

記憶喪失の神様

桜朔@朱樺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

楽しかった世界はあと数分で泡のように消えてしまう。
彼にとってユグドラシルこそが本当の世界だった。その世界の終りをたった一人、孤独に最後を迎える瞬間、彼は思う。
「こんなに苦しむのなら最初から知らなければ良かった」

(pixivにて投稿済、こちらは修正版となります)

目次

落ちてきました

プロローグ | 1

少女たち | 4

不思議なアンデッド | 8

戦士長 | 12

神か、魔神か、 | 19

アインズ・ウール・ゴウン | 33

冒険者を始めました

新米冒険者 | 37

漆黒の英雄 | 54

悪魔討伐 | 81

悪魔討伐 2 | 91

100年の揺り返し | 112

スライム討伐 | 117

帝国観光 | 121

聖VS悪

屋根裏の居候 | 128

赤マントの勇士 | 132

再会 | 144

再降臨 | 159

友よ！ | 181

友からの便り | 199

おいでよ！カルネ村

カルネ村の戦い | 208

請負人

227

死の騎士

241

それぞれの道

263

再び！

邂逅

282

共闘

304

ふれあです！

321

黒薔薇

341

落ちてきました プロローグ

楽しかったんだ——本当に、楽しかったんだ——

けれど、あと数分で何もかもが消えてしまう。冒険した世界も、仲間と語り合った場所も、思い出が詰まったここも——すべて泡のようになくなってしまおう。

見渡せばあんなに試行錯誤をし豪華絢爛に作ったここも、ガランドウで寒々しい。

他の誰かが残っていればと思い——そして頭を振った。

仕方がないのだ。それぞれに事情があり、これはただのわがままでしかないのだと、ギユツとギルドの証を握りしめる。

——なのに、現実では涙が止まらなかった。歯を食いしばるほどに唇が震えた。

ギユウギユウと胸が痛くなる。楽しく、幸せだと感じていたあの日々が過去の物となる。その事実が辛くて、最後の日に来てくれなかった彼らが恨めしくて、明日から何を生き甲斐にすればいいのかわからなくて……。ごまかすように「明日は5時起きかあ」と愚痴をこぼした。

もう十数秒しかない。頭の中でカウントダウンをしながら想う。

15、14、13、12、11——

こんなに辛いのなら知らなければよかった。幸せを知らなければ

絶望なんて覚えなかったのだ。

10、9、8――

ああ、いつそのこと自分もこの世界ごと消えてしまえばいいのに

7、6、5――
こんなに辛いのならすべて忘れてしまいたい

4、3、2、1――

すべてを

バタバタとローブがはためいている。全身に叩きつける風の強さに目を開ける。

最初に頭に浮かんだのは美しいという言葉。青く輝く星はもはや見ることはかなわないと言われた星の過去の姿に似ていた。

その星はどんどん大きくなり、暗かった周りが明るくなっていく。白い雲を突き抜け、様々な生き物の営みが見えた。街が見える。走り抜ける動物もいる。美しい川が流れている。横切る鳥がいる。人間の集団が馬を駆っている。大きな森が見える。横には小さな村――

ふと、村の様子がおかしいなと思った。騎士が、村人を追い立てている。

ああ、森の中にも：少女が二人、騎士に追いかけられている。捕まった。しかし、素手でフルプレートフルプレートの騎士を殴り逃れた。手を引いているのは妹か？ああ、斬られた。もうだめだろう。けどどうして騎士に追いかけられているのだろう？罪人か？それとも他国の侵略か？抵抗無き子供を斬り付けるような正当な理由があるのか？ああ、でも俺には関係ない。だって知りもしない赤の他人だ。

そう、俺に正義の味方は無理だ——

その日、トブの大森林に凄まじい轟音が轟いた。

少女たち

……びつくりした。何がなんだかわからん。俺はどうしたんだ??

凄まじい衝撃のあと、地面にめり込んでいた。——いや、普通に考えて落ちてたんだよ。何で気付かないんだ俺?

結構な深さだな。どれくらいの高さから落ちてたんだ?

ここから出ようと這い上がり、地上にでると——少女と目が合った。これでもかと目を見開かれていて、自分の間抜けな姿に恥ずかしくなる。

ああ、人型の穴が出来てる。マンガでしかみない表現だよ。ある意味すごい。なんて考えていたら後ろからトスツと軽い衝撃を感じた。

「誰か知らんが、目撃者も始末するよう言われているのでな」

後ろから聞こえた声に振り向くと騎士がいた。フルフェイスだから目ぐらいしかわからない。が、俺が振り返ったらその目がこれでもかで見開かれ。

「うわあああああああああああつっ!!!」

「きや——っ?!」

いきなり野太い声で絶叫されたものだから高めの声が出てしまった。恥ずかしい。なんて恥ずかしがっている暇はなく。騎士が剣を振りかぶってきた!!うわっ殺される!?

「へ心臟掌握!!」

ドグシヤア!!

思わず得意魔法を使ってしまった。騎士はそのまま糸の切れた人形のように倒れた。これって正当防衛でいいよね?あのままだったら確実に斬られてたし!——過剰防衛ではないことを祈りたい。

「あわ、あわわわわっ」

やばい!仲間がいた!!他の仲間を呼ばれてもやっかいだし、ちよつと弱い魔法で動けなくしとこう!!

ドラゴン・ライトニング
「へ龍 雷」

「ウヒヤアアアア——!!!」

ドチャツ!

弱っ?! え? 嘘だろ? 第五位階の魔法だぞ?! まじかよ完全に過剰防衛じゃん!! ええー・・・どうしよう。

二つの死体を前に途方に暮れたが、背後の少女二人を思いだし振り返った。

あー、怯えてるなあ。人死んでるもんない。

「・・・一つ聞きたい。お前たちは罪人か?」

「ひっ!」

一歩踏み出したら少女の顔がヒキツリ、わずかな水音が……。うん、俺は何も見てないよ。

「もう一度聞く、お前たちは罪人だから騎士達に襲われたのか」

「ち、ちがつ、違います」

「そうか」

あくよかった。向こうが悪いなら弁論の余地ありだな! そう言えば村が襲われていたよな。一応助けた方が良いかな?

—— 中位アンデッド作成 死の騎士 ——

助けに行くにも盾役が必要だし—— つて、うえ?! 死体に移った?! こんなの初めてだな——。

「死の騎士よ。この村を襲う騎士達を——倒せ」

ヴオオオオオオオオオオツツ

うわっ、勝手に走り出しちゃったぞ! なんか変だなあ、まあ、命令したの俺だけどき。一人で行けるんならまあ良いか。

もう一度少女達に向き直るとカタカタ震えている。しかし、その右手と背中には深い傷を負っていてとても痛そうだ。

「これを飲め」

下級治療薬マイナー・ヒーリング・ポーションでいくらかは回復するだろう。数だけは山ほどあるし、なんて思ってたなら揉め始めたぞ? 飲む飲まないって・・・、おっさんだからダメなのか? 怪しいおっさんが差し出したものは飲めないのか??

「別に変なものじゃないぞ? 普通の回復ポーションだぞ」

早く飲めと急かすとようやく受け取り一気に飲み干した。そして、

傷が見る間に消えていったことに「嘘」と目をまん丸にする。そんなに信用無いのかとため息がでた。別に良さ若い子に邪険にされたって悲しくないさ。

「とりあえず、他の騎士がこないとも限らないしな」

防御の魔法をかけて、マジックアイテムも渡しておけば大丈夫だろう。村に向かって歩き出したら少女から声をかけられた。

「あ、あの！助けていただきありがとうございます!!」

「ありがとうございます!!」

「——気にすることはない」

「も、もしよろしければ、お父さんとお母さんを助けてください」

「・・・出来るだけのことはする」

とは言っても、上から見た限り何人かの村人は殺されていた。その中にいないことを祈ろう。

悲鳴が聞こえる。村人の悲鳴ではないだろうと動けなくなった見張りの騎士を引きずりながら広場らしき場所に向かう。さつき角笛の音も聞こえたし、死の騎士はうまくやっているのだろう。

案の定広場に着くと死の騎士にぶっ飛ばされる騎士が見えた。あちこちに転がる騎士達の腕が変な方に曲がっているのが心配だが、殺していないようで安心した。これ以上の殺人は言い訳できない。

「そこまでだ死の騎士」

素直におとなしくなる死の騎士を横目に未だ立っている騎士めがけて引きずってきた仲間を放り投げる。これも殺してはいない。麻痺状態にしているだけだ。

「さてと、まだ抵抗する——」

問いかける前に剣を放り投げる様に、かなり疲れていると見えた。そして断頭台の前にいる罪人のような目を向けられる。神に祈る声も聞こえるが、神に祈るくらいならこんなことしなきゃいいのにと呆れてしまう。

「お前たちの上司に伝えろ。この辺で騒ぎを起こすなと」

不思議なアンデッド

村を救ったのはアンデッドだった。いったいどういう意図が有ったのかはわからないが、余計な刺激を与えて機嫌を損ねるわけにはいかないと、皆緊張の面もちで見っていた。

しかし、なぜか自分がアンデッドであることに驚き、ワタワタと動いていたかと思えばすぐにピタリと止まり冷静を取り戻す。

「あ、あなた、——様はいつたい何者ですか？」

「何者？…そうだ俺は何者なんだ？ここはどこだ？俺は誰なんだ？」
村長の問いかけにまたもやブツブツと呟き、落ちつきなく歩き回る。しかし、それもまた短い時間で終わり、足を止めると村長に振り返った。

「…すまない、ここに来るまでの記憶がない。だがあなた方に危害を加える気は無いことは信じて欲しい」

——信じるほかないだろう。それ以外を選択して相手を怒らせたらどんな恐ろしい仕打ちがあるかわからないのだから。今は従順に従うしかない。

周囲の者と顔を見合わせていると、アンデッドが魔法を使う。何をされるのかと身を固くすると、ドーム型の光に包まれた。守りの魔法だとアンデッドは言った。

「まだ敵が潜んでいないとも限らないから念のために、な」

そう言つて来た道を戻ろうとするアンデッドにどうしたのだと勇氣を持って問いかけた。

「森で少女二人を助けた。迎えに行ってくる。ああ、死の騎士^{デス・ナイト}は村人を守れ」

しばらくすると本当に少女二人を連れて戻ってきた。

「エンリー・ネム！」

村の人間はほぼ顔見知りだ。つれられて来た少女たちが誰かなどすぐにわかった。彼女らは飛び込むように広場に駆けて来て、キョロキョロとあたりを見渡していた。誰を捜しているかなど一目瞭然で、

すぐに顔を暗くする。

そんな自分たちを後目に、アンデッドは何かを黒い騎士に指示すると、死の騎士デス・ナイトと呼ばれたアンデッドは村へと歩いていった。そしてその手に村人の遺体を持って戻ってきたときはいったい何が始まるのだと、村人は全員顔を青くした。

一人一人、丁寧ディナーに地面に並べていき、アンデッドが遺体をのぞき込む。その家族が悲鳴を上げるが、周りの人間が口を塞ぐ。機嫌を損ねたら自分たちもあの中に入ることになるかもしれないと恐怖したが、アンデッドは恐怖で見開かれた目に手を置いて閉じさせて胸の上で手を組ませるだけで後は何もしなかった。

それがどういう意味を持つのか、理解するのに時間がかかった。アンデッド——いや、彼は村人の遺体を丁寧ディナーに広場に集めて置いているのだ。

そして、中には僅かばかり息のある者がいて、彼は惜しげもなく水薬ポーションを取り出すと見も知らない村人に振りかけた。

見る見るうちに傷が治り、意識を取り戻した男は——。

「ぎゃああああっ!!」

骸骨の顔を見たたん悲鳴を上げて顔面を殴り付けていた。それに慌てた村人が一斉に駆けだして男を取り押さえる。なんてことをするのだ!!

「お、お前はっ!!」

「すみませんすみませんごめんなさい許してください」

必死に謝る村人に、彼は困ったように笑った。

「そうだった。いや、仕方がないことだし、そこまで元気なら大丈夫だろう」

この顔じゃしようがないと笑うと、赤い水薬ポーションを何本も出すと村人に手渡した。

「息がある者が居たらかけてくれ。また殴られたらたまらんからな」

高価な水薬ポーションを無造作に渡す彼に驚き、そしてただの村人に使ってくれと笑う。その姿に徐々に嫌悪感が薄れていき、少しずつ感謝の言葉が上がっていった。

「お父さんっ!!」

新しく運ばれてきたのはエンリ達の父親だった。すでに事切れていて水薬ポーションは無意味だった。

父親に縋って泣く姉妹に、どう声をかけるべきか迷っていたら彼が骨だけの手をソツと頭に乗せた。

「・・・助けられなくてすまない」

そう声をかける彼にエンリは泣きながらも感謝した。

そのあとも、彼らは村のために働いてくれた。埋葬を手伝い村の修繕をしてくれたりと、もはや彼らを恐れる者は居なかった。

一段落した頃、改めて礼を言うために村長の家に彼を招き入れた。

そして様々な話をして、彼は記憶喪失と言う物らしい。この村に来る前の記憶を一切失い。何処から来たのか、自分が誰なのかさえわからないと言った。自身がアンデッドであると言う自覚も薄く、出された白湯を飲もうとしてすべて床にこぼしてしまうと言うちょっとした事件も起きた。

持っていた金貨から何処の国の者かわかるかもしれないと思ったが、あまりにも立派で分厚い金貨に目を丸くしてしまった。だいたい自分たちはあまりこの村から出ないのだから他国の金貨を見せられてもわからないじゃないかと頭を抱えた。

「とりあえず、王国の通貨ではないですね」

「・・・そうすると、帝国か法国の生まれの可能性があるか——。失敗したな、自国の兵士を殺したかもしれないな」

ぼつりつぶやいた言葉に村長夫妻は震えた。それに気づいたのか慌てて訂正した。

「とはいえ、罪もない村を襲ったのが自分の国の兵だったとしても助けましたよ」

その言葉にほっとした。自国に責められてこの村を差し出されたらどうしようかと思った。

結局は何もわからないままだと天井を仰いでいるとけたたましいノックの音が響いた。

「そ、村長!」

「何だ騒々しい」

「戦士風の集団が村に向かってきています!!」

戦士長

またやっかいごとかため息を付きたくなるが、そもそも肺がないののため息なんて付けるんだろうかとふと疑問に思う。

そんなことはどうでもいいかと隅に追いやり、チラチラと此方を伺う村長たちに仕方がなさそうに声をかけた。

「村人を一カ所に集めてください。出来れば大きな建物の中で。広場には村長と私で相手を出迎えます。味方の可能性もありますし」

騎士たちの仲間が報復に来る可能性もあつたが「戦士風」と言っていたので仲間ではないだろう。もしかしたら、村の危機を聞きつけた味方がやってきたのかもしれない。もしくは山賊の集団か。

とりあえず会ってみないことには判断が難しい。突然攻撃される可能性もあるが魔法で何とかなるだろう。よっこいせとイスから立ち上がり、村長と広場に出ようとしたが慌てて若い村人に止められる。

「ああ、そうだった。忘れていた」

自分がアンデッドであることを忘れていたと、アイテムボックスから適当なアイテムを探す。空中で手が消えたことに周りが驚いていたが、魔法か何かだろうと何も言わなかった。

「これでいいだろう」

ガントレットとマスクを取り出すと装着し、鏡で姿を確認する。――

うん、アンデッドには見えないが邪悪な魔法詠唱者だな。何でこのマスクを持っていたんだ――うっ、頭が痛い。ような気がする。俺の本能が思い出すなど血の涙を流している……気がする。

準備ができたと広場に出ると、確かに装備がバラバラの戦士風の集団が一直線で向かってきている。……山賊の可能性も高くなつたが、妙な動きがあつたら早々に撤退しようと思つた緊張の面もちで居たら、意外にも礼儀正しい動きを見せた。

そして、王国の戦士長と名乗る男に村長は心当たりがあつたらしい。肩の力を抜いてホツとしていた。しかし、隣の怪しい男について聞かれて身を固くした。まあ、どう説明するべきか悩むだろうと此方

が代わりに答えてやる。怪しき爆発の存在を警戒するのは仕方がないだろう。しかし、村を助けたといえ、馬を下りて頭を下げる戦士長に周りがどよめいた。

ふむ、あまり無いことのようなな。しかし、礼は言いつつ警戒は怠らないのは俺の存在が余りにも怪しいからだろう。マスクをとって見せて欲しいと言われて断ったので、さらに警戒心を高めてしまった。では名を聞かせて欲しいと言われてたがこれには本当に困ってしまい。思わず村長と顔を見合わせた。

「どうしたのだ？名前を教えてはくさらないのか？」

鋭い眼光に、どうしたものかと悩む。しかし、どうしようもないかと諦めて正直に話すことにした。

「実は、私はこの村に来るまでの記憶を一切失ってまして、名前すら覚えていないのです」

「名前すら……」

目の前の男は絶句したようだ。まあ、記憶喪失なんて滅多に見られないだろうからなあ。信じられなくてもうそは付いていないのだからしょうがない。しかし、目の前の男、ガゼフは信じてくれたらしく「己の身が大変であるにもかかわらず、村を救ってくれたのか」と感動までしてくれた。

そう簡単に信じていいのか？お人好しじゃないかこの人。

などと考えていたらまた非常事態が起こる。囲まれている？このタイミングで？村に復讐に来たのならもっと前に来れるはずだし、俺を恐れていたとしても、戦力が増えたこのタイミングで現れるのなんておかしいだろ。

となると狙いは――。

ちらりと目の前のガゼフを見ると、視線を感じたのか固く険しい顔をすまなさそうに歪めた。

どうやらもつとやっかいな話らしいとため息を吐いた。

アークエンジェル・フレイム

「炎の上位天使か……」

「あのモンスターをご存じで？」

「ええ、まあ」

確か第三位階の召喚魔法で呼び出せる天使系モンスターのはず——などと考えていておかしいことに首をひねった。

「記憶喪失でもそう言う知識はあるんだな」

おそらく目の前の相手も思っていたのだろう。思わず苦笑いが漏れていた。まあ、何もかも忘れていたら魔法なんて使えないだろうしな。と深くつつこむことをやめて、村を包囲する敵を見据える。ガゼフの部下からもたらされた情報と己の疑問をすりあわせていると、「雇われないか」と目の前の男が言う。

「報酬は望むだけの物を」

「望むだけの物を・・・ね」

報酬と聞いて真つ先に考えるのは金だろう。しかし、それは自分に必要だろうかと考える。アンデッドである自分は食事も睡眠も休息も何も必要がない。極端なことをいえば森の中に座り込んで数十年そのままでもかまわない存在だ。そんな自分が金をもらって何をするといいのか？ だいたい町に行って買い物など出来るだろうか？

「お断りします」

そんな物を対価に、命の危険があるかもしれない事を引き受けるのはバカのやることだと首を振る。

「では、あの召喚された騎士を貸していただくだけでも」

「お勧めしませんね」

デス・ナイト死の騎士は天使系と相性が悪い。特性故、一撃で消滅する事はないが上位の天使を召喚されて数回で滅ぼされる可能性がある。戦力としては加算しない方がいい。

「王国の法を用いて、強制徴収というのはどうだ？」

まるで脅すような剣呑な視線に、鼻で笑う。普通なら怯えるはずだが、アンデッド故に心は凧いで動かない。

「なるほど、死にたくないとか怯える人間に戦いを強要する人でしたか、残念です」

その言葉に、苦痛で顔をゆがませると「申し訳ない」とガゼフは頭

を深く垂れた。

「まあ、死にたくないのはあなたも一緒でしょう。少しでも生存率を上げたいなら仕方がないが——、私を信用しすぎでは？実は私は彼らの仲間で、後ろからあなた方をだまし討ちにするつもりかもしれないよ？」

途端に側に控えていたガゼフの部下の目が物騒な色に染まる。

「そうでなくても、強制された人間が裏切る可能性もあるでしょう？」

「・・・そうだな」

殺気立つ部下を下がらせ、ガゼフは改めて謝罪をすると再び敵の部隊を見据えた。

「村を救っていたいただいた御仁に無礼の数々、申し訳ない」

「かまいませんよ、私だってこんな怪しさ満載の人間が居たら警戒しますよ」

奇妙なマスクを指さしていえば、ほんの少し空気が和らいだ気がした。

「ならせめて、この村を守ってはもらえないだろうか？」

自分たちが囷になり敵を村から引き剥がし、その隙に村人を連れて脱出して欲しいとガゼフが言った。確かに作戦としてはいいのかもしれない。——敵があれだけしかないのならばだが。

「・・・彼らの狙いが貴方だとして、戦力があれだけだと少なくとも感じませんか？」

ガゼフの連れてきた兵の数、敵の数を比べて少ないと感じる。天使を召喚できるにしても、しよせんは後衛。召喚師の戦闘力はそれほど高くないと思える。——どこかに伏兵か切り札を持っているか。どっちにしても敵の増員の可能性があり、村人を逃がした先に伏兵が待ちかまえているかもしれない。

ガゼフが苦い顔をする。自分の考えすぎかもしれないが、完全に無いても言い切れない。可能性の話をしたらきりがなが慎重に越したことはない。では、どうするべきか？

「私も出ましょう」

一転した言葉にガゼフは驚きの声を上げる。このまま籠城したと

ここで時間の問題である。ならば打って出るしかない。

「村の人間は」

「動かさない方がいいですね」

敵が潜みやすい森に避難させるよりは村の一角所に守りの魔法をかけて凌いでもらうのがベストだ。もちろん護衛は置いていく。

伏兵が村を襲ったとしても時間稼ぎにはなる。その間に主力を倒し、村に戻る。もし伏兵がおらず、此方が倒れた場合はすぐさま森に避難してもらおう。もし自分が倒れたら死デス・ナイトの騎士は消滅するだろう。だが、村娘に渡したアイテムで小鬼ゴブリンの軍勢を呼ぶことが出来るからその小鬼を護衛にすればいい。

ただ、伏兵がいて、自分たちが倒れば村人は死ぬ。

今思いつく限りのベストな作戦を伝えれば、ガゼフはそれを承知した。

「後もう一つ、私は同行せず後方から戦いを窺います」

自分の情報が何処まで相手に伝わっているかわからないが、当然魔法詠唱者を警戒するだろう。しかし、同行していなければ彼らを見捨てて逃げたのだと見なし、意識から外すだろう。そうなれば自分は伏兵として機能する。

「可能なら背後から魔法をぶつ放します。それが無理なら攪乱魔法で相手に隙をつくる」

「なるほど、頼もしい限りだ」

表情が晴れたガゼフが心強いと笑う。だが油断は禁物だ。相手の強さは未知数で、もしかしたら策など何の意味もなく殺される可能性もある。

——よりもよって天使か、他のモンスターだったら生き残る可能性があったのに。

アンデッドの自分と相性が悪すぎる敵にため息がこぼれる。なら逃亡すればいいだろうともう一人の自分が囁くが、逃げて何処に行くのだ？自分が何者なのか何処から来たのかもわからない。ならば今は心のままに行動するしかない。せっかく助けたのだから最後まで面倒を見てやろう。

「では村長を呼んで作戦を説明しましょう」

不安そうな村人に大丈夫だと声をかけて守りの魔法をかける。これで大概の攻撃は防げるだろう。倉庫の入り口付近に死の騎士^{デス・ナイト}を待機させて侵入者を留めさせる。エンリを呼び、渡してあったマジックアイテムを使ってもらい小鬼達^{ゴブリン}を召喚しておく。逃げる段階で召喚してもパニツクでまともな命令が行えないだろうからの処置だ。

ガゼフ達は先に村を出ている。村の入り口を見張られていたら意味がないからだ。不可視化を看破する敵がいなくても限らないし。

それでもガゼフ達に出来る限りのバフ魔法をかけて居るのでしばらくは大丈夫だろうと大きく迂回しながら戦場を目指す。こういうときアンデッドは便利だ。歩きにくい道も、長い距離も何のそので走ることが出来る。疲れないとはすばらしいことだと思いつながら戦いの場を目視する。

周囲に伏兵はいないか注意深く探る。探知系の魔法はあまり持っていない：・あるのはこれだけだと^{ラビット・イヤ}へ兎の耳を発動させる。あまり人に見せられた姿ではないが文句を言っている暇はない。ピクピクと周囲の音を拾うが戦いの音以外の誰かが潜んでいる音はしない。伏兵は無し、ならば切り札でも持っているのかもしれない。

戦場に耳を澄ませていれば、少し焦ったような指揮官の声が聞こえる。

へこれほど手こずるとは、神官長様より授かった秘宝を使わねばならないか?」

「——やはり、切り札を持っているか」

秘宝と言うことはマジックアイテムだろう。どんな効果があるかわからないが自分にはやっかいなのは間違いが無いだろう。隙を見て奪うか指揮官を先に潰すか——、タイミングを計るために戦場を窺う——が。

「? 皆何を遊んでいるんだ?」

命の取り合いにしては低レベルな戦いに一瞬自分の目を疑う。確かに天使の数は多いが殆どが上位天使だ。アークエンジェルそこまで強いモンスターではない。魔法も飛んでいるが良いところ第三位階。なのに必死に戦っている。何体かしとめているがバフ魔法をかけているにしては弱すぎないだろうか？

ガゼフが一番まともに戦っている。それにしたってあまりにもお粗末ではないか?!

「・・・ガゼフは王国最強の戦士、だよな？」

本人も村長も言っていたのだから間違いないはずだ。自称(笑)ではないだろう。では全体的に弱体化の魔法でも受けているのか?しかし敵味方無差別に?それ何の意味があるの?

「まさか皆弱いのか?適正レベルが低すぎるのか?」

いやいやいや、もしかして俺を騙すために皆グルでは?などと被害妄想まで出る始末だが、だんだんと面倒になってくる。

「ガゼフも追いつめられてるし、もういいや。いざとなったら奥の手を使えばいいし」

名前を覚えていないのに奥の手は覚えてんだよな

ガゼフを助けるために歩き出した。

神か、魔神か、

ニグンはいったい何がどうなったのか、理解できなかった。想定より、梃子摺りはしたがガゼフの部隊をじわじわと消耗させ、特にガゼフを集中的に攻撃した。それにより、ガゼフの体力は限界に達し一度倒れた。

しかし、気力のみで立ち上がり、くだらない夢を語って剣を構える男をニグンは嘲笑した。

そのあとだ。マジックキャスター魔法詠唱者が現れたのは。

報告には上がっていたが、たった一人で何が出来るといえるのか。此方も嘲笑し、無駄なことだと天使に攻撃させた。

——しかし、何故か攻撃が通じなかった。マジックキャスター魔法詠唱者の一撃で散る天使。全員で掛からせたが一瞬で塵にされて、プリンパリテイ、オブザベインヨン監視の権天使の攻撃を片手で受けるとたった一つの魔法で滅ぼされた。

部下たちが恐怖に駆られて攻撃を加えるが一つとして堪えた風もない。恐怖はニグンにもある。何か得体の知れない存在が目の前にいると体が震えた。それでも何とか自分を保てたのは懐にしまっている秘宝の存在である。

縫るような部下の声に後押しされるように秘宝の”魔封じの水晶”を取り出す。その時、相手がほんの少し動揺した事実_に勇気をもらい。最高位の天使を召還した。

世界が輝いた。その神々しさにニグンも思わず感嘆のため息を吐き、部下たちも歓声を上げる。

逆に絶望の色に染め上げられたのはガゼフの部隊である。それもそうだろう。これほど強大で神々しい天使をみたのだから。

魔神すら殺せる天使の登場に、さすがのあの魔法詠唱者も——と目をむける。——しかし、不思議そうに首を傾げて天使を見上げているその姿にイヤな予感が走る。

「これが、奥の手か？」

なんともはや

「子供のお遊びだな」

その言葉に、今度は此方が絶望の色に染まる番だった。そんなはずはない。そんなはずはないと。自分を励ましながら最上位天使〈威光の主天使〉に攻撃を命じた。

光の奔流が、魔法詠唱者に注がれる。ガゼフが叫んでいるがさすがの奴も——しかし、そんな希望は打ち砕かれた。

「ふむ、さすがにダメージは受けたな」

まるで小雨に降られたかのような軽い調子で言われ、ニグンは目の前の光景を容認できない。あまりの恐怖に歯の根が合わずにガチガチと音を立てる。部下たちも同じようだ。逃げようとしなのは足がすくんで動けないのだろう。

「魔、魔神。そうかつ！お前の正体は魔神だろう!!」

「魔神——?」

「で、伝承では、この近くに封じられた魔神が居るといふ!!封印を解いたのだな?!」

そうでなくては説明がつかない。魔神が何故王国の兵に力を貸すのかはわからない。いや、もしかしたら法国の思惑を知り邪魔をしに来たのかもしれない。それとも愚かな王国が封印を解くという暴挙をしたのか。

何にしても世界の危機である。

ニグンの叫びに、魔法詠唱者は考え込み「そうかもしれないな」とぼつりとこぼした。その小さな呟きにすべての音が消えた。獣のような息づかいがそこかしこから聞こえてくる。ニグンはやはりと思いつつも違はずだと相反する思いを抱く。本当の魔神のはずがない。嘘だと言ってくれと祈るような思いだった。

「私は、今日より以前の記憶がない。自分が何者で、何処から来たのか

——一切判らないのだが」

指を差し向けて一つの魔法を放った。すると光り輝く天使は跡形も無く消え失せ、あたりは闇に包まれた。

「どうやら、私の力はお前たちには強すぎるようだな」

レベルが違うとニグンは絶望した。本国に報告をしなければと思うが、その前に自分たちは生きては帰れないだろうと悟る。神に祈る声が聞こえる。すすり泣きも……。神よ、何故私たちは——

「そうなるよ、お前の言う魔神が私である可能性が高いわけだ」

そう言っ、目の前の存在は仮面を外した。

「さて、伝承の魔神とは私のことか？」

その姿を見て、ニグンはストーンとすべてが腑に落ちた。

何だそうか。そうだったのか。

天使達がかかわらない？魔神も殺せる最高位天使が一撃？そんなこと当然じゃないか。当たり前じゃないか。あの方にとっては子供のお遊びに違いない。部下たちのすすり泣きが消えた。力なく膝を折る者が増えていく。

伝承の魔神？なんと失礼なことを聞いてしまったのか。ああ、私の

信仰心もまだまだだった。この方に気が付かなかったとは――
「スルシャーン様」

信仰すべき神がそこに降臨された。

これは・・・、命乞いをされているのだろうか？

顔を見せた後、ひざまずかれてしまった。まあ、強すぎる敵を前に命乞いをするのは判る。・・・判らないのは相手の目が全員イツちやつてる事だ。

すごく怖い！何これどう言うこと?!

「――長く信仰をしておりました」

「あ、はい」

何か語り出した。指揮官らしき男がめっちゃうつとりした目で俺を見てるんですけど!?

「神の僕として敬虔にそして従順に生きておりました。お姿を隠された後もその教えを信じて、神の意志に沿うよう努力を続けて参りました」

ニグン以下の部下たちもぶるぶる震えながら祈りを捧げている。しかし、それは恐怖ではない。驚喜からの震えであった。

「何者にも負けない信仰心を持っていると自負をしておりましたが――

――間違いました」

つーつとニグンは涙を流した。それは己を恥じる涙であった。

「今日、貴方様は我々の前に姿を現された。にもかかわらず、信仰心が

足りない我々は愚かにも貴方様に気づかず、御身に危害を与え、あまつさえ魔神などと——」

グウツと苦しげにうめくと、ニグンは懐から短剣を取り出すとその切っ先を己の首筋に当てた。

「神である貴方様に知らぬとはいえ、刃向かった僕の愚かさ!!この命で償いを!!」

「フアツ?!ま、待て早まるな!!」

何を言い出しているんだこいつとどん引きして見てたら自害しようとするので慌てて止めた。え?神?誰が?俺が?!

ただのアンデッドに何言っているんだ?さっきの魔神の方がよっぽど信憑性があったぞ!?!けど、こいつらマジで俺を神と信じている。指揮官だけならこいつだけ頭おかしくなったと言えるけど、こいつら全員俺を神だと信じ切っている。・・・なんだこれ。

「ううんっ!—— 剣を納めよ。えー・・・、敬虔なる私の僕」

こいつの名前なんかわかんないよ。でも素直に剣を納めてくれた。とりあえずこいつら何とかしないと——。

「お前たちの高き信仰心は判った。・・・お前たちのすべてを許そう」

「おお、慈悲深きお言葉、ありがとうございます!!」

額を地面に擦り付ける姿に若干腰が引ける。騙すのは気が引けるが命は大事にしないとね。

「だが、お前たちは王国でしかるべき償いをするべきだ」

「何故です?我々は人類の為に働きました」

え?村を襲う事とガゼフを殺すことで人類が救われるの?思わずガゼフを振り返るが、ガゼフにも身に覚えがないようで首を傾げている。意味がよくわからないが、ここで否定してやっぱり神じゃないと攻撃されても困るので何とかごまかす。

「・・・お前たちはガゼフを笑ったな」

それが何かと見上げてくる男にそれらしい言葉を語る。

「人類の救済のためにお前たちは働いている。それは重要なことだ。ガゼフを殺すことで救われる者も、いる、の、だろう。——だが、だからといって死を覚悟しながらも僅かな人間を救うためにがむしや

らに戦う人間を嘲笑するのか？」

目の前の男が息を飲んだ。よし、行ける！

「命を燃やして生きる人間を嘲笑する権利がお前たちにあったのか？」

人類を救うといつつ見捨てる人間を嘲笑するなんて矛盾しているだろう。

「お前たちは僅かな者も見捨てられない者に敬意を示さず侮蔑を送ったのだ」

それが、お前達の罪だ。

一斉に平伏し、謝罪の言葉が上がる。神の意志に沿って行動していたのに何故神に怒られたのか、その理由をでっち上げられて安堵のため息をつく。

こういう狂信者は下手に否定すると暴走するらしいから、うまく誘導できて一安心だ。もしかして俺、役者の才能でも有るのかな？

さて、おとなしくなったし後は丸投げしようとかガゼフを振り返ると、動揺した顔が此方を凝視していた。

「——神？」

「そつちまで信じないでください」

神な訳ないじゃないですかと向こうに聞こえないようにいえば、視線をさまよわせた後「そうか」と納得がいつていないような声が漏れ出した。

「後はそつちで何とかしてくださいよ」

そういつて満身創痍のガゼフにマイナー・ヒーリング・ポーション級治療薬を投げ渡す。部下の方はそこまで重傷者はいないようだから今はいいだろう。

ガゼフが数人の部下を連れて敵を捕縛しに向かうのを眺めていると、ガチャリと背後から金属音が響いた。振り返る必要はなかった、その音を皮切りに周囲でも同じ音が鳴り、ガゼフの部下に囲まれた。

まあ、仕方がないかとカタカタ震えながら剣を向ける人間を見て、諦めた気持ちになる。

自分の正体が知れるかもしれないと、後先考えずにアンデッドの顔を晒したのだ。当然強いアンデッドに敵意を持たない者はいないだ

ろう。

ふと、人間に剣を向けられるのは初めてではないかと、何となく思った。

此方の事態に気がついたガゼフが目を見開いている。彼もやはり自分を殺すべきと考えるだろうか？

——しかし、予想とは裏腹に激怒した顔で怒鳴った。

「何をしている?!」

部下たちの体がビクリと揺れる。それでも剣を下げないことにガゼフが苛立ち、叫びながら駆け出そうとして——全く別なところから怒号が響いた。

「愚か者どもがっ!! 貴様等は誰に剣を向けているのだ!!」

さつきまでおとなしかった指揮官が鬼のような形相で怒鳴り散らしている。そしてその部下も先ほどとは比べものにならないほどの敵意を膨らませていた。

「そのお方をどなたと心得る?! 本来なら貴様等異教徒ごときが目を合わすことすら恐れ多いと言うのにその御身に刃を突きつけるとは!!」

「異教徒め!!」

「やはり殲滅を!!」

「あの方をお助けしなければ!!」

膨れ上がる敵意に、剣を突きつけていた者達が飲まれようとした。

「やめよ」

しかし、静かな声にピタリと止んだ。

「静まれ、お前たちの信仰心嬉しく思う。しかし、自重せよ」

「し、しかしスルシャーナ様」

「良いのだ。信仰心高いお前たちならいざ知らず、異教の者にはこの姿は恐怖を与えるだろう。恐怖にかられ、剣を取らねば心が碎けるだろう。か弱い存在を私は許す」

その言葉に再び平伏したが、王国兵に対する敵意は収まらなかった。が、大人しくなったのでとりあえずはこれでいいと神様もどきは投げた。それにどうせ周りは大したダメージを与えられないだろうから気楽である。

騒ぎが収まり、慌てて戻ってきたガゼフは謝罪し、部下たちを捕縛に回した。心配そうな部下の尻を蹴り、再度深く頭を下げた。

「恩人の貴方に重ね重ね無礼を」

「いや、普通のことでしょう。むしろあの指揮官の方がどうかしてる」
本当ならガゼフ等と協力して此方を攻撃してもおかしくはないと言うのに――。怖いから早く連れてってほしい。

「――貴方は人間ではなかったのだな」

「みたいですわね」

まるで他人事のように言うのでガゼフが訝しげな表情なる。

「言ったでしょ？何も覚えていないと、今だって変な話アンデッドという自覚が薄いんですよ」

むしろガリガリに痩せたオッサンのイメージが自分の中で定着している。そのためアンデッドであることを忘れそうである。

捕縛もすみ、村に引き返せば歓声を上げて村人が迎えてくれた。アンデッドの姿を見ても驚かない村人にガゼフは目を見開き、そして彼を受け入れている村にすべてを悟る。人間だ、アンデッドだなど関係なく、この人は信頼を勝ち取っている。いや、むしろ当然だろう。彼の働きを見れば。

「そういうえば報酬の話がまだでしたね。あれはまだ有効ですか？」

「もちろんだとも」

笑顔で答えれば、アンデッドだから無効と言われなくてホッとしたようだ。

「では、私をそっとしておいてくれませんか？」

言われた意味をはかりかねて眉を寄せると、彼は自分を指さして言う。

「私はこの通りの体なのでお金等は必要ありません。しかし、望むだけの報酬を頂けるのなら、私のことは誰にも言わずに忘れて頂きたい」

あれほどの働きをしておきながら何の見返りもせず忘れろと言うのか！驚いた顔をすれば困ったように首を傾げて見せた。

「人に危害を加える気はこれっぽっちもないんです。ですから放って置いて欲しいんです」

モゴリと何かを言い掛けようとしたが、言葉にはできなかつた。出来ることなら王国に連れ帰り、報酬を与え、可能なら宮廷魔術師の地位を推薦しただろう。しかし、アンデッドである事実が邪魔をする。

この大恩人に報いる方法が見ぬ振りをするだけだとは——、何ともやるせないとガゼフは唸つた。ならばせめて、間違つても討伐されないように手回しするぐらいしかない。・・・討伐できる人間などいないだろうが。

「わかつた。誰にも貴方のことは言わない。部下にも言い聞かせる。——だが、困つたことがあつたら私を訪ねてくれ。名前を使つてもらつてもいい。貴方はこの村を、我々を救つてくれた大恩人なのだから」

両手で骨だけの手を堅く握り、深々と頭を下げた。

さて、これからどうしようかとガゼフ達を見送つた後空を見上げた。

結局自分が何なのか判らないままだ。一番可能性のあるのは封印された魔神であるが、別に人類に害をなそうなどと言う感情はない。むしろ訳の分からない場所に放り込まれ頼る者がいない心細さを感じる。

力はあるがそれで何かしてやろうという欲望もない。では自分が何者か知りたいかと、自分自身に問いかけるが知りたいとは思わなかった。自分がつまらない人間だと言うことが判るからだ。きっと、思い出しても思い出さなくても、大した差はないのだろう。

そうなると目的が何も無い。何をしたいとか、どこに行きたいとか。自分には何も無い。正しく空っぽだ。

どうしようか、とにかく村には何時までも留まる訳にはいかないだろうが、だからといって別の人間の街に行つたところで受け入れられるはずがない。

村のすぐ側の森を見て、森の中で暮らそうかと考える。家も水飲み場も食料もいらぬから何処でだって生きていける。モンスターがでるだろうが自分の強さなら問題はないだろうと決めようとしたが、突然胸がギュウツと締め付けられた気がした。

—— たった一人で居るのはもうイヤだ ——

何かが頭をよぎつた。が、すぐに泡となつて消えてしまひ首を傾げた。だが、もう森で暮らすという選択肢はなくなつた。

「・・・村の外れにでも置いてもらえないか聞いてみるか」

いくら恩人でもアンデッドが村を彷徨くのは嫌がるだろうが、役に立つからと説得してみよう。それがダメなら、村が見える辺りに小屋を建てて眺めさせてもらおう。

そう決めて、村長の家に向つた。

しかし、予想とは反して盛大に歓迎され、アンデッドは村に受け入れられた。これにより、カルネ村は例を見ないほど発展することになる。

ゴトゴトと護送される馬車の中、心配げな部下の声がニグンの耳に届いた。

「よろしいのでしょうか？死の神を他国の異教徒に預けて」

本来なら本国に連絡しすぐさま迎え入れるべきだと考えている部下を視線だけを見て、ニグンは首を振る。おそらく神はそれを望んでいない。

「本国には伝えるが、今はまだ迎えられんだろう」

何故？と部下全員の視線を感じ、ニグンは自分の予想を語った。

「おまえ達も知っているとおおり、スルシャーナ様はあの八欲王共に殺された。しかも、死の神であるあの方が復活できぬよう何らかの封印までしてだ」

それは法国の神官の誰もが知っていることだ。500年も前にあつたこの世界の歴史である。

「しかし、しょせんは我らの神の力が上だった。500年の時を越えて復活されたのだ」

ニグンの熱のこもった声に部下たちからも感嘆の声が上がる。しかし、ニグンは苦虫を噛み潰したように忌々しいとばかりに口を歪めた。

「だが、八欲王の呪いは解けきつてはおられないようだ。かの神はすべてをお忘れになっている」

自分が何者か判らない。そう言ったのだ。我らの信仰心に応えてはくれたが、我らと共に来ては頂けなかった。刃を向けた自分たちの罪は重い。

「あの方の呪いを解く方法を見つけてからでなければ我々の失態は拭えまい」

目覚められてすぐに刃を向けた者の国にあの方が来てくれるはずがない。我々の失態を許すと言われた神の慈悲に甘えるだけではない

けないのだ。

「幸いにも、あの村はあの方に救われ、形は違えど信仰するようになった。異国とはいえ、同じ神を信仰する者達だ。特例地として本国に報告しよう」

神を迎える際には召し上げる事も検討するべきだ。

「いいな？我らの命を懸けてでもあの方の呪いを解くことが使命として」

ニグンの言葉に部下たちも深く心に刻み領いた。

王都に帰還し、報告や様々な厄介ごとを処理したガゼフは王都を歩きながらあの村の事を思い出していた。

夜も更け、村に一泊することになったガゼフ等は法国の特殊部隊を見張りながら朝を待っていた。部隊の奪還を警戒するより部下たちはアンデッドの御仁を警戒していたが、ガゼフはその夜、その御仁が村を歩いているのを見かけた。

何をしているのか聞けばアンデッド故に睡眠は必要無いため、一応の見回りと村人にこれを使っていたと手のひらサイズの香炉を見せられた。それは恐怖を和らげる効果のあるマジックアイテムだという。

「村を襲われて、恐怖で眠れない人が多いみたいで、少しでも心を落ち着かせようと思って」

その言葉になんと気が回る御仁だろうと感動した。自分たちは敵を警戒するのが精一杯で、村人の心の傷までは気が回っていなかったと恥じる。

優しさとは人だけが持つものではないのだと痛感した。

その話を部下に言い聞かせ、かの御仁のことは絶対に口にするなど厳命した。半信半疑の部下もいたが何も言わずに頷いたので大丈夫だろうと部下を信じた。

それからガゼフの世界は変わった気がした。人の事ばかり考えていたが、人でない者にも素晴らしい人物がいる。その素晴らしい出会いに心が軽かった。

知らず知らず笑みを浮かべて、機嫌よく歩いていたその時、悲鳴が聞こえた。

すぐさま踵を返し裏路地に飛び込むと、数人の柄の悪そうな男たちと女性が一人。しかし、男たちは地面に転がり白目をむいていた。女性には破かれた衣服を抱きしめながらガタガタと震えていた。

「どうしたんだ?」

「ば、化け物が——っ」

恐怖にヒキツつた顔でガゼフにすがりつく女性は興奮状態でまともな会話が出来なかった。何とか落ち着かせて悲鳴を聞きつけた衛兵に女性を託すと——ガゼフは路地の奥の方に進んだ。

しばらく歩き続けるとそこにはローブをまとった人物がいた。

ガタイから男だろうと判別する。うなだれているようで、此方を振り返りもしない。

「あの女性を助けた方ですか?」

警戒することもなくそう声をかけると僅かばかり振り返ろうとして、すぐさま戻した。その一瞬、人ではない肌が見えた。よく見ればローブから覗く足も人ではない。

「無辜の民を助けていただきありがとうございます」

そう感謝を言葉にするとローブの男は気配だけで此方を伺っているようだった。

「もし、よろしかったら私の家でお礼をしたいのですが」

「——すみません。事情がありお誘いは嬉しいのですが」

「事情というのは——人間ではないからと言うことですか?」

バツと振り返った顔はやはり人間ではなかった。表情は何えなが困惑しているようだと言配で分かった。

「どうして……」

「私の知り合いに優しいアンデッドがいて、人ではないからとむやみに敵対すべきではないと思ったのです」

ガゼフの言葉にしばらく無言であったが、ローブの男は震えるような声を発した。

「わ、私は人間なんです。信じてもらえないかも知れないけれど、本当は人間なんです」

「……何か事情があるようですね」

路地が騒がしくなってきた。衛兵が集まってきたのだろう。

「私の家へ行きましょう。話はそこで聞きます」

そういつて手を差し出すと、おそろおそろ異形の手が伸ばされた。

t o b e C o n t i n u e d ?

アインズ・ウール・ゴウン

この世界に転移してからしばらくたった。

この異常事態に守護者を集め、早急に情報収集を始めた。周りは草原、近隣に生き物の影はなかったが、少し足を伸ばせば人間の街を発見できた。モンスターもそれほど強くない、と言うより弱すぎる部類であり。このナザリックの脅威となる存在は確認できなかった。

「それでモモンガ様、これからのご予定をお聞きしても?」

報告に訪れていたデミウルゴスが、執務室に座るオーバードに伺えば現状維持を命じられた。

「防衛レベルは引き上げるが、これまでと何も変わらずそれぞれの務めを果たせ。侵入者には死を。このナザリック地下大墳墓は永遠に現在の姿を保たせる」

「——了解しました。モモンガ様、それでは私も本来の守護階層に戻ります」

「ご苦労だった」

優雅にお辞儀をしたデミウルゴスを、オーバードと側に控え微笑むアルベドが見送り扉が閉じられた。

瞬間、微笑んでいたアルベドの表情が一変し、氷のような視線を隣のオーバードに向けた。

「いつまであの御方の姿を騙っているの。さっさと戻りなさい」

すると、オーバードの形が崩れ、その場に現れたのは軍服を着たドツペルゲンガーである。

「やれやれ、守護者統括殿はせっかちでいけない。デミウルゴス殿が引き返されたらどういいわけをするのですか」

「デミウルゴスだって気がついてるわよ。モモンガ様が本当は不在だって事は」

何の感情もない目で扉を振り返るアルベドに、「そうでしょうね」とパンドラズ・アクターもため息をつく。

この何処とも知れない世界にナザリックごと転移してからしばらくして玉座の間に現れたのはモモンガの姿を模したパンドラだった。

モモンガの帰還に喜びかけたアルベドは、すぐさま違和感に気がつき激高しパンドラを攻撃しようとした。しかし、パンドラの話にアルベドは落ち着きを取り戻し、気にくわれないが共犯者に成ることを決めたのだ。

「——それにしても信じられないわね。ユグドラシルが消滅してしまっただなんて」

アルベドは覚えている。珍しくモモンガがセバス達を引き連れて玉座の間に現れた日のことを。あの日は至高の方がお見えに成られた幸せな日だと記憶していたのだ。しかし、その日は世界が終わる日だったのだとパンドラに教えられた。

何を言っているのか全く理解できなかったのだが、あの日は世界が跡形も無く消えてしまう事が決められており、それをモモンガが嘆いていたと聞かされ、アルベドは常にないモモンガの様子を思い出して心を震わせた。

しかし、ナザリツクは残った。何らかの意志が働いたのか、ナザリツクは別の世界に転移することで消滅を免れたのだ。

それに気づいたパンドラは与えられた役職を一時放棄し宝物殿から抜け出してきた。このナザリツクを守るために——。

「・・・モモンガ様はこのナザリツクが消滅したとお考えになられているのね」

アルベドの暗い顔にパンドラは目を向けたが、慰めを必要としないことが判るので何も言わない。

ナザリツクが消滅したとモモンガが考えていけば、それは二度とこの地には戻られないと言うことだ。あんまりな事実にはアルベドは髪を掻いて発狂したい思いに駆られるが、そんなことは許されない。ただ一つ、慰めはモモンガが最後まで自分たちを見捨てなかつたこと、ナザリツクの消滅に心を痛めてくださったことだ。そして、アルベドにはもう一つこの身に残していただくだったもの。

「モモンガを愛している」

最後の戯れだったかも知れないが、アルベドに愛することを許してくださいだったのだ。それがアルベドを支えるものだった。

「……二度とお戻りには成らないかも知れませんが、至高の御方々が愛したこのナザリツクを何一つ変えることなく維持することが我々、いえ、私の使命だと考えております」

誰もいなくなったナザリツクを何一つ変えることなく維持してきたモモンガのように今度は自分たちがこの姿を永遠に残さなければ成らない。

だからこそ、ほかの僕に気づかれないようにパンドラはモモンガの姿に変わり、いつもと変わらない光景を作り出しているのだ。

——いや、本当は僕たちは薄々気がついていて。しかし、認めず現実から目を背け気付かないふりをして己を保ち続けている。デミウルゴスもそうだ。パンドラがモモンガの姿を模していることなど承知で目を背け続けていた。そうしなければナザリツクが崩壊すると知っているからだ。

現実から目を瞑り、またいつか至高の方々がお越しになる夢を見ながら変わらない毎日続けるのだ。

「——それじゃあパンドラズ・アクター、私も配置に戻るわ」

そういつて、アルベドも部屋から出ていくのを見送り、パンドラは宝物殿に戻った。

「………本当ならすべてを話した方がいいのでしようが」

宝物殿に転移して溜息をつく。

パンドラは本当はすべてを知っている。自分たちがゲームの存在でただのデータで有ったことを。そして、至高の方が、——本当はただの人間であることを。

メンバーがいなくなるにつれて、モモンガの独り言が多くなりそれをナザリツクの知患者と設定されたパンドラが拾い、真実を組み上げたのだ。

ならばもう好きにしまえばいいのかも知れないが、モモンガの

愛を知るパンドラにそれは出来なかった。

「子は親に似るものですし、ね」

もしかしたら、もしかしたらと願いながらメンバーを待ち続けたモモンガ。そのあとを引き継ぎ、パンドラも何も変えずにここで待ち続けることを決めたのだ。

「我が神よ、またお会いできる日をお待ちしております」

誰かに呼ばれた気がして振り返るが誰もいない。気のせいかとアイテムの整理をしながら自分の情報を探す。

何というか、意味のないものまで詰め込んでいるなど、以前の自分に呆れながらボックスを探っていて、ふと、あるものを見つけた。

それは黄金に輝くスタッフである。7匹の蛇が宝石を銜え絡み合いつつの形に成ったような杖。なかなか邪悪なオーラも発しているがこれが一番の貴重品だと判る。

「名は——」 スタッフ・オブ・アイنز・ウール・ゴウン”。アイنز・ウール・ゴウンの杖か……」

これが個人的な杖であれば自分の名前であることは間違いがない。さつき見つけた「モモンガ」よりはよっぽど名前らしいじゃないか。

「うん、これに決めよう。今日から俺はアイنز・ウール・ゴウンだ」
うんうんカッコいいと頷き、そばに控えていた死デス・ナイトの騎士もパチパチと拍手を送る。村人に早く教えたいがまだ夜は深い。早く朝にならないかなあとアイنزは綺麗な夜空を見上げた。

冒険者を始めました 新米冒険者

お世辞にも綺麗と言えない宿屋の扉を開けて入ってきた男を、柄の悪い者たちは鋭い視線で値踏みした。

アイنزは現在魔法で作った黒い全身鎧に身を包んだ戦士風の姿である。魔法詠唱者マジックキャスターが何故戦士の格好を？と思うだろうが、全身鎧の方がスケルトンな体を隠しやすいからだ。それに、自分の力が強すぎる事を確認したので出来るだけ本来の力を出せない状態の方がいいと思ったのだ。

強すぎてもろくな事にならない。

男たちの視線を無視して、宿屋の主人に部屋を頼む。大部屋を案内されそうになったが、一人部屋を希望したら何故か怒られた。聞けば新米ひよっこ冒険者はここで仲間を捜すのが常識で、大部屋で互いを知り合う為にこの宿屋があるのだという。なるほど、受付で薦められたのはそう言う訳かと納得する。が、大部屋でスケルトンが仲間募集中でーすVなどと出来るはずがない。一人部屋でお願いしたらフンツと不機嫌そうに鍵を投げ渡された。

(まあ、そっぴりかな。かわいくない新人だよなあ)

内心申し訳なさげ部屋に向かおうとしたら、通路に足が差し出された。相手を見ればニヤニヤとこちらを見ていた。店主は知らん顔である。

これは――

(漫画でいう転校生新人にありがちの不良ゴロツキからの洗礼だっ!!)

アイنزの脳内で、転校生であるアイنزの行く手を阻む不良の凶が展開していた。

(ここで下手な対応をしたら俺の冒険者ライフは暗雲に見舞われる！)

気弱な姿勢をとれば不良のパシリとなる運命だとアイنزは気を

引き締める。正解を導き出さねばと空っぽの頭をフルに動かす。

ポクポク チーンツ！喧嘩は買わずスルーだ!!

伸ばされた足を避けて跨ごうとすると、足を動かされて当てられた！しまった！当たり前屋だった!!

「イツてーなおいー」

反射的に謝りそうになったが、ぐっと我慢する。ここで下手に出れば相手が凶に乗ってしまう。威嚇してくる冒険者がオヤジ狩りする若者に見えてきた。しかし、俺は気弱なサラリーマンではない!!

「すまない、まるで三下なセリフに笑いを禁じ得ない」

「はあっ?……うおっ!!」

こう言うときは強い姿勢でいれば不良は一目置く、オヤジ狩りの若者は賤の意味で少し痛い目に遭わせればいい。

襟首を持ち上げ、床に放り投げる——つもりが向こうまで飛んで行ってしまった。しまった。力加減を間違えた!しかし、そんな気配はみじんも見せずに仲間を睨みつける。強者に認められたようで視線を逸らされた。

よし!イベントクリア———と思ったのもつかの間。女性の奇妙な悲鳴に何事かと全員顔を向けた。そしたら冒険者らしい女がつかつかとやってきて鼻先に指を突きつけてきた。

れでいーすが現れた!などと脳内テロップが出たが、どうやら投げた男の先に彼女の買ったばかりの回復薬ポーションが有り、それを割ったから弁償しろとのことだ。回復薬ポーションごとкиと思ったが、食事や酒を我慢してまで買った回復薬ポーションを台無しにされたのだと言われれば、罪悪感が沸く。自分もそんな覚えがある。記憶無いけどすごい判るので多分ある。

かといって弁償するにも金がない。ので、自分の回復薬ポーションを渡すことにする。差し出したら乱暴にひったくられた!れでいーすこええつ!

「こ、これで問題ない、な?」

「——まあ、ひとまず」

ちよつと声が震えた気がする。一応は納得したようなのでそそくさと部屋に行くときすぐさま鍵をかけて一息つく。もうカルネ村に帰

りたい……。

魔法を解いて粗末なベッドに倒れ込む。別に休息も睡眠も必要な心が疲れた。けれど、大手を振って出てきた身だ。せめて倍は稼いでこないかと、出てきたときのことを思い出す。

村は財政難に陥っていた。

村人を殺され、畑を荒らされたのだ。暮らして行くには苦しい状況である。何とか村で遣り繰りするが、街に出て補充しなければ成らないものが多い。しかし、金がない。売るものだってまともな物はないのだ。

アインズが持つ金貨を使うことも考えたが、こんな立派な金貨をこの村が持っているとは知れたら賊がわんさかやってくるだろうから却下した。―その前に村人がそこまで甘えられないと辞退した―

「なら私が出稼ぎに行きます」

アインズが名乗りを上げた。冒険者になればアインズの強さだ、すぐさま稼げるだろうとの考えである。しかし、ゴウン様ばかりにと村人に罪悪感がこみ上げる。

「村は助け合うものでしょう？村の一員として働かせてくださいよ」

その言葉に、村長は申し訳ないと言いかき集めたお金をアインズに渡した。冒険者になるにも登録料があるし、さすがに街では宿を取らねばならないからだ。

「すぐに倍にして持って帰ってきますから」

そういつてアインズは村人に見送られてカルネ村を後にした。

その際、何かあったときのためにと、ゴ布林メイジにメッセージのスクロールを渡していたらネムの突撃に合った。初めに着ていたゴテゴテしたローブではなく動きやすいシンプルなローブをギユウギユウにつかんで来た。

どうしたのかと聞けば、小さな声で「いっちゃやだ」と泣きそうな声で言われた。慌ててエンリが引き離しに来たが、大丈夫だとネムを抱き上げた。

「ほんの少し出かけてくるだけだ。すぐに戻って来るさ」

「……………」

「お土産買ってくるからいい子で待っててな？」

コクリと頷くのを確認してエンリに託すと村を出た。その時手を振るネムの姿に出張する父親の気分とはこう言うものだろうなと胸が暖かくなった。

「うん、ネムのためにもがんばろう」

新米パパは気合いを入れた。

しかし、意気込んだものの自分のランクに合った依頼はシヨボいものだらけで、倍を稼ぐどころか託された金額を稼ぐのに半年は必要だろうと無い眉を寄せた。分かっている、初心者ならこういう依頼がベストだという事は、しかし、村に残してきたネムの悲しそうな顔を思い出すと稼ぎのいい仕事をすぐに受けたい。意を決してミスリルランクの高い報酬の依頼を手に取り受付に行く。が、やはり断られた。「私は別の国でも冒険者をしていったんだ。このランクの依頼でも十分にこなせる」

もちろん嘘だが、魔神かも知れない自分ではこれくらいの仕事さえも物足りないくらいだ。しかし、受付嬢は規則ですからと相手にしてくれない。そこをなんとかと、すがりつきたいが若い子に無理を言って困らせるのも社会人としてどうなのだと思ひ直し謝罪する。

「わがままを言って申し訳ない。では、銅のランクで一番難しい仕事をお願いしたい」

ここで高い仕事といわないのは金にガッツいていると思われたくないからだ。金のために嘘までついて仕事を取ろうとしたなんて噂になったら恥ずかしくて外を歩けない。

「それでしたら、私たちの仕事を手伝いませんか？」

そういつて若い冒険者の4人組に声をかけられた。これが漆黒の剣との出会いである。

彼らの仕事とはモンスターを狩って報酬を得るというシンプルな仕事だった。依頼ですらないが、モンスターを狩った分だけ金を得られるので渡りに船であった。安い依頼をこなすよりよっぽど稼げるとすぐさま契約した。その際に色々な雑談していると自分が知らない生まれながらの異能の話に興味が出る。が、そう珍しいものでもないらしく不思議そうに見られた。

——では準備が出来次第出発。と話している時、受付嬢に呼ばれた。

「モモンさん、名指しの依頼が入っています」

モモンとは偽名である。アインズの名前で登録してもよかったが、アンデッドがバレたときの保険である。アインズでバレてもモモンとして逃げれるし、モモンでバレてもカルネ村に逃げれる。

本当はモモンガで登録しようとしたのだが舌もないのに噛んでしまいモモンで登録されてしまったのだ。まあ、問題もないので別にいいが……。

いったい誰と思えば先ほどの雑談で出た有名人だった。何で俺を指名したんだと首をひねり、先約がいるからと断れば周りは驚いていた。ペテルでさえももつたいないというので、じゃあ話だけでもということになった。

有名人ンファイアの依頼は葉草採取の護衛である。採取場所まで行って戻って来るといふ簡単な仕事だ。アインズ——モモンを指名したのも宿屋で強さを見せた事で興味を持ったからだそうだ。安くすませられそうというのも納得の理由である。しかし、先約を蹴るのもどうかと思ひ。ペテルに共同で受けないかと誘えば二つ返事でOKされた。取り分が減るが、後々取り戻せばいい。

向かう場所がカルネ村と聞き、来て早々Uターンかどがつくり肩を落とした。

のんびりと草原を歩きながらカルネ村に向かう。来た道に戻ることに若干複雑な心境だが、軽いおしゃべりをしながら道を進むのを少し楽しいと感じていた。

そのうちモンスターが現れ戦闘になったが、オーガを一刀両断し戦士として十分戦えることにホッとする。そしてすべて倒し終えたモンスターの周りをキョロキョロと見渡しているとニニヤが不思議そうに近寄ってきた。

「どうしました?」

「いえ、クリスタルが落ちてないかと・・・」

「?」ゴブリンやオーガが宝石を持っている話は聞きませんが・・・」
そうなのかと首を傾げた。モンスターを倒せばなにかしらのデータクリスタルが手にはいると思ったんだがと、自分の知識に頭をひねる。

実はそう言う齟齬が度々有るのだ。自分の中の常識と世間の常識にズレがあり周りに不思議な目で見られることがある。そうはいっても壊滅的なズレではないので今は放置しているが、そのうち本でも読んで修正しようと思う。

まだ明るいうちにベースキャンプを作り寝床を確保するときも早すぎないかと首を捻ったが、逆に首を捻られてしまったのでこれもズレだなとモモンは心のメモ帳に記載する。

竈からおいしそうな料理のにおいにワクワクし、装われた野菜スープに感嘆の声を上げたところで気がついた。

(俺アンデッドだから食べねーじゃん!!)

ガビーン と碗を持ったまま固まるモモンに周りがどうしたのだと伺ってくる。あんなに楽しみにしておいて食べないなんて可笑しいだろう。必死に言い訳を考えて絞り出したのが――。

「わ、わたし猫舌でして――」

「ぶはっ！その図体で猫舌あつ!?!」

腹を抱えて笑い出すルクルツトを殴っていさめるペテルだが、その肩が震えている。ニニヤも横を向いているが耳まで真っ赤である。ダインもファイレーアも俯いて全く顔を上げない。

「うう、さ、さめるまで待ちますので皆さんは先に食べてください」

「うぶ、わ、わかりました」

震える声に言い訳を間違えたと後悔したがもう遅いと、碗を横に置く。

「そう言えば、何故皆さんは漆黒の剣なんです?」

話題を変えようと話を振れば、「ああ」と未だ横隔膜をヒクつかせながら教えてくれた。

「由来は、13英雄の黒騎士が持っていた4本の剣です」

パチツ・・・パチツ・・・

えっ！それで終わり?! 13英雄ってなに?! 世間の一般常識なの?!

「ど、どんな話でしたっけ?」

「え? 知りません?」

「あ、いや、かなり前に聞いたつきりなので詳細を忘れました」

「あー、まあ、興味なければそんなもんだよなあ」

幾分かがっかりしたルクルツトが頭をかく。申し訳ないと思いつつも話を聞けば200年ほど前魔神と呼ばれる存在と戦った英雄たちと聞いて思わず身を堅くした。

(魔神と戦った――)

自分は魔神ではないかと疑っている身としては大変興味深い話である。

その中の悪魔の血を引いているといわれる黒騎士と呼ばれる者が

持っていた4つの剣を見つけるのがこのチームの目標なのだという。しかし、その一つがすでに発見され王国の最高位の冒険者の手にあるとンファイレアから聞くと、少しがっかりしたように声を上げた。しかし、伝説と言われたものが実在することに逆に燃え上がったようだ。残り三本かー全員に行き渡らないなーと、残念がついていながらも、でも自分たちにはこれがあるだろと、黒い刀身の短剣をそれぞれ取り出すと光に照らして目を細めた。チーム結成の証かと察すると、モモンはなんだか羨ましく感じた。

自分にも仲間がいたのだろうか？いたとして今はいつたいどうしているんだろうか？記憶をなくした俺を探しているのだろうか？

・・・ズキリと頭が痛くなった気がした。

ンファイレアがペテル達の仲の良さを見て、モモンには仲間がいなのかと話を振ってきた。

「いや、私は――」

「モモンさんは一匹狼って感じだよなー」

「はは、足手まといはいらないってね」

「あれほどの強さをお持ちですから、一人でも大丈夫――」

「好きで一人なんかじゃないっ!!」

しんっ、と静まりかえった場に我に返ったモモンは何か、フオローしないと思うがグズグズと胸の中でくすぶるなにかが暴れている思考が纏まらなかった。

「――すみません、頭を冷やしてきます」

そういつて冷め切ったスープの碗を持って離れた。

どうして、あんな事を口にしてしまったのだろう。なにも覚えていないというのに――。

けれど、一人でいることは本意ではないのだろうか、まるで他人

事のように思う。

脳裏に、広い円卓で一人座り込む誰かを幻視した気がした。

「・・・何か、悪いことをいつてしまったようですね」

「——全滅、とかか？」

「ああ、それは——」

「辛いことを思い出させてしまったかも知れないであるな」

離れてしまったモモンの背が、なんだか小さく見えてペテルたちは眉を下げた。なんだか距離を開けているモモンに勝手にツルむのが苦手な人なのだと思いきんでいた。けど、あの叫びを聞いてモモンが一人なのは別の理由なのだと悟った。

「仲間を戦闘で全員失った人はあんな雰囲気を見せるよ」

「・・・また失うのが怖いから壁を作ってしまったのかな」

発した言葉は戻らない。後悔とは後から悔いることだと誰かがいった。奪われる辛さをよく知るニニヤは暗い顔をした。

そんな暗い雰囲気を変えようとわざとらしくンファイレアが話題を降ると、それに飛びつくように漆黒の剣も話に乗る。

最初はモモンの強さから自分たちも強くならねばという話、それからモモンの兜の下の素顔の話にンファイレアが食いつき、そして何故か恋愛の話に発展し、ンファイレアの恋を応援する所まで発展したところまで——

モモンが碗を持ってこちらを伺っているのに気がついた。どうやって声をかけようかと困っているのが目に見えて、ルクルットがニヤリと笑うとンファイレアを捕まえてモモンを呼んだ。

「モモンさくくん、カルネ村にンファイレアくんの恋人がいるそうですよ〜?」

「こ、こ、こ、恋人じゃないですっ!!・・・まだ」

ルクルットに呼ばれてほっとしたモモンは「ほうっ」と話題に入ってくる。

「青春してますね〜」

「若いっていいね」

「よくし、お兄さんがすっげーテクニク教えてやんぜ」

怪しくにじり寄るルクルットに身の危険を感じるンファイアが後ずさりする。が、

「お前は実践したこと無いだろ」

ペテルの言葉に撃沈した。

「さも自分の経験みたいに噂を教えるなよ。それで失敗したら可哀想だろう」

「う、うるせーっ!!俺だつて経験ぐらい有るわーっ!!」

一転してペテルに噛みつきにくルクルットに察したモモンはなま暖かい目を送る。ニニヤは呆れ果てて、ダインは微笑ましく見守っている。

「そーいうお前はどーなんだよ!!」

「私は普通に経験してますよ」

ペテルの応えにルクルットがよろめく。

「し、娼館は数に入らねーぞ?」

「当たり前だろう」

さも当然という顔に裏切られたとルクルットはペテルと距離を取る。

「い、何時だよ?そんな様子全然」

「いや、村にいたときに付き合っていた子がいて」

「こんな人畜無害そうなのに!!」

うわーっ!!と叫びを上げるルクルットを呆れた面もちでペテルが眺めていたら、ポンとモモンに肩を叩かれた。何かと振り返ったら。

「爆発してしまえ」

「ええっ?!」

何故か恐ろしいことを言われた。どういふことだと動揺してたら

ルクルットが味方を得たとばかりにモモンの元へと走った。

「モモンさんいいこと言った!!お前なんか爆発してしまえ!!」

「ちよ、モモンさんまでなにをつ」

「うるさい、顔がよくてちよつとモテるからって余裕ぶっこきやがって。爆発四散してしまえ」

「モモンさんが怖い!？」

「もーお前なんか仲間じゃないぜ!このヤリチン野郎が!!」

「そこまでじゃないぞ!」

「いやですねーあんな女には興味ありませんてすました顔しておいて」

「ほんとですよー、女に刺されてしまえばいいのに」

モモンとルクルットがヒソヒソ話しながら離れていくのをペテルはもう怒ったと追いかける。もちろん本気ではないのでたき火の周りをぐるぐる回るだけのじゃれあいである。モモンは意外とお茶目だったんだなとニヤもダインもンフィーレアも笑った。その日はルクルットが捕まってお開きとなった。

カルネ村につき、村の変わりように驚くンフィーレアたちを眺めながら素知らぬフリでモモンは続く。自分は今はモモンであつてアインズではない。村人やゴブリンに気付かれないように口を閉ざして村にはいり、ンフィーレアとエンリが話している間に丘の方に足を進めた。

「うん、作業は順調そうだな」

村の襲撃のあと、防壁を作ること提案したのはアインズだ。モンスターにも襲われるのは稀だと言っても、やはり無防備に村を晒すのはよくはない。

人が少なくなり男手が足りないと言われたが、そこはアインズの魔

法が役に立つ。力仕事が出来るものや地道な作業に向いているモンスターを召喚し、村人とともに防壁をこの短時間で作り上げたのだ。しかし、防壁が出来てもまだまだ村でやることが多いので、デスナイトやスケルトンたちを置いて行ったのだ。

離れている間、デスナイトに不具合が出ていないか少し心配していたが、問題なさそうである。媒体のないスケルトンたちは時間制限がありすでに消えているし、アインズも手助け出来ないから作業が遅れる心配があったのだが――

「いらぬ心配だったな」

広場では弓の訓練をしている村人も見える。人間はたくましいなあと眺める。アインズを頼るばかりではなく、自分たちで何とか出来る力を求めて努力している。――いい村だなと改めてこの村が好きになった。

誰かが丘を登ってくると気が付き振り向けばンファイアである。なにをそんなに慌てているのかと思ったら

「モモンさんは、アインズ・ウール・ゴウン様でしょうか!？」

「ファッ!」

いきなり正体を当てられた!

何で早々にバレたんだ?!聞けば俺の持っている赤い回復薬は普通の製法では作れないはずの特別なモノだそうで、この村人に使ったもの、そして宿屋で渡した回復薬ポーションから結びついたという。

常識の齟齬に足を掬われた訳だ。これは早々に改善しないとだめだと頭を抱えた。

「あー、内緒にしてくれないか」

「はい!何か事情がおりなんですよね!」

別にそう言う訳じゃない。意気揚々と出稼ぎに行っておきながら仕事ですぐ戻ってきたなんて格好悪いから黙っていて欲しいだけである。

しかしまあ、勘違いしてくれるのならそれでもいいかとほっとくことにした。

さて、薬草採取の仕事をしようと必要な薬草の説明を聞いていたのだが——なぜか見分けがつかない。

えー？何でこんなに見分けがつかないんだ俺？草の種類くらい……だめだ。全部同じに見える。漆黒の剣の皆は黙々と集めているし、モモンさんは休んでいいといわれたが、皆が働いている中俺だけ突っ立っているわけにも行かないと辺りを見渡す。

あつ、あれそれっぽい。そう思っただけで近づくが途端に混ざって分からなくなる。もしかして老眼か俺？

仕方がないとンファイレアに近づく。

「ンファイレアさんすいませんが私向こうを探してきます」

「え？見分けつかないんですよね？」

「ええ、なのでソレっぽいのを片っ端から集めるので後で選別してください」

「わかりました。あまり遠くには行かないでくださいね」

雇い主の了解も得たので探索を開始する。遠くからならソレっぽいのは判別できるのだ。場所を覚えてその草を取ってかごに入れていく。ハズレも多くはいるだろうがまあ、無いよりはいいだろうとどンドン奥へと進んでいく。——と、何かに引つかかった感覚があった。

その瞬間地鳴りが響き、何かがこちらに向かってくるのが分かった。ンファイレアに呼ばれたのですぐに戻る。

「森の賢王でしょうか？」

「さあな、とにかくデカいのがくるのは間違いない」

森の賢王とはここら一体をテリトリーにして魔獣だと道中に聞いていた。そいつのおかげでカルネ村がいままでモンスターに襲われずにすんでいるらしい。だから殺さないで欲しいとンファイレアにいわれたが、カルネ村を結果的に守っているのならアインズ的にも殺

したくはない。しかし、テリトリーに足を踏み入れてしまったのなら仕方がない。多少の痛い目を見せて追いつ返そうと剣を構える。

「ここは私に任せてお先にどうぞ」

「一人で大丈夫ですか？」

「無理と分かったらすぐに撤退しますよ。逃げ足にも自信ありますし」

冗談で和ませたら「無理をなさらないでくださいね」とペテル達は出口に向かって走り出した。

さて、白銀の四足獣で尻尾は蛇とのことだから、予想では鶴だと思うが——。と、森の影から突然伸びてきた鋭い攻撃をいなす。そのままそれは影の中に戻っていくのを見ておそらくあれが尻尾だろうとあたりを付ける。

森の影から声が聞こえてきた。自分の一撃をかわすものはそうそういないと感心すると見逃してやると言ってくる。しかし、モンスターの言葉をそのまま信用する気はない。それに妙な言葉遣いに顔を見てみたいという好奇心があつたので、少し挑発し姿を現すのを待っていたら——。

「じゃ、ジャンガリアンハムスター・・・？」

「なんと！そなた拙者の種族を知っているでござるか?!」

「え？あー・・・うん」

確かこんな生き物がいたはずだ、——手のひらサイズで。

聞けばどうも仲間がおらず一匹狼(?)をしていたらしく、己の種族すら知らなかったという。同種との出会いを期待しているところ申し訳ないがサイズ違いの別種と説明すれば「そうでござるか」と落ち込んだ。少し申し訳なくなつたが、ハムスターは気を取り直すと”命の取り合い”をしようと思巻いてくる。しかし、ちよつと顔を見たかっただけのモモンにはそんな気はサラサラないし、カルネ村の安全の為に縄張りをキープしてもらわなければならぬのだ。

しかし、どう納得させようかと考えても目の前の気が抜ける顔を見ているとなんだかばかしくなる。

例によりめんどくさくなり絶望のオーラレベル1で闘争心を根こ

そぎ奪ってやった。

恐怖に腹を見せて服従のポーズを見せるので後は帰っていいと手を振ったのだが……

「殿！拙者、殿に忠誠を誓うでござるよ!!」

「——はっ。」

なんと森の賢王は起き上がり、仲間になりたそうにこちらを見つめている！

「いらん」

モモンは拒否した。しかし、森の賢王はつぶらな瞳で見つめてきた。

じ——

じ——

じい——つ

「ああもう分かった分かった!!」

森の賢王が仲間になった!!チャラーン!

「こ、これが……」

「森の賢王?!」

「とりあえず支配下に置いたので暴れませんよ。しかし、これが森の賢王とは——」

「な、なんて——立派な魔獣なんだ!!」

「ファツ?!」

「すごい、こんなの俺たちじゃひとたまりもなかったな」

「強大な力を感じさせるのである」

「英知を感じさせる瞳です!」

「ええ?!」

皆の絶賛に振り返る。・・・どっからどうみてもデカイハムスターである。

「えーと、皆さんこれ可愛いと思いませんか？」

「——え？」

信じられないという顔に、モモンも信じられない気持ちでいっぱいだった。

「も、モモンさんにはこれが可愛いとを感じるんですか？」

「ええ——・・・」

俺の感覚が変なのか??そりや世間とのズレは激しいけど、だってハムスターだぞ?ハムスターとは可愛いモノなんじゃないのか?!

「すっげーなあモモンさん」

「・・・ソレは度量的意味ですか?それともセクシーの意味ですか」

ただただ笑うだけのルクルツトを睨みつけるが、モモンはもういと投げる。かわいさ談義なんてどうでもいいのである。

問題はこのハムスターが俺に付いてくると言っただけで聞かないのだ。

「拙者は殿について行くのでござる~~~~!!」

「い〜ら〜ん〜~~~~っ!!」

スガリツクのを腕を伸ばして引き剥がそうとするが梃子でも動くうとしない。しつぽを腰に巻き付けてくるし。

おっさんがハムスターをつれて歩くなんてどんな羞恥プレイだ!!

周りは周りでいいじゃないですかとハムスターの味方だし、唯一こちらの味方は縄張りの心配をするファイヤーレアだけである。

「拙者に乗って颯爽と駆ってくださいれ~~~~」

「よけいにい〜や〜~~~~じゃ~~~~っ!!」

「いや〜懐かれていますね」

懐かれていますねじゃねえ!!

結局問答で日が暮れた。

*
*
*
*
*

漆黒の英雄

エ・ランテルに戻ったのは日もずいぶん暮れた頃だった。

森の賢王改め、ハムスケのおかげで馬車いっぱい薬草採取が出来、ンファイレアは上機嫌である。特別手当も期待してくださいと言われるとモモンも現金なもので、荷物の積み卸しも手伝いましょうという。それに続くように我々も漆黒の剣もかってでる。

「今回我々あまり働けてませんし」

「薬草採取で頑張ってたじゃないですか」

「ソレもハムスケ殿にほとんど持ってかれましたし」

さすが森の賢王。ンファイレアが見せた薬草をすぐさま把握すると一抱え分持つて現れた。しかも貴重な薬剤の原料も取ってくるのだから、直前に採取した薬草はすぐさま埋もれてしまった。

「殿々褒めてくだされ〜」とモモンにまとわりつく姿は伝説の魔獣と言うよりはご主人が大好きな犬を彷彿させた。——その伝説の魔獣は森に置いてきている。さすがに大きな街で連れ回すにはデカすぎるし、モモン本人が全力で拒否した。ハムスケも最後まで粘っていたが、結局モモンの「縄張りを守り、周辺の村を守れ」という指令に渋々従った。時々様子を見に来るからと言う約束に「絶対でござるよ〜〜〜」と涙ながらにモモンたちを見送った。

「絶対伝説の魔獣に騎乗した方がカッコいいと思いますけどねえ」

「……………絶対にイヤです」

恥ずかしくて憤死するとモモンは言うが、漆黒の剣もンファイレアも首を傾げてしまう。モモンの美的感覚は常人とは違うようである。「着きましたよ。荷卸をお願いしますね」

「了解です！」

ペテルが元気よく応え、それぞれ馬車の荷物を下ろしていく。モモンが一番重い荷物を持つものだから、ルクルットが不満げに口を尖ら

す。

「ここでも一番働かれちゃ、先輩の面目がねーんだけどー」

「ははは、ここは後輩をこき使うということだ」

適材適所という言葉もあるものでそれ以上はなにも言わず、それぞれ荷物を店の裏口に運び込む。ンファイレーアの冷えた果実水が有りますよという言葉に喜び、先にモモンさんが飲んでくださいと薦められたがどうやっても飲めないのどう断ろうか悩んでいたときだった。

——奥の扉から女が現れた。雇い主の姉かと一瞬思ったが雰囲気物が物騒だとな眉を寄せた。

「はあい、おかえり。ずっと待ってたんだよ？」

「え？誰？」

「お知り合いじゃ、ないんですか？」

訝しげにペテルが聞けば、おかしな女がンファイレーアを浚いに来たのだとあっさりとまるで世間話のように語る。瞬間、全員がンファイレーアを庇うように展開するが、女は気にした様子もない。腕に自信があるのか、それとも狂人か……。

モモンは注意深く周囲を警戒する。こういう輩には仲間がいるはずだ。一人が注意を引きつけ、もう一人が背後を取る。

——思った通り、背後の扉から年齢不詳の男が現れて出口を塞ぐ。どうやら魔法詠唱者マジックキャスターのようだとあたりをつける。さて、まずは雇い主を逃がさないと——。

「一旦引きましょう。こいつらの相手は私が引き受けますので」

「そんな！モモンさんだけに任せられません!!」

ンファイレーアをニニヤに任せて皆で掛かれば——、と、一陣の風がペテルを襲う。刺殺武器と認識するより前に目の前で火花が散る。目の前で交差するモモンの大剣と女のステイレットにペテルの目が見開かれる。

「ふくん、デカ物にしては意外と早いじゃん」

「どうも」

にんまり笑う女に気のない返事をしたモモンだが内心冷や汗の滝である。

(あつぶね!!気付くの遅れてたらペテル死んでた!!)

純粋な戦士ではないモモンに殺気を感じることは出来ない。たまに彼女の片足が後ろに引かれるのに気が付いた為、対応できたに過ぎない。

「ペテルさんたちは組合に応援を呼んでください。敵がこの二人だけとは限りませんので」

「あははっ!どーやってえ? 出口は塞がれてんだよお??いつとくけど、そのカジツちゃんも弱くないんだよ?」

確かにこの部屋の扉二つを敵にふさがれているのだ。一方の敵を倒してそこから脱出するにももう一方の敵の攻撃をどうにかしなければならぬ。万事休すと漆黒の剣がそれぞれの武器を握りしてていたら——モモンが無造作に剣を奮った。

「別に、扉から出る必要はないだろう?」

そう言っただけ音を響かせてぶち抜いた壁は外まで続いていた。まさかの力業に敵もポカリと間抜けな顔を曝していた。

一瞬早く我に返ったのはモモンの力を知っていた漆黒の剣で、出来た穴から脱出する。残っていても足手まといだと悟ったからだ。ならば言われたとおり組合から応援を呼んだ方がまだ生存率が高い。

「モモンさんお気をつけて!!」

ニニヤの声に片手で応えると穴を背に二人と対峙した。

「ちっ!逃がしてなるものか!!」

「簡単には通さんぞ」

男の方がペテルたちを追いかけようとするので、行く手を阻もうと剣を手にしたが、横から女が邪魔をする。

「あなたの相手はあ・た・しv」

「ちっ!!」

素早い突きにモモンは何とか防ぐが、男を取り逃がしてしまう。——少し甘くみていたかとモモンは女と改めて対峙する。

「あはっ、楽しませてね。お・に・い・さん」

「——やれやれ」

後ろから追いかけてくる気配にペテル達はニヤとンファイレアを先に行かせて、応戦の構えを取る。

「おいおい、じーさん一人で俺たちとやんのかい？」

「黙れ若造め、おまえ達の相手はこいつらだ」

そう言つて奇妙な玉を掲げると、どこからともなく動死体^{ゾンビ}が現れた。

「かかれっ!!」

一斉に飛びかかってくる動死体^{ゾンビ}にペテル達は苦戦する。それほど強い敵ではないが、数が多い。確実にしとめるには首を落とすしかないのだが、なかなか思うとおりの攻撃が当たらない。

まごついていたその時ペテル達の背後から悲鳴が上がり、慌てて振り返れば倒れるニヤにフードをかぶった男達に抱えられる意識を失ったンファイレア。

「ニヤっ!!」

「ちつくしようがっ!!」

ルクルツトが走ろうとするが動死体^{ゾンビ}に阻まれて動くことが出来ない。

「カジツト様、捕まえました」

「よし、では儀式に入るぞ。おまえ達はこいつ等を食い散らかしてお

け」
動死体^{ゾンビ}共に命じると、カジツトと呼ばれた男はフードをかぶった男達とどこかへと去っていった。

ガシャンッ！と漆黒の鎧が薬草棚を巻き込み倒れ込んだ。その両目にはそれぞれ炎と電撃をまとったステイレットが刺さっていた。

「はい、しゅーりょー。意外と骨があったねえ」

確かに力は強いが、戦士としての技術は全くなく、しかも獲物がデカすぎて狭い室内で向こうには不利な戦いだった。——それでも、彼女が奥の手を出すほどには手こずったのだが。

「カジツちゃんもお目当ての子、捕まえたかな？」

あの程度の冒険者に後れを取るはずもないと、刺さっていた愛用の武器を引き抜くと、倒した相手のプレートを見て驚いた。

「え〜？銅のプレートお??オリハルコンぐらいは有ると思っただのに」

確かに技術は素人だが、自分と良い勝負をした相手が最下級と知って顔をゆがめた。乱暴にプレートを引き剥がすとフンと不機嫌に鼻を鳴らす。

「・・・まあ、結構な成長速度だったし早々に殺せてよかったわ」

今までの口調をがらりと変えると、もう興味はないと店を出ていった。

「——俺がスケルトンじゃなきゃ死んでたな」

女が去ったことを確認し、モモンはむくりと起きあがる。目を刺してさらに炎と電撃つて、こええ女だとモモンは肩を震わせた。

勝てない相手ではないし、本気を出すほどではないと判断したモモンは初戦は捨てて情報収集に徹していた。

あの女を倒したところで、男が逃げてしまっただけは探すのに手間取るだろう。だったら泳がせておいて相手の隠れ家を一気に叩こうと思えば、女のマントに気付かれないようにマーキングアイテムを取り付け

て置いたのだ。

「しかし、俺のプレートを持って行くとは……」

物体発見魔法を警戒しないのかあの女はと、呆れながらもプレートを無くしたときの弁償料を考え、取り戻さねばと強く頷く。

「ペテル達は無事かな」

反撃を考えなければ逃げられない相手ではないと思うが——。そう考えながらモモンは外へと歩き出した。

ペテル達に襲いかかる動死ゾンビ体共を後ろから剣を一閃させて首を跳ねる。生命に襲いかかる動死ゾンビ体は、アンデッドであるモモンには見向きもしないので後ろから楽に首を落としてやる。そうして最後の一体を倒すと、ボロボロのペテル達が何とか立っているのが見えた。

「大丈夫ですか」

モモンの姿にホツとしたペテルだったが、すぐさま足を引きずりニニヤの元へ走った。

「ニニヤー！」

「こりやひでえ……」

ニニヤの体は酸によつて爛れ、浅い息を繰り返していた。騒ぎを聞きつけたのか、街の人間も集まり始めていた。

「いったいどうしたんじゃ?!」

「あなたは……」

ペテルが振り向いた先にはこの街で知らぬ者はいない老婆が立っていた。リイジー・バレアレ。雇い主の祖母だ。敵に遭遇せずにいたのは幸いであった。

「すぐに回復薬ポーションを」

ペテルがリイジーに事情を説明しようとして声をかけるが、その前にリイジーがモモンを、正確にはその手に持つ赤い回復薬ポーションを異様な目で見ていた。

「お、お主そのポ」

ばしやあ

「ほぎやあああああつっつ?!」

レイジーがモモンに声をかけるより早く、ニニヤに赤い回復薬をかける時、レイジーは目を見開いて絶叫した。そして真正面にいたペテルはレイジーの形相に「ヒイ!!」と後ずさった。

「う、うん?」

「おおつ、ニニヤ!」

「すっげえ効き目の回復薬だな!」

普通の回復薬ならじわじわ傷口が塞がっていくのに対し、モモンの使った赤い回復薬は一瞬で傷口を塞いでしまった。ああ、よかったと一安心するより速く、レイジーがモモンに詰め寄った。

「おおお、お主なんて勿体ないことをするんじゃない?」

「うわっ!?!な、何ですか?!」

異様に目をギラつかせ、憎悪すら籠もった目でモモンにつかみかかるレイジー。

「お主が使った回復薬は”神の血”と呼ばれる回復薬なんじゃぞ?!普通の価値に換算しても金貨8枚!付加価値をつければとんでもないもんなんじゃぞ?!」

「えええっ?!?!」

それに驚いたのは漆黒の剣である。惜しげもなく使ったのがそんな回復薬だと知れば使われたニニヤの顔は真っ青になる。しかもソレを言ったのは”あの”レイジー・バレアレだ。誰よりも正確な価値換算で有ることは疑う余地もない。

モモンは揺さぶられるまま、「ちよつと!」「落ち着いて」と宥めていたが、レイジーのしつこさにブチ切れた。

「ああもう知ったことかっ!!人の命より大事なものなど有るものかっ!!」

モモンの器のでかさに野次馬も漆黒の剣も感動した。しかし、モモンとしては余りまくっている自分では使わない回復薬を自分の好きにつかってなにが悪いという感覚である。

レイジーも頭が冷めたのか少し落ち着いたが、恨めしげな目は変わ

らずモモンに注がれている。ちよつとどん引きである。

「そんなことよりンファイアーさんは？」

「孫がどうかしたのか？」

え。とモモンがリイジーを振り返った。このクレイジーなばーさんの孫？と、一瞬誰のことを言っているのか分からなかった。

「ああそうですモモンさん!!ンファイアーさんが浚われました!!」

「なんじゃと?!」

再び目の色を別の色に変えたリイジーが今度はペテルにつかみかかる。ボロボロのペテルを前後左右に揺さぶり、どういうことだと怒鳴るリイジーにペテルの顔は真っ青である。多分首も締まっている。

対してモモンはやはりな、と冷静である。逃げ切れれば一番良かったが他に仲間がいたら挟み撃ちに合うだろうと予想は付いていた。

だから、こちらはあまり長引かせずに早々に負けて見せたのだが。

「大丈夫、敵の居場所はすぐに分かります」

リイジーがペテルを絞め殺す前にそう言えば、「本当か?!」と解放した。まるで動死体ソシビのようによろめくペテルに、大丈夫かとダインが支える。

「女の方にマーキングしていますので、魔法で場所は特定できます」

ただ、何らかの儀式にンファイアーアを利用すると言っていたので、早く特定しなくてはならない。

「とりあえず店に戻りましょう。——あとニニヤさん、これどうぞ」
そういつて差し出したマントに首を傾げるニニヤにルクルットは明後日の方向を見ながらニニヤの胸元を指した。

「? ~~~~~っ!!」

バツとモモンのマントを受け取ると頭からひっかぶる。幸い暗いこととモモン達が影になっていて野次馬たちには見えていないようだった。

「こ、これは、その!!」

「大丈夫だってニニヤ、何も心配すんな」

ルクルットも、ペテルもダインもすでに知っていて知らないふりをしてきていたのだと気付いて、ニニヤは顔を赤らめた。

「だいたいそんなまっ平らの胸に欲情する男なんていないグハアツ!!」

よけいな一言で鳩尾に重い一撃を食らったルクルツトはその場に沈んだ。

その晩、エ・ランテルの墓場は騒がしかった。

扉を叩く音、怨嗟のうなり声に門番の悲鳴。大きな門はもはや破壊寸前まで歪みきり、ビキビキと不吉な音を立てていた。

今夜もいつもの夜だと思いついていた兵たちは恐怖で顔を真っ青にしていた。激を飛ばしている警備隊長でさえ顔色が悪い。

もうだめだと逃げだそうとする者も出始めて、警備隊長が死を覚悟したときだった。

「このままだと入れませんね」

……のんきな声が背後から聞こえ、警備隊長の男が振り返ると見事な漆黒の全身鎧の戦士が立っていた。冒険者かと思ったがどこにもそれを示すプレートがない。旅の者かと思う暇もなく。下がるよう怒鳴ろうとして——飛び越えられた。その跳躍は人一人どころか、墓場を囲む塀すら飛び越えた。

バカなど、慌てて塀を駆け上がり男を探す。自殺かと思えるほど無謀な行為に、墓地をのぞき込んだ隊長は——自分の目が信じられなかった。

月明かりに鈍い閃光が瞬く、そのたびにスケルトンが砕ける音、動死体がつぶれる音、そして、わずかに届く光に照らされたのは漆黒の戦士、いや、漆黒の英雄だった。

時間にしてほんの数分で、アンデッドの上げる音が聞こえなくなる

と、中から声があがった。

「いいですよ！周囲にアンデッドはいません!!」

それに答えたのは4人の冒険者だった。プレートは銀。正直言って力不足だと男は思ったが、あの英雄の連れだと思おうと心強く見えた。

「門を開けてください」

その言葉に圧倒された兵は素直に門を開けて通した。

「すぐに応援が来ますので、それまで持ちこたえてください」

男の言葉に兵は頷くとすぐさま体制を整えるために動き出した。隊長の男は、もう一度墓場に目を向けた。まるで道ができるように倒されるアンデッドとその中を進む冒険者達。

「まるで、英雄の物語のようだ」

そう呟くと男も隊長としての務めを果たすために走り出した。

「カジット様、来ました」

フードの男に言われて顔を上げたのはやはり店にいたあの男であつた。彼がリーダーなのだろう。不思議なものを見たように目を見開くとチツと舌打ちした。

「しくじっているじゃないか」

始末したと言ったはずの男が平然と立っているのだ。それは驚くだろう。

「お前の言うことは当てにならない」

「——こっちもびっくりしてるわよお」

そういつて霊廟から現れた女はのんきな物言いとは裏腹に、顔は不快気に歪んでいた。

「どーいうトリック？てか、何でここが解ったのさあ」

「場所が解ったのはお前に取り付けたマーキングアイテムのおかげさ。あとは——種をあかしたら手品じゃないだろ？」

苦々しく舌打ちした女は「じゃあ今度は死んだふりも出来ないくらいバラバラにしてやんよお」と邪悪な笑みを浮かべた。

しかし、モモンは肩を竦めたただけだ。

「悪いが、お前の相手をする気はない」

「あ”あ？”」

その言葉に進み出てきたのは漆黒の剣の四人だった。

「バカじゃねえの？そんな雑魚をいくら連れてきたって瞬殺だつての」

「そうとは限らんよ」

顔をこれでもかと歪ませた女は「殺す殺す、絶対殺す」と呪詛を吐いた。しかし、そんな女を全く相手にしてないモモンは後ろに飛んだ。

そのすぐあとに大きな骨の鉤爪がその場所を抉った。

スケリトル・ドラゴン
「骨の 竜か」

骨の竜に慌てた様子もなく見上げたモモンは漆黒の剣を振り返ると「では、計画通りにお願ひします」と声をかけた。

マーキングアイテムのおかげで敵の居場所が分かり、すぐさま救出に向かおうとするペテル達を一旦止めたモモンは、まずは女の情報を共有した。

「彼女の強さは普通に言えば、私より上ですかね」

その言葉に目を剥いた漆黒の剣は互いを見る。そんな相手に勝てるのかと。

「しかし、攻略法さえ間違えなければ皆さんでも十分戦えます」

先ほどの戦いでつぶさに観察した女の技、早さ、武器、そして癖。それを分析し、モモンは女の攻略法を見いだしていた。初戦を捨てることで、次の戦いには必勝出来る方法を見つけだす。自然にそうすることをモモンは選んでいた。

(おそらく己の身に染み着いた戦い方なのだろう)

情報こそが重要だと考え、無理はしない。それが、自分のみだけではなく仲間の身を守ることもつながるのだ。

「問題は男の方ですね。どれほどの強さでどんな魔法を使うのか不明な点が多い」

動死体^{ゾンビ}を使役したと言うので死霊使いだろう、自分の”不死の祝福“に直前まで反応がなかったから、一度に大量の動死体^{ゾンビ}をその場で生み出したと思われる。さらに女がしゃべっていた情報が真実なら第七位階の魔法行使が可能なアイテムもある。

——初見の敵ほど厄介なことはない。

「情報を集めるのにも時間がない。なので、男の方は私が相手をしますので、皆さんに女の方をお願いしたい」

「私たちに倒せますか?」

「別に倒す必要はありませんよ。ただ、攻撃を凌ぎ続ければいい。こちらの攻撃は考えなくて良い」

モモンの言葉に訝しげにすると、モモンは笑ったようだった。

「隙を見せない守りは厄介ですよ?」

その言葉通り、女は亀のように防御に徹する漆黒の剣を倒せずに苛ついていた。

挑発しても聞く耳を持たず、ただ攻撃をいなしていく。まるで自分の動きを読まれているかのような感覚に、不気味さと腹ただしさを感

じていた。

「この！人外——英雄の領域に足を踏み入れたクレマンティーン様が
がてめえらゴミごときにいっつ!!!」

攻撃は一切受けていない。しかし、女、クレマンティーンアのプライドはズタズタに切り裂かれていく。どうして殺せない。いつだってこんな屑共はスツと行ってドスつで終わっていたのに——!!

完全に頭に血が上っているクレマンティーンアの攻撃は単調で、ますます読みやすくなる。ペテルはなるほどなど、モモンの情報把握能力に恐れ入る。

クレマンティーンアの攻撃に移る際の僅かなくせと、彼女がどこを狙ってくるかが解ればペテル達でも十分戦えた。無理はしない。死なない。それがこんなにも強さになるとは——。

完全によけきらなくても良い。急所さえはずせば、傷は回復できる。回復役を狙われても、自分が盾になればいい。

ダメージは蓄積されるし、相手を倒すことは出来ない。けれど、時間稼ぎには十分なる。

モモンを信じて待てば良いだけだ。

——そのモモンは現在骨^{スケリトル・ドラゴン}の竜と戦闘中である。フードの男たちの援護射撃に、時折漆黒の剣のメンバーを狙う攻撃をいなしながらモモンは宙を舞う。斬撃は利かないため剣の側面を使つての殴打を繰り返す。すぐさま回復をされるが知ったことではない。密かにマナエツセンスを使つて相手のMP量を確認。あまり大きな魔法が使えなくなるほど消耗するのを待つ。

(やはりたいしたことはないかな?)

慎重に慎重を重ねては来たが、やはり弱い敵に怯えすぎかと苦笑いをこぼす。このままでも十分勝てるだろうと、楽観視し始めていると、——カジットが仲間を殺し始めた。何事かとフードの男たちが悲鳴を上げるのをない目を見開いていると、それを動死^{ゾンビ}体化させた。

——そしてこちらに突進させてくるので特に考えずに首を跳ねて

倒す。

「十分だ！十分な負のエネルギーが集まった!!」

脈動するアイテムを掲げるカジットに、モモンは身構える。そのアイテムにどのような効果があるか解らないからだ。

「見よ！死の宝珠の力を!!」

その叫びに呼応するように大地を裂いて現れたのはまた骨スケリトル・ドラゴンの竜である。

「二体目か・・・」

あのアイテムにより骨スケリトル・ドラゴンの竜が召還可能ということに、モモンはない眉をひそめる。あとどれほどの数を召還できるのだろうか？

さらに増やされてはモモンだけならまだしも、漆黒の剣を庇いながらだと厳しい状況だ。

・・・実際は最後の力を振り絞つての召還だったが、慎重なモモンは楽観視はしなかった。

二体の同時攻撃や、漆黒の剣を狙う骨スケリトル・ドラゴンの竜。次第に劣勢になっていくモモンと、体力が尽きかける漆黒の剣にカジットとクレマンティーヌに笑みがこぼれた。

「——やめた」

突然モモンが肩を落としてため息を付いた。それに漆黒の剣が驚いた顔を向け、

「あはは、なんだ諦めちゃったのお？」

クレマンティーヌは嬉しげに笑う。

「はあ、ちよつと見くびりすぎた。やっぱり強い奴はいるもんだ」

やれやれと首に手を当てて自分の楽観視を反省する。諦めたにし

ては軽い雰囲気には訝しげに見ていると、とんでもないことを言い出した。

「しょうがない、本気を出すか」

「——はあ?」

今まで本気ではなかったというのかと目を剥くカジットに、逆にバカにしたように爆笑したクレマンティヌ。

「本気だあ? そーんなお粗末な技量で本気もなにも有ったもんじゃないじゃん! アホだろお前!!」

力がいくら強くても、戦士としての技量は全くない。むしろ少しづつ強くなっている所である。そんなモモンの本気とはなんだというのか?

「あれか? 重い鎧を脱いでスピードアップとか考えてんの?? バカバカしい。戦士失格じゃん!」

「——いつ、俺が戦士だと言った?」

モモンの言葉に、空気が止まった。なにを言っているのだこいつはと狂人を見る目が変わる周囲に、モモンは剣を投げ捨てた。

しかし、その捨てた剣は地に落ちるより早く霧散してしまい度肝を抜かれた。

「は?」

「——出来ればこのまま隠し通せば良かったんだが、そうも行かない。おまえたちを侮りすぎていたよ」

本当に迂闊すぎると、頭を振りながら——アインズは魔法を解除した。

その瞬間息を飲む音が一つにまとまり大きな音となった。

「ア、ンテッド? ——エルダーリツチか!?!」

「正確にはオーバーロードなんだけどな」

これである店で殺せなかった理由が解った。スケルトンは斬撃、刺突を無効化する。バカバカしいトリックである。しかし、だからなんだというのだとカジットもクレマンティヌも相手を睨みつける。

「たとえばエルダーリッチといえど、骨スケリトル・ドラゴンの竜には魔法に対する絶対耐性がある!!」

「ほう? 俺が知っているのとは違うな」

腕を組んで骨スケリトル・ドラゴンの竜を見上げる。

「俺が知っているのは第六位階以下の魔法の耐性でそれ以上の魔法は通すんだが——これも俺が持つズレなのかな?」

妙なことを言うアンデッドにカジットは呆然とした。なにを言っているのだ?

「まあ、倒す方法はいくらでもあるが、一応試しておくか」

広げた手に見たことのない魔法を展開するアンデッドにカジットは知らずに一歩後ずさった。

「チェイン・ドラゴン・ライトニングへ連鎖する龍雷」

その魔法に、一体の骨スケリトル・ドラゴンの竜が粉々に散った。もうカジットには理解が及ばない。

「なんだ、やっぱり俺が知っている通りじゃないか」

利かないならスキルを使用して大技を使うことも考えていたが、必要なかったなど、もう一体にブラックホールを使う。

そうして跡形もなく消えた奥の手に、カジットはガタガタと震え逃げようと足を動かした。——が。

「時間対策はしておいた方がいいぞ?」

真後ろに現れた死の具現にカジットが悲鳴を上げる間もなく、肩に手を置かれた。触れた瞬間、体が動かなくなりそのまま大地に転がった。

「な、なにやったの?! なにも見えなかった!!」

クレマンティーヌはあのアンデッドがどうやってカジットの後ろに回ったのか解らなかった。今までの動きから、クレマンティーヌより早く動くことなんて出来ないはずだった。

「ま、魔法詠唱者マジックキャスターが戦士より早く動けるはずない!!」

「簡単な話だ。時間停止魔法を使ったんだ」

場違いなほど軽い声にクレマンティーヌは顔を真っ青にさせて後ろを振り返った。……本当ならそのまま逃げれば良かったのだが、信

じたくなかったのだ。それに逃げたところで無駄に終わったが――

ガツリと首を捕まれ持ち上げられた。息を出来ることから力は加えていないことが解る。

「がつ!!は、離せ化け物!!」

認めない、認めてなるものかとがむしやらに暴れる。私は英雄の領域に足を踏み入れた。魔法詠唱者などスツと行ってドスで終わりだった。

私は劣つてなんかいないと目の前に骸骨を拳がつぶれるのもかまわず殴った。

「まったく、おとなしくして欲しいな。へ絶望のオーラレベル」

負けを認めず暴れ、無駄な傷を増やすのでアインズは戦闘意欲を奪おうと、ハムスケにやったようにスキルを使用した。

すると、その目に恐怖が宿りピタリと動きを止める。よし。と思う前に結構な勢いの水音が足下から上がる。

「え?あつ!?!」

女の股間から流れるものに驚いて手を離してしまう。大きな水たまりに落ちたクレマンティヌは涙と鼻水を垂らしながらヒイヒイと距離をとろうと地面を這う。

そのあんまりな光景に、思わずアインズが「だ、大丈夫か?」と手を伸ばせば悲鳴を上げて身を丸くした。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ガタガタと幼子のように泣く女にどうすればよいか解らない。人間に使用するとこうなるのかと、使用上の注意を心のメモに書き留めておく。仕方がないとニニヤを呼んだ。女のごとは女に任せるべきだ。

呼ばれた瞬間、身を震わせていたが意を決したようにこちらに歩いてくるニニヤにクレマンティヌを頼む。

「着替えはないからこれで巻いてやってください」

水とタオル、それと大判の布を渡すとぎこちなくも領いて、泣きじやくるクレマンティヌを連れて茂みに消えていった。

闘争心は折ったから大丈夫だとは思う。あとはカジットを拘束し、
ンフィーレアの居場所を吐かせなくてはならない。・・・クレマン
ティーヌは無駄だろう。ちよつとやり過ぎた。

ペテル達も少し、警戒していたがアインズが呼べば応えてくれる。
仲間だという認識がまだあるようでホツとした。

「モモンさん、あなたは——」

「詳しいことはあとで説明しますから、まずはンフィーレアさんを救
出しましょう」

その言葉に素直に頷いたペテルは動けないカジットを縛り上げる。
倒れたときに頭でも打ったのか意識はない。ルクルットが乱暴に呼
びかけているのを見て、ふと、足下にカジットが持っていた死の宝珠
が転がっていることに気が付いた。

拾い上げて、鑑定すると驚くべきことが解る。

「知性あるアイテム？俺も知らないな？しゃべれるのか？」

——「はい、”死の王”よ」

うわっ！マジでしゃべった!!と取り落としそうになるのを何とか
阻止し、しげしげと眺めた。

なにやら自分に仕えたいと喋ってくる玉に、ハムスケの姿が重な
る。どうしたものかと考えていると、カジットが目を覚ましたらし
い。だが、その様子がおかしい。

「わ、私はなにを——っ」

まるで悪い夢から覚めたように動揺し、そして今までの自分を振り
返って犯した罪に嘆いている。その様子に、死の宝珠を見下ろす。

「お前がカジットを操っていたのか」

——「左様でございます”死の王”」

まるで誇るような声にアインズは思わずこめかみに手を当てる。
すると声が聞こえていたらしいカジットが悲鳴のように死の宝珠を
罵倒した。

「お、おま、お前のせいで大勢の人間が死んだ!!私はただ、お母さんを
生き返らせたかっただけなのに!!」

——うるさいぞ愚か者め、私は思考を誘導したに過ぎない。人間

を殺したのも、この街を死の都市に変えようとしたのもお前の意志だ。

滝のような涙を流すカジットに、死の宝珠は見下したように突き放す。自分の罪に押しつぶされたようにカジットは泣き続けた。それが哀れだと思いアインズは側まで歩み寄った。

母を蘇らせた。それは誰もが考えることだ。泣くカジットの姿に親を亡くしたばかりのエンリとネム、村の子供たちの姿が重なる。

そして不意に、白い布を被せられた横たわる大人の前に立ち尽くす黒髪の少年の後ろ姿を幻視した。しかし、認識するより先に掻き消えてしまう。

「お前には運がなかった。それだけのことだ」

カジットと視線を合わせるように膝をつける。涙と鼻水でグシャグシャな顔はやはり子供のようだ。どれほど無駄な時間を費やしたか、哀れなことだ。

「親を生き返らせたいと願うのは誰だって同じだ。だが、大抵はそれを選び越えるか、諦めるかを選ぶ。．．．それを選べず、道を踏み外してしまったお前は運がなかったのだ。操られていたとしても犯してしまった罪は罪だ。——それでも、今からでも償い、やり直すことは出来るだろう？」

呪縛は解かれた。ならばこれから償うために生き、人生をやり直すべきだ。涙を流すカジットにアインズは優しく頭を撫でた。

最初の償いとして、ンフィーレアの元まで案内させると、霊廟の地下で薄布の衣服をまとったンフィーレアが立っていた。すぐさま漆黒の剣が駆け寄り声をかけるがピクリとも反応しない。

「——叡者の額冠は、使用者の自我を奪い。魔法を吐き出させるだ

けの存在にする。・・・しかも、使用者からは必ず発狂してしまう恐ろしいものだ」

なんと恐ろしいことをしてしまったのだとカジットは顔を青くして震える。漆黒の剣が絶望的な顔でカジットを振り返るが、その横を通り過ぎてアインズがアイテムの鑑定に入る。

「ふむ、破壊すれば発狂せずにはすむようだな」

「お待ちをー」

破壊しようと手を伸ばすアインズを止めたカジットを、ルクルットが睨みつける。しかし、震えながらもカジットは尚も言い募る。

「そ、それはクレマンティーンが法国より盗み出したあの国の最至宝。もし、それを破壊すれば法国が黙っていないかと・・・」

法国の名を出されてペテル達は顔を見合わせる。もしこれを破壊すれば、最悪法国と戦争になるかもしれない。一介の冒険者には荷が重すぎる問題だ。ならば組合に相談しなければならぬと考えていると鼻を鳴らす音が聞こえた。

「それは人の命より大事なことか？」

バカバカしいとばかりにアインズはどうやってかしらないが鼻を鳴らす。カジットは一瞬黙るが、しかし、法国は人の命より叡者の額冠を取ってきたのだと説明した。その言葉に、ガゼフを殺そうとした法国の特殊部隊を思い出す。大のために小を切り捨てるのは理解できる。

しかし、法国の覚悟の上で身を捧げた者と違い、ンファイレアは利用されただけの存在である。——だからといって操られていたカジットが責任を負えと言うのも少々かわいそうである。

メンドクサイ。

アインズは問答無用で叡者の額冠を破壊した。あちらこちらから悲鳴が聞こえたがかまわず、倒れるンファイレアを受け止めた。

「責任は俺がとる。法国がごちやごちや言うのなら直接話を付けてやる」

そう言うとなンファイレアを抱えて歩き出した。

霊廟から外に出ると、思い出したようにアインズは漆黒の剣を振り返り、ンファイレーアを託した。

「あとをお願いします」

そう頭を下げて、出口とは別の方向に歩き出すアインズにペテルはどうしたのだと声をかける。

「正体もばれましたし、この街にはいられませんのでここでとんずらします」

出稼ぎして早々アンデッドがバレてしまい、資金の倍稼ぐ所ではない。村長には申し訳ないが冒険者はやめることにする。

遠い国にでも行って、自分のマジックアイテムを換金しようとションボリしていたら、グツとルクルツトに肩を捕まれた。

「おいおい、なに水くせーこと言っただよモモンさん」

「そうである。これほどの偉業を成し遂げながら黙って去るなど言わないで欲しいのである」

「私たちにモモンさんの手柄を横取りするなんて出来ませんよ」

 ダインもニニヤもアインズを引き留めた。

「私たちは仲間なんですから」

「仲間・・・」

 ぱちくりと、ペテルの言葉を反芻したアインズは振り返る。

「——なんて、弱い私たちが言うのもおこがましいですけど」

「同じ竈の飯を食ったなか——って、そういう飯食べたの？」

「いえ、実は袋に移してまだ持ってます」

 暖め直してエンリやネムに上げようと思っていたのだ。ちゃんと〈保存〉もしているし。

「じゃあ、一緒に死線をくぐり抜けた仲だな！」

「モモン氏には全然死線じゃ無かったみたいであるが」

そう笑いあう漆黒の剣に、アインズはコトリと首を傾げた。

「私、アンデッドですよ？」

「かの英雄黒騎士も悪魔の血を引いていたそうですし、英雄が人である必要はないんじゃないですか？」

ペテルの言葉に、涙を流せない我が身を恨めしく思った。異形の身ゆえ、人には受け入れられないとずっと思っていた。ああ、いい人に出会えて良かったと心からそう思う。ふと、赤いマントがたなびく姿が脳裏に浮かび、消えた。

「・・・けど、ペテルさん達が黙っててもすぐに知れ渡るんじゃない」

「ワシも貴方の正体は誰にも言いません」

黙っていたカジツトがまっすぐな目でアインズを見つめていた。

「クレマンティーヌはどうかは解りませぬが、あやつ一人で騒いだところで誰も信用せんでしょう」

まあ、あの怯えようから口止めすればなにも喋らないだろうが。

そこまで言われてしまい、アインズは空を見上げて考えたが冒険者続けられるに越したことはないので、よろしく願いますと頭を下げた。

日が昇り、遠くから兵や冒険者達がこちらに向かって来ている。

長い夜が終わったのだ。

正式に“漆黒の剣”のメンバー入りしたモモンは、新しいプレートにため息を付いた。

「・・・みなさんは白金ブラチナなのに、何で私だけ」

「当然じゃないですか。むしろモモンさんも白金ブラチナだったら我々は抗議してましたよ」

煌めくのはミスリルの輝きである。秘密結社ブローラーノンの野望を打ち砕いた英雄に、組合は異例の特進を施した。ペテル達の働きも認められて二階級特進である。

「しかも私も漆黒の剣なのに・・・なんですか”漆黒の英雄”って」
「かっこいい二つ名じゃないですかモモンさん」

「そうですね”漆黒の術師”さん」

「———しません、恥ずかしいですね」

「えー？二人ともいいじゃないですか」

ペテルはとても楽しそうだ。早く自分も二つ名が欲しいとばかりである。モモンとしては彼がリーダーなのにと恐縮している。

「それじゃあ、私は一度村に帰りますね」

思わぬ報酬収入で資金の数倍は稼いだモモンは、必要なものを買って込んで村に帰ると漆黒の剣に伝えてあった。もちろん、アインズ・ウール・ゴウンのことも伝えてある。

「ならついでに送りますよ。バレアレさんもカルネ村に引っ越すから護衛が欲しいと言っていましたし」

ンファイレアのタレント能力を考えればこれからも狙われる可能性があるがある。それなら田舎の村に引っ越したほうが安全だろうと言うことだ。村に来るのならアインズの正体は伝えておかなければならないのですでに話した。その口止め料として、リイジーが赤い回復薬ポーションを要求してきたのはさすがと言える。

「仕事が入りましたらすぐに伝言メッセージを送ってください。転移で一瞬ですから」

ニニヤはまだ伝言メッセージを覚えていないがタレント能力ですぐ使えるようになるだろう。その間はスクロールを常備することになるが。

心強い新たな仲間には漆黒の剣は笑顔を見せた。

ひつく　　ひつひ　　ふう

隣の牢獄から聞こえる泣き声にカジットは身を起こして格子に近づく。

「怖い夢でも見たか？」

「カジツちゃんあん」

かけられた声に、目を赤くしたクレマンティーヌが格子越しにカジットにすがりつく。怖いよう怖いようと怯える娘の頭を撫でてカジットは哀れだと思った。

今までは自分の目的だけを見ていて、クレマンティーヌのことも自分の計画で使う駒程度にしか考えていなかった。

しかし、目が覚めて周りをみる余裕を得ると、この娘の不憫さを哀れに思った。心を折られたクレマンティーヌは幼子に戻り、恐怖に震えて泣いている。そんな娘をカジットはこうやって慰めていた。

「ここには怖い者はこない、安心しろ」

格子越しに背中を叩き泣きやむのを待つ。英雄級の力を持つ性格破綻者などと思っていた。だが本当は力を示すことでしか自分の価値を示せないだけの娘である。

「か、カジツちゃんあはあ、あたしが弱くても一緒にいてくれる？」

震え、泣きながらそんなことを言うので「当たり前だろう」と応えてやる。役に立たなければ捨てられるような環境にいたのだ。この娘は悪くないのだとカジットは気が済むまで抱きしめ続けた。

帝国の鮮血帝と呼ばれる男ジルクニフは、反吐が出そうになるのを必死に耐えながら、目の前の存在と紅茶を飲んでいた。

「そんなしかめっ面では美形が台無しですよ？我が友ジル」

「・・・気にしなくていいさ、皇帝に必要なのは顔ではなく手腕だからね」

そうかいと、異形の顔を歪ませて笑う男に、ジルクニフはテーブルのしたでこれでもかと拳を握りしめていた。

(なにが美形が台無しだ！愛想笑いは大嫌いだと半殺しにしたくせに)

この異形の化け物がこの国に来たとき、ジルクニフは出来るだけ穏便に済ませようと、いつものように美しい笑顔を張り付けてどう利用しようか算段していた。——しかし、ほんの僅かな会話で機嫌を損ね、その鉤爪でジルクニフを切り裂いた。

恐怖した。人間ごときの知略など、この化け物には通用しないと理解した。しかし、その傷を癒したのもまたこの化け物だった。まるで握手の際に爪で引っかいてしまったのを謝るような軽さで謝ってだ。「すみませんねえ、もうどこも痛くないですか？」

草食動物の頭を持つこの悪魔は、ニタリと顔を歪ませてジルクニフに手をさしのべる。自分は鮮血帝などと呼ばれるが、目の前の存在に比べれば優しい部類だろうと言いたかった。

「別に君を傷つけるつもりはなかったんですよ。ただ思ったより私の爪が鋭くて、手が滑ってしまっただんですよ」

片手でジルクニフを持ち上げると、そのままイスに座らせた悪魔は

白々しい仕草で非礼をわびた。

「私は君と友人になりたくて来たのですから」

その言葉に、ジルクニフには頷く以外の選択肢はなかった。拒否をすれば再びその鉤爪が自分を襲うことを解っていたから。

その悪魔を連れてきたのはこの国の大魔法詠唱者であるフルーダだった。己の魔法の試し撃ちに時々出かけるのだが、その日は興奮の面もちでジルクニフの元に訪れて言ったのだ。

「我が神に出会った」

実際には神などではなく悪魔のだが、己より優れた魔法詠唱者を望んでいたフルーダには関係ない。魔法の深淵さえのぞければ悪魔にだって魂を売るつもりなのだから。

帝国に最大の災厄を持ち込んだフルーダにジルクニフは裏切り者と憎しみをぶつけたくなるが、これが彼なりの忠義の結果でもあると解っていた。

悪魔に弟子入りするのなら、そのまま姿を眩ませてしまえばいい。しかし、それをせず帝国に招きジルクニフと引き合わせた。そうしなければ野放しになった悪魔の気まぐれで帝国は滅んでいたかも知れないからだ。今の状態は最悪だが機嫌を伺うことが出来る最善の状況である。フルーダは務めを果たしている。——悪魔に言われればすぐさま手のひらを返し帝国を滅ぼすだろうが。

だが、そんなフルーダの忠義でさえもこの悪魔は利用したのだろう。人間を掌で転がし、愉悦に笑っているこの悪魔は——。

「そうそう、私はしばらく出かけてこようと思ってるんですよジル」
「出掛ける？」

出来ることならそのまま帰ってくるなど言いたいが、グツと我慢する。数日でもこいつから解放されるのだ。下手な怒りは買いたくはない。

「どこへ行くんだい？よかつたらその領主に話を付けておくけど」
「いや必要はないですね。行くのは王国領ですから」

王国領と聞いて、ジルクニフは唾を飲み込む。いったい何をしにそこに行くというのか？

「ちよつとした生き物の生態調査ですよ」

t o b e C o n t i n u e d ?

悪魔討伐

最近のカルネ村には新たな日課が出来ていた。

朝も早くから働きクタクタになると、いそいそとその場所に向かう。

そこは石造りの壁に囲まれた建物で、村の中で一番立派かも知れない。それもそのはず、村の大魔法詠唱者のアインズが一から全て作ったのだ。その建物は入り口が複数に分かれており、それぞれの場所に散ると皆汚れた服を脱ぎ、その扉を開ける。

そこには並々と温かい湯が張られた大浴場だ。

風呂は用意するだけでも手間と時間がかかるため、村人は頻繁に入る習慣はないし、贅沢すぎて川で体を洗う、濡らした布で体を拭うのが一般的であった。が、アインズが突然作り、無料で開放した浴場に村人は毎日入らずにはいられないほど虜にさせられた。

「ふあ〜、もう最高だわ〜」

「お湯に入ってるだけなのにこの極楽感・・・ゴウン様万歳よね〜」
湯船に浸かってこれでもかとダレているエンリに、近所のおばちゃんもうつとりとお湯に身を任せていた。

「お風呂にはいると疲れて溶けちゃうのね。もう、昔の生活に戻れない〜」

はふう、と顔を赤らめていたエンリはふと、隣の男湯に目を向けた。

「ンファイ！そっちの湯加減どうお？」

「っ!!えええ、エンリ?!う、うん。すつごく気持ちいいよ!!」

「でしょお?ンファイも毎日入ろうよ。迎えに行つてあげるから」

「ま、ま、毎日、え、エンリ、と〜と〜と〜」

最後はなんだかブクブクと沈むような音が聞こえたが、お風呂の気持ちよさにエンリはどうでもいと手足を伸ばした。

ンファイレアが村に引越してきてから、ポーシヨンの研究のためにバレアレといつも家に籠もっている。そのため薬草の臭いなのか濃い体臭の臭いなのか解らない異臭をまとっていて、エンリには我慢ならなかったのだ。これからは強制的に連れてこようとエンリは

決めていた。

そしてこちらはまた別の湯船では、人間の姿は全くなく入るのはゴブリンにデスナイト、それにアインズである。ここは別名モンスター湯だ。

「あゝゝゝ、生き返るわゝゝゝ」

教えられたわけでもなく、顔にお湯をバシヤバシヤかける姿は小さいおっさんである。はじめは、水に体を浸したり臭いを落とすことに抵抗を示していたゴブリン達だったが、アインズの「女の子は臭い男は嫌い」という言葉にあわてて風呂に駆け込んだのだ。

俺たちのエンリ姉さんに嫌われたら生きていけねえとのことだ。しかし、一度入ってしまったばその気持ちよさに癖になり、言われなくても入るようになっていた。

「スケルトンの旦那もすげえの作りましたねえ」

未だ洗い場から動けないアインズに、ジユゲムが尊敬の声を上げる。一生懸命デスナイトと一緒に自分の体を洗っていたアインズは振り返るとため息の真似事をする。

「村人に気に入ってもらえて良かったよ。これで無職にならずにすんだ」

村の防壁を作ったあと、何の仕事もないアインズは焦った。働かず、ぶらぶらと遊んでいたらご近所の噂となり白い目で見られてしまう！

そんなことは全くないし、むしろ一番の稼ぎ頭にそんな目を向ける輩はいないのだが、なぜか仕事をしない者は生きていく価値なしという強迫観念が根付いており、働いていないと落ち着かない。

そこで、風呂屋を開業したのだ。ただお湯を沸かしているだけでいいのでアインズでも簡単に出来た。川の水をフアイヤーボールでお湯にし、臍気な知識で薪式のボイラーを作って保温を可能にした。

24時間入れる風呂に村人からは好評である。カルネ村の名物になればいいな、アンデッド銭湯。——その名称と店に掲げられたドクロにより、知らない人間からは禍々しい雰囲気しか感じられないこ

とはアインズは気づいていない。

「旦那がスケルトンじゃなきや、文句なしに姐さんを任せられんだけどなあ」

再び体を洗うことに集中するアインズを見ながらジユゲムはため息をつく。しかし、スケルトンでは一番重要な子作りは出来ないだろうと諦めて、次に見込みがあるンファイレーアを絶賛応援中である。

だがしかし、それに見込みがあるのでもエンリとネムの親代わりになっっているアインズであった。エンリと交際したいのなら俺を倒してからにしろと邪悪なオーラを立ち上らせた。気分は魔王に立ち向かう勇者ンファイとゴブリンの仲間たちだ。だが、それもネムの協力によりハツピーエンドを迎えられそうである。

最終的に体の洗浄にキレたアインズを眺めながらジユゲムは姐さんが幸せになればそれでいいと目をつぶった。

「悪魔討伐、ですか？」

〈^{メッセージ}伝言〉でニニヤに呼び出され、冒険者組合に顔を出せば集められたミスリルクラス冒険者のリーダー達がモモンを待っていた。漆黒の剣のリーダーはペテルなんだがと思ったのだが、仕事の難易度からミスリル冒険者として呼んだと言われては仕方がないかと納得した。

話はこうである。

ある冒険者達が街道の警備をしていたのだが、近くに野盗の根城があると聞き様子を伺いに行ったのだが、その野盗がモンスターに襲われていた。遠くから何うだけだったのだが発見され、逃げることは出来ずに戦闘。しかし、相手がすさまじく強く、異常を知らせに走ったレンジャーとなぜか見逃された女戦士だけが生き残った。

それから数日経っているのだ、そこに悪魔はもういないだろう。しかし、絶対とも限らないので調査し、遭遇したら討伐という仕事だ。

「悪魔の種類は？」

「解らんね、見たことも聞いたこともない姿だから突然変異かもしれない」

組合長アインザックの話にモモンは眉を寄せた。情報が少なすぎてどのように対処すべきか迷う。カルネ村の財政は落ち着いたから金の心配は今のところ必要はない。無駄に危険な依頼を受ける必要はない。依頼を断ろうとすると、横から「クラルグラ」のイグヴァルジがしゃしゃり出る。

曰く、モモンの実力に疑問を感じるからテストしてやるとのことだ。イグヴァルジとモモンのチーム（ペテルがリーダーだと何度言っても聞かない）で依頼を受けて実力を見てやると。

あんまりにもモモンに噛みつくので組合長もコメカミをひくつかせているが、モモンは仕方がないと思う。

（そりゃ入ったばっかの新人が今まで努力してた自分と同じ席に座られたら面白くないよなあ）

気持ちも分からなくはないので、モモンも穏便に済まそうとしているのだが火に油の状態である。なら実力を示すしかないのだろうと諦めるが、問題は悪魔の実力である。

ランクは鉄とはいえ、冒険者数人を楽に屠ったのだ。下級悪魔ではないだろうな。それは組合長も思っていたらしく、渋い顔をした。

「悪魔相手にたった2チームなど、容認できん。全員が出るべきだぞ」しかし、イグヴァルジが引かずに喚くものだから、こめかみの血管がキレそうになったところでモモンが止めた。

「悪魔がいまだそこにとどまっている可能性は低いですよね？むしろ、近くの村や町を狙っているかも知れませんが、ミスリルクラスが全て出払うのもまずいからイグヴァルジさんは2チームと言ったんじゃないですか？」

フム、確かにそうかと頷く組合長にイグヴァルジがまたモモンを睨む。助け船を出したのに睨まないでくださいよ先輩。

「しかし、洞窟で遭遇したらひとたまりもないぞ?」

「それでしたら、私の切り札があります」

切り札?と、全員が身を乗り出したのでそれを出す。

「魔封じの水晶です。中身は第八位階魔法」

言ったとたん周りの異様な熱気にモモンは怯む。前回の戦闘の反省から、モモンのままでも勝てる切り札を用意するべきだと考え、魔封じの水晶を用意したのだ。モモンでも勝てない相手だとそれぐらいの魔法が良いと思い第八位階にしたのだが・・・失敗したかも知れない。

皆、伝説級の魔法に興奮するなか、特に魔術師組合長のラケシルの興奮がハンパなくてモモンはどん引きである。

見せて欲しいと血走った目で見られたら渡す以外の選択肢はない。没収はさすがにないだろうと、他も触りたがるのでバケツリレーの要領で全員に触らせてラケシルの元に届ける。鑑定魔法をかけて良いかと聞かれ、何も考えずに頷いたが後悔した。

受け取ったときは欲しい宝石を貰った女のような恍惚した、いや、欲しい物を手に入れた少年のような表情を浮かべていたのだが、まだ理性が働いている状態だった。鑑定でアイテムの情報を確認したラケシルの感情は爆発し、暴走を始めた。

「本当だよ・・・これに封じられているのは第八位階の魔法だ!私の魔法ではこれが精一杯だが・・・いや、これはすげえ!すげえ!」

「おち、落ち着け!何をしているんだ!」

水晶を掲げ、頬ずりし、舐め回したところでモモンは悲鳴を上げる。なんだこの変態?!モモンのどん引きに、組合長であり、ラケシルの仲間のインザックが仲間の非礼を詫びながら取り上げようとするが、がっちり掴んではなさない。

「ばっか!これが落ち着けるか!すげえよ、これ!マジで封印されているのは第八位階だぞ!さすがに何の魔法かまではわかんないけどよ!」

キラキラしたオメメでどこで手に入れたか聞いてきたが、全く覚えていないので適当に煙に巻く。組合長の努力によりようやく返却さ

れたが、涎まみれの水晶にモモンは若干身を引いてつまみ上げる。

さすがにもういりませんともいえないので持っていた羊皮紙で入念に拭って別の羊皮紙にくるんで仕舞った。ラケシルの目が怖い。見せるんじゃないかった。

「ところで私は——モモン殿が悪魔退治に行くことは反対だ！」

「おまえいい加減にしろ!!」

悪魔ごときにもつたいない!!とラケシルが喚く様はもはや子供である。アインザックも苦勞するだろう。

「何も悪魔に遭遇すると決まった訳じゃないですし、戦闘になっても使うとは限りませんよ」

モモンもなだめに入れば、少しは落ち着いたらしいラケシルがじゃあと、いくつかの強力なスクロールを渡してきた。

「こ、これを使ってくれ!その水晶のなかの魔法は神の領域なんだ!!本当に貴重なんだ!!くれぐれもおいそれと使わないでくれ!!」

「ラケシ——ルッ!!!」

ついにラケシルのもとに鉄拳が落ちた。

渡されたスクロールを返そうとしたら、アイザックに迷惑料と思つて受け取ってくれと深々と頭を下げられた。ぶっちゃけ、アインズにとつては弱い魔法しかないのだが、ニニヤにでも上げようとそのまま受け取ってきた。

討伐に出発するまで二日、準備期間を貰ってモモンは漆黒の剣に相談した。やはり相手の強さが未知数なため、そのまま連れて行くのははばかられたのだが、4人はアツサリ了承した。

「大丈夫ですよ。モモンさんと一緒なら」

樂觀視とも取れるが、それだけ信頼されている証でもあるのでモモンも頷いた。次に情報収集だと、生き残った冒険者に会いに行ったら見たことのある女冒険者に驚いた。——世間って狭い。すでにイグヴアルジが話を聞いていた後らしく、すぐに当時の状況を話してくれた。

その悪魔は、野盗が根城にしている洞窟から出てきた。最初は獣人の一種かと思っただが、牙の生えた山羊の頭にそれは違うと気がついた。小悪魔を従えて優雅に歩くその手には野盗の頭部が握られていた。むろん体はその下にはない。

遠くから伺っていたが、すぐに撤退しようと仲間が言う。おそらく我々では勝てないだろうと、——しかし、すでに気付かれていた。

「おや、もうお帰りですか？せつかくですし遊んでいきませんか？」

頭上からの声に、女戦士、ブリタは短く悲鳴を上げた。いったいいつの間にと、すぐさま戦闘態勢に入るが、力の差がありすぎて何の抵抗にもならず仲間が倒れていき、ブリタだけが残された。

ブリタだけなぜ残されたのか、それは目の前の悪魔の言葉ですぐに解った。

「フム、・・・人間の女が、悪魔の子を孕む事は可能なんですかね？」

これほど女の身を後悔したことはない。逃げようにも、悪魔が何かしたのか硬直した体は指一本動かせない。従う小悪魔が手を叩いてはやし立てる。

「幸運な女だ！我が主の寵愛を受けられるのだから本当に幸運だ!!」

「——別に好みではないんですが、今後確認する必要があるでしょ

うし、確認だけなら後腐れない方がいいですね」

ニタリと笑い、南方の衣装である仕立てのよいスーツの襟をゆるめる山羊顔にブリタは思考を放棄した。延ばされる鋭い鉤爪が付いた手が目前に迫り、目を閉じることも出来なかった。——が、悪魔の動きが止まり明後日の方を見ると顔をゆがめた。

「——召喚した奴らが、倒された？あの逃げた男か？しかし方向が違う。……チツ、俺に報告もしないで死ぬなよな。何のために周囲に展開してると思っているんだ」

ブツブツと呟きながら何らかの魔法を使った悪魔はブリタに目もくれずに眷属を殺した存在を探していた。

「やっぱ悪魔はバカだな、主人の言ったことしか出来ない。俺の気持ちを汲んで行動出来るような出来た部下が欲しいなあ。——ああ、懐かしい。あいつみたいなの悪魔を作ってみようかな？でもどうやって作ればいいんだ？昔みたいにはいかないよな——」

独り言を呟いていた悪魔は不意に黙るとニタリと笑った。

「見つけた。どこのバカだ？この俺に喧嘩を売ったのは——つ?!」

しかし、驚愕に目を見開き「バカな」と手で口元を覆った。

「ワールドアイテムか？いや、本物とは限らない——だが」

チツと舌打ちを打つと、ブリタを無視して空に飛び上がり忌々しげに森の向こうを睨みつけた。

「……昔ならいざ知らず、何の装備もない今の状況じゃ危険だ。——撤退するぞ！」

そう悪魔が命じると、周囲から何かが飛び立つ音が聞こえた。ブリタの近くにいた小悪魔も慌てて飛び上がると主人の元へと急ぐ。そして、その場で悪魔達の姿が掻き消えた。

ブリタはしばらく立ち尽くしていたが、悪魔が去ったことを理解すると足がガクガクと震えてその場に座り込んで泣いた。

「それ、バフオメットじゃないんですか？」

「バフオメット？」

周囲の困惑した顔に「あれ？知りませんか？」とモモンは首を傾げた。「上位悪魔の種類ですよ。頭が山羊で体は人間という姿の悪魔」

見たことも聞いたこともない突然変異と聞いていたのに。しかし、周りを見れば「そんな悪魔が」と震えていた。——これも自分のズレなんだろうか？そう言えば、自分の姿を見ると必ず「エルダー・リツチ」と呼ばれる。本当は「オーバーロード」何だが……。どうやらここいらではそう言う上位種は見かけないようだ。

しかし、バフオメットとなると魔封じの水晶は使わざるを得ないかも知れないあと、モモンはため息を付いた。

イグヴァルジから馬の用意をしておくようにと言われた。その言葉にモモンは固まり、震える声で言った。

「わたし……、馬乗れません」

目を丸くしたイグヴァルジに、モモンは体を小さくした。乗馬なんて一度も経験がない。借りた馬で試してみたが、まず馬が怖がつて乗せてくれない。たぶんアンデッドだと察知しているのだ。

馬車でも用意するしかないかと渋い顔をするイグヴァルジにシヨンボリするが、ペテルが良いアイディアが有ると声を上げた。

そして当日、ドヤ顔を披露するハムスケがエ・ランテルの城門前で待機していた。

「殿！このハムスケ、殿の元に馳せ参じたでござる!!」

「自分で走ります！走って皆さんについて行きます!!」

「モモンさんわがまま言わないでくださいよ。せつかくハムスケさんも来てくれたんですから」

「いやーっ!!この歳でハムスターに乗りたくない——っ!!」

「かっこいいですって、ちよつとだけちよつとだけ試しに、ね」

森の賢王に驚愕するイグヴァルジのチームだったが、さらに展開される漆黒の剣のコントに開いた口が塞がらない。なぜそんなに嫌がるのか理解できない。

ちなみにハムスケの登録はルクルットが済ませていた。

悪魔討伐2

イグヴァルジには夢がある。子供の頃からの夢。

それは英雄になることだ。一度は誰だって憧れて、そして諦める夢である。

しかし、イグヴァルジはまだ諦めていない。ずっと努力を続けてようやくミスリルクラスまで上り詰めた。しかし、まだ先は長い。夢を叶えるためなら、イグヴァルジはどんな手を使っても良いと思っっている。

巨大な魔獣を駆って後ろを付いてくる胡散臭い男に、イグヴァルジは顔をゆがめて舌打ちをする。

何が”漆黒の英雄”だ。ただ単に運が良かっただけの木偶の坊だろう。伝説級のアイテムを持ち、伝説の魔獣を従えるその姿に嫉妬する。

鎧から元は金持ちのボンボンか何かだろう。財を持ち、たまたま力があった。それだけだ。それだけで英雄を名乗っているに違いない。

——奴を蹴落として、俺が英雄になる！伝説級のアイテムも、伝説の魔獣も奪ってやる!!俺が、伝説の英雄になるんだ!!!

「殿！乗り心地はいかがでござるか?!」

「……うん、悪くはないよ。……乗り心地は、な」
結局仲間に押し込められて、モモンは巨大ハムスターの上に乗っていた。

あまりの押しの強さに渋々乗れば、今度は仲間達から絶賛の嵐である。その光景は愛息子を乗り物に乗せて写真を撮りまくる親のようで、死にたくなかった。おとなしく乗るから！お願いだからもう黙って!!

いつまでも城門前にいたらエ・ランテルの住人にも見られるかも知れないので、早く出発しようと思っただけならイグヴァルジに「おまえが

ウダウダしているから出発が遅れてんだよ」と嫌みを言われた。本当のことなので反論はできない。むしろ社会人として反省しなくてはならない。シヨンボリしていると、横の方でルクルットが「クラルグラ」のチームに話しかけていた。

「あんたらも大変だな、あんなりーダーで」

横柄な態度のイグヴァルジに、漆黒の剣のメンバーは嫌な顔をする。まだ白金のプレートのパテル達を見下しているのを隠そうともしないのだ。そりや穏やかなダインでさえも口を曲げる。

「いや、悪い奴・・・ではないんだけどな」

「嫌な奴だよな。よくミスリルまでいけたな・・・もしかしてメンバー何度か入れ替わってんのか？」

「いや、結成以来一人も欠けてないよ。性格はあれだけど能力は確かだからさ」

「ふくん」

胡乱な目で、前を走るイグヴァルジを見るルクルット。完全に信用していないと、仲間は苦笑いしていた。

現場に到着すると、まずレンジャーのルクルットとハムスケがモンスターが周囲に潜んでいないか確かめる。そして、野盗の罫だった洞窟の前までモモンが先行し、中を伺う。入り口付近にまだ血の臭いがこびり付いているが、生き物の気配はなかった。

その間、イグヴァルジは気がないようで欠伸をしていた。これはモモン達の試験なのだから、モモン達が働くのが当たり前だと到着直前に言っていた。しかし、だからといってこの態度はないとニニヤは嫌な顔を向けていたが、全く堪えた風もなく仲間が代わりに謝る始末である。

「周囲にモンスターの気配はありませんね。——不気味なくらいに」

「おい、早く仕事しろよ。この仕事は調査だぞ？中までしつかり確認

しろ」

そんなイグヴァルジに漆黒の剣は眉をしかめるが、モモンは「そうですね」と素直に頷く。先行はレンジャーのルクルット次にモモン、ペテル。間に入って”クラルグラ”ニニヤ、殿にダインド。

ハムスケも付いてこようとしたが、入り口につつかえてしまい断念。出口を守る役目を貰った。これで下手なモンスターが後ろから・・・ということはない。

「・・・さすが野盗の癖、手が込んでるぜ」

所々人の手が加えられ、侵入者を迎撃しやすくされていた。未使用の罫の存在も確認した。しかし、使用することもなく悪魔に殺されたようでそこかしこに血の痕が散らばっている。ヒドいところは天井にベツタリと張り付いた人型のナニカがあった。

モモンは常時〈暗視〉状態なので、明かりがなくてもあたりの状況を見渡せる。注意深く観察しルクルットの後に続いた。

「ん？んこら辺から血の痕が途切れますね？」

モモンに言われてよく見れば、確かに密集するように続いていた血の痕が途切れた。彼らは知らないが、ここで野盗の用心棒をしていたブレイン・アングラウスという男が悪魔と対峙し、そして心を折られた場所である。

「前衛が全滅して、残りは奥で待ちかまえたって所かな？イテツ！」

クラルグラの一人が思わずそう考察すると、イグヴァルジに蹴られる。余計なことと言うなと睨みつけていた。それに溜息を吐き、ひらと手を振って了解を示すと黙り込んだ。

その後も、横穴にカーテンを引いただけの部屋などもあったが、特に手掛かりはなかった。——そしてようやく最奥の広場のような空間に出た。死体は検分のため全て運び込まれてはいるが、生々しい戦闘の後にニニヤは顔をしかめて口元を覆う。

入り口を囲うように積み上げられたテーブルやガラクタはバリケードに使ったのがわかる。普通の侵入者であれば、ここで矢の集中砲火で倒れるだろう。しかし、悪魔には何の意味もなかったようだ。バリケードの一部が魔法か何かで粉々に吹っ飛ばされた跡がある。

「悪魔は何がねらいでここを狙ったんだ？」

組合の話では野盗がため込んでいた金も武器も何も手を着けられていなかった。——捕らえられていた女もだ。

なら何しにきたのか？だたの獣人だったら人間を食べるためという理由もあるが、相手は悪魔であるし食い散らかされた犠牲者もない。——では、ここを襲った理由とは？

「……それぞれ、別の魔法で殺されていますね」「うん？」

モモンが血の痕を撫でながらそう呟いたので、漆黒の剣とクラルグが振り返った。

「どう言うことですか？モモンさん」

「いえ、血の散り方からそれぞれ異なった死に方をしているのでは？思っています」

言われてよくよく観察すると、炎で焼かれた痕もあれば、雷撃で貫かれただろう痕、氷が溶けたような痕、剣で切られたような血の飛び散り方、つぶされたような散り方、周囲に飛び散ったような痕もあった。

漆黒の剣はよくわからないと首を傾げていたが、歴戦を潜り抜けてきたクラルグの面々は納得したような顔になった。

「……普通は広範囲魔法で一気に攻撃するもんだよな？なのに一人一人別の魔法で殺した？何でそんな手間を?？」

「——おい、おまえはどう思っただよ」

仲間が口々に考察し始めたのに舌打ちし、イグヴァルジはモモンに顎をしゃくった。偉そうな態度にまたルクルツトがムツとしているが、モモンは気にせず答えた。

「だたの推測ですが——、試し撃ちじゃないですか？」

「試し撃ち……」

「ほら、新しい武器とか手に入れたら試し斬りしたくなるって言うじゃないですか。それと一緒に、人間相手に魔法を撃ち込んでみたくなつた——とか？」

イグヴァルジは何も言わずにただモモンを見て、そして視線を外し

た。

「むしろ人間をおもしろ半分に殺したってほうが納得できるがな」

「ああ、まあそうですね」

悪魔の性癖は相手をいたぶることである。たまたま野盗に目を付けておもしろ半分に殺した。そちらの方が解りやすい。だが、一人ずつ別の魔法という不可解な点もあるし、拷問などのいたぶった形跡もない。

——モモンの推測が案外当たっているのかも知れないと、思ってしまう。面白くなく舌打ちする。

「いつまでもこんな辛気臭い場所にいないでとつと戻るぞ！」

苛ただし気に戻るイグヴァルジに、仲間は困ったように、漆黒の剣は呆れたように後をついて行った。モモンはグルリと周囲を見渡すと、後に続いて歩き出した。

しばらく無言で歩いていると、ふと、先頭のイグヴァルジが立ち止まる。若干迷惑そうな漆黒の剣と、どうしたのだと心配するクラルグラの仲間。そして、イグヴァルジの隣まで出たモモン。——何かおかしい。その時、入り口から悲鳴が上がった。

「っ!!ハムスケ!!」

出口を見張っていたハムスケの悲鳴にモモンは走り出し、イグヴァルジが舌打ちしながらも追いかける。

「ハムスケ!どうしたっ!!」

出口の光が見えたあたりでモモンの顔に毛玉が張り付き、思わず急ブレーキをかけた。

「な、何だ?!」

「どの~~~~っ!!」

毛玉を引きはがし見下ろしてみても、モモンは驚愕に目を見開いた。

「えっ?ハム、スケさん??」

固まったモモンの手には毛玉、小さくなったハムスケがいた。普通

のハムスター・・・いや、モルモットサイズに縮んだハムスケは涙目でじたばたしていた。

「な、にが・・・」

「敵でござる~~~~!!拙者縮められたでござるよ殿~~~~!!」

ハムスケの言葉に、出口に目をやれば逆光で顔はよく見えないが誰かが立っていた。しかし、それが何者かなど全員が瞬時に理解した。頭から捻れた大きな角が二本。

「はじめまして、罨にかかったネズミの皆さん」

優雅にお辞儀をしたのは、組合から、ブリタから聞いた悪魔、バフォメットであった。

その悪魔を見たたん、全員の背中に悪寒が走った。今まで、これほどまでに強力な悪魔など見たことはない。今までの知識や経験ではなく、本能が逃げろと言っていた。

「全員奥へ!!早く!!」

モモンの怒声に我に返ると洞窟の奥へと逃げ出す。正直、逃げ場のない奥に逃げるなど愚かな事だが、だからといってあの悪魔の横をすり抜ける事などできない。幸いにも、この洞窟は外からの攻撃を防ぎやすくするために曲がりくねった構造になっている。攻撃を避けながら、何とか反撃を伺うしかない。と、振り返った先で悪魔の指先に電流が迸っていた。

「じゃまだどけっ!!」

「っつ?!」

「ニニャっ!」

イグヴァルジに突き飛ばされたニニャはバランスを崩し壁に激突した。その横をすり抜けるように〈雷撃〉が壁に穴を開けた。ルク

ルットがすかさずニニヤを助け起こして奥へと急ぐ。しかし、悪魔の追撃は終わらず、続いて〈火球〉が飛んできた。が、それはモモンが斬り落とす。

「ほうっ？」と感心したような悪魔のため息に続いて、少しづつ強い魔法を放ってきた。それをモモンが防いで行くのを見て楽しそうに笑った。

「なかなか骨がありますね？ここを住処にしていたネズミよりよっぽど遊べそうじゃないですか」

ニタリ、と笑うバフオメットに、モモンはない眉間の皺を寄せる。だが、何をいう訳でもなく。油断なく後退した。

「鬼ごっこですか？いいでしょう3分時間を上げますので、せいぜい楽しませてくださいよ」

そういつて、ポケットから懐中時計を取り出してその場から動かなくなつた。完全にお遊びモードだなど、モモンは言いしれない気持ち悪さから悪魔から目を背けて仲間の元に走り寄る。

皆大きな怪我はないようだどホツとするが、その場は険悪な雰囲気だった。ペテル、ルクルット、ダインがニニヤを突き飛ばしたイグヴァルジに嫌悪の目を向けていたのだ。

「最低だなあんた」
歯をむき出しで睨むルクルットに、イグヴァルジは見下した目を向けた。

「じゃまだから突き飛ばしただけだろ」

はつと鼻で笑うものだから一触即発の雰囲気だ。

「喧嘩している場合じゃないでしょう？早く反撃を考えないと皆殺しに合いますよ」

まさに殴りかかる寸前にモモンに言われて、ルクルットは渋々と拳を納める。しかし、敵意は隠す様子もない。モモンは悪魔の様子を伺いながらイグヴァルジに助言を求めた。

「どうしますイグヴァルジさん」

驚いたのは漆黒の剣だ。なぜこんな奴にという顔だが、同じように驚いたのがイグヴァルジ本人である。目を見張り、モモンを見て半眼

になる。

「何で俺に聞く」

「なぜって、貴方に聞くのが適切だと思ったからですよ」

この中で経験豊富なのはやはり「クラルグラ」の面々であり、そして適切な判断ができるのはリーダーであるイグヴァルジだとモモンは思ったのである。口をへの字に曲げて「おまえ等の試験だろ」と突き放した物言いをしたがモモンはめげない。

「状況を判断し、対処できる人に指示を仰ぐのは基本ですよね？」

確かにその通りである。使える物は何だつて使うのが生き残るコツだ。自分のプライドを優先して命を捨てるのはバカのやることである。イグヴァルジは一度目を閉じると深いため息をつく。

そう、今は自分もプライドを捨てるべきなのだ。

「――野盗どもの持ち物がほぼそのままだ。使える物は使うぞ」

リーダーの指示にクラルグラの面々がすぐさま散る。罠の状態をチェックしたり、一室から油やら蝋燭やら、様々な物をかき集めてくる。それを見て、漆黒の剣は顔を見合わせたが、同じように使えそうな物を探しに走る。

「おい、てめえの切り札。中身は何だ？」

「――残念なことに爆裂系です」

「ちつ、役立たねえな。使ったら生き埋めじゃねえか」

よりによって洞窟に不向きな魔法にイグヴァルジは興味をなくした。後はラケシルに貰ったスクロール数枚にざつと目を通す。幸いにもこちらは使えそうだ。

そのほかに、かき集めたガラクタを見てイグヴァルジは考えをまとめる。その間、モモンは懐に入れていたハムスケに目を落とす。

「お前ぐらいだったら逃げられると思うぞ？」

「何をおっしゃるでござる！拙者、殿と運命を共にする覚悟でござる！！」

フンスとドヤ顔を披露するハムスケに「そうか」と頭を撫でてやる。

――そして、先ほどの悪魔を思い出し、気持ち悪い感覚にモモンはヘルムの下の動かない骨の顔を歪ませていた。

「さて、そろそろいいですかね？」

パチリと時計の蓋を閉めると、悪魔はまるで散歩でもするかの軽い足取りで洞窟の奥に向かった。

何の警戒もなく進んでいけば、野盗どもが設置したのだろうトラップが発動する。自動的に矢が放たれる罠が火を纏って飛んでくる。避けるのは造作もないと、足を引くと突然地面が噛みついた。

ベアトラップ、此方はさらに毒のおまけ付きだ。ベアトラップにより動けなくなったところに火矢が降り注いだが、悪魔は特に感情を動かさずに服に付いた火の粉や埃を払う。

この程度のトラップなど、ダメージらしいダメージは受けないし、何だったら全て避けることが出来るのだが——、せっかくのおもてなしだ。全て頂いて上げよう。どうせレベルは大したことはない、ならばハンデくらいはあげようじゃないか。

絶対的強者の高慢な自信故に、悪魔は次々と罠にかかる。しかし、大したダメージなど食らわない。せいぜい1ポイントくらいだろう。

さて、あのネズミ達をどう料理してやろうかと歯をむき出しにして考えていると最奥に着いてしまう。

このさらに奥に脱出路があるのだが、すでに塞いであるので逃げられるはずもない。思った通り、奥で固まる獲物を見つけて微笑むが——一人足りない。

その瞬間、横つ面に剣の切っ先が迫ったが、悪魔は慌てずに鉤爪で受け止める。魔法職ゆえ、接近戦は苦手なのだがレベルの差が大きいのか危なげなくはじくと、シゲシゲと目の前の人間を見た。

「——やはりあなたが一番の強者、と言ったところですか」

巨大な二本のグレートソードを操る漆黒の戦士に、悪魔は舌なめずりをする。最後の砦といえるこの人間を目の前で殺して見せた後の人間たちの絶望の顔を思い描いて愉悦に浸る。

「では踊りましょうか、死の舞踏を」

鉤爪を強化させて、悪魔は目の前の戦士の肉を抉ろうと襲いかかる。

剣と爪から火花が散る。戦士の鎧が思ったより堅く、肉までは抉れないが鎧は着実に削れていく。耐久性も徐々に無くなっていく。

一方悪魔の方も細かい傷を負っていたが、なめれば治る程度の浅さだ。一番深くは血が滲んでいる腹部のみ。

そこに少し不機嫌になるが、仲間の援護射撃をうまく使ったの不意打ちだったので仕方がないと自分を慰める。むしろそこだけしか傷らしい傷を付けられなかったのだ。それにすぐさま無詠唱化したへ魔法の矢をたたき込んで仕返ししたし。

苦手の接近戦も飽きてきたし、そろそろ決着でもつけてやろうかと頬をつり上げたときだった。

奥からまた魔法が飛んできて、無駄なことをと払い落とした——瞬間、洞窟から人影が飛び出した。奥ではなく後ろの通路から出てきた人間に驚く事なく、悪魔は振り返った。隠れている存在は知っていた。やり過ぎして仲間を見捨て逃げるつもりかと思ったが、意外と勇敢だった。残念だ。入り口に置いておいた僕に殺される絶叫を聞けなかつたと、悪魔は眼前に迫った剣先を優しく摘んでやった。さあ絶望の顔を見せてくれと人間の顔を見ようとして、腹部の衝撃に目を見開いた。

顔を狙った剣はフェイク、その影に隠すように腹を突いた剣が本命か！

してやられた事に顔を歪めるが、そこまで深く刺さっていない。その首を跳ねてやろうと手を振りかぶった。

「行け！ハムスケ!!」

「お主に命令される筋合いはないでござる!!」

男の背から飛び出したのはモルモット——ではなく縮められたハムスケである。その背にはスクロールを背負っており、飛び上がると目の前で広げた。

「雷撃<!!でござる!!」

獣がスクロールを使えるとは思ってもみなかった悪魔は一瞬虚を突かれた。見た目は巨大ハムスターだが、ハムスケはこれでも数百年生きた森の賢王である。——置いてきたが、アインズから貰った死の宝珠だつて使えるくらい魔法の力は使える。

しかし、雷撃程度の攻撃など——。だが電撃が腹に刺さった剣に向かつている事に気が付き、顔を大きく歪ませた。

「——っ!!ゴミ共が」

言い終わる前に青い閃光が洞窟内部を照らし、悪魔の身の内を焼いた。表面はダメージを軽減される。ならば柔らかい内部からならと——男、イグヴァルジは距離を取る。すと思った通り、悪魔は大ダメージを受けてよろけていた。

「に、人間ごときがああああああああつっ!!!!」

今まで余裕を崩さなかった悪魔が、身の毛もよだつほど山羊の面相を歪めて睨みつけてくる。イグヴァルジも勿論、足下にいたハムスケも毛を逆立てて固まってしまった。

これほどの殺気を受けることなどこれまで無かった。死を感じて動けなくなるほどの圧力だったが、その横から鎧の腕が伸びた。

「お前の相手は私なんだろう?」

鎧の男モモンが悪魔に突き刺さったままの剣を握ると、そのまま力任せに押し込んだ。

「っ!!なぜ俺の殺気の中動ける?!」

「種を教える気はない。——ここで死ぬ奴には余計にな」

押し込んだ剣を今度は力任せに上に引き上げれば、悪魔の体は肩まで真っ二つに避けた。

「ぎゃあああああああああああつ!!」

断末魔の声を上げる悪魔のその大きな口にもう一度剣で貫くと、固

まっているイグヴァルジとハムスケをひつつかんでモモンは奥へと跳んだ。

その先にはスクロールを広げているニニヤがいた。

「電撃球〈!!!〉」

ラシケルが渡した中で、もつとも強力な魔法を発動し剣を避雷針に悪魔にたたき込んだ。

「あ——っ、生きてたわあ・・・」

これは死んだと思ったが、何とか生き残ったとクラルグラのメンバーは洞穴の外で胸一杯に新鮮な空気を吸い込んだ。

血と腐臭で鼻がバカになっている気がする、鼻をこする。そしていまだ夢醒めやらぬ風の漆黒の剣の背を叩いて気付けをしてやれば、まだまだまだ細い背中がビクンと飛び上がる。

「よく頑張ったな」

先輩冒険者の言葉に、「あ、ありがとうございます！」と漆黒の剣も頬を染めて頭を下げる。イグヴァルジは苦手だが、ほかのメンバーはとてもいい人だ。そのイグヴァルジにはモモンが話しかけていて少しハラハラするが、先輩は苦笑いを漏らすだけだった。

「ありがとうございます」

モモンの感謝の言葉に、イグヴァルジはあり得ない言葉を聞いた気がして目を見開いたが、顔を歪めてそっぽを向いた。

「イグヴァルジさんがいなかったら全員で生き残ることは出来なかったと思います」

「——お前、よく俺のこと信用できたな」

悪魔と対峙するさい、イグヴァルジはモモンに「死んでこい」と言ったのだ。作戦はすでに伝えてはいるが、もつとも危険な役をモモンに任せた。冷静に考えて、この中で一番防御力が高いのはこいつだからだ。

死ぬ確率の高い役に漆黒の剣が反発する中、モモンだけは素直に頷いたのだ。

「命、お預けします」

そう言って離れていく背中を見て、イグヴァルジは髪をかきむしり仕方ねえから助けてやると悔しげに呟いた。

「命捨てろと言われて何であんな素直に聞けるんだ？しかも俺相手に」

「そりゃ、クラルグラの皆さんがあなたを信頼してるのがよくわかったからですよ」

冒険者は命の預け合いだ。本当に性格の悪い男に人はついていけないし、それにモモンはこの男の素直じゃない優しさに気がついていった。

「それに、ニニヤを助けてくれましたし」

「ありや逃げるのに邪魔だっただけだ」

間髪入れずに返すイグヴァルジにモモンは笑う。悪魔と遭遇し、奥に逃げようとしたとき、雷撃がニニヤを狙っていたのだ。それをとつさに突き飛ばしたのに、そのことを誇るわけでもなく悪態をつく。

本当に嫌な先輩というのは何が何でも出来る後輩をたたき落とすものだ、モモン——いや、失われた記憶の中の鈴木悟が知っている。

仕事をするために生きる世界は、文字通り仕事が出来なければ生きていけない弱肉強食の世界だ。仕方がないこととはいえ、足を引つ張りまくって自分が生き残ろうとする。時には憎悪が蔓延るほど最悪である。

そんな世界を覚えていないとはいえ、もはや魂に刻みつけられているモモンにとって、イグヴァルジは少し意地悪だけど後輩を気にして

くれる良い先輩である。嘘を教えて自爆させようという気は全くな
いようだったし。

そのイグヴァルジは、常にならないほど感謝されて口をへの字に曲げて
いた。——ここまで素直に慕われて、嫌う方が難しいと嫌々自分の
負けを認めた。

(ああ、認めてやるよ！お前は確かにミスリル——いや、英雄級だよ
チクシヨウ!!)

器のでかさを見せつけられて、頭をかきむしる。全くなんて新人だ
よと、悔し紛れの嫌みを吐き出す。

「それよりてめえ、力任せに剣を振り回してるだけじゃねえか。それ
でミスリル級なんていえるか」

しかし、思った以上のダメージだったらしく、モモンは肩を落とし
てシヨンボリした。

「……ですよね。やっぱり我流じゃだめですね。あの悪魔にも
ほとんど通じなかったし」

「——相手が前衛職だったらお前殺されてたな。でも、まあ、善戦
は、したか、いや、認めてやる訳じゃねえけど！」

本気で落ち込んでいたので、思わず慰めの言葉を言ってしまった。
そんな柄じゃねえのにと視線を外したら目をまん丸にした仲間が視
界に入って、さらに顔を歪ませた。

「……イグヴァルジ、頭でも打ったか？」

「うるせえよ!!」

別に良いだろ！たまには!!その言葉に、ならたまには俺らも労って
くれと笑われた。

「どうやら倒されたようだな」

カップを傾けながら、繋がりが切れるのを感じて山羊の頭を持つ悪魔が視線を遠くに跳ばした。

「——しかし、出来が悪いな。そりゃ性能は低く設定したが、頭まで落とした覚えはないぞ」

チツと舌打ちした悪魔は、「やっぱり自分で造るのは無理か」とため息をついた。

撤退後、自分の存在が気付かれたおそれがあったので、急遽ダミーを造ってあの洞穴に配置したのだ。ワールドアイテムを持った相手がそのダミーを倒して死を偽装する計画だったのだが、普通の冒険者風情でも負けるほど、お粗末な失敗作だった。

力も能力も自分の半分以下、頭も悪いし品もない。自分を模した存在だというのに——あまりにも不愉快で造って早々自分で処分しようかと本気で悩んだ。

「まあ、これで人間を襲った悪魔は死んだことになるわけだし、それなりに使えたってことだな」

悪魔はうんうん頷いて喜んだ。アレには意外と手間が掛かったのだ。手探り状態で悪魔を一から作成し、外装や能力を設定。調整が難しく、何度投げ出そうかと思ったことか。それに時間も無かったから色々手を抜いてしまった感もあったが、目的が達成できたのだからよしとしよう。

「——けど、あいつを作り出すにはまだまだ時間が掛かるってことだな」

作り出せないことは無いことは証明されたが、今のままでは完璧に再現できないと、悪魔は寂しそうにした。

「・・・理解者が欲しい。一緒に遊んでくれる奴が欲しい」

この世界に飛ばされた時、悪魔は一人だった。昔遊んだゲームキャラの姿で、ほとんど丸腰ではあったが魔法は問題なく使える状態に、悪魔はとても喜んだ。あちらの世界では常に自分を殺し続けなければならなかった。本当の自分を出せるのはゲームの中だけだった。

だから此方では、何の我慢もせずに遊ぼうと凶悪な顔で笑ったのだ。

帝国に入り込み、皇帝を脅して贅の限りを尽くした。オーダーメイドで衣装を何着も作らせ、それに弱いが付加魔法を付けたり、旨い物を幾つも運ばせたり、日がな一日ゴロゴロしたり、狩りに出かけたりと欲望のまま過ごしていた。

——しかし、ふと、ここに仲間がいたらもっと楽しかったのにと気付いてしまったのだ。

すると、今まで楽しかったはずのことがとたんの色あせて仕舞ってつまらなくなつた。切っ掛けは、自分を師事するフルードが、自分を慕ってくれていた友人と重なつたのだ。彼もまた、ワールドデイズスターの自分に憧れ、教えを請うていた。彼らと一緒に冒険した日々を思い出し、悪魔はかきむしるほど寂しいと感じるようになった。

あの胸くそ悪い男でも良いから此方に来てないだろうかと考えるが、探しには行かなかつた。……これで見つからなかつたら、この大きな穴は一生塞がらないのだと絶望することになるからだ。

だが、今はそんな場合ではない悪魔は頭を振り、立ち上がった。

「さて、”私”を倒した冒険者とやらの顔を拝みにいきますか」
そう言うと、悪魔の体は黒い空間に消えた。

”黒い” 山羊のような悪魔の頭を持ち帰ると、冒険者組合は大騒ぎとなつた。

全く見たことがない悪魔なのだ。また現れるとも限らないのだから大急ぎで調査が始まつた。

冒険者が持ち帰つたのは頭部だけだったが、それだけでも様々なこ

とが解る。魔法組合長のラケシルもコレは大発見だと大興奮した。そこに前回の生き残りの冒険者に、間違いなく当時の悪魔だと確認も取られた。

ただ、その時ブリタもレンジャーの男も少し不思議な顔をした。”黒い山羊”の頭に、確かにこいつだと思っただが、変な違和感を覚えたらしく互いに顔を見合わせていた。

組合は今回の件で冒険者のランクアップは确实だと話し合いがされた。

モモンは人々からの賞賛から逃げて、一人噴水に座り込んでいた。思い出すのはあの気持ち悪い悪魔のことである。なぜだか、モモンはあの悪魔を見たとき、怒りが沸いたのだ。

まるで、大事にしてきた物に泥を塗られたような？いや、大事な物を粗悪にまねされたような胸くそ悪さを感じていて、可能であれば本性を見せて徹底的にぶちのめしてやりたかった。

けれど、アンデッドの特性で精神鎮静が起こり、何とか冷静さを取り繕っていた。でなければ漆黒の剣に迷惑をかけていたのは間違いないだろう。

しかし、あの悪魔を殺した後もこの嫌なもやもやは晴れることはなく、いまだにくすぶっていた。

「———どうして、こんなに胸が痛いんだろう？」

骨だけしか無い身だということにと、ボロボロな鎧の上から胸をさする。

ふと、地面を見つめていた視界に誰かの足が入り込んだ。誰だろうと視線を上げると、線の細い男がそこに立っていた。

「はじめまして、モモンさん」

「はじめ、まして———？」

誰だろうと小首を傾げていると、目の前の男は黒い髪を揺らしてお辞儀をした。

「私、帝国にて商いをしているデミウルゴス、と申します。ご偉業を成し遂げたモモンさんと是非お話ししたいとおもい、声をかけさせて頂きました」

「はあ」

にっこりと笑うデミウルゴスと名乗る男に、モモンは困惑する。偉業などというが自分一人の力ではないと言えば、謙虚ですねと嬉しそうに笑った。

「モモンさーん」

その時丁度漆黒の剣がモモンを見つけてやってきた。それにちよつとホツとすれば、ペテルがデミウルゴスを見て目を丸くしていた。

「モモンさんのお知り合いの方ですか？」

「いえ、初対面です」

「そうなのか？同じ南方の人種……いや、同じ黒目黒髪だからってつきり」

スケルトンに人種も何もなかったと思い出したルクルツトが訂正する。幻術で見せられた顔は確かに南方の人間の特長であるが、つくった顔なら意味がなかったと頭を搔く。

「あれ？デミウルゴスさんは帝国の商人さんだと——」

「……まあ、生まれは南方ですよ。モモンさんもそうなんですか？」

少し悩む、これで同郷だと色々突っ込まれても困るのだが、もしかしたら自分のルーツの可能性もあったので、ヘルムをとって幻術の顔を見せた。

一瞬目が見開かれ、すぐに笑顔になったデミウルゴスに首を傾げた。

「……人が良さそうなお顔だと思います」

「気を使って貰わなくて結構です」

少しバカにされた気がしてきつさとヘルムを被るが、デミウルゴス

は笑顔のままだ。

「いえいえ、私は好きな顔です」

「え？そう言う趣味の人なんです？」

ルクルットが茶々を入れれば意味深な笑顔を返されて、「マジか・・・」と距離を取った。そんなルクルットをペテルは殴る。

そんなとき、向こうから悲鳴が上がり土煙が此方に向かってくるのが見えた。

「殿——っ!!」

「ハムスケ?!お前外で待つてろと言ったろ!?!」

突然現れた巨大な魔獣の姿に街の人々は怯えている。悪魔を倒したとき、ハムスケの呪いも解けて元の大きさに戻ったのだ。・・・その際、モモンの頭に乗っかっていて押しつぶしたのはご愛敬である。

登録は済んでいるとはいえ、巨大ハムスターを連れ回すのはさすがに精神に来るので置いてきたのだが・・・結局我慢できずに来たらしい。

街の住人は恐ろしい魔獣が屈強な戦士に従うのを見て安心し、尊敬のまなざしをモモンに向けている。そのことに、少しばかりホツとした——が、

「ブハッ!!ちよ、でかいハムスターじゃん!!」

デミウルゴスが盛大に吹き出した。その瞬間モモンの恥ずかしさは天元突破し、強制的に鎮静された。

「すごいギャップ!かわいいかわいいwww」

「・・・もしかして、南方の人は変わったセンスをお持ちなんでしょうか?」

腹を抱えて笑うデミウルゴスにペテルはモモンを振り返る。他国人の感性であれば、モモンのセンスとペテルたちのセンスが合わないのも納得である。

そして、モモンは南方の国には絶対に近づかないぞと心に堅く誓った。

最初は、ダミーを倒した冒険者を殺すつもりであった。偽装のため
に必要だったとはいえ、自分を模した存在を殺した相手は少なからず
不快だったからだ。事故にでも何でも見せかけて殺そうと伺ってい
て、一番目を引く存在を見つけた。

「・・・どっかの誰かを彷彿とさせる奴だな」

全身鎧に赤いマント、色は違えどよく口論していた相手の姿に似て
いると幻術で作った眉を寄せた。・・・しかし、しばらく観察してい
て全く別の人物を彷彿とさせられて、悪魔は知らず口を緩ませた。

「我が主、ご命令をください。あの冒険者たちをすぐに血祭りに上げ
てご覧に入れましょう」

耳障りな小悪魔の言葉が聞こえたが、悪魔は目もやらずに握りつぶ
してやった。そして、しばらく考えると仲間の輪から離れていく男の
後を追いかけていった。

「もしかしたら——なんて旨い話はないか」

モモンたちと別れて、デミウルゴスと名前を偽った悪魔は残念そう
にため息をついた。あまりにも、友人と重なるので話しかけてみたの
だが——反応が薄いと感じた。

自分の今の姿は現実での人間の姿を模していた。オフ会で顔を合
わせているから、あの人だったら何らかのアクションがあると思っ
たのだ。デミウルゴスの名にもあまり反応が無かったので、他人の空似
であったかとかかりした。

——顔も、声も、仕草も、性格もそっくりだというのに・・・。

しかし、悪魔はならばと笑みを浮かべる。

「あの人間を元に、あの人を造ってみるのはどうだろうか？」

きつと寸分違わぬあの人が出来るに違いないと、心が躍った。それはとても良い考えだと悪魔は笑う。彼と一緒にならきつと楽しく遊べるだろう。

友人と息子を造り、一緒に遊ぶのが楽しみだと悪魔は足取り軽く、そのための準備に歩き出した。

「ひよえ?!」

「どうしました？モモンさん」

「——骨なのになんか背筋に悪寒が」

「スケルトンでも風邪引くのであるか？」

「ポジションで治りますかね？」

「むしろダメージ負いますよ」

「負のエネルギーで回復するんだっけ？じゃあ、墓場いくか？」

「何で回復スポットのように言うんですか、遠慮しときます」

仲間たちに囲まれて、モモンは村に帰って風呂に入ろうと腕をさすった。

1000年の揺り返し

「ザリユース、生け簀に行くの?」

「ん? ああクルシユ」

雄の蜥蜴人のザリユースが振り向くと、雪のように白い鱗を持った雌、クルシユがこちらを伺っていた。

「魚の様子を見にな、さすがに先生にまかせつきりと言うのは」

「貴方が育ててきたんですもの、先生だって許してくれるわ」

トブの大森林の北、逆さ瓢箪型の湖の湿地帯に住む蜥蜴人の二人は連れだって歩き出す。仲むつまじく歩くその姿は恋人のそれで、時折しっぽが触れ合う。

二人の向かう先には大きな生け簀が幾つも設置してある湖だ。昔はザリユースが小さな生け簀を作っていたのだが、今はそんな粗末な物より大きく立派な物が広がっている。まだ、安定した魚は取れないが、もうしばらくすれば部族全員に行き渡るほどの魚が取れるだろう。

「これも全て」先生”のおかげだと、生け簀のすぐ横に立てられた小屋に向かう。

「せんせー・・・ウワアッ?!」

「キヤアッ!?!」

中にいるだろうと思っていた”先生”は湖に頭を突っ込んでピクリとも動いていなかった。敵の襲撃かと慌てて駆け寄り引きずり起こし、呼吸を確認する。

すぴー すぴー

「・・・寝ているようだ」

脱力した顔で伝えれば、クルシユは腰が抜けたとその場にへたり込んだ。

「イヤーすまない。あまりにも星が綺麗なもので徹夜で眺めてしまつてね」

すまんすまんと謝る”先生”にザリユースもクルシユも心臓に悪いとため息を吐く。

「脅かさないでください先生、先生ほどの強者を倒す者がいるのかと肝が冷えましたよ」

「悪かったって」

頭に当たる部分を搔く”先生”は蜥蜴人ではない。最近この村に現れた異形の者だ。

ザリユースが作った生け簀を勝手に改良を加えていたところに遭遇したのだ。自分より遙かな強者に逃走を選択しようとしたザリユースに、異形の者は思いがけず理性的に話しかけてきた。

警戒しながらも話を聞けば、生け簀についてすごい知識を持っている彼にザリユースは師事を仰いだ。

そこからはすんなりと彼は蜥蜴人達に受け入れられた。力こそ全ての蜥蜴人だ。全ての村の族長に勝つて認められたのだ。ゼンベルはその強さに惚れ込み、よく決闘を申し込んでいるようだ。いまだ惨敗だが。

そこから彼は生け簀を本格的に作り、飼育を請け負った。なかなか難しいから素人に手を出して貰っては困ると、ザリユースさえも閉め出された。しかし、見学と簡単な手伝いは許してもらえているのでそのうち一つの生け簀を任されるかも知れない。

生け簀のほかにも、彼は様々な事を蜥蜴人たちに教えた。小さい魚は逃がすこと、少し我慢すれば大きくなるのだから。

魚の産卵の時期は穫るのを控えること、卵が産みつけられなければ次の魚は生まれてこない。

などの心構えのほかに、日持ちする干物の作り方や保存方法を教え、魚の産卵場所を造つてやる事を教えた。

魚だつて勝手に生まれてくるわけではないのだ。環境を整えてやれば、湖の魚も増えてくれると彼は教えてくれた。

「観察日誌も増えましたね」

小屋の中の一角を占めるのは大量の紙だ。巷にある羊皮紙ではなく、彼が木の繊維から一から作った紙である。——まあ、現実の世界で普及するようなものではなく、分厚くゴワゴワした手作り和紙だが。

蜥蜴人達は文字を持たない。けれど、生け簀などの知識を伝えていくので有れば口伝ではだめだと、彼は日本語を彼らに教え始めた。今はまだ理解されないが、何代も重ねてゆけば普通に読み書きできるようになるだろう。

（——だが、それで本来の蜥蜴人の生態を壊すことにならないか？）
彼は蜥蜴人達を見て葛藤する。自然のままに生きている彼らを、異物の自分が勝手に変えて良いものか……。これは自然破壊ではないかと悩んだ。利便性を押しつけて、文明を発達させて文化を失わせる。

自分の、人間の身勝手さではないだろうか？

しかし、学ぶことに喜びを覚えているザリユースやクルシユ、わずかな蜥蜴人達に彼は目をつぶって見ない振りをする。

（彼らが生きるためだ。そう、これは保護なんだ。生き残るために手助けして、十分生きていける頃に野生に帰す。——何の問題もない）

「先生、そろそろ餌の時間じゃないですか？」

「ん？ああ、そうだな。ザリユース手伝ってくれ」

はい！と元気よく応える生徒に、彼は仲むつまじいカップルの元へ足を向けた

「なかなか依頼がありませんね」

「まあ、レベル高い依頼なんてそうそうないよな」

モモンが掲示板を眺めているとルクルットものぞきこんできた。

「スライム討伐の依頼もあるけど、こんなんはだいたい銀のプレートの仕事だよな」

「ところがどっこい、そうでもないんだよ」

横から声をかけたのはそれなりの年数を重ねたであろう冒険者だった。

「その依頼、なかなか難しいぞ」

「？ 高々スライムだろ？そりゃ専用の装備や酸軽減がないときついだろうけど」

そのルクルットの疑問に「甘い」と冒険者が首を振った。

「かなり強いぞ？突然変異なのか普通のスライムなんかの100倍強いんじゃないか？」

詳しく聞けば”黒き漆黒の粘体”と呼ばれるスライムの最上位種だった。しかし、周囲にとつては色が変わったスライムと言う認識らしく、報酬も少な目であった。

「なによりやつかいなのはな、そのスライム、価値の高い武器や防具ばかり狙ってくるんだよ」

「盗られたのか？」

「ならまだまじだよ。——目の前で溶かされんだよ！苦勞して買った防具を！その場で！！・・・酸軽減の魔法かけても効かねえし、今でも狂ったようなあの笑いが耳に付いて離れんのだ」

どうやら犠牲者だったらしい。装備もあるし簡単な仕事だと軽い気持ちで行ったら、無理して買った魔法の掛かった防具を目の前でポロボロにされたらしい。

しかし、被害は高価な防具や武器、たまにアイテムだけで人に被害はない。そう言うこともあって報酬も低いし、優先度も低いらしい。

「悪いことは言わん。その依頼は受けない方がいい。特にモモンさんの鎧は真っ先に狙われるぞ」

別に魔法で造った鎧だから懐にダメージはないが、骨の素顔を見られたら困るとモモンは忠告をありがたく受け取った。

「あと、それもランクと報酬が低い割に難易度高いぞ」

そう指さした依頼は、「ローレライ討伐」と書いてあった。

「ローレライって何だ??」

「対象がそう名乗ったらしい。幼い子供の声で相手を誘い、近づいたところを襲われるんだと。油断しないで近づいてもいつの間にかぶっ倒れてるらしい。だから敵の正体も不明。唯一解っているのはピンクのなにかだ」

「ピンクのナニカって何だよ?」

「それが解ったら苦労しない。ちなみに、こっちも死傷者はないが身ぐるみはがされたってさ」

そう肩をすくませる男に、モモンも肩をすくませた。特に重要性のない依頼ばかりだし、村も特に困っていない。なら、しばらくは村でのんびりするかと、組合を後にした。

スライム討伐

スライム討伐の依頼が来た。なんでも数々の冒険者が討伐に乗り出すも悉く返り討ちに会うので、さすがに討伐対象のランクを上げたいらしい。

特に急ぎでもないが、上位種スライムを放っておくのもどうかと思い、スライム討伐の依頼を受けた漆黒の剣は、スライムの出現場所に到着した。

「では私をおとりにスライムをおびき出しましょう」

今のところ人的被害は出ていないが、スライムの酸はかなり強力だ。防御が薄いと全身がただれてしまうので、全身鎧のモモンが一番適任である。

とりあえず、ほてほてと周囲を歩き回るが特に襲ってくる様子はないので無差別に旅人を襲っているわけではないらしい。

やっぱりじめえつとした場所に潜んでいるのかなと、石の裏をひっくり返して覗いたり、藪の中を覗いたりして探す。しかし、ふと顔を上げると風通しのいい木陰に、なにやら草のドームが出来ていた。自然に出来た物ではなく、なにかしらの手を加えられているのは明らかだった。子供が作った秘密基地のような場所をのぞき込むと、それほど広くはない室内には家具のような不格好な固まりや枯れ草のベッドがあった。何とも人間くさい住処だなあと覗いていたら、・・・目があつた。

「オロロロロロ~~~~~ンツツツ!!」

「キヤーツ!!」

思いのほか近くにいて威嚇らしき声を上げるスライムにびっくりして、モモンは高い声を上げてしまった。恥ずかしい、不幸中の幸いは“漆黒の剣”が離れていて声が聞こえていないことだろう。

「ごほつごほつ!ん、お”お”っし!!」

誤魔化すように野太い声を上げて距離を取ると剣を構える。隠れていた”漆黒の剣”も酸欠減の盾を持ってモモンの後ろに立つ。と、住処からスライムがヌツタリと出てきた。———なんというか、くたびれたサラリーマンのように見えるのは気のせいだろうか？

チラツとモモン達を見上げると深くため息を付いた。と、思ったら潰れたような体を持ち上げて立ち上がると、まるでパンプアップのように肉体が盛り上がりモモンを見下げるような巨体となった。

「オ”オ”オ” オオオオツツツツツ!!!」

ペテル達はその巨体に腰が引けたがモモンは動揺しない。スライムはただモモン達を見つめるだけで特に攻撃はせずに威嚇だけしている。そのことにモモンは首を倒してスライムを見上げた。

(もしかして、攻撃しない限りは攻撃してこないのかな?)

どうしようか、モモンは悩んだ。考えてみれば人に危害を加えていない相手を殺すのも気が引ける。

モモンは見上げるほど巨大になったスライムを前にして、剣を地面に捨てた。”漆黒の剣”が驚いているが手を振って大丈夫だと示した。

「———此方の言葉は解るだろうか？ 平和的に解決したいと思っっているのだが」

モモンの言葉にスライムは威嚇の声をやめしばらく無言でいると、見上げるほどだった体がシユルシユルと縮み、モモンと同じくらいの大きさとなった。

話をするなら相手と同じ目線で、社会人の常識である。常識的なスライムは懐疑的な目をしながらも口を開く。意外と流暢にしゃべれるようだ。

「平和的に解決してもらえらるのなら放って置いて欲しいのだけれど」

「貴方は有名になりすぎだから少し難しいかと」

「.....だよな」

ベシヤリと地面に潰れるスライムはとてもお疲れのようだ。ために何故人間を襲っているのか聞いてみた。

「そりゃ自分の身を護るためだよ。最初はただのスライムと侮ってお

むしろ半分に攻撃してくるから頭来てね。高そうな剣をダメにしてやったんだ」

どこかのバカ貴族だったんだろうな。ベソかいて喚いていたよ。それで討伐隊を連れて戻ってきたんだけど、装備一式全部溶かしてやったらしつぽを巻いて逃げていったんだ。その後は冒険者がひつきりなしにやつてくるようになったよ。あ、あんまり人を攻撃したくないから高価な武器や防具を目の前で溶かして戦意喪失させて追い払ってたんだよ。

「でも、そろそろ静かに暮らしたいんだよねえ」

ため息を付くスライムに、モモンは同情する。どう考えてもこのスライムは悪くない。話を聞いていた”漆黒の剣”も眉をしかめている。「これだから豚は」と不穏な声が聞こえた気がしたが空耳だろう。うん。

モモンはスライムをトブの大森林に放すことにした。ここなら人間は近寄らないし、危険なモンスターもない。・・・ハムスケには襲わないよう言っておこう。

組合にはスライムは別の土地に移動したらしいと報告したので、スライム討伐の依頼も暫くすれば破棄されるだろう。

「わざわざこんなところまで連れてきて貰って、なんとお礼を言えればいいか・・・」

「いえいえ、けど本当に森でいいんですか？よければ村に住むことも出来ませんが」

「そこまでは甘えられませんし、それに静かな場所でゆっくりと寝たいんですよ」

眠そうにみえる顔だと思ったなら本当に眠かったらしい。ユラユラと左右に揺れている姿は残業、徹夜続きのくたびれたサラリーマンと重なる。なんだかモモンの胸にくる姿だ。すぐく労りたい欲求が出

て来て、マッサージでもして上げたい気分になるが、どこが筋肉なのか判別できず諦める。

「ああ、そうだ。自己紹介してませんでした。私へロへロといいます」
「モモンです。何か困ったら森の南にあるカルネ村まで訪ねてくださいね」

「モモンさんは優しいですね。じゃあいつかお礼をしに伺います」
ペコリと頭を下げたへロへロは体を引きずるようにフラフラと森の中に消えていった。

「すいません、無駄骨になってしまつて・・・」
「いいんですよ。スライムさんだってそんな悪い人じゃなかったんですから」

「ウム、モンスターだからと無闇に討伐するものではないと勉強になつたのである」

「というか、悪いのはバカな豚ですから。モモンさんやスライムさんは全然悪くありませんよ」

ちよくちよくニニヤが黒い気がするが、なんなんだろう？

「そーなると、ローレライって奴もそんなに悪い奴じゃないのかもな。こっちも人に危害を与えてないわけだし」

「いや、どう聞いても追いはぎですけど・・・。こっちは情報がほとんどないので依頼が来たとしても気は進まないんですよ」

軽く見て痛い目には会いたくないと言えば、”漆黒の剣”は苦笑いする。

「モモンさん程の人に痛い目を合わせる奴なんていないと思いますけどね」

「わかりませんよ？天使系のモンスターかもしれないし」
「天使が追いはぎってシニールだけだな」

まあ、モモンが嫌がるのなら強く言うつもりはない”漆黒の剣”はじゃあしばらくは依頼なしでゆっくりしましょうと、エ・ランテルへの帰路についた。

帝国観光

急ぎの用事もないし、観光してみたいとモモンは”漆黒の剣”と共に帝国を訪れていた。

ランクも上がり、報酬も増えたことで、そろそろ質の良い防具が欲しかったので他国との貿易が盛んな帝国にわざわざやってきたのである。帝国と王国は戦争中ではあるが、冒険者なら結構簡単に入国できるものらしい。戦争に加担しない前提があるからこそその自由さだが、モモンはいろいろ心配になる。スパイとかだったらどうするんだ。

まあ、それは置いてここからどうしようかと話し合う。ペテル達は買い物もしたいしニニヤは帝国の魔法学院や研究施設に興味がある。帝国の冒険者組合も覗いてみたいと希望が次々と浮かんでくる。しかし、滞在できる時間は限られているので結局効率よく手分けして用事を済ませようという話になった。

「モモンは誰と帝国を回ろうかと考えた。」

初めての帝国だしお城を見てみたい気もするし、他国の冒険者組合はどんなものだろうと気になる。しかし、やはり魔法詠唱者マジックキャスターとしてなら帝国魔法省も捨てがたい……。いやいや、遊びに来たわけではないのだし、買い物を手伝うべきだろう——と、思ったがルクルットがやっぱりアンデッドだから墓場が気になるか？（笑）とかいっているので手伝いはなしにした。

ニニヤと帝国魔法省へ。

やっぱり魔法詠唱者マジックキャスターとして、最先端の魔法と言うものがみたいので

ニニヤに同行することにした。日々新しい魔法を作り出す場所だと聞けば、行かないわけにはいかないだろう。ただ、学園の見学は問題なかったが、近衛兵に魔法省自体の立ち入りは禁止されていると言われてがっかりした。——まあ、国としても重要施設だから当たり前だが。

めぼしいスクロールを買ってペテル達に合流しようかと話していると、突然 ザ・魔法使いなじいさんに声をかけられた。こちらがオリハルコンの冒険者と見ると、何の用か聞かれ、魔法省の見学に来たが断られたことを話すと、ザ・魔法使いはあっさり近衛兵に話を付けて通してくれた。

魔法省の案内をされながら話をよく聞いたら、なんと帝国最強の魔法詠唱者で魔法省の最高責任者のフルーダだった。何でもオリハルコン級のニニヤと話をしたいらしい。

「若いのにそこまでの位階の使い手とは」

タレント能力でニニヤの魔力を見抜いた老人に、ニニヤは魔法適正のタレント持ちなので、比較的早く魔法習得できるのでと説明すると「ほう」とフルーダの目が少し剣呑な光を帯びた。

「・・・羨ましいことだ。私のタレントもそれであつたら」

続く言葉を飲み込んだフルーダは、目を閉じた。

ニニヤと同じタレントであつたなら、もつと早く今の域まで到達できただろう。そして、もつと魔法の研究を先に進められたかもしれないと寿命が迫っているフルーダはニニヤに嫉妬した。

しかしフルーダは頭を振る。今は若造のタレントを羨んでいる時ではない。フルーダの目的は横にいる戦士である。

実はフルーダは我が師が望んでいる人物を献上すればさぞ喜んでいただけるに違いないと、下心満載で二人に話しかけたのだ。誘拐はさすがに出来ないが、つながりを持ち、後々絡めていけばいいとフルーダはモモンにチラリと視線を向ける。

すると、モモンはなぜか天井を見上げていて首を傾げてしまう。

「何か気になるものでも?」

「ああ、いえ。変わった警備の仕方だと思ひまして」

何の話かと問えば天井を指さされ――

「天井に忍者を配置っておもしろいなあと」

言われて見上げても、どこにも忍者などいない。が、フルーダがすぐさま不可視化を看破する魔法を使えばまさに天井に張り付く忍者がそこに居た！

「曲者じゃ!!」

すぐさまフルーダが〈電撃〉を放つが、雷より早く忍者がそれを避ける。そして不可視化を解いたらしいそいつは華麗に着地するとすぐさま走り出した。弟子達が突然現れた忍者に驚き、慌てて捕縛しようとするが風のようにすり抜けられてしまう。警備兵が慌てて出口を固めると、忍者は急停止しすぐさま踵を返すと鉄板で固められた窓に向かう。

鋼鉄の扉の窓をこじ開けるのは不可能だ。たとえ可能だとしても破るのに時間がかかると、誰もが思ったが――

忍者は腰に差していた二本の短刀を抜き去ると光の早さで切り裂いた。

そしてそのまま腕をクロスさせて窓を破ると、そのまま町へとけ込んでいくのを警備の兵や弟子たちは呆然と見送ってしまった。

帝国の重要施設でもある魔法省にスパイが入り込んでいた事に周りは大騒ぎとなった。盗まれた書やアイテムを確認し、他に仲間がないか警備兵や弟子達が走り回る。怒号が飛び交う中、ぽつりと取り残されたモモンとニニヤは顔を見合わせた。

「あー……、忙しそうですしお暇しましょうか」

「そうですね」

「面倒ごとに巻き込まれないうちに、モモンとニニヤはコソコソと魔法省を後にした。」

「そんなことがあったんですか」

無事仲間と合流して、魔法省での出来事を報告すればペテル達はこの騒ぎの原因はこれかと驚いた。今や帝国中に騎士たちがうろついでいて、件の忍者を探しているのは明らかである。ペテルが顔を出していた冒険者組合にも来たらしい。——忍者が冒険者の可能性もあると疑っているのだろうが、組合がそんな仕事を冒険者に斡旋するわけがないだろうと怒りを露わにする。やるとしたらワーカー連中だと突っぱね実力者ならこいつらだろうと何チームかの名をあげる。「だが、いくら奴らだって魔法省の侵入自体不可能だし、そんな依頼を受けてただじやすまないことぐらいわかつてるはずだ」

組合の人間の言葉に頷く者は多い。あの最強の魔法詠唱者マジックキャスターが管理している場所にこのこと忍び込むバカなどいない。仮にできたとしても、帝国を敵に回すのだ。どれだけ金を積まれたってそんなリスクを負うようなバカはいない。——となると他国のスパイであることが濃厚である。まあ、暗殺集団の可能性もあるのだが……。それでも何か情報があるかもしれないからと、騎士たちは教えられたワーカーの所に行った。

途中、たまたま外で飲んでいたらしいワーカーと遭遇したようで話を聞く、・・・というか言い争いになっているのをペテルは見た。

「あー、市場の方にも来てたなあ。せつかくいい買い物してたつてえのにさ、お陰で相手に逃げられちったよ」

「おそらくは無許可であったのであろう。始終顔を隠していたである」

そういつて見せてくれた防具やアイテムは質が良く、なぜあんなとこで売っていたんだと疑問になる位である。

「・・・ま、それぞれ事情つてもんがあるんだ。深く詮索はしなかったけどよ、やっぱ人間って嫌だな。別の奴が相手の足元見てタダ同然で買ったたこうとしてたもんだから頭にきちまった」

「相手の高慢さはそれが有り余るほど、一度痛い目に会うべきである」
同感とばかりにダイスが頷くのだ。それは相当な奴だったのだから。

「しかし、どうする？こんな騒ぎじゃ国境越えるの難しそうだけど――」

「あ、それなら大丈夫です。通行手形をフルーダさんから頂いてますんで」

「なんでまた？」

「まあ、忍者を見つけてくれた。お礼とまたニニヤと話したいということでした」

「お？ニニヤに玉の輿のフラ、グウつつ?!」

「ルクルツト黙れ」

ニニヤの重い一撃がルクルツトの鳩尾に決まる。日に日に扱いが雑になっている気がする。

ある隠れ家での会話

「ふーむ、思った以上に難航してますねえ。やっぱり人間種に化けられる人がもうちよつと欲しいな」

「そう言っても、殆どのメンバーが必要ないからって変身能力取ってませんよ？」

「せめて幻覚系魔法を持っている人を見つけれたらなく・・・と、お帰りく首尾どうだった？」

「あく、お城の前まで行ったんですけどやっぱり門前払いですわ。当

たり前だけど・・・、皇帝の周囲を窺うのはやっぱ普通じゃ無理だわ。
警備頭丈」

「冒険者としての情報はあんまし・・・やっぱランクが低いとだめだな」
「となると、やっぱり隠密機動NO1の忍者さんが一番期待ですな」
「あ、ごめん失敗しました。たまたま来ていた冒険者に見破られました。
たぶん警備死ぬほど嚴重になります」

「何やってんだよ」

「情報は何より大事なんだよ？場合によっちゃ命に関わるんだからま
じめにやってく下さい！」

「は」

「全然気が入ってない・・・」

「でも皇帝に悪魔が付いてるって噂、嘘じゃないかなあ？ここ数日見
てますけど影も形も見えない」

「まあ、冒険者内の噂だったし信憑性は全然だしね。でもそれがホン
トだったらやっぱあの人だと思う」

「うんうん。あの人だったらやりかねないね。てか、王国の赤マント
の勇士もさあ・・・」

「あ・・・、どうする？二人一緒にすると面倒だよ？むしろほつとい
たほうがよくない？」

「でも所在ははつきりしとかなないとね。ところで、封印されたアン
デッドの方は？それもわからずじまい？」

「そっちはばっちり確認済み。ただの死の騎士^{デスナイト}だったよ」

「なんだよ伝説のアンデッドとか言うから死の超越者^{オーバーロード}かと思ったの
に」

「いやーでも仮にあの人だったとしてもそう簡単に捕まらないと・・・
「ほんとに思うか？」

「・・・うん」

「ただいま」

「おかえり〜ってどうした？やけに機嫌いいな生産班」

「いやね。いつも通り安く買いたたかれそうになってただけだよ！
オリハルコンの冒険者が助けてくれてしかも規定通りの値段でアイ

テム買ってくれたんだよ！やっぱ人間捨てたもんじゃないわ〜」

「結構高めのアイテムも買ってくれたからさ、ノルマ達成したぜ!!」

「それはよかった！じゃあ、それを資金に本格的に動こうか」

「そう言えば墓場の噂聞いた？ハゲだかズラだかの秘密結社が邪神の召喚に成功したとかしないとか」

「ただの噂でしょ」

「それがさー、信者を若返らせたって噂があつてさ……。超位魔法ほくね?」

「あれって経験値消費するタイプだろ？そんなショーもないことに使うわけ……。いや、自らの設定を崩さないためにやりそうな人はいるな」

「邪神設定とか嬉々としてつくりそうだよなあ」

そう笑いながら歩いていく者達の影はことごとく人の形をしていなかった。

聖VS悪

屋根裏の居候

どさりと、まるでゴミの様に落とされた。痛みは感じなかった。いや、どこもかしこも青あざだらけで、痛みだらけで解らないだけだ。

——いや、むしろ何もかも心から遮断していたのかも知れない。何も感じず、何も考えず、ただただそこに転がっていた。逃げようとか、助かろうなどと言う考えも浮かばなかった。

けれど、なぜだか、麻袋の開いた口から見えたその影にわずかばかり手を伸ばしていた。すべてを拒絶していたのに、すべてを諦めていたのに・・・その赤い外套を指先に引っかけていた。

その日、ゴミ捨てをするはずだった男は、転がしていたはずのゴミがないことに慌て、店から逃げ出した。

コンコンコン

「……………」

その日、珍しく自宅に帰ってきていたガゼフは天井から聞こえた小さな音に気が付くと、つま先で床を叩いた。

トントントン

そしてゆっくりとした動作で部屋を出ると、召使いの老夫婦が帰ったことを確認すると、乱雑に木箱を置いている物置まで行く。

木箱は、本当にただ置いただけのように見えたが、実は天井まで上れるように計算されて置いてあった。ガゼフは足先を引っかけるく

らしいしかない足場を器用に上ると、天井をノックした後天板を外した。

「どうかしたか？」

真つ暗な天井裏をのぞき込むと、そこは綺麗に掃除されてちよつとした部屋のようになっていた。まだ目は慣れていないが、奥の方には簡単なベッドと書き物が出来る小さな机が置いてあるはずだ。そして、反対側には外へ出られる小さな出入り口がある。その方向から気配を感じて声をかけたが、別な気配に眉を寄せた。

「すまないガゼフ」

その声に目を凝らして、ガゼフは目を見開いた。

「——その者は？」

「道で、死にかけていた。状態も悪い。すぐにでも治療しないと危ない状態だ」

「……」

ガゼフは一瞬迷った。どう考えてもやつかいごとになるだろうとわかるのだ。それによって自分の行動で王に迷惑は掛からないだろうかと悩んで仕舞う。

しかし、それも一瞬のことで、ガゼフは「必要なものはあるか？」と訪ねると、衣服が欲しいと答え“ソレ”をベッドに寝かせた。

「——居候の身で、凶々しいとは思うが」

「気にするな、貴方は王国の民を救ってくれているのだ」

立場を気にして動くことが出来ないガゼフにとって、彼の行動は眩しく、うらやましい。そんな彼に感謝こそして、迷惑に思うことなどない。

「清潔な布と湯を持ってくる。その後なにか消化に良い物も買ってこよう」

そう言つて下に降りたガゼフは比較的綺麗な布を探し部屋をひっくり返す。彼自身治癒魔法が使えるからポジションや包帯はいらないだろう。

……彼が欲していたのは家主であるガゼフの許可だけだ。ガゼフが迷惑だと言えば、神殿にでも置いてきたかも知れない。

しかし、そんなことを言うわけもない。彼が拾ってくることでガゼフも自分に言い訳が出来るのだ。

「立場とは、面倒なものだな」

そう苦笑いしながらガゼフは見つけた布と湯を持って再び天井へ上った。

「無理です！」

悲鳴を上げるように怒鳴るエンリに、村長、いや、元村長は苦笑いする。ただいまカルネ村村長の代替わり中である。

「無理無理無理!! あたしなんか村長なんて出来ない!!」

「大丈夫お前さんなら大丈夫じゃやて」

「いきなり老人言葉使ってなだめないでください! そんな年じゃないでしょう?!」

「まあまあ、エンリも落ち着いて」

「そ、それならゴウン様が村長になった方が」

「それは無理」(キツパリ)

「何ですか!? あたしよりよっぽど!!」

「あんなエンリ、あくまでもここは人間の村なの。アンデッドの俺が村長じゃモンスター村になっちゃうでしょ?」

しかし、エンリは往生際悪くアインズを見上げている。気持ちはぐらぐら揺れ動くが、結局は顔を背けることで事なきを得た。

「だいたい王国の監査官に村長ですってこの骸骨顔見せられないでしょ」

「ううう〜!」

今度はンファイーレアにも助けを求めるが、困ったように説得してくる。裏切り者と睨みながら、エンリは四面楚歌の状況に泣きそうだ。

みんな最近なんだかコソコソしていると思つたら・・・ハメられた!!

「ただの小娘の私には無理だよ〜」

「大丈夫だって、村長だって元はただの村人その1だったんだから」

「——ゴウン様も言いますな。まあ、その通りですが・・・」

「大丈夫だよエンリ！僕も協力するから!!」

「え〜〜」

「俺も協力するから、困ったときは相談に乗るぞ?」

「ゴウン様がいるなら・・・」

「・・・僕は戦力外なのエンリ?」

ガツクリしているンフィーレアを気にすることなく、エンリは未だに渋っている。

「だって、私より頭がいい人もいるし、経験ある人の方が——」

「そういう奴の方が実は頭が固いんだぞ? 若い方が発想力あるし、女性の方が実はタフで強いしな」

「む〜〜」

コレは何を言っても畳みかけてくる気だとエンリは気が付く。味方を作らないといけないとニニヤの顔を思い浮かべる。アインズの冒険者仲間だが、女性で幼い妹がいると話すとすごい親身になってくれたエンリの親友である。

(ニニヤならきつと私の味方になってくれる!!)

そう思つて時間をもらったが、結局ニニヤにもニコニコと言いくるめられ、エンリはカルネ村の新村長となった。

赤マントの勇士

その存在が外へ出て行ったことを、ブレイン・アングラウスは感じ取った。

剣の天才と言われていたブレイン・アングラウスは強さのみを追い求め、己の腕を磨くために野盗崩れの傭兵団に用心棒として雇われながら日々剣の修行に明け暮れていた。

目指すのは唯一ブレインに土を付けたガゼフに勝利する事、その目的のために生きてきたと言っても過言ではなかった。

しかし、ほんの数週間前にその価値観を人生を破壊された。

出会ったのは悪魔。強く、高慢で、相手をいたぶることを好む相手。しかし、ブレインはその悪魔の強さを感じていながら刀をとり、戦いを挑んだ。

——結果は惨敗。ブレインとの格の違いを見せつけた悪魔は、耳元で囁いた。

「本気を出していただいて結構ですよ？」

ブレインが、今まで本気だったことは解っているはずだった。しかし、つまらなそうに悪魔は鼻を鳴らしてブレインを見た。

「つまらない。魔法詠唱者の私でも指先だけで相手できるなんて——、貴方もう少しまじめに鍛えた方がいいですよ」

これまでの努力を、いや人生を否定された気がした。心を折られたブレインが見逃して欲しいと懇願すると、まさにどうでも良さそうに悪魔は言った。

「私から逃げきれぬのならどうぞ。取りこぼしたところで気にしませぬので」

この悪魔にとって、自分は道ばたに落ちている石ころと価値が変わ

らないのだとヒシヒシと感じ、ブレインは死ぬ気で逃げ出した。あの悪魔の横を通り抜ける勇氣も無鉄砲さもはや無かった。

脱出路から飛び出した後も、全く気をゆるめることが出来ない。注意深く探れば、やはり周囲には悪魔が逃げ出す者を監視していた。”逃げきれぬのなら”と言ったが、逃がす気はないのだろう。それでもブレインはとにかく身を隠し、ガタガタと震えていた。信じてもない神にすら祈る。

——しばらくして、悪魔共がどこかに去っていくのが見えたが、畏れも知れないと思うと動けない。ブレインは、ただただ朝日が昇るのを闇を恐れる子供のように待っていた。

その後はただがむしやらに逃げて、そしていつの間にか宿敵であるガゼフがいる王都にたどり着いていた。心身ボロボロでふらふらと亡霊のようにさまようブレインをガゼフが拾い何も聞かずに自宅に置いた。

そして、ブレインは久しぶりに深く眠った。疲労がピークだったからだろう、ブレインはその館の中の存在に気が付かず、ただただ眠っていた。

氣力体力ともに十分に回復した頃に気が付き、ブレインは血相を変えて跳ね起きるとガゼフに詰め寄った。しかし、ガゼフは心配するなと刀を放そうとしないブレインの肩を叩いて、天井を見上げて笑った。

「彼は人に危害を加えることはない。私の友人だ」

ブレインはビクビクと天井を見上げているが、敵意がないと感じると刀の柄から手を放し、もう一度ガゼフに「大丈夫なのか」と訪ねた。力強く頷くのを見て、ブレインは胡乱げながらもその存在に触れないことにした。

それでも気配を探ってしまうのは、相手が自分を指先一つで殺せる存在だと本能で解るからだ。その気配が動くたびにブレインはビクビクと震えていたが、最近はやつと危険はないと理解し慣れた。そして、冷静に観察できるようになった。

奴はよく外に出かける。どっから出入りしているのかとガゼフに訪ねると、屋根の一部がはずれるようになってしていると説明された。自由に出入りさせるのはどうかとも思うが、ブレインはあまり関わりたくないのも言わなかった。

しばらくして、ブレインは外に出るようになった。あの悪魔が俺ごときを追ってくるはずがないと確信したのと、もし追って来ても屋根裏にいる強い存在を先に襲うだろうと思ったのだ。

そして外に出て、王都をブラブラしていると色々な噂が耳に入ってくる。その中には屋根裏の存在だろうと思われる噂もあった。

どこからともなく現れて、悪を倒し困っている者を救う。巨大な魔獣だろうと、屈強な野盗だろうと瞬きする間にたたき伏せる。その者の正体は未だ不明。男であろうことと、赤いマントが特徴だとか……。ブレインは気のない振りをして聞いていた。

(……ガゼフが好みそうな奴だ)

だから天井裏を貸しているのだろうと何となく思った。そして、それはあの悪魔とどれくらい戦えるだろうかとぼんやり考えかけて頭を振る。

ブレインがガゼフの館に戻ると、女にばったりと出くわした。女はガゼフの館に住み込みで働いているが、詳しいことは聞いていない。自分の顔を見るなり震え、奥へと走って行ってしまふ女を見送り、ガゼフは頭を搔く。——あの女にはブレインが今まで何をしてきた

か肌で解ってしまうのだろうか。

女の名前はツアレだとガゼフから聞いている。事情があり家で働いている使用人とのことだがブレインには一目でツアレがどんな目に遭ってきたか解った。あの時に捕らえられていた女たちと同じ目をしていたからだ。女たちにブレインは何もしなかったが、同時に何の感情も無かった。しかし、ガゼフが保護している女については妙な罪悪感が沸く。ガゼフという繋がりがあるからだろう。ブレインもツアレについてはあまり接触したくない女だと思っていた。

ツアレはガゼフの使用人であるが、大抵は天井裏にいるようで、おそらくツアレを連れてきたのはアイツだろうと想像できる。召使いの老夫婦は屋根裏のアイツのことは知らないようだがツアレのことは知っていて、婦人の方がよくツアレに仕事を教えたり労っているのを見た。おそらく婦人もツアレがどんな目に遭って来たかうすうすを感じているのだろう。人におびえるツアレと根気よく接する姿に、ブレインはお人よしだなと横目で眺めた。

そして、やっかい事だと知っていながら匿うガゼフもお人好しだとブレインは思う。

——しかし、ソレが長く続かないだろうことはブレインも、ガゼフもよくわかっていた。

ガゼフが珍しく早く帰宅していた時だった。ブレインが部屋で寝転がっていると、館の扉を乱暴に叩く音が聞こえた。物騒な気配にブレインは音もなく起き上がり、窓から入り口を確認するとやせっぽっちの男と太った男、ソレと兵士が一人。

・・・王国戦士長の館に来るにはいささか無礼にも見えるが、役人らしい太めの男が偉そうにしている。

わかりやすいやっかい事が訪ねてきたのだ。ガゼフが直接対応して館の一室に案内するのを確認して、ブレインは息を殺して隣の部屋

に潜む。

一方的な問答だ。王国戦士長と言う地位をもらっていないながら女を誘拐したと言いがかり、女の引き渡しと金銭の要求をしている。――そして後々は、これを弱みにガゼフを揺するつもりだろうことが解る。

ガゼフは貴族連中に嫌われているから、弁明したところで貴族共は聞かないだろう。・・・もしかしたら地位剥奪だってあり得る。

奴らが帰った後、怒りを隠そうともしないガゼフの前にブレインは立つ。

「どうするんだ？ 奴ら根回しをしっかりとってお前を脅しに来ているぞ」

「・・・そうだな。アングラウスにも迷惑をかける」

俺のことなど、どうでもいいだろうとブレインは怒鳴りたかったが、実際自分には関係ない問題なのだ。安易に首を突っ込んで道連れなどゴメンだ。

・・・何も言わずにいれば、ガゼフは通り過ぎて物置へと向かった。

――奴と話をするのだろう。ガゼフの性格なら、女を連れて逃げろと言う気かも知れない。

「――俺には関係ない」

そう言い聞かせるように、与えられた一室に戻って布団を被った。

しかし、屋根裏の存在が外に出たのを感じて、ブレインは布団を跳ね上げるとガゼフに何も言わずに飛び出した。

やっかい事を持ち込んでおきながら、全部ガゼフに押しつけててめえは逃げるのか!?

自分より遙かな強者と知っていながらも、一言いわねば気が済まないブレインは気配を追いかけた。

ブレインが、その気配を追いかけていると、大通りで酔っぱらいの喧嘩が起こっていた。あまり関わりたくないように、気配を見失わないようにと道の端に寄ると、今まで屋根をつたっていた気配が下に降りた。

あわてて身を隠すと、騒ぎの輪に向かうそいつの姿をブレインは確認した。一見、赤い外套の普通の人間に見えた。しかし、強いモンスタ―は人間に化けることが出来ることをブレインは知っていたので、奴も化けたのだろうと考える。

そのまま様子を伺えば、酔っぱらいたちをほんの一撃で黙らせ、地面に倒れていた子供を助け起こした。しかし、なにかを考えるそぶりを見せると、衛兵らしき男に子供を託してその場から去っていった。(これ以上やっつかい事を増やすんじゃないよ)

あの酔っぱらいの中に権力者でもいたらまたガゼフに迷惑が掛かるだろうと、ブレインが舌打ちして尾行を続行する。

――奴を尾行する者が一人増えていることも、自分を尾行している者の存在も気が付いていたが無視し、ブレインはただ奴を追いかけた。

人気のない場所まで来ると、奴は尾行者に対して話しかけた。ブレインは自分の尾行もバレているだろうなと薄々気づきながらも物陰にかくれ、もう一人の尾行者の顔を見る。声が異様に枯れた少年だった。少年は王国の兵士で奴の強さを目の当たりにしその強さに感動し、教えを請いたいとのことだ。

無駄なことをとブレインは少年を哀れんだ。奴は人間ではないから、どんなに教えを請うたところで同じ高みには到達しない。

しかし、断つても少年が諦めないことと、少年が兵士であることを聞いて、奴は稽古をつけてやることを承諾した。

その見返りとして、自分の友人が陥っている事態を何とか解決で

きないかと少年に相談した。

勿論ガゼフの名は伏せてはいるが、不特定な人間にそんな話を広めるんじゃないという怒りと、問題をガゼフに任せず解決したいという気持ちに少し見直した。

しかし、そんなことを相談された少年も困り果てていた。当然だろう、ただの一兵士にそんな問題が解決できるはずもない。考えれば解るだろうと呆れ、謝る少年を哀れに思っていたら、稽古を付ける話に戻った。

交換条件が成立しないのにと、身を乗り出したのはその稽古方法と言うのが気になったのだ。——しかし、すぐさま後悔した。

奴の放つ殺気にブレインはへたり込み、ガタガタと身を震わせた。体の芯から刻み込まれたあの悪魔の恐怖心が奴の殺気により蘇ったのだ。涙が滲み、お守りのように刀を握りしめそれでも少年が気になり視線を上げた。

・・・驚いた。あの殺気を真正面から受けて立っていた。立っているのがやつとという感じではあるが、確かに気力を何とか失わずに前を向いていた。

奴の腕がゆっくり上がる。その手にはきらめく刃が見えた。ナイフかと思つて目を凝らすと、それはただのカトラリーのナイフで人どころか、硬い肉すら切れない。切れるはずも届くはずもないと頭では理解していたが、心が逃げたいと悲鳴を上げていた。それでも刀を握りしめて少年の背を見つめていた。いくつもの疑問符も、嫉妬も、そして尊敬が浮かんで消えていく。

ガゼフも、きつとこの殺気を前にしても立ち続けるのだろうか、ブレインは思った。

やはり、ブレインの尾行もバレていたようで、あの殺気を浴びたブレインを見て奴は納得したように頷いた。

「なるほど、気骨はしっかりありますね」

ガゼフがブレインのことを褒めていたのだが、ふぬけたブレインしか見ていなかったの、ついでに試したらしい。

勝手に試されて腹が立ったが、現れたブレインの尾行者と戦うことになり、文句は言えなかった。尾行者の見当はついていた。ガゼフを脅していることを他の者に漏らされては困るのだから。だから館から出てきたブレインを尾行して殺すつもりだった。まあ、ソレも承知でブレインは館を出たのだが……。

その後はまあ、割愛する。腐っても周辺諸国最強のガゼフと同等のブレイン、それをやるかに上回る化け物がいるのだ。むしろ刺客にはご愁傷さまとでもいふべきだろう。

刺客を倒した後は怒涛だった。人間に化けていた奴が時間切れだと本性を現したり（まさか蟲人間とは俺も思わなかった）刺客から情報を引き出して、諸悪の根元である娼館に強襲すると言つて聞かずに巻き込まれる形でブレインと少年・クライムも突入することになった。

そこが八本指と呼ばれる犯罪組織の娼館だったり、アダマンタイト級と同等の力を持つという六腕（これはガゼフの館に来た男だった）と戦闘して勝利したりと、色々大変だった。特に大変だったのは奴の強情さである。働かされていた（むしろ虐待されてた）従業員を連れていくと言つて聞かない蟲やろうをブレインは殴り（むしろ此方の拳が砕けそうだった）兵士のクライムに託して何とか事なきを得た。

そしてクタクタになつて帰つてきたブレインたちに、ガゼフは驚きつつも感謝した。———というか、ガゼフもこいつを怒るべきだろう。さては甘やかしまくっているなど、ガゼフに説教すると

「自分は立場があつて出来ないことを、代わりにして貰っているのだ。出来る限り手助けするのは当たり前だし、そのための苦勞など苦勞とは思わん」

きつぱりと言ひ放つたガゼフに、これは自分が手綱を持たねばそのうちガゼフが失脚するとブレインは頭を抱えた。

「王都への荷運び、ですか？」

漆黒の剣を名指して、どんな依頼かと思えば拍子ぬけする依頼だった。一応、”漆黒の剣”は悪魔の件もあってオリハルコン級に昇格していた。モモンに関してはアダマンタイト、と言う話も出たのだが「私もまだまだなので」と辞退したのでオリハルコン止まりである。

ちなみにイグヴァアルジ達、”クラルグラ”もオリハルコンに昇格した。そしてイグヴァアルジがモモンにやたら先輩風を吹かして絡みまくっている。

「はい、オリハルコン級の冒険者の方には物足りないと思われませんが、荷は貴重なもので、万が一壊れたり紛失されると此方も困りますので・・・」

そう言つてニコニコ笑う依頼者は、以前話をしたことのある帝国のデミウルゴスの使いであった。帝国から王都のさる貴族の下まで荷を届ける予定だったのだが、事情がありエ・ランテルからは冒険者を雇つて王都まで届けて貰うことになったのだという。

「店にトラブルがあり、我々は帝国に戻らなければならず。信用のおける冒険者の方に荷を預かつて貰いたいのです」

「それを私たちに、ですか？」

「ええ、こういってはなんですけど・・・”クラルグラ”のリーダーさんはちよつと」

「ああ、なるほど・・・」

イグヴァアルジは確かに悪い奴ではないのだが、少し嫌みがすぎるのと優しさを素直に出せないという癖の強さがあり、初対面では距離を

置きたいタイプだ。”漆黒の剣”だって理解するのに時間が掛かったし、仲間もなかなか根気がいったと笑っていた。——モモンぐら
いである。初対面でイグヴァルジに反発せずにいたのは。そのせいでかまいまくられてるが。

「他の方を信用しないという訳ではないのですが、何せ近くに悪魔が現れたとなると・・・」

出来るだけ強い冒険者をお願いしたいのだと言われれば、漆黒の剣”も納得した。

「——で、受けちゃったんですか」

連絡を受けてカルネ村までの〈転移門^{ゲート}〉を開いて漆黒の剣を招いたアインズは、依頼書を眺めながらため息を付いた。文字が読めないが、魔法が掛かった眼鏡をかけているのでアインズにも読めた。——
「決して老眼ではないことを言っておく。」

「まずかったですか？」

「・・・依頼内容はいいんですが時期がまずかったなあ」と

カルネ村の新村長となったばかりのエンリを置いて、しばらく村を空けなければならぬ。なにかと不安だろう。エンリが。

今も泣きそうな顔でこちらを見つめている。でかでかと無理だと顔に書いている。しかし、受けた依頼を断ればチームの信用を落とすだろう。

ペテル達だけが行く選択もあるが、悪魔がいたあたりを通るのだ。あまりいい考えとは言えなかった。

「——千尋の谷に突き落とすか」

ここで甘やかしてはエンリは成長できないと判断し、アインズは依頼を受けることにした。

「じゃあ何かあったらゴブリンメイジに〈伝言^{メッセージ}〉を送らせるんだぞ。すぐに村に戻るから。それと、なにかおかしいと思っただらすぐに森に避難。ハムスケの縄張りだから大抵の敵はアイツが何とかしてくれる。戦闘に関してはデスナイトとジユゲムに任せておけば間違いない。あとそれと——」

「モモンさん、ソレぐらいにしとかなないと日が暮れますよ」

子供の留守番を心配する親のようにモモンがエンリに言い聞かせていた。はじめは不安そうだったエンリも、モモンの心配性に苦笑いに変わり「大丈夫ですよ」とむしろモモンを安心させるように胸を張った。

「何かあったら連絡しますし、無理はしませんから」

「そうですよ。僕もついてますし」

「何かあったらンファイアを盾にしても良いからな」

「ええ?!」

「ん、ンファイアじゃ盾にならないかな」

「ちよつとエンリまで!!」

頼もしさをアピールしたつもりが全く期待されてなくてンファイアはガツクリと肩を落とした。それを慰めるように叩くクルツトとジユゲム。

「モモンさん、ちよつとはンファイアさんを認めてもいいんじゃない」

「いやですよ。水瓶も持てない男にエンリは渡せません」

きつぱりと言い切るモモンに漆黒の剣は苦笑いを漏らす。

「……この数日がチャンスだぞ少年。モモンさんが留守の間にエンリちゃんのハートをがっちりキャッチだ」

「そおツスよ。既成事実作っちゃえばこつちのもんす」

「き、ききき、既成事実って?!」

「既成事実はともかく、男らしさアピールしてエンリちゃんに惚れてもらいな。そうすりゃモモンさんもなにも言えねえから」

ルクルットとジユゲムにグツとサムズアップをされ、赤い顔に大量の汗を掻きながらも、ンファイレアは覚悟を決めたように重々しく頷いた。

こうして、“漆黒の剣”は王都に向かって出発した。

——それが悪魔の罠とは知らずに。

再会

王都に向かう際にとデミウルゴスの使者から豪華な馬車を貸されたのだが、どう考えても盗賊共の格好の的としか思えなかったので辞退し、普通の荷馬車で向かうことにした。

普通であれば貴重品を持っているとどうしても緊張するものだが、モモンが持っていれば安心と漆黒の剣も余計な力を抜いて旅を楽しんでいた。

「私、王都初めてなんですよね」

武器や防具類を買うために帝都にはいったが、自分が暮らす王国の主要都市に行くのは初めてのモモンはちよつとワクワクしていた。帝国では騒ぎがあつてエンリやネムへお土産も買えなかったものの今度こそはと意気込んでいると、反対に表情を堅くしているニヤに気が付いた。どうしたのだろうかと声をかければ、暗い顔を上げてモモンを見上げる。

「昔・・・貴族に姉を連れて行かれたんです」

何というか、人を殺しそうな物騒な光をその目にたたえているニヤに驚くが、詳しく事情を聞いてモモンも怒りが沸いて来た。それがエンリだったらと思うと、その貴族は100回殺しても生ぬるいと思う。時折ニヤが黒かったのはこのためかと納得もする。

漆黒の剣のメンバーは全員知っている話らしい。モモンに言わなかったのはタイミングもあるが、モモンの力を利用してしまいそうだから言いづらいのもあった。

確かにモモン——アインズの方だったら貴族ごときから簡単に取り返せるし、復讐だつて成し遂げられるだろう。が、モモンに頼り切るのもよくないと自制していたのだ。

「私もかなり力を付けましたし——、今なら豚の一匹や二匹ぐらい」

物騒なニヤの顔に、むしろ利用して貰った方がいい気がする。モモンは若干引く。仲間が犯罪者になつて欲しくない。

「普通に告発じやだめなんですか？」

「無理ですよ。衛兵とかも貴族から賄賂貰っているから我々の言葉には耳を傾けませんよ」

そこまで腐っているのかこの国。と、モモンがない眉をしかめる。ガゼフみたいな王国兵はマレなのかとちよつと失望した。——富裕層が兵を私物化する話をどこかで聞いたことがあるので、墮落した国にはありがちなのかも知れない。

「——もし、お姉さんを助けるにしてもどういう方法で助けるつもりですか？」

「二人で暮らしていける十分な資金をためたら、豚小屋に私の使える最高位魔法をぶち込もうかと」

「おまえそんなこと考えてたの?!」

どこまで考えているか問いかけてみれば、もはや実行してもおかしくないほど計画を練っていた。

犯罪者になる覚悟まで完了していたと聞いてルクルットは仰天する。ペテルも目を見開いてニニヤを見ていたし、馬の手綱を引いていたダインも思わず振り返っていた。モモンは頭を抱えてしまう。だめだこの娘。

「いやいやいや!!もつと他に方法あるだろう?!」

「どんな方法が?いくら考えても国が腐ってれば貴族を追い落とすことは不可能ですよ」

ニニヤに言われてルクルットも黙る。冒険者ごときがなにを言ったところで貴族を優先されることが目に見えるからだ。そうになると、ニニヤが思い描いていた方がよっぽど可能性がある。が、やはり仲間が犯罪者になるのは悲しい。ダインがなにか言いたげにしているが結局言葉が見つからず、重い空気が流れるが、モモンが冗談混じりに提案してみる。

「じゃあ、たとえばその貴族の館に強い骸骨モンスターが現れて娘を浚ってしまうというのはどうでしょう?」

モモンの提案に漆黒の剣は全員顔を上げる。

「モンスターが人を浚うのなんて日常茶飯事ですし、強いモンスター

なら貴族も諦めるかも」

「でも、モモンさんが討伐対象になりますよ」

そもそも元村娘のために救出隊やら討伐隊を出すとは思えないが、モモン——アインズに迷惑はかけたくない。

「んー、じゃあ襲撃するモンスターをでっち上げて、そのモンスターを討伐するというのはどうです?」

「? しかし、ソレではニニヤのお姉さんは貴族に渡さないといけないのでは?」

「ふっふっふ、私これでも交渉には自信あるんですよ。法外な報酬をふっかけるんですよ。ソレで支払いを渋ったら、じゃあそちらの娘さんをくださいと言う。裕福な奴ってプライド高い癖に金払いが悪いから高確率で娘を引き渡します。あ、勿論仕方がないという雰囲気は作ってくださいね。目的が娘と知れたら色々と言ってきますから」
見事に悪どいマッチポンプ作戦にペテルも感心してしまう。これだとチームの信用は落ちるだろうが、ニニヤの姉を連れ出すことはできる。が、

「それだと奴隷売買と言われかねませんか?」

「——じゃあ、嫁にしましょう。婚姻だったら合法でしょう?」

「モモンさんがお姉さんと結婚するんですか?」

「あー・・・、さすがにスケルトンとは結婚できませんし・・・、ルクルットさんどうです?」

「んーニニヤのねーちゃんかー。ニニヤと違って巨乳ならイッテエツ!?!」

ルクルットの脛にピンポイントでニニヤの杖の先が突き刺さる。効果は抜群だ!!

「ルクルットだけには姉さんは任せられない」

いまだ身悶えているルクルットを無視して、ニニヤはモモンに綺麗なオメメで見上げてきた。

「襲撃するモンスターには貴族をギツタギタにするよう言ってくださいね!むしろ死んでもかまわないです!!」

「・・・・・・・・・・いや、ただの冗談ですよ」

いや、どう聞いても本気だったと男性メンバーは思う。実用性があ
る作戦なのでいつか本気で実行する日が来るだろうとペテルは苦笑
いをもらし、ダインもニニヤが犯罪者にならないならと笑った。

——が、もはやそんな必要は無いことは今の時点では誰も
知らなかったし、もつと早く実行してれば良かったと思うのも先の話
であった。

変だと思ったのは王都に入ってあたりが夜に沈んだ頃だった。何
とか関所が閉まるギリギリに滑り込み、貴族の館を訪ねるのは明日に
しようと宿で一息付いているときだった。

王都がやけにピリピリしているのを感じて、窓を開けて王都の街を
見渡したときだった。

「——戦闘だ」

アンデッドであるアイنزの目に、わずかに炎が上がるのが見え
た。常に^{ダークビジョン}「暗視」が発動しているから気づけた異常である。そして、
その炎に照らされた影が異様な姿をしているのにも。

先日討伐した悪魔を思い出す。アレの仲間が他にいたとしてもお
かしくはないと、アイنزは^{クリエイト・クレーター・アイテム}「上位道具創造」でモモンに変わると、
アイテムボックスから羽のネックレスのアイテムを取り出した。

「ペテルさん、王都内で戦闘が起こっています。モンスターの可能性
もあるので現場に向かいます」

「王都内で戦闘?!」

モモンの言葉にペテルは慌てて横から街を見渡す。人間の目には
なにも見えないが、モモンが嘘を付くとは思っていないペテルは地図

で場所を把握するとすぐさま仲間を集めると振り返る。

「戦っている者がいるので私が先に飛んでいきます。皆さんは後から現場に来てください」

「わかりました。くれぐれも無理はなさらないように！」

そう言つてペテルが部屋を飛び出すのを横目に、モモンは窓から飛び立つ

「へ飛行」

アイテムの力で飛び上がると、夜空に紛れて現場に急行した。そして眼下に広がる光景にモモンは顔をしかめる。

冒険者らしい姿の他に、やはり悪魔の姿が見えた。あれはなかなか強いモンスターだ。山羊の頭蓋骨にハ虫類の鱗としっぽを持ちコウモリのような翼を持った悪魔——、アインズにはどうというモンスターではないが、モモンでは少し手こずる相手である。しかし、だからといって冒険者を見捨てる選択にはならなかった。

——中に幼いと言つてもいい娘がいることが、村の養護者としては見逃せなかった。

魔法詠唱者だろう赤いフードを被った少女に襲いかかる悪魔の間に降り立つと、少女を背にして悪魔の大金槌を受け止める。

「大丈夫か？」

「え？ あ、は、はい！」

戸惑つたような声は年齢が解りにくく変質されていた。けれど、線の細さからネムよりは上だが、エンリより下だろうと思えた。モモンはギロリと悪魔をにらみつける。

「——か弱き少女に手を挙げる不屈き者が！我が剣の錆にしてくれらる!!」

ニニヤの姉の件を聞いた後のせいもあり、女子供に手を挙げる存在に負の感情が蓄積されていたモモンは見栄を切つて悪魔と対峙する。

その後ろでは何百年も生きた国墮として呼ばれた吸血姫がキラキラした目でモモンを見上げていた。

3メートルもある巨体が繰り出す攻撃をモモンは危なげなく避けながら、大剣で斬りつけていく。イグヴアルジの指導により剣の腕は以前より遙かに向上していて、厳しい指導と嫌みに耐え抜いた結果、戦士としての体裁を何とか整えられるようになっていた。もはや、力任せに体大剣を振り回す子供のゴツコ遊びではない。

大金槌と剣の間から火花が散る。鱗は堅いが傷つけられないほどではない。相手の力も相当だが、此方の筋力の方が上だ。——と
いっても骨に筋肉などないのだが。

しばらくすればペテル達も遅れて到着し、少女、イビルアイの傷ついた仲間の治療に入っている。弓矢や魔法の援護射撃もあり徐々に追いつめていたが、突然絶叫を上げると炎を後方に向けて放った。

「チイツ!!」

狙いは防御が低い後方かとモモンは後ろに飛ぶと、一番前にいたイビルアイを庇った。

「せ、戦士様!!」

「ぐうっ!!」

アンデツドの弱点である炎の攻撃にモモンはヘルムの下の顔をしかめた。しかし、その程度である。少し熱い鍋の蓋を素手でつかんで思ったよりも熱かったと驚いた程度である。目の前の存在と、仲間に被害がないことを確認するともう一撃叩き込もうと振り返った瞬間だった。

横からすさまじい衝撃を受けて吹っ飛んだ。何事だと目線向ければもう一体。

(え、援軍かよ畜生!)

さすがに2体の相手となるとキツイ。真の姿を現せば雑作もなく倒せるが、余計なギャラリーの前ではそれは出来ない。このまま戦うにしてもペテル達のレベルは上がっているとは言え、やはりまだ未熟である。

(あ)———つつ!!完全戦士化の魔法使えば一刀両断できるのに!!)

その魔法を使えば魔法職から戦士職にレベルそのまままでシフトできるのであるが、そうすると魔法で作ったこの鎧が消えてしまい結局スケルトンの顔を晒すことになるのだ。——前々から予備の鎧を作ろうかと考えていたが、さっさと作るべきだったと後悔した。

新しく現れた悪魔がもう一体の悪魔になにかの思念を送ると、2体ともモモンに向かってくる。強い奴から始末しようつてのかと剣を構える。

「はっ、モテモテじゃねえか！俺にも相手を寄越せよ！」

先ほどまで傷ついていた戦士らしき者が、元からいた悪魔に刺突戦鎚を叩き込む。そちらに意識を向けたらしい悪魔に、もう一体の新しく来た悪魔が諫めるように唸るが、すかさず繰り出したモモンの攻撃に振り返った顔を前に戻した。

「助かります。が、本当なら皆を連れて逃げてほしいんですが」

「へっ、恩人見捨ててしっぽを巻いて逃げたんじゃ女が廃るぜ！」

——え？と思わず呆気にとられて女戦士を凝視してしまい。モモンは強烈な一撃を受けてしまった。

「おいおい、なにやっつてんだ色男！」

「——今は、貴方が悪い」

無いはずの脳が揺さぶられた気がして頭を振ると、気を取り直して悪魔と剣を交える。今はあの戦士が男だろうが女だろうが関係ない。まずはこの悪魔をどう倒すかである。支援魔法や援護射撃も飛ぶが、今度はなかなか突き通せない。

だんだんイライラして来てモモンはめんどくさい！と結局正体を晒そうとしたときだった。

——一陣の風が吹き、女戦士が相手していた悪魔が薪のように真つ二つに切り裂かれた。ゆっくりと左右に倒れていく悪魔の体。そこから絶えず赤い血が吹き出して——いや、アレは風にたなびく赤いマントだ。ズンツと悪魔の体が地に落ちると、赤いマントの男は立ち上がり剣に付いた血を払うように横に振る。

皆、呆気にとられた。ソレもそうだろう今の今まで手こずっていた悪魔を一撃で屠ったのだ。……だが、ソレよりも何よりも驚

いたのはその男が人間ではないことに皆声が出なかったのだと思う。

モモンは彼が味方だとなぜか思った。見た目は蟲のモンスターであるが、まるで正義の味方のように現れたその姿。モモンはなぜかその背後に正義光臨の文字が出ている気がしたが、頭を振ってもう一度目を向けるとやはり幻だったらしくその背後にはなにもなかった。

(そうだよな、本気で背後にそんな文字が浮いてたらどんな顔すればいいか解らないからな)

ちよつとホツとしたモモンと対峙していた悪魔は、仲間が倒されたことに気が付き大鉄鎚を振り下ろす。それを全く危なげもなくやり過ぐすと、彼は女戦士の腰を抱いて後方に飛んだ。

「後は私にまかせて」

悪魔から距離を開けると顔を真っ赤にしている女戦士を置いて、走り出す。悪魔の攻撃をすべて紙一重でかわすと、悪魔に向かって剣を振り下ろした。が、悪魔の大金槌に阻まれ、しかも剣は悲鳴を上げて砕け散った。

「耐久性が持たなかったか」

もとよりボロボロであった剣にチツと軽く舌打ちすると、そのまま悪魔の胸部に向かって強力な蹴りを繰り出した。ただの蹴りであったがその衝撃はすさまじかったらしく、悪魔は涎を吐き出しヨロメいた。それでも、大金鎚を振り上げて尚も襲いかかろうとするので、彼は身を引き体制を立て直そうとしたとき。——その蟲の顔の横に剣が投擲された。彼は驚くこともなく、たやすく黒い大剣の柄を掴むと投擲されたGなどものともせず、そのまま横一線になぎ払い悪魔の胴を真っ二つに引き裂いた。

「いい剣ですね。助かりました」

「いえいえ、お役に立てて良かったです」

ズンツ、と2体目の悪魔が地に倒れたのを確認すると、彼は血糊を払い感謝しながらモモンに剣を返した。やはり味方だなどモモンが納得すると、――後方でおとなしくしていたはずのイビルアイが儼然とした顔で彼を睨みつけていた。

「――なぜここにいる」

「何故って・・・、普通に通りがかっただけですよ。ちよつと近くに用事がありました」

「たっちー！てめこの野郎!!せめて人に化けてから助けに入れ!!」

なにやら突然裏路地から鬼の形相の男が飛び出してきて蟲人の彼、たっちを罵倒した。その後からは少年兵と冒険者らしき男と、女性が一人。

「しかし、ブレインさんに化けるにはMPを消費しますし、そんな時間ももつたいないでしょう」

「その昆虫顔を晒されたら後始末が大変だって言っただよ!!てめえはアイツを失脚させる気か?！」

全く意味が解っていない風のたっちに、ブレインと呼ばれた男がそう言うとその顔面に頭突きを繰り出した。が、逆にダメージを負ったらしい自身がひっくり返り、たっちが慌てて回復魔法を当てていた。

王都の赤マントの勇士の噂はエ・ランテルでもちらほらと囁かれていたが、あまりにも人間からかけ離れた話ばかりだったので、皆眉唾物だと信じていなかったのだが・・・、その顔を見て漆黒の剣は納得した。

何だろう、異形種の中で人間を助けることがブームなのだろうか、チラツとモモンを見てしまう。

まあ、ブームでも気まぐれでも何でもよかった。そのおかげで自分たちは何度も助けられているし、ニニヤの姉は助かったのだ。姉と抱き合ってわんわん泣くニニヤを見てペテルは口をゆるませながら鼻を啜った。

経緯は省かれたが、たつちがニニヤの姉ツアレを保護していたのだが、八本指という犯罪組織に浚われたのを救出し、六腕という凄腕の犯罪者をボコボコにした帰り道に、悪魔と戦闘しているモモン達を見つけて助太刀したのだという。

——助けて貰ってなんだが、もう少し正体を隠した方がいいと思う。ブレインの苦勞が偲ばれる。

ニニヤの「皆殺しにしてくれば良かったのに」という物騒な空耳をスルーして、改めて感謝の意を伝えれば、逆にビツクリされた。まあ、ふつうは人ではない者を怪しみ、なにか裏でもあるのかと疑うだろうが、仲間にアンデッドがいる漆黒の剣は割とすんなりたつちという人物を受け入れられる。

「・・・何というか、ここまで素直に感謝されるなんていつぶりだろうか？」

ペテルと握手を交わすたつちの表情は解りにくいだが、雰囲気嬉しそうだと感じた。これもモモン効果だろう。彼も表情が全くないスケルトンだから。

そして、今度は悪魔と戦闘になった経緯を蒼の薔薇から話を聞こうとした時、ブレインが不機嫌に割り込んだ。

「場所を変えるぞ、兵士達もこつちに向かっているはずだ。見つかったも面倒だからな。あと、お前はいい加減顔隠せ！」

いつまでも顔を晒しているたつちにいつ野次馬に見られるか気が気ではないとブレインは苛ついていた。

「えーと、じゃあこれを貸しましょう」

そう言つて、モモンが懐から取り出したのは、なんだか血の涙を流しているようなマスクだった。とりあえず顔を隠せば何でもいいと、礼を言つてたつちが受け取つて顔に被ろうとした。が、何度試しても装着できなかつた。被つたと思つたらするりと脱げてしまうマ

スクにたつちは困惑気味である。

「？ あのと、かぶれないんですけど」

そして、それに何故か精神ダメージを受けるモモンは、よろけながら別のアイテムを探して「・・・じゃあ、・・・これどうぞ」と別の仮面を取り出した。今度はすんなり装着できたし、時間もなかった。何故最初のマスクがかぶれなかったのは謎のままになった。

蒼薔薇が、悪魔との戦闘になった経緯は八本指の幹部と言える人物のアジトを襲撃しようとしていたのだが、そのアジトがあつた悪魔に襲われていたのだという。

「まあ、悪魔を飼い慣らそうとして失敗したんじゃないかね——したんじゃないんですかね」

何故か男言葉を直して佇まいを直すガガーランに皆首を傾げる。

「あの、ガガーランさん調子でも悪いんですか？」

「そんなことありませんよ、童・・・クライム君」

おほほと笑うガガーランに何というか、背筋がぞわつときた。違和感バリバリだ。初対面のモモン達でさえもそう思うのだ。ブレインも刀に手を置いて警戒している。それを呆れたように見ているのは彼女の仲間の少女ティアだ。

「ガガーラン、気持ち悪い。乙女にならないで」

しかし、ガガーランは知ったこっちゃないらしく、ただ一人に熱い視線を送っている。——その相手は全く気が付いていないようだが。

ガガーランという人物はほとんど女を捨てて戦士として生きていたのだが、ある日そんなガガーランを変える衝撃の事件が起こったのである。

それはラナー王女からの秘密の依頼で危険な物だった。さすがのガガランもその時は命の危機を感じたのだが、そこへ颯爽と現れガガランをお姫様だっこして助けた者がいた。——それが噂の赤マントの勇士、たっち・みーだ。

自分より強いどころか、抱え上げる男さえいないと思っていたガガランには衝撃だった。ある意味人生初の出来事に恥ずかしさと悔しさからたっちに悪態を付いたのだが意にも介さず、優しく地面に降ろしてガガランの顔の擦り傷を魔法で癒しながら言ったのだ。

「可憐な女性を護るのは男の役目ですから」

その瞬間ガガランは目の前の男に堕ちたのである。たとえば種族が蟲だろうと関係なく惚れたのである。それまで男前だったガガランはたっちの前では乙女になってしまい。必死に取り繕うようになったのだ。

それにラキユースはめでたいことだと素直に祝い。イビルアイは呆れ、ティアとティナは爆笑したのだが——。

「——恋する乙女が増えた」

もはや笑えないとモモンにぴったりくつつくイビルアイを見てティアはどうしたものかため息を付いた。

「そこに我々が異常を感じて助けに入ったわけです。あまりお役に立てませんでした……」

「いいえ！モモン様だったらあんな悪魔の一匹や二匹時間をかければ倒せましたよ！」

興奮気味にイビルアイがモモンに迫るが若干引き気味である。何でこの子こんなに近いの？助けを求めようと周囲を見渡すと、何故かニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべているルクルットと目があった。「やー、モモンさんモツテモテ〜」

ダインもダインで微笑ましいと生温かい目線を送るだけである。ニヤとペテルはツアレを休ませに他の部屋に行っているので、助けはこない。

「まあ、何にしても悪魔は倒したから問題は解決。後は八本指の情報
がどれだけ残っているかだよな」

ブレインの言葉にクライムもうんうん頷く。協力してくれた元オ
リハルコンの盗賊もたつちを警戒しながらも事件がうまく終わりそ
うで安堵していた。

——が、そううまくはいかなかった。

王都に悪魔が次々出現し始めた。発生源は倉庫街や商会のある地
域、そして一部貴族の館がある区画だった。そこをグルリと炎の障壁
が囲い、そこから悪魔がわき出している。障壁の外の住民は避難して
いるが、中の住民は忽然と姿を消していると報告が上がっている。ち
なみに難を逃れた貴族は早々に自分の領地へと馬車を飛ばして逃げ
ていた。

緊急事態として王城にすべての冒険者が集められて対策会議を
行っているが、なかなか芳しくはない。まさか都市の中心に悪魔がわ
き出すなど、誰も思っても見なかったのだ。悪魔がどのように沸い
て、どれだけいるのか検討も付かないのだ。誰が、何の目的で？憶測
ばかりが飛んで話がまとまらない。

ラナー王女の推測も確証を得られない。今選べる選択は二つだ。
王都を捨てるか、戦うか。しかし、王都を捨てるのも一時的な解決に
しかならないでしょうとラナーは言う。

「王都を捨てれば当然悪魔に占領される。そして、そこから悪魔が王
国全土を侵略しないと誰が言えますか？」

王都を足がかりに悪魔が王国を、いや、世界を侵略する可能性は非常に高い。ならば広がる前にたたかねばならないとラナーは悲痛な面もちで言う。冒険者達も互いの顔を見合わせて、意を決つしたように頷いた。

はじめから選択肢は一つだけ、生き残るために戦うのみだ。しかし、悪魔と戦う作戦はあまり勝ち目がなさそうなものだ。

防衛戦を張り、そこをラインに冒険者が悪魔を討伐、傷ついたら防衛ラインまで撤退し、回復、そしてまた戦場へと戻る。その繰り返しだ。その間に、アダマンタイト級の蒼の薔薇が悪魔の発生原因を発見し、取り除く。

それ以上の作戦は誰にも考えられなかった。誰の脳裏にも死ぬかもしれないという考えが浮かんでいるなか、黙って話を聞いていたモモンは王国戦士長のガゼフの元まで進む。誰もが、何かいい考えでもあるのかと期待した。

「戦士長殿、少し話を聞いて貰ってもよろしいですか？」

「ああ、モモン殿。何か良い考えがあるのなら何でも言ってくれ」

「ここでは少し話づらい内容なので・・・すみませんが別室を用意していただいてもよろしいですか？」

もちろん盗み聞きはなしで。というモモンの言葉にちらりとラナーを見やるガゼフに王女はコクリと頷いた。

そうしてガゼフとモモンが部屋を出ていった。

しばらくすると、廊下からカツカツと規則正しい足音が聞こえてくる。人数としては十数人だろうかと、感覚鋭い盗賊職の冒険者が予想するより早く、扉が勢いよく開かれた。

そこに現れた人物をこの場に集まった者は誰も知らない。

——いや、蒼薔薇のメンバーだけが目を見開き、頬をひきつらせた。

「まったく、王国は考えていた以上に愚かだ。あまりにも哀れで同情してしまう」

　嘆かわしいと頭を振り、ツカツカと冒険者達の前にでるとその顔を見渡した。その時、ラキユースの顔を見て少し顔をしかめたが、何事もなかったように前を見据えると地図を広げているテーブルをバンと叩き宣言した。

「貴様等に悪魔の狩り方を教えてやろう異教徒ども。貴様等のちっぽけな信仰心を神に捧げよ!!」

　そう法国の特殊部隊陽光聖典隊長ニグンは声高らかに叫んだ。

再降臨

「法国の特殊部隊はもう送還してしまいました？」

別室に移動して早々、モモンの言葉にガゼフはギョツとし、スツと半眼になるとモモンを隙無く睨みつけた。

陽光聖典の存在については、ごく一部の者にしか知らされていない機密である。あれらの立場はかなり特殊な立場であり、法国との戦争を引き起こしかねない。国力も衰え、帝国との戦争を繰り返している王国はさらに法国まで敵には回したくない。

そのため、村の襲撃やガゼフの暗殺未遂を不問にするから不可侵条約を結ぶよう交渉中である。・・・バカな貴族達が知れば法国との戦争を押し進めるだろうから最高機密にまでなっているはずだった。

——なのに、この冒険者は陽光聖典の存在を知っている。

「・・・何の話ですか？」

スパイの可能性も考え、いつでも剣を抜けるようにしていたら——
—モモンはおもむろにヘルムを消してその素顔を見せた。

広間でみた人間の顔ではないそれにガゼフは固まるが、ようやく思い至り肩の力を抜いた。

「魔法詠唱者殿だったのか！」

カルネ村でその陽光聖典の捕縛に協力したアンデッドの御仁なら特殊部隊のことを知っているのも当然だとガゼフは納得した。しかし、まさか戦士のふりをしているとは思わなかった。

「驚いた。魔法詠唱者殿は剣も扱えたのか」

「魔法詠唱者殿って——、ああ、そう言えばまだ名前を伝えてはいなかったか」

あのころは名もない魔法詠唱スケルトンだったから、ガゼフが今のアインズの名を知らないのは当たり前である。

「もしや、記憶が戻りましたか」

「いや、残念ながら。今はとりあえずの名を名乗っています。冒険者ではモモン、カルネ村の魔法詠唱者としてはアインズ・ウール・ゴウンと」

「アインズ・ウール・ゴウン・・・法国風の名前ですが」

「持っていた荷物の中にその名を冠するアイテムがあったのでそこからです。法国出身かは何とも言えません」

それは残念ですなとガゼフが悲痛そうな顔をするが、アインズは気にするなと手を振る。

「思い出せないものはしょうがありませんし、過去がなくて困ることもありませんから」

その言葉に嘘がないことを認めるとガゼフは頭を振ったため息をこぼした。しかし、今は世間話をしている場合ではないと表情を引き締めると話を戻した。

「・・・今回の件、ゴウン殿でも解決は無理ですか？」

「悪魔を殺すことに関しては簡単です。が、なにぶん広範囲に悪魔が散らばっているので時間がかかりますし、広範囲の魔法も使えますが、市街地で使うのは・・・」

アインズの言葉に、ガゼフは頭をかきむしる。アインズがいることで勝機が見いだせるかと思っただが・・・。

（馬鹿者め、ゴウン殿にばかり頼ってどうする。お前は王国戦士長だろうが）

自分のだらしなさを叱咤し、ガゼフは前を見据えた。協力をしてもらえただけでも感謝せねばと向き直ると、「それで」とアインズは言葉が続けた。

「彼らの協力を得られないかと思いましたが」

アインズの彼らというのが誰なのか、一瞬解らなかつたのだがガゼフは最初の会話を思い出し「あ」と声を上げた。

法国特殊部隊陽光聖典。天使を召喚し、ガゼフを追いつめた者達。そして天使は悪魔の天敵だ！確かに彼らの力が使えればこれほど心強い者はない。——しかし。

「法国の秘密部隊が、他国に協力するだろうか？」

しかも、ガゼフの暗殺未遂をしたのだ。たとえ王の頼みでも断られる可能性が――。しかし、それも大丈夫だと……あまり気が進まないようにアインズは言う。

「神様の言葉なら彼らも聞いてくれるでしょう……騙すのは気が引けますが」

「――ああ、なるほど」

アインズの考えを理解し、彼らは喜んで協力するだろうと頷いた。ならば後は彼らを牢から出す許可を王から貰って来るだけだ。

「じゃあ、私が彼らと話を付けてきますので、諸々の手続きはお願いします」

そう言うと、アインズは装備一式を以前の物へと変えるとその場から消えてしまった。それに驚くこともなくガゼフは許可をもらいに走り出した。

「――どういう風の吹き回しなの？」

たまたま王国に訪れていた法国の神官達という紹介をされた秘密部隊の隊長にラキュースは訝しげな目を向けた。因縁の相手と言える女が目の前に立つのをニグンは不愉快そうに顔を歪めたが、すぐに表情を消して地図上の部隊の配置を再度確認する。無視されたとムツとするラキュースにじやまだとばかりにニグンは手を振る。

「私に構っていないで作戦の準備をしているろ」

「……………私は貴方たちを信用していない」

罪もない亜人の村を襲撃してきた集団の力を借りるとするのは、納得できないとラキュースの感情が反発しているのだ。

「視野の狭い女だな蒼薔薇」

褪めた目を向けるニグンにラキュースはグツと体を跳ねさせた。

「所詮、神より授かった世界しか知らん小娘だ。感情を優先し、己の使

命を忘れるなど・・・戦場では許されん」

ニグンは部隊の特性故戦場、敵地のまったく中の任務などザラである。特に竜王国の任務は獣人たちの侵略から民を護るという任務が多い。その時いけ好かない相手との合同任務だつてあるのだ。一時の感情で連携がとれず、己の命だけならいざ知らず、部下や救うべき民を殺すことなどもっとも愚かなことである。なにが大事であるか見極めて、即座に不要な物は切り捨てる、プライドもその一つだ。それが隊長に求められるものである。

ラキユースたちも理解はしている。が、完全に殺しきれない幼さがある。それが戦場で戦っている者との意識の違いである。

「我々は神の僕だ。その神のご意志に添うためなら、我々は喜んで貴様の足の裏も嘗めてやろう」

うつとりとした表情に狂信の光を目に湛えるニグンに、ラキユースはドン引きした。——だめだ、話が通じない。

まったく別の世界の生き物に向けるような目をするラキユースにニグンは鼻で笑い地図に目を落とした。

「・・・たとえば私が信用できずとも、我々の力は信用できよう？」

一度は戦った相手だ。ニグン等の強さは蒼の薔薇がよく知っている。そして先ほどの指揮官としての実力も目の当たりにした。ラキユースだつて解つていた。自分が意固地になつてしていることを。

深く息を吐くと、ラキユースは右手を挙げてニグンに差し出した。感情の整理は出来ないが一時休戦の意味での握手である。それが解つたようで、ニグンも黙つて握り返した。——ただし、顔は嫌そうに歪めていたが。

「なによ、その嫌そうな顔は」

「それは貴様もだろう。戦いには協力するが貴様が嫌いなことには変わらん」

気が済んだらさっさと作戦行動に入れと追い払われた。ラキユースはやっぱりあの男嫌いと、不機嫌に仲間の元に戻った。——が、その未熟なところをイビルアイに苦言された。

作戦内容はラナー王女が提案したこととあまり変わらなかった。ただ変わったことは一つだけ、”悪魔を一カ所に追い込む”ことだけだ。

王都内に散らばっている悪魔を撃破、あるいは所定の位置に追い込む。追い込んだ後はモモンが持つ第八位階魔法が封じられている魔封じの水晶で一網打尽にする。冒険者のみであれば厳しい作戦だったが、天使を召喚できる神官部隊に、伝説級の魔法の切り札があったことで可能となった作戦である。

——ちなみに、切り札を見せて魔法狂いの再来にあった。どこにでもいるのかよ！二度と高位魔法の切り札は持たん!!とモモンは涎まみれの水晶を拭いながら決意した。

「神から授かった秘宝に無礼な・・・」

ちなみに陽光聖典には魔封じの水晶は神から授かったと嘘を教えている。アインズの時に、モモンという男に秘宝を預けているので協力するようにとっておいたのだ。でないとも魔封じの水晶の出所を勘ぐられるだろうし、下手に正体がバレたら精神が持たない。・・・牢屋での会話だけでも疲れるのに。

作戦はスムーズに進行した。召喚した天使数体で悪魔を追い立てる。時折強い悪魔に天使がやられるが、すぐさま次の天使を召喚。悪魔が召喚する神官をねらっても、冒険者がそれを阻む。ほんの数秒時間を稼げれば召喚された天使が悪魔を撃破する、完璧な布陣である。神官一人につき冒険者チームが数組つくという念の入れようで、

徐々に包囲網を縮めていく。

言ってみれば陽光聖典はこのような事態のプロであった。獣人に襲撃された国の救出要請に応えるのは、対亜人種部隊の彼らだ。竜王国で行う任務と何ら変わりがないので手際がよい。

ただ、相手が悪魔であることと奴らも召喚されている事が厄介だった。獣人と悪魔の違いは筋力の差と魔法を使うことである。下手な獣人以上のパワーも厄介だが、悪魔の魔法は距離を取っていても此方に届くのだ。冒険者が悪魔に操られることもある。だから少しだつて気を抜けない。

そして、問題は悪魔を召喚している者の存在だ。まだ判明していないそいつを倒さなければ、まとめて葬っても意味がない。たった一撃しか許されない為、今は諜報が得意な者が探っていて、発見しだいそちらに悪魔を追い込む手筈となっていた。

「くっ、まだか！」

神官が呟くと、また天使が一体天に還ってしまった。

人影が一切ない家屋の横を、悪魔を追い込んでいるのは別の部隊が走り抜ける。彼らは救出隊である。悪魔に浚われ閉じこめられているかもしれない市民を捜すための特別隊だった。メンバーはブレイン、クライム、盗賊、そして陽光聖典の神官一人である。

クライムが救出隊の編成を要請したのだが、ニグンははじめ良い顔をしなかった。悪魔に浚われた市民の生存ははつきり言って限りなく低い。貴重な戦力を危険度が高く、そして無駄に終わるかもしれない活動に裂く余裕はない。

大を生かすために小を切り捨てるのは指揮官として当然の判断で

ある。クライムも解っていた。しかし、自分一人だけでもいいから行かせてくれと言う熱意に、鼻で笑いかけてニグンは神の言葉を思い出した。

わずかな人間も見捨てられずに命を懸ける者を笑う権利などない。慌てて顔に手をやり、その神の意志に背く行為を止める。——そして、クライムを見て悩んだ。この少年兵を見捨てることを神は許さないだろうか？

現在の状況を省みれば見捨てても仕方がないと、神は許してくれるだろう。しかし——、とニグンは目を閉じる。

「おい、お前は救出任務に何度か付いていたな」
「はい」

隣にいた部下の一人に声をかける。モンスターに占領された人間の街で、少人数の救出活動を何度も経験している彼はブレインよりも年が上のように見える。

「部下を一人付ける。ただし、こいつが無理だと判断したらすぐさま指示に従うことが条件だ」

獣人と悪魔では勝手が違う。長年の経験が役に立たない場合もある。それでも、この部下を付けることで生存確率は格段に上がるだろう。

クライムが顔を紅潮させて頭を下げるが、ニグンは部下が一人抜けた穴を埋めるための考えを纏めるので、軽く手を振るだけで済ませた。

「以前の失態を雪ぐ為には期待以上の働きをしなくてはな」

ニグンはそう言つて、救出隊の許可を出したのだ。

家屋には人の気配はおろか悪魔さえいない。おそらく王都の中心部に向けて襲撃しているため、背後が手薄になっているのだろう。盗賊とブレインが周囲の気配に注意を払い。クライムは神官のアドバイス通りに道を進む。

「殺した形跡がないのなら一カ所にまとめて閉じこめられている可能性はある。悪魔も人間を食料にするのなら新鮮な状態で食べたいだろうから生きてる可能性は高い」

神官の生々しい物言いにクライムは想像したのか、ウツと顔を陰らせる。しかし、神官は構うことは無く地図を眺めて経験上どの位置に食料をため込むか考えていた。

「やはり倉庫に閉じこめるだろうか？野外に置いても逃亡の可能性があるし、管理するならやはりまとめた方が奴らも楽だろうし……、しかし逃亡防止で足を切られている可能性も——」

ブツブツと地図を睨みながら危なげなく走る様はまさになれている歴戦の猛者のそれだ。クライムは彼が法国の神官であるとしか聞いているが、ただの神官にしては戦いの場に慣れているようだ。

一体どんな仕事をしているのだろうか？と気になったが、今は彼の詮索をしている場合ではない。建物の影に身を潜めながら進んでいると、空を悪魔が飛んで行くのが見えて慌てて隠れた。が、逆に神官は悪魔の存在をみとめた瞬間屋根によじ登り、悪魔の向かう先を追いかけた。

見つかるのではとハラハラしたが、巧く建物の影にとけ込んでいて発見はされなかったようだ。そして暫く屋根の上に潜んでいたが、降りてくると地図に大きな×印を付ける。

「ここだ。間違いない、悪魔が捕まえた人間をこの倉庫に放り込んだ」
「どうやらあの悪魔は人間を浚ってきたようだ。被害が拡大していることは口惜しいが、おかげで捕らえられた人たちの場所もわかった。」

クライムたちは慎重にしかし素早く目的の場所に急いだ。

悪魔に対する包囲網が狭まるにつれて、悪魔の攻撃も激化していっ

た。それもそうだろう、包囲が狭まると言うことは今まで散らばっていた悪魔が集合することになるのだ。しかも途中取り残されていた市民を見つけてしまえば放って置くわけには行かず、避難誘導のために冒険者がいくつか抜けてしまったりもするのだ。

悪魔の出現ポイントから発生場所を特定し、誘導場所が決まったがそこまでが遠く険しい。天使の召喚数はもはや自身の最高記録までいったという隊員は少なくなき、皆疲労困憊である。

「ニグンの召喚した”監視の権天使”の視認距離には入っているのに、多少は楽にはなつたが、やはり戦況はよろしくはない。天使は悪魔にとって天敵であるが、天使にとっても悪魔は天敵である。

弱い悪魔はすべて灰となったが、残っているのは強い悪魔ばかり。天使の数も減ってきている。

それでも、全員の胸にあるのは神の言葉だ。再び現れた神のから授かった言葉が芯となり挫けることはない。

これは神が与えもうた試練である。

ブレインは自分はここで死ぬのだろうと直感した。

人々が捕らえられている倉庫に向かう途中、悪魔と遭遇した。それもただの悪魔ではない。ブレインが野盗の場で遭遇し、心折られた桁違いの悪魔がそこに立っていたのだ。

「——ふうん？来たのは君たちだけですか・・・」

期待はずれとばかりに肩をすくめる悪魔に、ブレインは全身の毛を逆立てて震えた。あの瞬間刻み込まれた恐怖がぶり返し、本能が逃げろ逃げろと叫んでいる。クライムたちはまだこの悪魔の恐ろしさに気が付いておらず、戦闘態勢に入っているが——間違っている。なりふり構わず逃げることが正解なのだ。

クライムが一番先頭にいた。天使を召喚できる神官を護るような立ち位置になっていてはいるからだ、そこはすでに断頭台の上。

「あてが外れたな。彼が来るかと思ったのだが——まあ、そう上手くは行かないな」

攻撃態勢をとられていても余裕の態度を崩さない悪魔に、怪訝な顔をしているクライム、ブレインは逃げろと叫びたかった。しかし、声をあげたらあの悪魔の視線が此方を向きそうで怖かった。

脂汗が流れる、刀がカタカタと震えて切っ先が定まらない。そんなブレインの異常に気が付いた盗賊が心配そうな目を向けているが、そんなこと気にしていられない。

「まあ、居場所は常にわかる状態だ。性格上この王都から逃げ出すこともないだろうし、ゆっくり探せばいいか」

そう言っておもむろに片手をあげたので、ブレインは意を決して声を上げた。

「お前等の目的は何なんだ」

ぴたりと止まった悪魔の手は、流れるようにクライムの顔数センチ前まで持ち上げられていた。クライムは目を白黒させながら勢いよく後ろに後ずさった。

一体いつの間に、目の前まで接近を許してしまったのか、クライムにはわからなかった。そして、神官の男も滝のような汗を掻いて悪魔を凝視し、荒い息を吐いている。・・・ブレインは気が付いた。すでに召喚されていたはずの3体の天使がもうドコにもいないこと——。あの瞬きするだけの時間で天使を殺していたのだとわかり、ぞつとした。

3体の天使がいたからクライムは今生きているのだと——。

「・・・おや、どこかで見たような顔と思えば、野盗の用心棒じゃないですか」

名前は、何だったかな？意外なことに悪魔はブレインの事を覚えていたらしい。名前どころか、存在すら視認していないかと思っていたのに・・・、ブレインは少しだけ心が浮き上がった。

クライムがそんなブレインを凝視している。それもそうだろう。

野盗の用心棒などをしていたという事は悪党の一人だったという事。しかし、ブレインは否定も反論もしない。事実でしかないし、言い逃れするつもりはない。

俺はお前やガゼフのように清廉潔白には生きられない男なのさ。

「ブレイン・アングラウスだよ。——ウルベルト・アレイン・オードル」

忘れることがなかった悪魔の名を口にした。今の今まで口に出さなかったのは、名を出せばこの悪魔が現れるのではと怯えていたからだ。

「あー、そんな名前でしたね。貴方も運がない、せつかく私から逃げ切れたのにまた会ってしまうとは……」

悪魔、ウルベルトは肩を竦める。逃げたブレインのことは頭の隅にあつたが、特に問題ないと放っていたのに、この王都に逃げ込んでいたとは……、不運な男だ。

「ふむ、まあ二度も私の前に現れたのだしこれも何かの縁でしょう。私に忠誠を誓うというのなら特別に貴方だけ助けて上げても良いですよ?」

山羊の口元を大きく歪めて、悪魔はブレインを誘う。もし乗るのなら、残りの三人を殺すよう命じるつもりだ。拒否をしても”悪魔の呪言”で操るし、生き残るために三人を殺しても、結局最後には実験材料にするつもりだった。

やはり、ぶつつけ本番で”彼”を使っても失敗する確率は大きい。なら何度か人体実験をして練習しなければならぬから、それなりに強い素体が欲しいと思つたのだ。しかし、ブレインの答えはN.Oだった。

「どうせ玩具にされるのが目に見えていて、素直について行くと思つか?」

「——まあ、間違いではないですね。だが、運が良ければ人では到底到達しない力をその身に宿すことが出来ますよ」

その誘惑に、正直ブレインは惹かれる。強さを求めながらも人間の限界を知り心折れたブレインは悪魔の甘美な誘惑に思わず喉が鳴つ

た。——が、それはほんの数日前のブレインだったならの話だ。あの頃のどんな手を使っても強くなりたいたいという欲求はなく。今欲しいのは、死なせたくない奴らを護る力である。

ブレインが答える代わりに刀を構えれば、ウルベルトは目を細めて肩を竦めた。この世界で目の前の男ほどのレベルに到達できるものは少ない。その数少ない素体を殺さねばならないのは少々もったいない。

・・・少しばかり力の差というものを見せつけて、抵抗する気力をなくさせようと、魔法で剣を創造する。

「遊んで差し上げよう」

悪魔がにたりと笑った。

最後の最後で抵抗が激しいとニグンは舌打ちをした。

所定の場所までは誘導できたが、その場に押しとどめるためにはもうわずかに包囲の輪を縮めたい。しかし、大きな悪魔がその豪腕を奮って冒険者を、天使を薙払う。

ほかの隊員も自分の役割で精一杯で、もしソコに穴があれば網はすぐさま崩壊するだろう。やはり、一人だけとはいえ外したのは痛かったか。

「・・・崩れるのも時間の問題。なら今、発動するべきか？」

ニグンは迷う。このままアイテムを発動したところで十二分に悪魔を押さえ込めるとは思えない。おそらくわずかな歪みから悪魔が抜け出すだろう。しかし、このままでは悪魔どもが包囲を食い破り、また国中にあふれるだろう。

それは法国にとっても不味い事態である。ただでさえ、異形の者たちと戦争中だというのに、背後に悪魔が蔓延る国が有っては人間に勝

ち目などない。そうならないようにニグンたちの部隊は人間の領土内の亜人種を早めに狩っていたのだ、まだ人間同士で戦争してもらっている方が増しである。

「仕方がない合図を——」

ニグンが隊員に合図を送ろうとしたとき、大きな悪魔に刺突鉄鎚が叩き込まれた。怒り狂った悪魔の叫びが聞こえるが、それを塞ぐような女の叫ぶ声が聞こえた。

「超技！暗黒刃超弩級衝撃波オオ!!」

凄まじいエネルギー波により、悪魔は消滅こそしなかったが大きな傷を負って後退した。

「各員！発動!!」

その隙を見逃さずにニグンは叫ぶ、すると陽光聖典隊員は一斉にカード型のアイテムを発動した。その瞬間空中に光の檻が現れて悪魔たちを包み込んだ。悪魔は当然それを壊そうとしたが、強い悪魔でもビクともしなかった。

実はこれは神から授かったアイテムで光の護宝剣という。光の剣が一定時間壁となり相手の攻撃を無効化するコラボアイテムだ。普通なら一方向しか防御できない微妙系アイテムだが、隙間無く包囲する事で光の檻として悪魔を閉じこめることに成功した。

悪魔が出てこられないことに冒険者達に歓声上がるが、喜んでい暇はないと、ニグンは鋭く叫んだ。

「冒険者達は負傷者や取り残されている住人を直ぐに救援、待避だ!! この檻もそう長くは持たんぞ！急げ!!」

冒険者達はすぐさま負傷した仲間を抱えたり、荒らされた住居に入って生存者の確認を急いだ。ニグンの部隊はアイテムを発動しているため動くことは出来ない。共に戦った者に「戻ったら奢ってやるからな!」と激励しながら冒険者達は安全区域まで離脱していった。

「——防衛ラインでの指揮を命じていたはずだぞ蒼薔薇」

「あら、でも助かったんじゃないの?」

貴族の娘がしないような笑顔を向けるラクユースに、ニグンはチツと舌打ちをする。まさかコイツに借りをつくるとは……。

「あちらが壊滅していたら目も当てられんぞ」

「心配しなくても戦士長殿が来たから問題ないぞ」

ガガーランの男臭い笑みにニグンはチラリと後方に目をやった。

「奴は王宮の護衛ではなかったか？」

「正確には王の護衛よ」

ラクユースの誇らしげな顔に、ニグンはどういう状況が起こったか悟る。国王自ら戦場に出てくるとは――。勇敢ともいえるが、愚かでもある。あの王が死んだり力を失った場合、この王国はすぐさま崩壊することをニグンは知っている。それをねらつてのガゼフの暗殺計画だった。

――法国にとっては悪魔を掃討し、更にあの王が死亡するのがベストなのだろう。そうすれば法国は安心して異形種との戦争に専念できるのである。しかし、欲張りすぎるのもいかんと頭を振るとラクユース達にも早々に戻るよう指示を出した。

「モモンさんは？」

「まだ来ていない。ヘメツセージも通じない状態だ」

切り札を持った存在がないことに訝しげなラクユースにニグンは素っ気なく答える。悪魔に殺された可能性もあるが、神が使命を与えた冒険者だ。そう簡単にはくたばらんだろうとニグンは考える。

「戻る途中で見つけたら直ぐに来いと伝えろ」

光の檻に捕らえた悪魔達を隙無く睨みながらニグンは歩き出した。

「なかなかやるじゃないか」

ほんの少し短くなった髭を撫でながらウルベルトは感心したようにブレインを見た。仲間との連携が有ったとはいえ、傷一つ付けられ

なかつたウルベルトの髭を切り落とした。——髭ごとく、などとウルベルトは考えない。ここはゲームではない、それほど時間がたっていない間にこれほどの成長だ。才能あふれる人間なのだろうとウルベルトは目を細めた。

だがそれだけだ。今現在はウルベルトにとっては大したことのない、ただの人間で、実験動物でしかない。

歓喜を隠しきれない表情をしていたブレインは、ウルベルトの気配が変わったことに気がつき、クライム達に逃げるよう叫んだ。

遊びは終わり。まずはうっとうしい周りを消して、ブレインの心を砕き従順に教育しようとするゆつくりと手を持ち上げた——その時だった。

棚引くマントを翻し、目の前に降り立った存在にウルベルトは一瞬呆気にとられた後、醜悪なほど顔を歪ませて笑った。

人に化けられるとはいえ、制限時間の有るたちは作戦部隊とは別行動をしていた。包囲からこぼれた悪魔や強すぎる悪魔の掃討、取り残された民衆の誘導、救助などを行っていた。

だいたいが終わった後はクライム達に合流しようとして屋根伝いに走っていた。陽光聖典達の手伝いもしたかったが、イビルアイから彼らが異形種を嫌っていることを聞いていたので断念したのだ。

救助隊にも隊員がいるので、影ながらサポートという形ではあるが

クライム達が今どこにいるかはわからない為、たっちは風潰しに走り回る。人助けが趣味だったたっちにとっては王都は庭のようなものである。だいたいの見当はついていると、取りこぼしの悪魔を見つ

けては切り捨てながら向かっていた。

そうしてようやくクライム達の気配を感知した瞬間、たっちの足が止まった。

「——まさか」

彼らの気配の近くに、知っている気配を感じ取ったのだ。初めてその気配を感知したのに、知っているのとたっちの感覚が訴えていた。ゲームでは味わえなかった感覚なのに、何故彼だとわかるのかたっちにもわからない。

嬉しいと思う反面不安に思う。なにせ初めて存在を感知したのだ。本当にそうであると確証はないのだ。……そしてもう一つ、何故彼がここにいるかという疑念が湧く。——いや、この事件の真相がわかったような気がしてたっちはギリッと拳を握りしめる。

「違う。きつと私の勘違いだ」

そう口にはするが、蟲の体は正直に警戒音をガチガチと鳴らしていた。彼ではないと口にしながらも、脳裏にはあの時代の彼の言動を思い出す。

”悪”に徹底的にこだわる悪魔、世界の一つぐらい征服してやろうと仲間達と話をしていた。ただのロールだろうと思っていた。けれど、本心からの言葉だったら？

——もし違おうとしても、もしかしたら彼は飲み込まれてしまったのでは？と握りしめた拳を見つめながら思う。

この体になってから、時々人としての理性を無くしそうになる。健全な精神は肉体から、なんて言葉も有るくらい精神は体に引つ張られるモノだ。たっちだって時々飲み込まれそうなのを何とか踏みとどまっている。

もし、彼が異形の心に飲み込まれて人でなくなったとしたら——
|。たっちは覚悟を決めなければならぬだろうと拳を強く強く握りしめた。

互いをその目で認識した瞬間、彼らは凄まじい勢いでぶつかり合った。

一瞬火花が散ったように見えたが、魔法職と戦士職の根本的腕力が違うため、ウルベルトが後ろに吹っ飛んだ。それを追いかけるたつちの耳には、クライムの声は届かず、目の前の悪魔だけを見ていた。

「あはははっ！懐かしい！懐かしいなあたつちさん!!」

「———こういう再会はしたくありませんでしたよ。ウルベルトさん」

〈飛行〉の魔法を使ったのだろう。ウルベルトは空中で止まるととても愉快そうに笑っている。対して、たつちの表情は何うことが出来ないが、顎のあたりから警戒音が鳴っていて、更におもしろいとウルベルトは笑う。

「ゲーム時代は表情固定でしたが、現実になると何ともおもしろいですなあ」

蟲そのものの威嚇音に、ウルベルトは喉を鳴らす。

しかし、たつちはただウルベルトを睨み付けるだけで、なにも言うことはない。ウルベルトも一通り笑うと、表情を消してたつちを見下ろした。

「たつちさん、貴方なにをここに来ましたか」

昔の友人を見つけて懐かしくなってダイナミックハグをかました訳ではないことはウルベルトもわかっている。正義大好きなこの男のことだ。事件を解決しに来たのだろう。

ウルベルトがなにをしているのかも解っているようで、敵意を隠しもせずに向けてくる。しかし、ウルベルトは素知らぬ顔で肩をわざとらしく竦めてみせる。

「ま、その様子を見ればだいたい解りますがね。・・・相変わらずヒー

ローゴツコがお好きなようで」

何年も会っていないなかったというのに、するりと出てくる嫌みにウルベルトは内心笑ってしまふ。たっちの不機嫌さが更に強くなるのを感じながらも、懐かしさばかり感じる。

そう、ウルベルトは嬉しいのだ。喧嘩ばかりしていた相手とはいえ、自分一人しかいないのかもしれないと思っていた世界で友人に会えたことに。だから、昔では考えられない言葉がウルベルトの口からするりと出た。

「また一緒に遊びましょうよ」

当時はクエストの誘いすら嫌々だったというのに、まるで子供のように無邪気に誘った。——ただ、遊びの内容はたっちには顔をしかめる物だったが。

「人を玩具にするのはやめてください。私たちと同じ人間なんですよ？」

「同じ人間？」

一瞬意味が分からないという顔をしたウルベルトは、考えるように口元に拳を置いていたが、思い至ったのか「ああ」と顔を上げた。

「たっちさんあなた勘違いしてますよ？彼らは人間ではありません」

生徒に教師が教えるように、ピツと人差し指をたてると悪魔は言った。

「私も便宜上、彼らを”人間”とは呼んでいますが、あの世界の人間とは全くの別物ですよ」

帝国の宮廷魔術師のフルーダを取り込んでいるウルベルトは、この世界の成り立ちを調べ、この世界の人間とは自分たちとは全く別の進化の過程を得た生物だと結論づけていた。

まあ、言うなれば凄まじく人間に近い見た目のチンパンジーと言うところだ。

「まあ、勘違いするのも仕方が有りませんがね。よく考えれば解ることですよ。元の我々は魔法を使えないが、彼らは魔法を使える。これは大きな違いですよ？根本的に体のつくりが違うんです」

「……………」

驚愕したたつちの気配を感じて、ウルベルトは笑う。これが、相手の血が緑だったらもつとわかりやすかったのだが、あいにく両者を隣に並べても見た目だけでは解らない。だが、身体能力は自分たちとは比べものにならないとウルベルトは思う。もし、両者が同じ世界に存在していれば、間違いなく自分たちの人間が淘汰されるのが目に見えた。自分たちは幸運だ。100levelのゲームキャラの姿でこちらに来れたのだから。

「——だからと言って、この世界の人間を殺していい道理にはならないでしょう?!」

ふむ、結局はソコに行き着くかとウルベルトは頷く。たつちは正義感溢れる人間だったからな、むしろそこで納得したらそれはそれで正気を疑ったろう。

しかし、結局二人の問答など、実験に使われるモルモットが可哀相だ何だというようなものだ。たつちだって、必要なら仕方がないねと言って躊躇無く殺すだろうとウルベルトも解っていた。

「要するに、あなたヒーローゴッコがしたいだけでしょう?」

現実の世界で出来なかったことをこの世界で実現すること。たつちもウルベルトと何の変わりもない。この世界を自分の理想に利用しているだけだ。

その瞬間、たつちの殺意が膨れ上がりウルベルトに斬りかかった。とつさに避けなければ危なかったとウルベルトは思う。ギチギチギチギチと警戒音が絶えず鳴り響いている。——昔だったら、もう少し我慢できたと思っただが、体が異形になってから本能が理性を上回リやすくなっていた。

そして、ウルベルトもさすがに失言だったと——口には出さなくても内心反省していただろうが、たつちの反応に愉悦を感じて口をつり上げて更にたつちを煽った。

「何でしたら、私が悪の親玉でもして上げましょうか?あなたののだあすきな正義の味方には欠かせない相方だ。今だって肩身の狭い思いをしているのでしょう?」

異形種と言うだけではない。力が有りすぎる存在とは排斥される。

ましてやバカしかいない王国は余計にだ。しかし、強大な敵が現れれば嫌でもたつちの力を認めるしかない。頼らなければ自分たちは滅びるしかないのだから。

たつちから答えはない。ただただ、ウルベルトに向かって攻撃してくるだけだ。——殺す気はないようだが腕の一本や二本は獲る気がらしい。魔法を展開しながらウルベルトは守りに徹した。

たつちの武器はあのころに比べれば粗末な物だ。基が良くても鉄の棒を振り回しているようなものだ。が、対するウルベルトも同じようなものだ。人間に作らせた衣装は弱い付加魔法しか耐えられず。そこいらのフルプレートの方がマシという防御力だ。それでもこだわりを獲ってしまったのは、弱い存在しかいなかったため・・・、まさかたつちと再会して喧嘩することになるとは思っていなかった。

「この世界に我々を理解する者なんていませんよ？同郷の者同士仲良くしましょう」

のんびりと、危機感無くウルベルトがそう言ったときだった。

王都の一角に眩い光のドームが出来るのを二人は見た。

驚いたのはウルベルトだ。この世界の常識ではフルーダが使う第六位階の魔法が個人で扱える最上位だ。

なのに、目の前で展開されている光は超位魔法特有の光だった。

法国ならまだ理解できた。しかし、ここは魔法詠唱者を軽視する王国だ。そんな切り札が有るなどと考えもしなかった。

「つー術者を攻撃しろ!!」

放っていた悪魔にそう思念を送る。超位魔法だろうと発動前に止めてしまえばいい話だ。——しかし、想定していたより早く超位魔法が発動した。

「失墜する天空」——つ、課金アイテムも有るのか!？」

ウルベルトはギリツと歯をかみ砕いた。

時間は少し戻る。

ニグン達陽光聖典が悪魔達を足止めしていたが、肝心のモモンが姿を現さない。へメツセージも通じず、いつたいなにをしているのかとニグンが苛立たしげに舌打ちをしたときだった。

「モモンには別の指令を与えた。奴は来ない」

そう言つて背後に立つた存在に、ニグンは目を見開いてその場にひざまづいた。

「我が主…なぜこちらに——？」

「改まらずとも良い、…奴に渡した魔法では力不足と感じたのでな」
悪魔を押さええている隊員も跪こうとするのをとめると、まがまがいローブを羽織ったアインズが悪魔達を見据えた。

モモンの切り札としていたのは第八位階の爆裂系の魔法だ。低位の悪魔だけなら一撃でしとめられるだろうと予想していたが、思った以上に強い悪魔が紛れており、これではダメだろうと予定を変更したのだ。

被害がでるだろうからと、冒険者を下がらせたのは正解だった。さすがに他の者にこの姿を見せるのは戸惑われる。

「私の魔法でここ一帯を焼き払う。お前たちは巻き込まれないよう待避しろ」

そうは言つても、悪魔を押さええているのだからギリギリまでは離れられないだろう。光の檻が消えて範囲外に出るまでは撃てないだろう。タイミングがずれればすべてが水の泡だ。陽光聖典達の間際緊張が走る。

「では、準備に取りかかるか」

そう言つて魔法陣を展開したアインズに、ニグン等は神々しいと恍惚の表情を浮かべる。それを内心ドン引きしながらアインズは懐から砂時計型のアイテムを取り出す。時間的に、檻が消えるのが早い。帳尻を合わせるためにはこのアイテムが必要だ。

悪魔が暴れ始める。奴らは超位魔法を知っているのだろう。術者であるアインズをどうにか攻撃しようと躍起になっているが、神に指一本でも触れさせてなるものかと隊員たちが力を込める。

残っている天使をアインズの前に展開し守りを固め、自分たちもジリジリと距離をとる。

——そして光の檻が消えた。

その瞬間隊員は一目散に待避するが悪魔達はそれに見向きもせずアインズに殺到する。しかし天使の壁に阻まれもはやどうにもならない。

さあ、チエツクメイトだとアインズがアイテムを砕こうとしたときだった。

全く別の場所から悪魔が飛び出しアインズに襲いかかった。どうやら網からこぼれ、今まで身を隠していたらしい。天使の壁を横目に悪魔がその鉤爪を振り下ろした——。

「させんぞっ!!」

躍り出たのはニグン、アインズに襲いかかる悪魔の爪をその身ですべて受け止めて見せた。悲痛な隊員の声が聞こえたが、足を止めるなと怒声を放つ。悪魔が瀕死のニグンを無視して再びアインズに襲いかかろうとする。が、それをニグンが許すはずもなかった。

「下賤な悪魔がごときが・・・我が神に触れられると思うなっ」

光の粒子になりかかっている監視の主天使が悪魔の脳天を砕くのを不適な笑みを浮かべ——ニグンは倒れた。目は白く霞み、即死しなかったのが不思議なほどだが、力強い腕に受け止められたのが解つた。

「——よくやった」

ガラスが砕ける音と共に、空が落ちてきた。ニグンは最期に神の御技をその目に映すことを幸福と感じながら闇に沈んでいった。

友よ！

剣が重いと、たつちは悪魔が去った空を見上げながらそう思った。超位魔法の発動を確認したウルベルトはそのあとすぐに撤退した。たつちだけの相手ならまだしも、超位魔法に課金アイテムを保有している者との敵対は不利だ。魔法に遅れをとる事はないが装備アイテムが乏しいし、まさかとは思うがワールドアイテムを保有している可能性もあると早々に意識を切り替え、たつちに別れを告げると空に溶けていった。

・・・たつちはウルベルトを追いかけなかった。胸に大きな風穴を空けられた気がして動けなかったのだ。王国民の救助に向かうべきだと頭では解つていても、剣が、足が鉛のように重くて動けないとただ空を眺めていた。

「たつちさん！」

不意に呼ばれて振り返った先にいたのは漆黒の鎧をまとった冒険者モモンだ。どうやら、クライム達から話を聞いて援護に来てくれたらしい。

「主犯は逃げましたか」

たつちの様子を見てそう判断したモモンだったが、こちらを振り向いたまま動かないたつちの様子に首を傾げた。

「どうしました？どこか怪我でも・・・」

しかし、問いに答えることなくたつちはモモンの肩に頭を乗せる。突然のことに驚いた様子だったが、何となく落ち込んでいる雰囲気になにも言わずにただじつと立ち尽くしてくれた。

客観的に見たら異様な光景だろうと思う。しかし、彼は自分を拒絶せず、何も聞かずにただそばに居てくれた。その空気が、なんだか懐かしく感じてしまい甘えてしまう。

「・・・すみません、もう少しこのままお願いします」

余りに小さい声は、普通の人間だったら聞き逃していただろう。しかし、モモンには聞こえたらしく、苦笑いを漏らす空気を感じた。「——もし、肩を貸す以外に出来ることがあつたら何でも言つてくださいね」

その声が、あまりにも彼と共通の友人であるあの人と重なり、たつちは思わずその顔をのぞき込んでしまった。広間でみたフルフェイスに隠された顔は確かにあの人に似ていたと思ひ出す。

けれど、あの人ではない。彼は魔法詠唱者であつたし、それに顔を合わせたときに何の反応も無かつた。

——もしかしたら、この人は別世界の彼だろうか？SF小説の読みすぎだと言われるだろうが、しかし、確かに異世界が存在したのだからそんなファンタジーだつてあり得なくはない。

「モモンさん、私と友人になつてくれませんか？」

「へ？は、はあ・・・」

ここに來てからずっと孤独だつた。

ガゼフにはよくしてもらつていたけれど、どこか壁を作つてしまつていたのは異世界の人間だから自分とは違ふと心の隅で区別してしまつていたのだ。ウルベルトの言葉に納得してしまい愕然としてしまふ。

自分は異形種だからと遠慮しているつもりが、彼らは別の生物だと無意識のうちに差別していたのだ。それに気付かされてしまった。

それではだめなのだ。彼らに壁を作つたままでは私はいつか心まで異形になるだろうと、たつちは決意する。

手を握られて戸惑つているモモンに願う。ガゼフには迷惑をかける過ぎていて、今更友人になつてくれなどと言えない。

しかし、モモンとならいい友人関係を築けるだろうとたつちは思うし、純粹に彼と友達になりたかつた。このまま縁が切れるのもイヤだつた、——モモンの雰囲気は昔を思い出させてくれて、あの頃の自分に戻るような気がした。

「それで、たっち殿と友人になったのですかゴウン殿」

「まあ、そうですね」

ガゼフの館に招かれたアインズは、少し困ったように頬骨を搔いていた。

「どうも私はたっちさんの昔の友人に似ているらしくて、それで友達になりたいと言われたんです」

「彼はあまり他人に心を開かなかつたから少し心配していたんだが・・・」

いい傾向だとガゼフは頷く、ちなみに話題のたっちは日課の自主的パトロールに出かけ、ブレインはラナーに呼ばれて王宮に出向いている。そのためアインズは気兼ねなく骸骨の姿を見せられる。

「と言うことは、その姿はたっち殿はすでに知っているのですか？」

「そのことなんですが——」

アインズは申し訳なさそうにガゼフを見上げた。

「私の正体を彼に黙っていただけないだろうか？」

「？　なぜだ？別にゴウン殿がアンデッドでも彼は気にしないと思うが」

「いえ、多分ですけど、たっちさんは人間と友情を結びたいと思うんです。それなのに、実は私アンデッドなんですーなんて言ったらがっかりすると言うか——」

アインズの言葉に、ガゼフはたっちが元人間だという話を思い出した。そしておそらくだが、今の異形の姿を受け入れてくれるはずがな

いと心を閉ざしていた。そんな状態で初めて、人間だと思っているモンに対して友人になりたいと言っているのだ。その心情に水を差すだろうことにガゼフは納得した。

「——せめてもっと人間の友人が増えてから正体を明かそうと思うんです」

「そうですね・・・」

確かにその方がいいとガゼフが頷き、そう言えばと思い出す。

「陽光聖典の者達には——」

「思い出させないでください」

今もつとも頭が痛い問題にアインズは突っ伏してしまふ。

闇である。まるで泥の中のような闇のなか、呼ばれたような気がしてニグンは闇の中で目を開いた。あの方が呼んでいる。

闇の中に神の姿が見える。その背には無数の光の翼が——。

カツ!!

「うひよあつ?!」

死んだニグンを生き返らせるために”蘇生の短杖”を使ったアインズは、勢いよく目をかっぴらいて生き返ったニグンにビビって変な悲鳴を上げた。

びっくりした!心臓止まるかと思った!心臓無いけど!!

「も、問題ないか?」

目をこれでもかと開いてアインズを凝視したまま動かないニグンに心配になる。そして背後では五体投地している隊員達。問題ない

なら今すぐ逃げたい。

超位魔法をぶちかました後、一撃で死ななかつた悪魔も当然居たので、魔法三重化に〈魔法の矢〉をこれでもかと詰め込んで、残りの悪魔に放ってやった。単純に魔法の矢は相手を追尾するので弱った悪魔には十分効くと選んだのだが——、無数の殺到する光の矢に陽光聖典達にはアインズの背中に光の翼が生えて悪魔を滅ぼしたように見えたらしい。

涙を流して跪いてしまった。使う魔法の選択を誤ったと気がついてももう遅い。死んでしまったニグンを生き返らせてさっさと逃げようと〈蘇生の短杖〉を使ったのだが——。

「——ス」

「す?」

「スルシャーナさまあああああああああああつっ!!!」

「ほぎゃああつああつっ?!」

目をかっぴらいたニグンが凄まじい腹筋力で起きあがった。もはやアインズに場を取り繕う余裕はない。立ち上がったかと思えばすぐさま跪き、イっちゃった目でアインズを見上げている。息が荒いのは生き返ってすぐだからだろう!そうであってくれ!!

「おおおっ!!この目で神の御技を見られただけでなく、この愚かな僕の為に御慈悲を頂けるとは!!このニグン!!一生を!いや来世!いやこの魂がすり切れ滅びようともすべてを御身に捧げますううううううっ!!」

「お、おち、落ち着け!まず落ち着け!!そんなに興奮するな!!」

生き返ってすぐの混乱で、ニグンの理性は遙か彼方に飛んでいつているようだ。跪いたり立ち上がったたり落ち着き無く繰り返し、神を賛辞するよくわからない羅列を延々と述べ続けている。息継ぎしているのか心配になるし、何より血走っている目が怖い。

矢継ぎ早にアインズをほめたたえていたと思ったら——
ブチイツ!!

——なんか切れた音がしてニグンが鼻血を吹いてぶっ倒れた。病み上がりに興奮するから血管が切れたようだ。隊員たちが慌てて

助け起こしているが、本人の幸せそうなニヤケ顔にアインズは早々に逃げ出した。

「本当は神様じゃないってバレた後が怖い……………」

「……………たしかに、あの狂信ぶりは私も些かビビりました」

彼らが城に戻ってきたとき、部隊全員が恍惚の表情でぼんやりしていた。ラキユースがあの後どうなったのかと聞くと、ニグンが凄まじくだらしない顔になって不気味に笑うのでなにも聞けなかった。――代わりにモモンが無事悪魔を掃討した事を報告してくれたからよかったが。

そして救出部隊にいた神官は仲間からなにを聞いたのか…………地団駄を踏んで悔しがっていた。

「たっち殿のおかげで救出部隊も無事、捕らわれていた民を救い出すことが出来た。…………しかし、いまだ行方不明者は多い」

悪魔に連れて行かれた者は多い。救出されはしたが家族を失い、兵に当たり散らす者も少なくない。心優しい少年兵が目に見えて傷ついて居たのをガゼフは痛ましげに見た。

「貴族も何人か消えていたんですね？」

「ええ、ゴウン殿達がお探しの貴族も行方不明者のリストに有りました」

王都に来る目的であった貴族も依頼の品を渡す前に悪魔に襲撃さ

れたらしい。依頼主になんと言えればいいのか・・・、アイنزはため息をついた。

その後、モモンら漆黒の剣とたち・みーがこの事件の功労者として、王の御前にてお言葉を賜ることになった。

たち・みーは異形種であるし、モモン達も王都の冒険者ほど働いた気がしない。アダマンタイト級冒険者を差し置いてと思いい辞退したのだが、どうしても言われて仕方なく出席した。

冒険者達の代表として”魔封じの水晶”を持っていたモモンをとの話だったが、リーダーはペテルだからと言ったら漆黒の剣全員で王の御前に入る羽目になって、緊張でガチガチになったペテル達に恨めしそうに睨まれた。

たちちに関してはやはり正体を貴族連中に知られると厄介なので、人間に化けて受けていた。もちろん制限時間内に謁見を終わらせるようにはしていたのでこれはモモンも助かった。幻術をかけているとはいえ、なにがきっかけでバレるか解らない。

褒賞として、漆黒の剣には王から短剣と”魔封じの水晶”の対価としての少くない白金貨を、たちは王都での今までの活動も認められ、こちらは白銀の全身鎧と王都での住居を与えられた。

「しかし、今回は王も珍しく強気だったな」

「そうなのか？」

謁見が終わり城の廊下を歩いてきたガゼフがぼつりと呟き、隣にいたブレインが不思議そうに振り向く。

「今回の謁見は貴族達大半から反対意見が出ていたんだ。王国民が国のために戦うのは当たり前前、冒険者は金のために戦っただけだと言っていた」

普段の王なら、貴族達を刺激しないように謁見を取りやめて褒賞だけを与えるぐらいにしたらだろうが、それを押し切ったのだ。貴族達の不満の声は大きい。

「はあん？自分たちはさっさと逃げ出した癖にな」

「自分の領地を守る義務が有るから帰還しただけだと言っている。しかも、王の領地は王が守るのが当たり前だと言ってきた」

「……お前等も大変だな」

哀れそうな目で見てはいるが、ブレインだってこれから人事では無くなるのだ。なんとたつて、ラナー王女付きになったのだから。

「俺は気楽にやらせてもらう。うるさく言うならさっさとやめてやるさ」

権力や金に興味はないブレインらしい言葉に、ガゼフは苦笑いをこぼしながらもその自由さに少しうらやましいと感じた。

自分は王のために尽くす。それに後悔はないが、雁字搦めになって動けなくなる事がある。王と国民の為に戦いたいのには、王と国民を守るために戦えない。貴族達を敵に回せばこの王国は真つ二つに割れて滅びる。

ガゼフは動けず涙を飲んだことは何度だったか。

しかし、そんなつらさは微塵も見せずブレインに笑ってみせる。

「だからと言って無駄に喧嘩を売るんじゃないぞ」

先輩としての忠告をしてやればブレインは気のない返事を返すだけだった。

「——きつとこれから王国も変わる。いや、変わらねばならないんだ」

今回の事件で、数多くの犠牲者を出し問題点が浮上した。これを教訓とし、変わらねばならない。それを解っていたから、王はこの謁見を強く押し進めたのだとガゼフは思う。

——しかし、ガゼフの胸中に一滴のシミがあった。先ほど王が別人のように見えたのだ。きつと決意を新たにした王の強い意志がそう感じさせたのだと思うのだが・・・、ガゼフは不安を払拭するように頭を振るとブレインとともに廊下を進んでいった。

ちなみに、本当の一番の功労者である陽光聖典達に関しては、貴族達が強く反対するため何もない。元々王国に害を及ぼした特殊部隊なので、こちらは強く押し進める必要もなかったのだ、ガゼフから王の感謝の言葉が贈られるのみだった。少しばかり申し訳なさもガゼフにはあつたのだが・・・

「別に貴様等から見返りなどこれっぽっちも求めていない。——それに我らはすでに神から祝福を頂いているのだ!!余計な事で我らの幸福の余韻を汚してくれるな!」

「おお神よ!とそれぞれがうっとり祈りを捧げているので——すまん、じやましたな」とガゼフとブレインはそそくさとその場を後にした。

モモン達、漆黒の剣が王都を去る日が来た。多くの冒険者やレエブン候が見送りに来ていたが、さすがに王族の見送りは無かった。貴族連中をあまり煽つたら逆にモモン達に迷惑がかかるからだ。

結局はアイテムの力だと謙遜しても、モモン達の功績はすばらしいものだ。王都の冒険者組合が漆黒の剣を昇格させ、新たなアダマンタイト級冒険者が生まれた。エ・ランテルの組合にはすでに連絡済みだ。

新たなアダマンタイト冒険者とながりをもちたい、あやかりたいと多くの冒険者が見送りにやってきたのだ。

「みなさんのお力を借りて成れたようなものなので、むしろ恐縮しています」

そんな風に言えば、多くの冒険者から好感を持たれた。王都に来たときは奢つてやるなどと肩を叩かれた。

——あと、ペテルから漆黒の剣のリーダー変更の相談を持ち込まれたが全力で拒否した。自分は人間じゃないからと言うのもあるが、なぜか解らないが責任者はもうやりたくない。魂が叫んでいた。

「寂しいですね・・・、また遊びにいらしてください」

そう言つて手を差し出してきた。たつちは王から賜った全身鎧を来ていた。銀色の鎧に赤マントという派手な出で立ちだが、どうしてだかこの人にはしっくりくるとモモンは思う。周りの冒険者達はまさかこの鎧を着ているのが蟲人だとは思つてもみないだろう。

わざわざ見送りに来てくれたのは嬉しいが、ツアレの件があつて少々気まずい。

ニニヤの姉ツアレははじめ、たつちの元に残るといったのだが本人が拒否。家族の元にいた方が幸せに成れるからと言ひ聞かせ、ツアレをモモン達に託した。

ツアレが、たちちを愛しているのだと告白したが、それは勘違いですとすっぱりと否定し、そして私はあなたを愛せないとまで言ったのだ。

ツアレが泣き崩れてしまい大変だった。諦めさせるためとはいえ、もう少しソフトに言えないのかと思ったが、「私、既婚者なので」と言われてしまった。——ああ、それはわずかな希望も持たせちゃいけないな。うん。

しかし、見送りは遠慮して欲しかった。馬車にツアレがニヤとともにいるのだ、気まずいだろ。デリカシー無いなこの人！

蒼の薔薇のメンバーとも別れの挨拶をした。寂しいのか、イビルアイがなかなか言葉を出せずにモジモジとしていたので、視線を合わせる意味で膝をついてその小さな手を握った。

「また会いましょう」

小さな子供にするように頭を撫でてやろうと思ったのだが、脱兎の勢いで逃げられてしまって伸ばした手が無意味になってしまった。

——さすがに子供扱いを怒ったのだろうか？リーダーのラキユースに謝罪したが笑って気にするなと言われた。

こうして、たくさんの人に見送られてモモン達は王都を後にした。

「そうでしたか、大変でしたね」

エ・ランテルに戻ると、雇い主であるデミウルゴスがモモン達を待っていた。本来なら成功報酬を渡すためであるが、届け先が悪魔の襲撃で行方不明で任務失敗の報告を本人にする羽目となった。

しかし、デミウルゴスは気にすることもなく、漆黒の剣がアダマンタイトに昇格したことを素直に祝ってくれた。

「取引先は残念ですが、物騒な世の中ですからね」

代金はすでもらっていたし、品物もこうして還ってきてこちらに損は全くない。だから依頼を失敗されても特に怒る理由はない。

むしろ大事件に巻き込まれて大変でしたねと、漆黒の剣を労るくらいである。

では報酬をと、デミウルゴスが使用人から金貨の入った袋を受け取るのを見て、漆黒の剣は慌てて辞退する。結局は依頼を失敗したのに報酬を受け取るわけにはいかない。しかし、デミウルゴスはそれでは私の気が済みませんのでと、強引に渡されてしまった。

「まあ、昇格祝いと思ってください」

にっこり笑うデミウルゴスにペテルは恐縮しながら、仕方なく受け取った。

「では、預かってました品物です」

モモンが懐から出した包みを受け取り、中を確認すると「確かに」とデミウルゴスはテーブルの上に無造作に置いた。

依頼の品を勝手に開くことはないのです、ここで初めて運んでいた品物を目にした。それは小さな木箱で、おそらく魔法がかかっていると思われた。

「これってどんな品物なんですか？」

「ルクルットっ！」

不作法にも依頼の品の詳細を聞くルクルットにニヤが脇を肘で突いて黙らせる。依頼内容にも品物の詳細は極秘と書いてあったのだ。

しかし、依頼主は気にした風もなく教えてくれた。

「ああ、これは通信魔法を無効化させるアイテムですよ」

秘密の相談とかで〈伝言〉^{メッセージ}などで外部と連絡を取られたくない時に使いたいとのこと、あまり使い勝手が良くないアイテムに買い手が付いたのだ。本当にただ〈伝言〉^{メッセージ}などの魔法を遮断するだけだし、常に発動状態なので何でそんな物作った?!という謎のマジックアイテムだ。

中身が極秘というのも、秘密裏に設置する予定だったからだが、その相手が居なくなっただけでもはや秘密にする必要はない。

「使用方法が限定されるアイテムだったので売れてほっとしたんですがねえ」

デミウルゴスの言葉に「ああ、だからモモンさんに伝言^{メッセージ}が繋がらなかったのか」と王都での戦闘中の異常に納得した。

陽光聖典達が悪魔を追いつめたようなのに、なぜかモモンに連絡がないと漆黒の剣達は首を傾げたのだ。何か問題があったのかも、モモンが慌てて現場に向かわなかったら大惨事だった。

まあ、何とかなったから良かったとホッとしていたら、——モモンが慌てたように立ち上がり、断りは入れたが返事も聞かずに退室してしまった。

何事かとルクルットが追いかけるが、走らないのが不思議なくらい焦っているのが見えた。

「ど、どうしたよモモンさん」

ルクルットが走って追いついた頃にはモモンも止まっていた。何事か見上げるとモモンは鎧を消してアインズになった。

ギョツとして慌てて周りを確認したが、どうやら人の死角になる場所に駆け込んだらしいと理解して肩の力を抜いた。

「——〈伝言〉^{メッセージ}が届かないとか聞いてない!!」

「お、おおう。落ち着きなよモモンさん、王都では危なかったけど大事には・・・」

宥めようとしたルクルットはふと、なにか、大事なことを見落とししている気がした。アインズがイライラしたように〈伝言〉^{メッセージ}を発動した。いったい誰に——などとのんきに考えるほどルクルットもバ

力ではない。

「ゴブリンメイジ！聞こえるか?!」

「ああーゴウンの旦那!!ようやく連絡が付いた!!」

カルネ村が何かあったら伝言メッセージを送るよう言っていたゴブリンメイジに繋ぐと、聞き捨てならない言葉を聞いた。

何度かメッセージ〈伝言〉を送ったような様子にアインズはイヤな予感がバリバリだ!!

「そちらに何か問題あったか!?!」

「ええ、まあ。でも解決しましたんでもう大丈夫ですよ」

その言葉にほっとした。まあ、アインズが出張らなければならない案件などそうそうないのだ。多少の問題なら彼らでも解決可能である。

しかし、何があったのだろうか？

トロールの奴らが攻めてきて、村の一部が壊れましたがちゃんと撃退しましたんで

アインズは膝から崩れ落ちた。

「目的は果たせなかったが、まあ王国中枢の掌握は出来たな」

座り心地の良いソファに身を沈めて、ウルベルトは天井を見上げた。

悪魔は人間をいたぶることを愉悦と感じる生き物だ。なので人間狩りをしたいから王国の人間を浚ってくると皇帝ジルクニフに言っ

であるが、実際はただ一人を浚うための計画だった。

冒険者モモン

ウルベルトは彼を浚ってそれを元に友人を作り出そうと考えた。しかし、彼だけを浚えば後々面倒だろう。

ジルクニフ、彼はウルベルトの弱みを常に探っている。何とかしてウルベルトを殺したいと思っているだろう。

・・・別にウルベルトはそのことでジルを怒るつもりはない。悪魔の自分を恐れるのは当然であるし、こっちはこっちで利用しかないうつもりで上位者としての余裕をみせている。

しかし、だからといって弱みを握られていい気分にはならない。だからモモンに執着していることをあまりジルに知られなくなかった。

「ジルは王国と戦争しているのでしょう？ だったらついでに戦力をそいで上げますよ」

あくまで気まぐれを装いつつ王都の襲撃を計画し、モモンを王都におびき寄せたのだ。エ・ランテルにしなかったのはジルに疑われないためにあえて避けた。

〈メッセージ伝言〉を使えないようにし、なおかついつでも居場所が判るようにアイテムを持たせた。届け先に指定した貴族も名前だけ借りただけで、実際は何の取引もしていない。王都の多くの行方不明者に紛れるように浚う計画をしていたのだが・・・、思いがけないことが立て続けに起こったため中止せざるをえなかった。

たちち・みーとの再会

超位魔法の使い手の出現

そしておそらく課金アイテムを持っていることから装備も少なくとも神器級の一つや二つつけているだろう。

無理に敵対すればこちらが不利なのは明確、計画を変更する事にした。

今までの即物的な考えを反省し、情報を収集する事にした。自分より強い者の存在や、アイテムの存在を調べ上げ、取り込めそうなら取り込み自身の強化を狙う。そうして、安全を確保してから気兼ねなく遊べばいい。たちちもその頃には人間を見限っているだろう。

「王国全体の掌握も時間の問題だな、八本指の頭のすげ替えも終わっているし、俺に逆らう奴は殺せばいい。——問題は頭がいい奴らだな。アイツ等も出来れば使いたいんだよな。……やっぱ人質とるのが一番かな？」

帝国もいつ裏切るか判らない。だから王国を乗っ取ることにした。悪魔にありがちの王様に成り代わって国を征服すれば情報も収集しやすいし、モモンやたっちの居場所も把握しやすい。

「とりあえず絶対王政にしなきゃな。逆らう貴族は八本指に始末させればいいとして、……ザナック、レエブン、あとラナーかな？ 第一王子はまあ脳筋だからどうとでもなるし、アイツ等さえ押さえれば大丈夫だろう」

よっこいせとおっさんくさく立ち上がると、これからの計画に頭を悩ませる。

「こういうとき、頭いい奴らの助言が欲しいよなあ。……たっちもいたし、他の奴らも来てないかなあ」

その後、王国は凄まじい勢いで改革がなされた。

王に逆らう貴族は尽く肅正され、反旗を翻した貴族は逆賊として王国軍に蹂躪され、鳴りを潜めてしまった。

貴族の率いた兵の大半は領主に不満を持つ農民のため、尽く王国側に寝返ってしまう。褒賞も何もなく、ただ自分のために死ねと言われれば離反するのは当たり前である。そこらへんはレエブン候の間者がそそのかしたのも効果が出ていた。

新しい領主はウルベルトが媒体を使って召喚した悪魔達が就任し

た。頭はよろしくないが、反旗を翻すようなことはないので安心である。

王様に成り代わったウルベルトは悪の王様らしく、国民に重税を敷くことにする。生かさず殺さずのギリギリのラインを見極めて、国民達を苦しめた——つもりでいた。

「領主が変わってから税が軽くなったねえ」

「ああ、王様はすばらしい方だ」

最近の領民はもっぱらそんな会話をしている。それはなぜかと言えば、今までの領主は領民を人だとは思っておらず、搾り取れるだけ搾り取ることしか考えていないバカだった。払えないなら死ぬ。とか普通にいうバカだった。黄金の卵を生む鶏を殺すようなバカより、死なないよう最低限のラインを作った王様扮するウルベルトは領民にはいい支配者だ。

悪魔の新領主も主人に隠れて賄賂を受け取るようなことはしない。人間の領主は国に報告しているより多くの税を穫って、懐にため込んでいたのだ。なので、前よりずっと軽い税金に虐げられていた領民達は涙を流して感謝していた。——それを悪魔領主達は涙を流して苦しんでいると勘違いし主人に報告していた。

逆に王国領は前より重い税に不満顔だが、周辺の領民達の現状を見れば仕方がないかと納得するしかない。むしろ、貴族の反発が無くなって王国内の環境が急速に整っていくのだ。資金が足りなくらいだろうと心配になる。

それでも酒の席では税が重いとグチをこぼすが、うちの母ちゃん口うるさくて程度の軽口である。・・・それを影で聞いていたシャドウデーモンが、主人の圧制で人間どもは苦しんでいるようですと報告する。

「ふふふ、我ながらあくどい王様じゃないか」

部下の報告にご満悦な悪魔。

——王国は平和である。

*
*
*
*
*

友からの便り

ある国は、いま獣人^{ビーストマン}達の脅威にさらされていた。

一定の時期になると、獣人^{ビーストマン}達が支配する国から人間を狩りにやってくるのだ。その時期がまさに今なのだが、いつもであれば一定のラインまで入ってくることはないのだが、今年は違った。

——まるで、すべての人間を狩りつくさんとばかりに獣人^{ビーストマン}達が国の、竜王国の奥にまでその牙を届かせようとしていた。

獣人^{ビーストマン}と人間の根本的な力の差は歴然で、たとえば英雄級の人間が一人いたところで、獣人^{ビーストマン}三人もいればその首は噛みちぎられてしまう。

そんな相手に、ただの一般人やそれに毛が生えた程度の兵士が適うはずもない。いつだって一方的な蹂躪をされてしまっていた。

それでも、アダマンタイト級冒険者や法国の秘密裏の援助によって何とか耐えていたのだが——、今年に限って援助、陽光聖典の到着が遅れていた。彼らは竜王国にとって数少ない戦力だというのに……法国はなにをしているのだと、女王は頭を痛めながら目の前にある被害報告に目を落としていた。

「冒険者だけでも無理があるというのに、今年の奴らは凶暴性が増している。———いったいどうしたと言うんだ」

秘密裏に借りていた部隊だったため、表だって要請することは出来ない。それでも書簡を送って打診しているが返事がこない。———もしや、見捨てられたかと眉をしかめていると、ノックする音が響いた。

「報告がございます」

「ハア……、また被害が出たのか！ 今度はどこだ?！」

「いえ、被害もありましたが———冒険者の方が妙な鳥人^{バードマン}をつれてきました」

「? 鳥人^{バードマン}だと?？」

謁見の間に、馴染みの冒険者と一人の鳥人バードマンがいた。

女王のお出ましを待っているのだが、鳥人バードマンの方はキョロキョロと周りを見渡して鳴いていた。

「ほえ、ふくん、はあ、はあ」

「キョロキョロするな。おのぼりかお前は」

「別にいいだろう？滅多に入れない場所何だから隅々までみたってさ」

冒険者“閃裂”に諫められた鳥人バードマンが肩を竦める。

しかし、その仕草一つ一つに周りが警戒していることをこの鳥人バードマンは気が付いているのだろうか？しかし、敵意もなくこの国の女王に会うには緊張感が全くない。異形種故の高慢ともとれる鳥人バードマンに“閃裂”は眉を寄せるも、こいつのおかげで助かったのも事実のためため息だけにとどめていた。

所詮獣だと、女王のお出ましを待っていた――。

コツリと小さな足音が響いた。官僚が女王の入室を声高らかに宣言すると、室内の者すべてがひざまずき、頭を垂れた。

意外にも、鳥人バードマンも周りをみて慌てて真似をしたので空気は読めるようだ。

衣ずれと靴音がわずかに響いたあと、女王の声が降ってきた。

「獣人討伐への協力、深く感謝します。面を上げてください」

幼い声が耳に心地よく、“閃裂”はうつとりとした顔で女王の顔を見上げた。

女王が座する椅子は少々彼女には大きすぎるらしく、小さな足が地に着かず宙でプラプラと揺れている。その肩には大きすぎるであろう、豪華な上掛けが引つかかっているのだが、首まですっぽり埋まっています。

その裾からのぞく小さな指が、椅子の肘掛けに乗せられているが、距離がありすぎて手を大きく広げてても爪の先が乗るのがやっととい

う感じであった。

何というか……、子供が懸命に背伸びして大人に見せかけようとしているようで、とても萌えると”閃裂”は鼻から垂れそうになるモノをぐつと耐える。

「それで、報告の方は聞いていたのですが……。その鳥人バードマンとは彼のことでしょうか？」

「はい、女王陛下。彼の者が獣人ビーストマンに襲われていた村人を救い、我々に協力をした鳥人バードマンでございます」

”閃裂”達が到着した頃には獣人ビーストマン達は逆らう村人を喰殺し、食料として連れて行かれる寸前であった。

小さな少女に手をかけようとした獣人ビーストマンだったが、一本の矢が光のごとく豪腕を吹き飛ばした。獣人ビーストマンが悲鳴を上げるその口が再び矢で射抜かれると、天からその鳥人バードマンが舞い降りた。

怒り狂う獣人ビーストマン人などモノともせず、粗末な作りの弓矢で、矢がつきればその拳でたたき伏せる。その豪勇に”閃裂”たち冒険者達の力など必要ないと思えるが、村人を守るにはやはり多勢に無勢だった。

仲間は、鳥人バードマンが味方である保証などないと言ったが、”閃裂”には解った。

アレは”同胞”である。

結果、”閃裂”の賭は大勝ちであった。村人を救うだけでなく、多くの獣人ビーストマンをほふることが出来たのだ。それもこれも鳥人バードマンのおかげである。

「そうですか……。この国の代表として感謝します。——それで、もし不都合がなければお名前を教えてくださいませんか？」

女王の言葉に、無言が返されいぶかしげに”閃裂”が横を盗みみると……、鳥人バードマンが間抜けにくちばしを開いたまま女王を凝視していた。

「ど——」

したのだと、問いかける前に我に返ったらしい鳥人バードマンが、纏う空気を変えた。……おそらくキリツと気持ちと表情を引き締めたのだろう。

不思議に思いつつも、まあ、幼い女王に呆気にとられ、我に返っただけだろうとその時は思った。

「失礼しました。女王陛下、——私の名は……、ペロロンチーノと申します」

一瞬名を名乗る時に迷ったように見えた。

「自由気ままに枝から枝に旅をする鳥人バードマンでございます」

「旅の者でしたか、——何故、獣人ビーストマンではなく人を助けたのかお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「困っているロリ——いえ、幼……ゴホンツ困っている者を助けるのは紳士として当然でございます」

何度か言い直す鳥人バードマンに、女王の横にいた補佐がぴくりと反応する。

そして女王も内心天を無性に仰ぎたくなつた。そして、先ほどから鳥人バードマンの視線が強い気がするのは気のせいではないだろう。

「……そうですか、高い志に深く感謝いたします。それでもし、よろしければこの国を助けてはくれないでしょうか？」

女王の言葉にどよめく者は多い。しかし、この鳥人バードマンを味方に出来ればと思わないわけではない。そのためにはどんな対価が必要だというのか……？

「我が国を救っていただけるのであれば、報酬は望むままに差し上げましょう」

女王の言葉にギョツとする。要求や、条件を聞く前に報酬を与えることを約束してしまつた。これで鳥人バードマンがなにを要求しようとこちらは答えねばならない。そんな無謀な行動に動揺する者は多いが、女王にはこの鳥人バードマンがなにを望むのか見当が付いていた。

そして、この国の追いつめられ具合からみれば自分の身の一つや二つを投げ出す覚悟も決めなければならぬ。

「お願いします。我が国を救ってください」

悩むそぶりを見せる鳥人バードマンに、女王は頭を下げる。そのことにどよめきが大きくなつたが構う暇などない。今は竜王国の存亡に大きく関わっていると云つても過言ではないのだ。

「——望みを、どんな望みでも聞いていただけるので？」

「はい」

確認する鳥人バードマンに、女王は深く頷いた。

「——では、私の言うとおりにして貰ってもいいですか」

何なりと、女王が促せば真剣な顔で鳥人バードマンが言った。

「まずは・・・、ちよつと膝を持ち上げて、あ、イヤそんなに上げなくていいです。ほんとちよつとですええ。膝小僧はくつつけて、あ、スカートスカートの裾とハイソックスの隙間もうちよつと広げてください。で、前の方で両手首をくつつけて——、あ、もうちよつと上、口元を隠す感じで。そうそう、体ちよつと丸めて、いったん視線は床に、その伏せ目がちのまま上目遣いで・・・。うーんと、ちよつと首傾げて貰えます？あ、萌え袖の方がよかったかな？まあ、とりあえずこれで——、じゃあそのポーズのままこう言つて貰つていいですか？」

そう言つて、女王の耳元で何かを囁いたあと、元の位置に着くともう一度ひざまずき「どうぞ」と女王を促した。

「——ペ、ペロロンおにいちゃん。あたしをたすけて？」

「喜んでっ!!!」

イエス、ロリータ!!と謎の呪文を唱えた鳥人バードマンはガッツポーズを取った。

なにがなにやらと困惑し、呆氣にとられていると“閃裂”が「ぐふうっ!!!」と悶えた。

「じよ、女王陛下!!わ、私にもお願いします!!!」

「ふ、ふえ?!え、えつと・・・」お、おにいちゃんたすけてえ?」「任せとけえっ!!!」

イエス、ロリータ!!と、なぜかアダマントイト冒険者まで叫び、鳥人バードマンと目が合うとがっしりと堅い握手を交わした。

獣人達ビストマンをもものすごい早さで押し返した鳥人バードマンとアダマントイト冒険者は英雄と言われるのはあとの話である。

——女王は酒浸りになったそうだ。

「——世界が滅亡すると、本当にそう言ったのか？」

「はい。……その予言をしたあと自殺を図りましたが、何とか取り押さえて落ち着かせました——、しかし、いまだ部屋に閉じこもっておりません」

「……それを知っているのは他には？」

「すでに箝口令をしいて押さえています。——いまだ動揺は収まっておりませんが」

「それがいい。今は無用な混乱は避けなければならぬ。……滅亡の原因は分かっているのか？やはり”滅亡の竜王”の復活か？」

「解りません。ただ、世界が消え失せていくとだけ」

その報告に、男は片手で顔を覆う。——そして、辛そうに命令した。

「……落ち着いたら、詳しく”視る”ように伝えろ。原因を特定できれば回避できるかもしれない」

そう言つて下がらせると、男は口元に手を当てて考え込む。この時期にそのような予言が出ることに、男は思い当たることがあつた。

「——100年の揺り返し、八欲王の再来、か？」

降つて沸いた巨大な問題に男は頭を抱えた。

「ゴウン様お手紙です」

「はいはい」

渡された手紙を受け取り、アインズは二つの封筒をひっくり返す。

ソコには新しく友人になった者の名前が書かれており、最初に白い封書の封を切る。

——開く前から思っていたが、やはり中にはぎつしりと手紙が詰まっている。これはもうちよつとした本では？とも思ったが、睡眠の必要のないアインズには長い夜にちようどいいと目を通す。

送り主はたつち・みーだ。王都から離れる際に文通しようと言われている。

冒頭は手紙の定型文から始まり、何を書いていいか判らないからとりあえず近況を報告しますと、事細かに書かれていた。

たつちが王から貰った住居は元は商家だったらしく、なかなか広い物件で掃除が大変そうだと書かれていた。まるで人事だなどと読み進めていたら、どうやら一人で住んでいるわけではないようだ。

助けた人たちが使用人として働いているらしい。住む場所も行き場も無く、困っている様子だったから雇ったとのことだ。——それがツアレの元同僚達と聞いて、アインズは頭を抱えツアレにはこの手紙のことは黙ってようと思つた。

まあ、助けたときに異形である事は知っているらしいから、何も知らない人間を雇うよりはいいだろうなとアインズは納得する。

彼女らもたつちに恩を返したいだろうし……。ちなみに元同僚には男も居たらしい。人間の業の深さにアインズは呆れるしかない。

そんな彼らとの日常を手紙にびっしりと書いてあるが、読み進めるうちにアインズは頭痛を覚えてしまう。

彼女らはまだ心の傷が癒えていないらしく、懇願されて夜は一緒に寝ていると書かれていて、アインズは緑色に発光した。しかし、読み進めればただ添い寝をしているだけらしい事にホッとす。

——ただし、相手の希望は添い寝ではないようだ。

“一緒に寝てあげていると擦ってくるんですよ。やめなさいと叱っているんですが、泣かれてしまって——子供返りですかね？”
相手が哀れになってしまふのと同時に、ツアレはたつちと別れて正解だったと頷いた。

他にも王都の女性達は親切で優しいという話も書かれていて、アイ

ンズはこれはモテ自慢だろうか、ないコメカミがひくつく思いをしたが、本人が全く気が付いていないので天然タラシであると結論づけた。

「——いっぺん爆発すればいいのにつ」

アインズの胸で嫉妬マスクが血の涙を流した。

さて、次は黒い封筒である。これも友人となったデミウルゴスからの手紙である。

何でも古い友人と喧嘩してしまい疎遠になり、寂しいから友人が欲しいと言われたのだ。私でよければといえば大層喜んで、では文通しましょうと言われたのだ。

こちらにも分厚い。手紙ってそんなもんだっけ？と思いつながら封を切って手紙を読む。

上流階級の貴族が書くような丁寧な手紙で、何とか住んでいる世界が違う内容だなーと思いつながら読み進めていくと——だんだんと古い友人のグチが長々と書き連ねられていった。

その友人の悪口のオンパレードだが、嫌いきっていないのが言葉の端端から見えて、仲直りしたいんだらうなあとアインズは思った。

他にも、新しい仕事に着手して大変忙しい毎日ですと書かれていて、商人も大変なんだなと頬杖を付く。

「——うーん、いざ手紙を書くとなると何を書けばいいか判らないなあ」

返事に頭を悩ませながら書いていると、結局二人に負けなくらいの枚数となり苦笑いを漏らしてしまった。

——誰も気が付かなかった。

相手の手紙を何の問題もなく読んでいたという事実にはアインズは

気が付かなかつたし、返事を貰つた二人も嬉しさからアインズからの手紙に使われている字の違和感に全く気が付かなかつた。

相手の手紙が日本語であると言う事実には気が付けば、きっと何かが変わっていただろうに……。

*
*
*
*
*

おいでよ！カルネ村 カルネ村の戦い

「ごめんなさい、クライム・・・」

「ラナー様」

目の前でハラハラと泣く太陽のような王女に、クライムは自分のふがいなさに唇を噛んだ。

王の様子がおかしいと気が付いたのはラナーだった。確かめたいからと、クライムを連れて王と謁見したのだが、王は悪魔に成り代わられていた。

あの時の悪魔が王国に入り込んでいたことにクライムは驚愕し、ラナーを逃がそうとしたが、ブレインでさえも齒が立たない相手にクライムは僅かな間も持たなかった・・・。

もはや殺されると覚悟したとき、クライムの前にラナーが立ちはだかり悪魔と対峙した。逃げてくださいとクライムの懇願にもラナーは首を縦に振らず、悪魔をにらみつけた。

そんなラナーを面白そうに見ていた悪魔は、二人に枷を付けた。

悪魔にとってラナーの頭脳は利用価値があった。そして、ラナーの優しさにつけ込んだのだ。

「その枷は、互いに連動しています。どちらかが私に反旗を翻せばもう一方の枷が爆発します。無理にはずそうとしてもそれを感知しますので、爆発しますよ。——まあ、相手を見捨てれば、自分だけは助かりますがね」

邪悪な笑みを浮かべる悪魔にクライムは震えた。枷は、クライムの首に食い込んでいたが、何よりクライムが悔しいのは、ラナーの左腕に食いついている枷の存在だった。

「ラナー王女は利用価値がありますからね。殺しはしませんが腕の一

本は吹っ飛ぶでしょう」

互いを人質に取られてしまい。クライムは血が滲むほど拳を握りしめた。

ラナーだけでも助けたいとクライムは自分の命を投げ出そうとするが、ラナーに泣いて止められてしまえば、もうどうしようもなかった。

ガゼフ達や”蒼の薔薇”にも話せば相手の枷が爆発する。クライムは自分のふがいなさに涙が溢れたが、ラナーはそんなクライムを慰めるように抱きしめた。

クライムはラナーの優しさに触れて、慟哭し、たとえ何を課してもこの方を守ると決意した。

——しかし、そんなクライムに見えない位置で、ラナーはこれ以上ないくらい愉悦に笑っていた。

「ラナーの奴は、わざとかな?」

「否定は出来ませんね、あの方ならやりかねないならなおさらです」

疲れたように互いにソファに沈み込むザナックとレエブンは、裏切り者に悪態を付く。

「さては悪魔ともグルじゃないか?アイツの望んでいた通りになっているぞ」

以前、ラナーにクライムとどうなりたいか訊ねた際、今の関係のまま首輪を付けて飼いたいと言っていた。

現在クライムの首には首輪のような枷がはめられていて、以前以上にラナーの身辺警護に力を入れている様はまさしくご主人様を守る犬である。

クライムから見えない位置でご満悦に微笑んでいた妹にザナックはゾツとした。

「あの方だったら我々にも気付かせずに上手くやりますから、おそろく悪魔とは手は組んでいないでしょう」

「……だなあ」

そうなると思魔さえ手玉に取っているのだろうか、あの化け物は。しかし、それは後でいい。今はあの化け物より父に成り代わっている悪魔である。ザナックはため息を吐き宙を見上げた。

「俺もお前も人質を取られてしまつて動くことはできない」

まあ、人質を取られていない状況でも、どんな抵抗も無駄だろう。悪魔は協力するので有れば身の安全の保障をしようと言つてきた。

約束を守るとも思えないが、抵抗するすべを持たないのだから今はおとなしく言うことを聞いておくのが利口だろう。

「——アダマンタイト級の冒険者達ならあの悪魔を倒せるか？」

「無理でしょう。戦士長殿と同等の実力を持つあのブレイン・アングラウスでさえ歯が立たなかつた。数で何とかなるとも思えませんし、何よりラナー王女が向こう側に付いていますからね」

「……アイツまで敵に回るとは悪夢以外の何者でもないな」

ザナックもレエブンも深くため息を付く。—————————————————————
魔に気付かれないように戦力を集めなければならぬと頭を悩ませた。

「———あの悪魔、王国をどうしたいのだ？」

「いや……、他国から見れば十分圧制を敷いているのですが、なにぶん前の貴族達の圧制の方がひどかつたので……」

最悪からマシになったので感覚が麻痺しているらしい。国民に二人は頭を抱えてしまった。

「——で、どういう事だ？」

村にマツハで戻ってきたアインズは、村の所帯が増えていることを声を低くして訊ねた。

「少し見ない間に、ゴブリンどころかオーガまで増えてるように見えるが？」

「あー、旦那に相談無く決めたことは謝りますが・・・、なにぶん連絡が取れなかったもんで」

そこを指摘されてしまえば黙るしかない。それに、村の代表となったエンリが決めたことに口を出す気はないので、アインズは深くため息を付いた。

アインズが王都へ行ってしまつてすぐに、村に傷ついたゴブリンがやってきた。東の森がなにやら騒がしくなり、オーガやトロールに追われて逃げてきたそうだ。それを薬草を探しに来ていたエンリ達が見つけて保護したのだ。そして、話を聞いて村にも影響が及ぶ可能性も有ると話し合い、エ・ランテルの冒険者組合に相談に行った。

アインズに連絡しなかったのは、〈メッセージ伝言〉のスクロールが安くない値段であることを聞いて、そこまでせっぱ詰まっていけない現状で連絡するのが憚られたのだ。

まあ、すぐにどうこうなるとは思っていないなかったのが失敗だった。トロールがカルネ村を狙つて襲つてきたのだ。

カルネ村は外敵から身を守るために塀を作ったり演習を行ったり——言ってみれば軽い要塞化がされていた。そんな良い住処をトロール達が乗っ取ろうと考えてしまうのは当たり前だろう。

良かれと思つたことが逆に敵に狙われてしまい本末転倒である。

慌ててアインズに連絡を入れようにも繋がらず、エ・ランテルの冒険者を呼ぶには時間が無かった村人は覚悟を決めて、戦うことを選んだのだ。

幸いデスナイトやゴブリンと言う心強い用心棒も居るので、撃退は成功。トロールが一体村に進入したが、危ないところをハムスケが助けに入ったので軽いけがのみで、死者は出なかった。

そう話したエンリの隣にはンファイレアが座っているのだが――「近い、近すぎるぞ小僧!と黒いオーラを発しながら睨みつけるアインズ。

「ハムスケさんがいなかったら僕死んでたかもしれません」

「もお! 笑い事じゃないわよンファイ!」

エンリを逃がしてトロールと対峙したンファイレアには軽く包帯が巻かれており、エンリが心配そうに見ている様に、・・・アインズはイヤな予感がバリバリであった。

「・・・ズイブン、仲良くなったようだが」

アインズの言葉に、二人は顔を見合わせると照れたように顔を赤く染めて俯いた。そして、意を決したエンリが照れながら・・・アインズを絶望にたたき落とした。

「その、私たち付き合うことになりました」

多分目の前にエンリがいなかったら絶望のオーラVを垂れ流しにしただろう。

「やっぱり王都になんか行くんじゃないかった!!」

うわぁん!と酒場で漆黒の剣にグチを垂れ流すモモンに周りは興味ありげにチラチラとこちらを見ている。

酒も飲めないのに自棄酒に來たモモンに漆黒の劍は苦笑いを漏らすだけだ。

「まあまあ、エンリちゃんも年頃だししようがないって」

「変な男に引つかかるよりンフィーレア氏で良かったのであるぞ？」

「モモンさんも子離れしないと」

「味方がいない!!」

コンチクショウ!とモモンはヘルムを被ったまま嘆いている。酒は頼んでいりけど飲む気配がないモモンの心情を察した男達は、同情的な暖かな視線を英雄に送っている。

モモンさんも人の親なんだなあ、俺の子もいつかは羽ばたいて行つちまうんだろうなあ。とホロリとする者多数である。

「ううう、あんなモヤシ認めてなるものか〜」

「そんなこと言っていると、またネムちゃんに怒られるぞ」

お姉ちゃんの邪魔しちやダメと怒られたばかりである。ネムがいなかったらンフィーレアの暗殺計画も立ち上がる勢이었다。とんだモンスターペアレンツである。

「まだ早い〜まだ早い〜」

「いやいや、もう16だろ?結婚してもおかしくない年だつて」

「そうですよ、行き遅れるよりいいじゃないですか」

「である」

ぴいぴいと駄々をコネる漆黒の英雄に仲間は呆れ気味である。男連中だったら同意してくれると思つたのに、裏切られたとモモンは突つ伏する。

ニニヤはツアレの付き添いでカルネ村に行っている。エ・ランテルよりはカルネ村の方が住みやすいだろうからだ。落ち着くまではしばらく二人村に住むことになっている。

「うう、俺の気持ちなんて誰も分かつてくれない」

「何やってんだお前等」

いじけているモモンに“クラルグラ”のイグヴァルジが顔をしかめて声をかけた。酒場で湿っぽい話なんてしてんじやねえとモモンの鎧を小突いてくるが、モモンは獲物を見つけたようにイグヴァルジ

にグリンつと振り返った。

「聞いてくださいよイグヴァルジさん!!」

「うわっ!なんだうっとおしい!」

グチる相手を見つけたモモンがイグヴァルジにすがりつくが、相手はつれない態度である。ペテル達がヤレヤレと笑っていると「クラルグラ」のメンバーの一人がモモンはどうしたのかと訪ねてきた。

「あーと、娘?に恋人が出来たって泣いてんの」

「モモンさん娘さんが居たのか」

純粹に驚き、そして苦笑いするのは漆黒の剣に同情しているからだろう。ルクルットの肩を叩いて言葉もなく激励している。

「まあ、年頃の娘を持つている男なら皆一緒だな。・・・モモンさんの娘さんでどんな娘だ?」

興味本位に聞いてくる男に肩をすくめながらも大きっぱに説明した。——最初は笑っていた男の顔がだんだんと強ばっていった事にペテルは首を傾げてしまう。

そしてイグヴァルジは未だにモモンに捕まっている。

「———そうか、モモンさんの娘だったのか」

「? 会ったことでも?」

「いや、この間エ・ランテルに来たらしいんだ」

検問所の兵士に知り合いがいて、その娘の持つているマジックアイテムのことでちよつとしたトラブルがあったらしい。

「ただの村娘が持つにはあまりにも高価なマジックアイテムだから、村娘に変装した魔法詠唱者かと疑われたらしいんだ」

結局涙目になった娘が、モモンと知り合いですと言ったのでその場はいったん落ち着いた。本人が依頼で街を出ていたから確認がとれなかったが、これで本当にモモンの知り合いなら悪印象である。なので、目的をしつかり聞いた後に通した。もちろん秘密裏に兵士が監視していた。

たとえ知り合いでも、ただの村娘に高価なマジックアイテムを与える事に疑問が残るし、それに村からエ・ランテルまで一人でやってきた事にも魔法詠唱者の疑惑が深まっていた。———で、結局は何事も

なく娘は帰っていったわけだが、一体何者だったのかと兵士の間でもっぱらの噂だった。

「モモンさんの娘だったら納得だわ」

恋人が出来たくらいであの嘆きよう……。溺愛していることは請け合いだ。高価なマジックアイテムの一つや二つ、与えてそうである。

——そしてもう一つ、”あの”漆黒の英雄であるモモンの娘がただの村娘であるはずもない。つまり、村からこの街まで、その腕っ節一つで遣ってきたのだ。魔法詠唱者か、マジックキャスターもしかしたら剣を隠し持っていた可能性もある。実際少くない武器や防具も買っていたらしい。

そう思うと、兵士達の対応は正解だった。下手したらモモンを敵に回していただろうし、最悪、その娘に叩きのめされていたかもしれない。

「後で教えておかないとな」

男は一つ頷いた。お互いのためにも知っておいた方がいいだろう。しかし、彼の厚意によりエンリの噂は瞬く間に兵士達に広まり、よけいな推察も混ざり巡り巡って”血濡れのエンリ”なる人物が出来上がってしまった。

そして、そんな噂を聞いた悪魔が、部下に確認に向かえと指示を出す。

「で、噂の真相はどうだ？」

「はい、実力は確認は取れませんでした。ゴブリンやオーガを従えておりました」

「まじか」

ちよつと力が有る程度の村娘かと思ったらモンスターを従えるほどの実力があるらしい。もしかしたらモンスターを服従させる特殊能力でもあるかもしれないとウルベルトは考える。それがどの範囲まで及ぶのか——

「ゴブリンとオーガだけか？ だったら亜人種のみかもしれないな」

「ほかには魔獣が一匹に、デスナイト一体です」

「監視の悪魔を撤退させろ。いや、もう洗脳されてる可能性有るから消せ」

魔獣はともかく、アンデッドのデスナイトを服従させるとは前代未聞である。下手に手出ししたら不味いとゾツとした。とにかくこちらの地盤が固まるまでは放っておこうと決めた。

——こうしてエンリの伝説が始まった。

などと村の外で自分がとんでもないことになっていいるとは思っても見ないエンリはいま、多くのギャラリーの中料理を作っていた。

事の発端は、外から来たゴブリンを村に置いておくのは危険だとアインズが言ったことだ。

「召還されたジユゲム達ならいざ知らず、野生のゴブリンだぞ？ いか暴れ出すぞ」

「それに関しては、ゴウンの旦那がチョイト脅かしてくればいいと思ってたんですよ」

強者に従うのがゴブリンやほかの野に生きる種の本能だ。一応はエンリが強者だとは言い聞かせているが、アインズの強さも見せれば絶対に逆らわないだろうとジユゲムは思っていた。

しかし、アインズは頭を振る。

「力で従わせても長くは持たん。俺が弱体化したら途端に牙を剥くだろうし、エンリが本当は強くないと知った時、奴らは下克上を狙うだろう。——そんな奴らはこ……追い出した方がいい」

エンリをチラリと見てアインズは言いきる。疑心暗鬼すぎるかもしれないが、ゴブリンは人間より力が強い。戦いに慣れていない村人を殺すのは雑作もないことだ。アインズが村にいる限りはそんなこ

とはさせるつもりはないが、どうしても村を空けなければならぬ事もある。

そんな不安の種を置いておくのは反対なのだが――、しかし、エンリは納得いかずむくれ顔でアインズを睨むのだ。

子供に弱い自覚のあるアインズはため息を付き、一つの提案をした。

「なら、アイツ等に人間に味方するメリットを提示するしかないな」

「と、言いますと？」

「つまり、従っていればおいしい思いをすると分かれば、その報酬目当てにエンリ達を助ける。つまりは給金を支払って用心棒になって貰うという事だな」

「なるほど、でもゴ布林達にはお金は何の価値もないし、財政が不安定ですからいつも同じ額を用意できないですよ」

「何もお金で給金しなくていい。現物支給にすればいい」

「現物・・・、つまりは食料ですか？」

「それじゃ、人間から奪う方が効率がいい。それよりも人間にお願いしないと手には入らないものだ」

ンファイレアが首を捻るので、アインズは自信満々に胸を張る。

「美味しい料理で奴らの胃袋をガツチリ掌握だ!!」

そんなこんなで、ゴ布林達の胃袋掌握大作戦！が始まり、エンリの苦難が始まった。

美味しい料理といわれても、日常的に簡単な料理しか作ったことのないエンリは、どうすればゴ布林達が満足する料理が出来るのか分からない。

そのため、街の料理を毎日口に行っている漆黒の剣のメンバーに、ゴ布林代表のジユゲム（彼らの間ではすさまじい争奪戦があったらしい）それとンファイレアが試食する事になったのだ。

エンリの肩にはカルネ村の命運がかかっているのだと言われるとすぐく逃げ出したい。しかし、いつもゴ布林達に何か恩返しできない

いかと考えていたエンリだ。頬を叩いて気合いを入れ、料理に取りかかった。

ちなみにアインズは料理の手伝いだ。味覚どころか舌自体ないから美味しい不味いの問題ではない。

「エンリ、あまり気に負うな。失敗しても全部ンファイレアが食べてくれる」

「ええ?!」

「どうせ、恋人の作る料理は何でも美味しいって言うに決まってるんだ。お前の役目は料理を残さず食べる係だ」

「あー、確かにそこらへんはンファイレアさんあてにならないわな」

彼氏の彼女の料理は美味いが一番信用ならない。そこはルクルツトも賛同する。幸せリア充は爆発しろ。

そしてンファイレアもエンリの顔を見て美味しくないとはどうしても言えないだろうと分かっていた。

「じゃあ、処分係も決まったし、張り切っていくか!」

覚悟を決めたエンリは腕まくりをするとエプロンを付けたアインズとネムと共に料理に取りかかった。――が、

「きゃーっ!!ゴウン様鍋から火がでてますよ?!」

「はっ!!アンデッドなのに意識が飛んでた!?!」

「テーブルまで切っちゃダメです!」

「なぜだ?!なぜ卵すら割れないんだ俺!?!」

「おねーちゃん!ゴウン様転んで材料ぶちまけたよー!」

「ゴウン様、台所立ち入り禁止」

シヨンボリ

なぜか料理をしようとするのと大惨事を起こすアインズに、さすがのエンリも仁王立ちである。正座してシヨンボリするアインズは材料すらさわらせてもらえなくなった。

「じゃ、ンファイアお願いね〜」

ネムがぐちやぐちやになった料理をンファイレアに押しつけるのを見た漆黒の剣。

(わぎとか?)

(わぎとじゃね?)

(わぎとである)

(わぎとだろくなく)

顔を青くしながらも、料理を食べるンファイレアの姿に漆黒の剣は同情的である。意地悪な舅だなあと呆れ顔だが、わぎとではない。

「おかしい、何で野菜すら切れないんだ?」

料理スキルを持っていないアインズは首を傾げるばかりだった。

ちなみにアインズの調理中に竈が大爆発したが、アインズから貰ったエプロンのおかげでエンリ達は無傷である。汚れどころか爆炎からも守る最強エプロンだ。

「そういえば、トブの大森林で何があったんだ?」

仕方なく、料理が出来るまでのつなぎトークをすることにしたアインズはずつと気になっていることを聞いた。

「たしか、森の東の主が入れ替わったって言ってましたね」

青い顔をしながらも料理を平らげたンファイレアが確認するとジユゲムが頷いた。

「大森林は基本的に3匹の主がいるらしいんですよ。西に魔蛇、東に巨人、で、南はハムスケさん」

「つまりハムスケレベルの主が森の奥に居るって事か」

アインズはふくと軽い相づちだが、伝説級が他にもいる事は普通の人間には恐ろしい事実である。漆黒の剣も強くはなっているがどこまで通じるものか……。

「で、その巨人、トロールだったわけですが、他の奴に負けて住処を追われたって訳ですわ」

まあ、自然の摂理で仕方がないことだ。ボスが他の強く若い雄に蹴

落とされるのなんて珍しくもない。ただし、カルネ村を襲ったことを許すつもりはないが。

「で、新しい主もトロールか？」

「いや、元部下のオーガ達に聞いたら見たことない奴だったそうのでかくてつよい。キバはえてた。こわい。」

「アイツ等の説明じゃ全然わからねえんですよ」

肩をすくめるジュゲムに、アイズはフムと拳を口に当てた。

「後で調査しておくか」

ハムスケなら東の主の縄張りも知っているだろう。

「どうですか？」

「うん、美味しいよエンリ」

間髪入れずンフィーレアが絶賛するが、アイズがチョップを入れて黙らせる。恋人の評価は当てにならない。

ジュゲムも「美味しいですぜ」ととりあえず褒めるが、じっくりと味を見てゴ布林やオーガの味覚に合うか考えている。漆黒の剣も真剣な顔で料理を食べていた。

「うくん、美味しいけど素朴な味だよな？」

「味の濃い街の料理に慣れてるせいかもしれないけどね」

「素材そのものの味が出ているのである。ただ、体を動かす者にとっては薄味である」

「・・・ゴ布林やオーガにとつちやもつと濃い方がいいかもなあ」

その言葉にエンリは落胆してしまう。けれど、みんなの意見を聞いて次はああしようこうしようと思いを巡らせる。

「ゴ布林って普段なに食ってたんだ？」

「まあ、基本雑食ですからねえ。木の実とか、動物の肉ですよ。ただ、料理っちゅう概念がないから生で食うのが普通かね？」

だから香り付けとかされても正直邪魔に感じるのだと、ゴ布林代表に言われると納得する。人間と違って野生の獣に近い食生活で、よ

くて焼いたりするくらいだろう。——ゴブリンの王国はどうか分らないが。

「じゃあ、ゴ布林さん達が美味しいと思うのは何ですか？」

「うーん、基本的には全部美味しいんですよ？強いて言えば体が暖まる肉入りのスープですかねえ」

「やっぱ肉か・・・、と全員頷く。体を即感的に暖めるスープも冒険者としては分かるし、ポリウム満点のお肉は皆大好きである。ただ、それだと特別感はない。

「誰でも作れるものだと、簡単に引き抜かれて裏切られる可能性もあるから・・・、特別な料理・・・、特別な肉・・・、ドラゴンステーキ？」

「キュピーンと目を光らせるアインズだが、さすがにそれはやめて欲しい。山脈の向こうにいるフロストドラゴンが、報復にこちら側にやってくるのは勘弁して欲しい。」

「美味しい料理ねえ」

「ドラゴンステーキを却下されてアインズは天井を見上げて考える。フロストドラゴンの肉もうまそうなんだがなあと、何となく姿を想像して、ふと、ある食べ物が浮かんだ。」

「アイスクリームとかどうだ？」

「あいす？」

「アインズの言葉に全員首を傾げる。知らないのかと、アインズも首を捻りながら知識の中のアイスクリームを語った。が、誰も思い当たる物がなく首を捻るばかりだ。」

「簡単な作り方なら解るが——」

「ゴウン様は台所に立たないでください」

「入れたら最後、大爆発と共に家が吹き飛びそうだ。かといって、この中で現物を知っているのはアインズだけである。」

「だが、調理も、味見すら出来ず、曖昧な作り方だけでその”アイスクリーム”とやらが出来るのか。不安である。」

「まあ、とにかく作ってみますか」

「エンリの前向きな姿勢にその場全員頷いた。」

試行錯誤の末、たまたまニニヤとのぞきに来たツアレの手によってそれっぽい物が完成した。実はツアレの料理スキルが高かった為、アイズの曖昧な説明でも”アイスクリーム”を再現出来た。

アイズが味見する事が出来れば、もつとなめらかなクリーム状だったとか、少し甘すぎるなどの評価が出来ただろうが、残念なことに現実世界では商品にならないアイスもどきであった。——が、そんなアイスもどきでも、冷たくて甘い食べ物に皆目を丸くして驚いて、味見と称して次々と手を伸ばした。

「あま〜〜い！」

「うむ、氷のように冷たいというのに柔らかく、口の中ですぐに溶けてしまうのである」

「牛の乳ってどうかと思ってたけど、うめーなこれ！」

「俺も初めて食べますよ！——モモンさんてもしかして結構上流階級の出なんじゃ？」

「うおお、美味すぎますぜ旦那」

皆大絶賛に、満足げに頷きならちよつぱり羨ましいアイズ。骸骨の身が恨めしい……。

ジユゲムが言っていた物と正反対だが、物珍しいだろうし、とにかくこれで報酬足り得る食べ物が出来たと見ていいだろう……。ドラゴンステーキも早々に確保しよう、未だ諦めていないアイズに山向こうのフロストドラゴン達の背中に悪寒が走っていた。

結果として大絶賛であった。

ゴブリンやオーガは食べたこともない物に驚き警戒したが、族長のエンリが食べてみせることで危険はないと理解させた。

そして、自然界では得ることが出来ない甘みに興奮し奪い合いまで始まりそうになった。しかし、欲張りすぎる者には罰が下る魔法がかけられており（ただの頭がキーンとする現象）おとなしく与えられた分を舐めるように食した。

「この村のために働いたものには褒美としてこのアイスクリームを与えよう！」

アインズの言葉に、歓声を上げた新しいゴブリン達やオーガ達は仕事をくれとエンリに殺到するが、ジユゲムが止めて手筈通り仕事の割り振りをする。思っていた以上に成功して大満足だが、今はまだ暖かい季節だから成功したにすぎない。冬までに何とかフロストドラゴンステーキをと不穏な空気を出すアインズをンファイアが呼びびに来た。

「ハムスケさんの準備できました」

「わかった。すぐ行く」

村のことが一段落したら、東の森の調査に行くことにしていた。

どさりと、衛兵がまた一人地面に沈んだ。

あまりにも静かな襲撃に、カジットは冷や汗を流しながらも「やはり・・・」と悟ったように目の前の存在たちを睨みつけた。

ズーラーノーンの高弟達が、我々を見逃すはずがない。フードを深くかぶった者達の顔は見えなくても、長らく同じ者を師と仰いでいたのだ。見えずともその正体はしれた。

隣の檻のクレマンティヌはぼんやりと奴らに目をやるが、興味なさげに視線を外した。別に侮っているのではない。心を折られてしまったため何もかもがどうでもよくなっているのだ。あの怖い存在に会うくらいなら死んだ方が楽かもしれないと考えるほどには心が衰弱していた。

けれど、何かの気配に気がついたのか目を見開くと、カジットの檻にすがりつく。カチカチと、小さな歯のぶつかる音が響き、カジットの袖を引きちぎらんばかりの姿に、カジットは訝しげに眉を寄せた。クレマンティヌがここまで怯える存在など、ズーラーノーンにい

ただろうかと正面を見据えると——高弟達が道を開けてひざまずいた。

そしてようやくカジットも気がついた。その奥にいる存在に。ゆつくりとこちらに歩いてくるその姿を見て、カジットは全身に鳥肌が立った。言葉は発せられず、はくはくと口を開閉する事しかできない。一步一步近づいた際に、クレマンティーヌの怯えが痛いくらい伝わってくる。怯える少女の手を取り、震えながらも握り返す。……偽りでも、安心させることが出来ればいいと思って——。

カツリ

檻の前までやってきたその存在をカジットは震える声で表した。

「邪神——さま」

呼ばれた存在は笑ったようだった。そして格子をすり抜けるように入ってきた。カジットには逃げる場所はない。クレマンティーヌは邪神が近づいてきてもカジットから離れようとはしなかった。

「……死の宝珠はどこだ？」

水死体を思わせる目がギョロリと此方を伺っている。カジットはカラカラになった唾を飲み込みながら答える。

「ここには、ない。制御できる者に託した」

「——ほう？」

シユルリと触手がカジットの頬をなでる。その気持ち悪さに顔色を悪くしていると、隣からわずかな殺気を感じた。みれば、震えながらも邪神を睨みつけるクレマンティーヌがいた。余計な刺激を与えるなど引つ張るがカジットを邪神から離そうというのか逆にギユウギユウと引つ張られてしまう。

「では、誰に渡した？」

「——お前に言うつもりはない」

目が覚めもはやズーラーノーンに戻るつもりなど欠片もないカジットは、邪神を睨みつけてやる。もうこれ以上他人を不幸にするつもりはない。

あの方であればあの呪われた石も正しく使えるはずだ。邪神に、渡すわけにはいかなかった。

このまま殺されようとも構わないと睨みつけていると、邪神はため息を吐くと「まあいい」とあつさり諦めた。

「まあ、ちょっと興味が有っただけだ。問題ない」

シユルリと触手が引いていきホツと息を吐いたのもつかの間だった。水掻きのついた異形の手がカジットの頭を掴んで持ち上げた。

「がっ?! な?!」

「カジッちゃん!!」

掴んでもびくともしない青白い手にカジットは己の運命を悟る。人の命を弄んできた自分に相応しい最後だろうと他人事のように思った。

「カ、ジッちゃんをはなせええっつ!!」

どこに隠し持っていたのか? クレマンティーナが短剣を邪神の目玉にめがけて投げつけるがあつかりと触手にキャッチされてしまった。

「っーバカ者め!!」

すぐさま触手に捕らえられ首を絞められるクレマンティーナにカジットは必死になつて邪神に訴える。

「そ、その娘は助けてやってくれ!! もはや心折れて何も出来ないだけの幼子と変わりないのだ!」

必死に言い募るカジットを見て、そしてヒイヒイと泣くクレマンティーナを見る。さつきまでの威勢はどこへやらで、怯えて震えている。

「カ、ジっちゃん、カジ、ちゃん——っ」

親にすぎるような目をカジットの向けているのを見て邪神は「フム」と一つ頷いた。

「が? あ、ア”ア”ア”ア”——っっっ?!」

「カジちゃっ?! やだああああああっ?!」

邪神が何かの魔法を使用したらしく、カジットは頭の中をぐちゃぐちゃとかき回されるような不快感に悲鳴を上げた。逃れようとバタバタと手足をバタつかせるが、何の抵抗にもならず、やがて手足がだらりと力なく垂らされ、床に捨てられた。

再び、娘を見ればそこに怯えなど何処にもなく、あるのは憎しみに歪む醜い顔だった。

「ゴ、ロス絶対殺す殺してやる殺してやる絶対絶対みんな殺してやる」呪詛を吐き続ける娘に邪神はゆっくりと頭を掴んだ。

「おい、姐さんに知らせてこい！村に向かって武装した集団が向かってるって!!」

t o b e C o n t i n u e d . . . ?

請負人

「やべ、あれ半魔^{ネファイリム}巨人じゃん」

東の森を調査しに来たアインズは、オーガやトロール相手にビシバシ稽古を付ける半魔^{ネファイリム}巨人を見つけてしまった。

たぶんあいつが新しい東の主なんだろう。ただのトロールが勝てる訳なかった。

「強いでござるか殿？」

「んー・・・、たぶん俺より強いなあれ」

アインズより強いと聞いて驚愕を露わにするハム助を無視して、相手が使っているスキルや技を見てほしいのレベルを推測する。

「高レベルにならなきゃ使えないスキルもあるし、少なくとも80レベル——いや、高めに見積もってMAX levelと見よう。前衛職ほいし、うくん。アイテム使って不意を付けばあるいは勝てるかもしれないけど、不用意に喧嘩するのは得策ではないな」

朽ちた大木に身を隠しながら分析していたアインズはふと、後ろを振り返った。

「——で？お前は何だ」

「っ?!ひえええ!わ、ワシが見えるのか!?!」

「うるさい静かにしろ、気づかれるだろ」

姿を消してコソコソ此方を伺っていたのは西の魔蛇、リユラリユース・スペニア・アイ・インダルンというナーガだった。

最近代替えた東の主が恐ろしく強く、いつ自分の縄張りを荒らされるかと戦々恐々していて、ここは南の魔獣と手を組もうとハムスケを探していたという。しかし、見つけた魔獣のそばにはこれまた恐ろしいアンデッドがいるので様子を伺いここまで付いてきていたのだ。

不可視化を無効化出来るアインズには間抜けにヒョコヒョコ付い

てきているようにしか見えなかったが。

場所を移動し、改めて話を聞く。リユラリユースは東の主の代替わりを不本意にも目撃したらしい。たまたま前主のグと話すことがあり、東の森に来ていたら縄張りに侵入者が現れたとグの部下が知らせに来た。すごく強いと言うことで、グが直接侵入者を殺すと言いいリユラリユースはそれの見学をする事になったのだが――。

「結果、グの奴は負けてしまい。東の森の支配権を手放すことになったのです」

見たこともない怪物に、警戒しろ用心しろとグに忠告したのだが鼻で笑ってそのまま力任せにつっこんでいったのだが、あっさり返り討ちにしてしまったのである。いったいこの森に何の用かとリユラリユースが震える声で問えば住処を探していると返答があった。つまりはグの縄張りを奪いに来たのだ。それに怒ってグの奴が再び怪物に向かつていくがまるで相手にならずあっさり敗北した。

「グの奴は付いてくるわずかな部下を連れて森を離れ、ワシは姿を消して自分の森に逃げ帰ったのです」

あのグをもものもしない怪物にリユラリユースは怯えていた。あんな奴が自分の縄張りに来たらひとたまりもない。いつそのことこの森から逃げ出すべきかと考えるほどである。しかし、別の住処を探して生きていける保証はない。

リユラリユースの話聞き、アインズはフムと先ほどの半魔^{ネファイリム}巨人を思い出す。

「――お前に手を貸してもいいぞリユラリユース」

アインズという言葉に魔蛇は驚きの顔を見せる。アインズの実力は話の前に軽く見せた（脅した）ので十分すぎるほどわかっていた。

「あの半魔^{ネファイリム}巨人は我々にも驚異だ。あれが此方側に侵攻するというのはあれば我々もただでは済むまい――、だから手を組もう。元々そういうつもりだったろう?」

「それは、まあ」

「ま、お前としては私をアレにぶつけて共倒れが望ましいのだろうか?」

「いいいいいいえ、そんなことは——」

わかりやすい動揺に、アインズは笑ってしまう。誰だっぺおいしいとこどりをしたいものだ。

「まあ、そうはいつても此方から仕掛けることはしない。もしかしたら東の森だけで満足する可能性もあるからな、余計な藪をツツいて蛇を出すこともあるまい」

そこはリユラリユースも同意である。グの奴は自分の力を過信して余計な喧嘩を売り、結果すべてを失っている。そんな二の舞になるつもりはない。

「では、私の縄張りを侵し始めたら撃退の協力をしてくれるということですか」

「——うん、話が早いな。ハムスケ、リユラリユースのが森の賢王にぴったりじゃないか？」

「そ、そんなら、とのく見捨てないで欲しいでござるくく!!」

でかいハムスターがスガリツいてくるが、アインズははなからハムスケに期待はしていない。

「その代わりといつては何だが、不可侵条約を結びたいがどうだ？」

「——まあ、今の縄張りを失うよりは数倍良いですからな受けましょう」

よしよしとアインズは頷く、言ってしまったえばカルネ村に被害さえなければどうでも良いのだ。ならば此方側に被害が広がる手前、リユラリユースの縄張りでくい止められればアインズはそれでいいので、リユラリユースと同盟を組んだのだ。——もし、あの半魔^{ネファイリム}巨人が東の森で満足するというのならそれでも良い。それでリユラリユースが縄張りを広げるために此方側に侵攻する可能性もあったが、この条約によりそれも消えた。

まあ、ナーガにもそう悪い条件ではないだろう。東の森が攻めてきてもアインズが助けてくれるのだ。それにあの半魔^{ネファイリム}巨人を倒せたら、東の森はリユラリユースにまるまる渡すつもりだった。——可能性はかなり低いが。

「^{メッセージ}伝言」は使えるな。定期的に連絡を取り合い、情報交換をしよう。

どんな些細な情報でも何かの役には立つからな、そのかわり此方からは・・・そうだな何か提供できるものでも考えておこう」

そういつてアインズが右手を差し出すと、察したリユラリユースも枯れ枝のような右手を差し出して固い握手を交わした。

とても目のあたりがよい大きな木の上に、まるで大きな鳥の巣のよ
うな固まりがチョココンと鎮座していた。中を覗けば黒い粘液がなみ
なみと入っているのが見える。が、それはただの液体ではなく、命あ
るスライムである。深く眠っているのか、見ているだけでは液体が零
れもせずにたまっているように見えるが、軽くツツいてみれば嫌がる
ように液体がへこみ自然ではあり得ないさざ波をたてた。

「うう~~~~、すみません。必ず期限までには仕上げますのでもうし
ばらく待つてくださいい~~~~」

——うなされている。申し訳なくなつてそつとそこから離れた。

依頼で出会つたスライムのへろへろさんは、ハムスケの縄張りで暮
らしている。近くに半魔^{ネフイルム}巨人が現れたので、一応気をつけてと言いに
来たのだが——、深く眠っているのを無理矢理起こすのはやめてお
こうとアインズはふわつと巣のある大木から離れた。

「スライム殿はいかがお過ごしでござるか殿？」

「あーうん、かなりお疲れみたいだからそつとしておけ」

ハムスケはへろへろとは面識はない。ただ、主君が連れてきた客人
なので丁重に対応しようとしているのだが、いまだ会えずじまいであ
る。というよりいつなら起きているのか全くわからない。寝ている
ときに木を揺らしてよじ登るといふ失礼は出来ない。

「残念でござる。今日こそご挨拶できると思つたのでござるが——
」

「まあ、今まで苦勞していたみたいだし気が済むまで寝かせておけ」

挨拶できなくて残念だと思つるのはアインズも同じである。だが、起

こしてまですることではないと諦めて、カルネ村へ〈転移門〉を繋げた。

「もうお帰りになるのでござるか・・・」

出来ればカルネ村まで送りたいとハムスケは言うが、アインズはその僅かな時間も惜しいのである。

——自分がいない間、ンファイレーアがエンリとイチヤイチャしていると思うと無い腹が立ってしょうがない。それを言えばハムスケも呆れたようのため息を付いた。

「姫も大変でござる。子孫を残すのは生物としての急務でござるのに・・・」

殿の娘御ということではエンリとネムを姫と呼んでいるハムスケは、なぜアインズがその生物の急務を邪魔するのか理解できないでいる。アインズが生物であれば自分の子孫を残したいから他の雄の邪魔をするのはわかるが、スケルトンだし、エンリは娘であるし、ハムスケには訳が分からないでいた。

「何か言ったか？ハムスケ」

「なーんでもないでござるー」

そうか？と小首を傾げたアインズは、それじゃあ後は頼むと黒い空間に消えていった。

「・・・ウウム、拙者のつがいが見つかったら殿には黙っておくべきでござろうか」

ちよっぴり自分の心配も始めたハムスケだった。

カルネ村は騒然としていた。武装した集団が此方に向かっていると聞くと、顔を青くする村人が多数。まだ自分の村を焼かれた心の傷が癒えておらず、誰かを探すように不安げにあたりを見渡している。それが誰かなんて、エンリにも判る。どうしてこう言うときに限っ

てやっかいごとが起こるのかと、神様に問いつめたくなる。しかし、もしかしたらただの冒険者の可能性もあるので、まずはジユゲム達に確認に向かってもらった。

すると、やはり冒険者風であるとの報告にエンリは少なからずホツとするが、不審な点が多いとジユゲムは言う。

「冒険者ってーのは身分証明にプレートを下げてくもんだが、ぱつと見プレートが見あたりねえ。まあ、距離あるし、見落としたかもしれないやせんがね」

次に、冒険者にしては大所帯だ。おそらく数チームが集まっているのだろうが、そこまで人数をそろえるような事があるのか？普通の依頼では、報酬の配分がかなり少なくなる。となると、全員に十分行き渡る報酬を約束するような大きな依頼がある事になる。

ジユゲムはとっさにアインズの討伐を頭に思い浮かべたが、アインズが外でハマした話は聞かない。次に考えられるのは、トブの大森林の東の森の主の交代である。主の交代により、森が騒がしくなり周辺の村に被害が出ていても不思議ではない。それで、冒険者が数チームで組んで森の調査に来たのなら話は分かる気がした。

「でも、それなら漆黒の剣の皆さんにも話が行ってるはずだよな？」

アダマンタイト級冒険者には釣り合わない仕事かもしれないが、エンリが前にモモンの名前を出したのだから、話だけでも行くはずだ。が、ペテル達から何の連絡もない。

そして最後に、彼らはすでに戦闘をした後らしくボロボロである。おそらく重傷者もいるようだ。しかし、助けを求めるならエ・ランテルへ向かうはずである。カルネ村が近かったとしても、森が近いこの村を負傷した冒険者が選ぶだろうか？モンスターとの遭遇率を考えれば街道に沿って町に行きそうなものだが――。

「まあ、地図を無くしたとか、一刻の猶予もないけが人がいる可能性も無くはないんですがね」

どうにも不信感が拭えないジユゲムに、エンリも少し考える。確かに疑問も沢山あるが、けが人を見捨てるのも嫌である。しかし、村長として村に何かあったら一大事だ。何かの罍の可能性も捨てきれな

い。

「アインズに連絡しようかとも思ったが、相談する時間もなさそうである。」

「・・・ちよいと乱暴な手を使いましょうか」

ジユゲムの提案にエンリは仕方がないと同意した。

村に訪ねに来た者達をおびき寄せると、隠れていたゴブリン達が囲い込み武器を捨てさせた。相手には気の毒ではあるが、村を襲う危険性を排除するには有効であろう。

思ってもみないゴブリンの登場に相手は目を白黒差せていたが、集団の中で一番の手練れと見られていた老人が抵抗しない方がいいと言えば、皆疲れたように武器を手放した。

此方が主導権を握った後に、相手の状態を確認すればやはり人が多数いた。ンファイレアに薬草とポーシオンを頼めばすぐに取ってくるよと走り出す。

魔法詠唱者マジックキャスターに気をつけながら冒険者風の者達を観察すると、やはりプレートが見あたらぬ。ここに来た目的を聞いてもどうも納得できない。

「我々はモンスター討伐に来たのだが、強いモンスターと出くわしてしまい。深手を負ってしまったので近くの村に薬草を分けてもらおうと来た」

その答えにエンリも眉を潜めた。この辺りはアインズ扮するモモンが殆どの強いモンスターを討伐してしまっている。そのため、それほど強いモンスターなど森の奥以外にはいないはずである。それに、カルネ村周辺のモンスター情報はモモンが優先的に依頼を受けているはずである。

怪しい集団に村人も互いに顔を合わせてヒソヒソと不信感を見せている。

秘匿性のある依頼かもしれないが、やはり信用できないとジユゲムの顔も険しくなる。何よりエンリが気になるのが、他の者とは少し違った様子の二人だった。とてもきれいな女の人ののだが、武器も防具ももっておらずボロボロの衣服を纏っていた。薬草やポーシオン

を持ってきたンファイアに聞こうとすると眉を寄せ、手伝いに来たツアレが顔を歪ませた。

「たぶん、アレはエルフの奴隷じゃないかな」

言いづらそうにそういったンファイアに、エンリは目を剥き嫌悪感を露わにする。奴隷を連れてくる事にますます不信感を募らせていると、若い男がエンリに話しかけてくる。ヘツケランと名乗った男は不信感をもたれていることが判ったようで、さっきの話は嘘だと気軽にあかして見せた。

「ちよつとヘツケラン!？」

「しようがないだろ？下手な嘘ついてけが人抱えたまま放り出されても困るのは俺たちだ。——悪いな、詳しいことは契約上いえないんだが、少なくともこの村に悪いことをしに来た訳じゃないんだ。傷薬をもらったら早々に立ち去るよ」

ヘラつと笑いながらも真剣な目を向けるヘツケランにエンリはどうしようかとンファイアを見つめた。恋人に見つめられ、ンファイアは僅かに考えると頷いて見せた。

怪しき満載ではあるが、けが人がいることは事実だしこの村に危害を加えないと言うのであれば、放っておいても大丈夫だろう。村に留まらないとも言っているし。エルフの奴隷も気にはなるが、だからといってどうすることも出来ない。

仕方がないと、エンリも渋々頷こうとしたときだった。エンリの横に見慣れた闇がぽっかりと口を開けた。

ヘツケランは今回の依頼は人生最大級のハズレだと、墳墓の中を逃げ回りながら思った。

帝国の貴族が起死回生をねらって、未発見のこの墳墓の調査という名の宝漁りを、請負人の”ヘビーマッシャー””天武””緑葉”そしてヘツケランのチームの”フォーサイト”に依頼したのだ。

今帝国の鮮血帝にはある噂が囁かれている。皇帝に悪魔がとり憑いたという噂話。——それは今まで処刑してきた貴族達の呪いで召喚されたとか、死んだ貴族が悪魔に生まれ変わって皇帝をとり殺そうとしていると帝国国民の間で噂になっている。事実、ここ数ヶ月皇帝の様子が少しおかしいらしい。

何にせよ噂の真相より、皇帝の力が弱まっている事実が貴族には重要で、今のうちに力を蓄えようと遺跡の宝を狙って動いたのだ。

他国の未発見の遺跡の調査は犯罪である。しかし、目の前にぶら下がった未知のアイテムと多額の報酬に目がくらみ、ヘツケラン達”フォーサイト”はこの依頼を受けた。——仲間の事情も多少は入っているが、本当に多少である。アルシエという仲間の問題が無くてもほぼ受けただろう事は全員判っている。

しかし、もつとよく考えるべきであったと逃げ回りながらヘツケランは思う。

この墳墓には確かに宝があった。それはもう輝かんばかりのお宝がすぐに見つかったのだ。そうなれば、もつとあるだろうと奥に進むのが人間である。はじめはまだ良かった。墳墓に巣くうモンスターは確かにいたが、それほど強くは無かった。しかし、奥に行けば行くほど敵は強く、そして巧妙な罠が待ちかまえている。それでももう少し先に行けるのではと考えてしまったのが間違いだった。

初日はそれぞれのチームで探索していたが、敵が強くなってこれ以上進めないと判断し地上に戻った。そして合流後、次はチームを一つにまとめて進もうという提案が出た。”天武”のエルヤーが不満げな顔になったが、”緑葉”のバルパトラがなだめる事によって渋々承諾したが、正直ここでエルヤーを外せば良かったのだとヘツケラン達は思った。

墳墓にはさらに奥があり、さらに下に続く階段があり敵が手強くなっていった。帰りのことも考えて慎重に進もうとしているのに、エルヤーはドンドンと先に進んでいってしまう。己の腕を過信しているからだ。そして仲間という名の奴隷を囷に使ったり、罠がないか確認するために先に進ませるといふ外道な行為に、他の請負人^{ワーカー}達は顔を

不快げに歪ませて内心エルヤーを軽蔑した。

しかし、それを声に出してしまえば敵地での仲間割れとなり、互いの命が危険にさらされてしまう。だから、さりげなく奴隷のエルフの娘達をかばうように率先して先に進んだり、八つ当たりの怒りを逸らすために話しかけたりと、むしろ墳墓よりエルヤーに対しての注意が強かっただろう。

そのため、普段であれば深入りしすぎたと顔を青くする程の奥地まで入り込んでいた。

チーム別でいたらおそらく死んでいただろう相手を何とか倒し、そろそろ戻るべきじゃないかと”ヘビーマツシャー”のグリーンガムの言葉に殆どの者が同意する中、またもエルヤーが異を唱え、さっさと先に進んでしまった。今までと雰囲気が違う場所に出たと感じるまもなく、エルヤーは地獄の扉を開けてしまった。

結果、ヘツケラン達は墳墓内を逃げ回っていた。とんでも無い敵との遭遇にエルヤーは敗北し心をへし折られ、涙と鼻水を垂れ流しヘツケラン達を置いて逃走。

そして、おそらくこの墳墓の主であろう美しい少女の姿をした化け物に追われ、ヘツケラン達は全力で出口を探して逃げ回る。

何処をどう通ってきたのかもはや判らない。化け物の他にも大量のモンスターが行く手を阻む。はじめは何とか撃退できても徐々に体力が奪われ苦戦してゆく。後ろからは鈴のように軽やかな少女の笑い声が追いかけてくる。なぶるように地下だというのに黒い日傘をクルクル回して歩く。嘗められていると判っていても誰も怒りなご沸かなかつた。竜狩りも成功している。パルパトラでさえも、アレと対峙すれば死ぬと理解していた。

だから、とにかく逃げる事を優先した。

何度も死を覚悟しながら進むと神のご加護か、上に続く階段をようやく発見し上の階層に足をもつれさせながら登り切った。

途中、イミーナが転び階段の上で倒れ込んでしまった。正直に言えばイミーナはここで死んだと思った。すぐそこまで化け物が迫っているのだ。助けに戻る無謀者などいないと思われたが、ヘツケランが迷わず助けに向かった。

公言はしていないが二人は恋人同士であった。本来であれば見捨てて行くのが正しい行為だというのに、ヘツケランは戻りイミーナを助け起こした。それを見て、パルパトラは愚かなことをと吐き捨てながらもその場に留まる。別に老い先短いから若い者達の為に犠牲になろうというわけではない。このままでは追いつかれるのは目に見えている。だからヘツケランとイミーナを攻撃している間に己の最大の技を叩き込み、歩みを鈍らしてから逃走するつもりである。

しかし、そんな老公の謀など知らない若者達はその姿に感動し、震えながらも武器を手にその場に立ち止まった。

——しかし、待てど暮らせど化け物は追ってこない。恐る恐るヘツケランが下をのぞき込めば、つまらなそうに見える少女と目があった。チビリそうなほど震え上がったが、興味を無くしたように化け物はクルリと来た道に戻っていった——。

そこから何処をどう通ったのかよく覚えていないが、何とか地上に這いだとヘツケラン達は少しでも墳墓から離れたいと休む間もなく逃げ続けた。拠点に戻る勇氣もないので宝は放置された。

出来ることならそのまま帝国に戻りたいが、重傷者も少なくないためどこか安全な場所で傷を癒さなくてはならない。エ・ランテルに向かいたいが、仕事の内容上大きな町には寄れない。そうなれば10Km程離れた場所にある集落に身を寄せるのがいだろう。そうして、地図上では小さな村に身を寄せることにしたのだが——。

実際の村を見て、請負人達は度肝を抜かれた。もはやちよつとした要塞の様な村である。森が近いために守りを頑丈にしているのかもしれない。

ヘツケラン達はむしろ村が強固なことに少しホツとする。

無いと思うが、あの墳墓から化け物が追ってきているのではないかと何度も振り返ってしまうのだ。これほど頑丈な壁に囲まれていると思えば少しだけ安心できる。

などと考えながら畑で作業をしている村人に声をかけたらゴ布林達に囲まれて捕まってしまった。

意外なことに、この村はゴ布林とオーガなどと共生しているらしい。驚きはしたが、そこまで不思議なことではないだろう。まれにゴ布林達を手懐けたり出来るタレント持ちがいたりするのだ。おそらく、ゴ布林達と話している娘がその特別な才能を持っているのだろうとヘツケラン達は考える。

ここは穏便に話を進めようとヘツケランは友好的な態度で話しかける。嘘も見抜かれているようだから、あえて話が嘘であったことを明かして謝罪する。——そうすれば、僅かにも此方を信用する空気が生まれるものだ。すると思った通り、不審な目の奥に困惑した色が滲み戸惑いが生まれる。そして、傷薬やポーションは提供しようと言う雰囲気になった。出来ることなら休む場所も借りられればと交渉しようと言うときだった。

村の少女の横に闇が出現し、ヘツケランは硬直した。

その闇は墳墓の中で散々目撃したものだ。化け物を振り切つたと安心する間もなく、その闇が生まれてそこから化け物が現れるのだ。

まさかここまで追ってきたのかと、顔を青くしてヘツケラン達は後ずさった。

——しかし、そこから現れたのは別の存在だった。

肉も皮もない骨だけの姿にローブ姿に、ヘツケランはエルダーリツチだと肩の力を抜く。エルダーリツチも油断できないモンスターではあるが、あの化け物よりは遙かにマシである。

背後のグリンガム達もホッと力を抜くのが判った。まだ敵か味方が判らないが、一体だけのエルダーリッチなら何とでもなると――

――その少女以外請負人ワーカー全員が思ったのだ。

「――おげえええええっつ!!!」

「アルシエ?!」

突然嘔吐した仲間の少女にイミーナはかけより、そして原因であるエルダーリッチを睨みつける。奴が現れてすぐにアルシエが吐いたのだ。どう考えてもエルダーリッチが何かしたと思うだろう。「何をしたの!?!」と怒鳴るイミーナにアルシエがスガリツキ必死に訴えた。

「みんな逃げてー!そいつは化け――おえええええっ!!」

全員アルシエの様子に呆気にとられ……。そして戦慄した。アルシエのタレント能力は全員知っていた。”相手の魔力量を見抜く”その能力でエルダーリッチを”見た”アルシエの反応は尋常ではない。涙を流して怯えるその様子は、あの化け物に追われていた時以上である。

落ち着かせるために〈獅子のごとき心〉をかけ、冷静さを取り戻したアルシエがエルダーリッチの恐ろしさを震えながら言った。

「そいつは、化け物!人が勝てるような存在じゃない!!あのフルーダでさえも勝てない!!」

その言葉に絶望の色に塗り替えられる。そんなわけがないと笑い飛ばすことなど出来ない。なぜなら、アルシエはフルーダの魔力を”見て”いる。そのアルシエがフルーダ以上と言えればそれは紛れもない事実である。

もはやこれまでかと、イミーナとアルシエを無駄と判っていないながらも背後に隠しながらエルダーリッチを睨み上げ――ようとして目を見開いた。

「――へ?」

なにやらエルダーリッチが顔を覆ってしゃがみ込んでいる。何事かと目をぱちくりしていると、ものすごい弱々しい声が聞こえた。

「……………初対面の女の子が吐くほど、

オレって気持ち悪いのか？」

すさまじく傷ついていた。横にいた村娘が慌てて慰めている。周りで様子を伺っていた村人はなぜか殺気だち、ゴ布林達もオロオロとエルダーリツチを伺いながらも此方の警戒を緩めない。

「そ、そんなことありませんよゴウン様!!きつと突然現れたからびつくりしたんですよ!!」

「おめーら失礼だろうが!!ゴウンの旦那はこう見えて繊細なんだぞ!!」

村人もこぞつてゴウンと呼ばれたエルダーリツチを励ましにやってきて、アルシエ達を睨みつける。

「ゴウン様が気持ち悪いなんて絶対ありませんよ!」

「・・・そうは言ったって、お前だつてオレと初めて会ったとき——」
恨めしそうに村娘を見上げたエルダーリツチが、何かを言い掛けて慌てて立ち上がった。

「・・・あゝいや、すまん何でもない。うん、忘れた。忘れたから気にしなくて良いぞ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ゴメンナサイ」

今度は娘が真っ赤になってうずくまったので、初対面で何かあったのだろう。逆に慰める側に回ったエルダーリツチに、ヘツケラン達はポカンと間抜けな顔をしてしまう。それに気づいたエルダーリツチが、ゴブリンのリーダー格に近づき何かを囁き合い、頷きあうとゴ布林達がヘツケラン達を取り囲み、剣を向けた。

「——悪いが、しばらく拘束させてもらおうぞ」
ヘツケラン達は抵抗するすべを持たなかった。

死の騎士

「うわあああつ!!寝過ごしたあああつ!!」

ガバリと起き上がり、時間を確認するために目覚ましを確認しようとして——ポカポカと、暖かい日差しに思い出す。

「あ……、そっか、もう仕事行かなくていいんだっ……」

べしやりと寢床でつぶれたスライムは、サワサワと風に揺れる木の葉を眺めながらどれほど眠っていたのだろうかとぼんやりと考える。

「——もう起きなきゃ、やることはいっぱいあるんだし……。ああ、そうだ。モモンさんにも挨拶に行かなきゃだし——」

しかし、優しい木漏れ日と森の音楽がスライムを優しく撫でる。ストレス社会で生きてきたスライムの心を癒してくれる場所に、なんだか瞼が重くなっていく——。

「……もう、ちよつとだけ——寝てもいいかな?」

二度寝どころか睡眠もままならなかった頃とは違うのだ。ウトウトと幸せな睡魔の誘いに誘われるように瞼を閉じる。

「次起きたらにしよう。もうちよつとだけ——あと、5、ふんだ、け」
スウーと眠りについたスライム。ちなみに彼のもうちよつとはこれで二桁を越え、繰り返されたもうちよつとは一ヶ月を越えた。

その頃エ・ランテルに到着した漆黒の剣は冒険者組合に呼ばれていた。モモンが一緒にないことに組合長が少しがっかりしたようだが、

ペテル達もアダマンタイトに相応しい実力を持っているので、気を取り直して事の顛末を説明し始めた。

以前エ・ランテルで事件を起こしたズーラーノーンの二人が襲われたのだ。犯人はおそらく、他のズーラーノーンの幹部だろうと予想されている。

「二人は拘束されていたとはいえ実力はオリハルコンに匹敵する。その両名を襲撃したのだからただの構成員のはずはないだろう」

それは実際に対峙したペテル達も納得する。あの二人を襲うとなると相当の実力者である。

「それで、カジットとクレマンティヌは殺されたんですか？」

ペテルの問いに、意外にも組合長は首を横に振った。

「命に別状はない——ただ、記憶を消されている」

「記憶を？」

ちらりとニニヤを振り返れば首を振られる。記憶を消す魔法はニニヤでも知らないようだ。もしかしたらモモンが知っているかもしれないが、少なくとも”普通の人間が行える範疇”を越えている。

「魔術師組合でも総力を挙げて調べているが今のところいい結果は得られずにいる」

ズーラーノーンの貴重な情報源を失ったことに、組合長は悔しげである。

降伏したとはいえ、高弟の二人の実力を警戒し慎重に情報を引き出すとしたのが仇となった。

大きな事件も立て続けに起こっていたので、たいした事情聴取も出来ていなかった。

「——それで、二人は今どうしているんです？」

「それは見てもらった方が早い」

そういつて、ある部屋に通された。そこには手足を拘束され俯いた状態で座っているカジットがいた。

ゴクリと喉をならしたペテル達はその部屋に一步踏み出した。

「ゴウン様が、ここを出て行くとおっしゃられた」

ザワリと、カルネ村の村人達は元村長であった男の言葉に驚いた。隣には俯いたエンリもいる。

「な、なぜですか?!ゴウン様は我々をお見捨てになるのですか!?!」

「違います!...ゴウン様は私たちを守るために村から出て行く」と
悲しげなエンリの顔に、声を荒げた男が口を噤んだ。

「村に、強いアンデッドがいることが知られたら国から討伐隊がくるだろう。もしかしたら、アンデッドに支配されたと見なされて村を焼かれる可能性もある。だから、村に迷惑が掛からないように出て行く」と――」

そう、ゴウン様はおっしゃったのだと言う言葉に、村人は悲痛な表情を浮かべた。――そしてどうしてと、怒りが沸いている。

アインズは自分たちの救世主だ。襲われた村を救い、村を焼かれてしまった他の村人すら受け入れ、復興に尽力してくれた。さらには村のために冒険者にまでなつて金を稼ぎ、守護してくれた。

――そんなアインズを、アンデッドだからと排斥し、害そうとする者に殺意が芽生えてくる。

王国が我々に何をしてくれた?アインズを傷つけようと言う者こそ悪ではないのか?

「――ゴウン様が出て行く必要なんかない!王国がなんだ!ゴウン様を追い出そうというのならオレは戦うぞ!」

家族を亡くした男がそう叫べば、同意の声がそこかしこから上がる。しかし、国を相手に勝てるはずもない。そこで、静かに話し合いに参加していたゴブリンが手を挙げる。

「さすがに国相手じゃみんな死んじまいます。――ここは王国に知られる前に口封じしちまいますよ!」

エンリを危険にさらすわけにはいかないと、ジユゲムはそう提案する。

アインズが出て行くことでとりあえずの危険は回避できるだろうが、その後強い外敵が現れたら？エンリを絶対的に守護してくれるアインズを失うのはジユゲムたちにとっても打撃である。

だから、アインズが出て行く原因を取り除けばいいと考える。

「旦那の存在が国にバレなきやいいんすよ。あの集団が外に漏らす前に殺しちまえばいい。——なに、皆さんはなにもしなくていい。傷ついた冒険者がモンスターに殺されるなんてよくあることですから」その言葉に戸惑う者もいるが反対する者はいなかった。エンリでさえも仕方がないと思う。

「……ただの通りすがりの人間とアインズを比べる必要もないと。今まで同じ人間にひどい目に遭わされてきた村人は極度の人間不信に陥っていた。」

「失敗したな」

はくあ、とため息を吐くアインズは荷物の整理をしていた。

「まさか部外者が村の中にいるとは思わなかったもんな」

特に確認もせずに〈転移門〉を使ってしまったのが間違いである。まあ、それだけだったらいくらでも誤魔化しようがあったのだが、まさか探知系魔法を使っていたとは——。

「だいたいはただのスケルトンとかエルダーリッチだと思われて、警戒はされてもほっとしてもらえたんだけどなあ」

ゴブリン達もそうなのだが、そこまで強いモンスターと思われていないので、どうにかなると思うらしく村に移住した住人もしばらく警

戒するがだいたい慣れてしまうのだ。

慣れてしまえば親切だし、いろいろと手伝ってもらえて便利だし、たいていの問題はアインズが解決してくれるのでなかなか友好的な関係を築けてきたと思う。

しかし、今回はアインズの実力を見抜かれてしまっている。超絶強いアンデッドが友好的に接してきても何かの罠だと疑うだろう。むしろ問答無用に殺しにかかる。

「探知阻害の指輪外してたもんな〜」

西の主到手っ取り早く自分の実力を知らせるために指輪を外したのだ。うっかりそのまま帰ってきてしまいこの惨状である。

「まあ、仕方がない。いつかはバレると判っていたいな」

無防備にも、村の中では骸骨の顔を晒していたのだ。これでバレない方がおかしいだろう。

「さて、荷物の整理も終わったし——と、ちょうどいい」

連絡しようとしていた相手からの〈伝言^{メッセージ}〉に、アインズはこめかみに手を当てた。

「ああ、ニニヤさん。ちょっとご相談があるので皆さんで来てもらってもいいですか?」

「ええっ?!村を出て行くってどうしたんですか!?!」

〈転移門〉で招いて早々仰天する漆黒の剣に、ぼつが悪そうにアインズは頬骨を搔く。

「いやー……、うっかり部外者にこの姿を見せちゃいまして」

「なにやってんすか……」

ルクルットの呆れ顔をニニヤが杖で黙らせ、ペテルは困った顔をする。

「それじゃあ漆黒の剣もやめてしまおうんですか」

「え？やめませんよ？」

何でそういう話にと首を傾げるアインズに、ペテルも首を傾げてしまふ。

「村を出て行くという事は遠くに行ってしまうのでは——」

「違いますよ。村のアンデッドの事はバレましたけど、モモンの正体が私だって事は知らないわけだから、しばらくはモモンのままエ・ラントルに引っ込むですよ」

そう頻繁に村に顔を出せなくなるが、様子を見にはこれる。その説明になあんだとペテルたちはあからさまにホツとする。

「ビックリしましたよ。てっきり王国領から出て行かれるのかと……」「いやいや、東の森の主の件もありますから今離れるのは——と、ちよつとすいません。どうしたデスナイト？」

突然こめかみに手を当てて視線を外したアインズに顔を見合わせていると、少し焦ったように振り返った。

「——デスナイトが助けを求めています。もしかしたら拘束していた者たちが暴れているのかも」

会話はできないが、不思議なつながりがあつてアインズはデスナイトから焦ったような助けを求める感情を受信した。

思い当たるのは拘束し、見張らせていた集団が反撃に出たか。とにかく村に被害が出る前に何とかしないとアインズは走り出す。

「我々も手伝います！」

そう言つて後ろから追いかけてきた漆黒の剣に、少し考えながら幻術の魔法をかけた。

「アダマンタイト冒険者がアンデッドの味方をしたら大問題ですからね」

亜人種の姿になったペテル達は、互いの姿に驚き幻の耳を触ろうとしてすり抜けてしまふ。

「見事な技であるな！」

感心しながら笑うダインに皆互いに笑った。

「……なにをやっているんだ」

現場に到着してアインズは思わずそうつぶやいてしまった。

確かに、拘束していた者達がオーガやゴブリン達と対峙し、一触即発の雰囲気を出していた。それだけなら予想していた相手の反撃だと思っただが——、デスナイトの立ち位置がおかしい。

デスナイトはオーガやゴブリン達に立ちはだかる様になっている。

——いや、実際していた。見た目には判りづらいがかなり困った様子でアインズに助けを求めている。

「コイツラ、タオシテ、あいすくりーむタベル！」

「ヴオオオオオオオツツ!!!」

そういつて棍棒を振りかぶってくるオーガに、デスナイトはいとも簡単に受け止めると、そのオーガの頬に平手打ちをかました。恐ろしげな咆哮をあげているが、オーガに必要以上の怪我をさせないようにかなり加減している様だ。

その横をゴブリン達がすり抜けようとするが、素早く後ろを取ると脳天にチョップをして押し返す。

「デスナイトの旦那！邪魔しないでくださいえ!!」

「ブオオオオオオツツ!!」

ジュゲムが怒鳴るが、デスナイトは抗議するように吼えた。が、アインズ以外にそれが伝わった者はいないようだ。

そしてよく見れば、オーガやゴブリン以外に村人も斧やら鍬やらを持っていた。

「デスナイトさん！お願いですからそこ退いてください!!」

そう迫ってくる村人にいつそう困ったデスナイトは、とにかく押し返そうと目にも留まらない早さで張り手を空中で繰り出し、それで起こった風で村人を押し返していた。

オーガやゴブリンならまだしも、レベル差が開きすぎている村人には怖くて手が出せないようだ。もはや泣きそうな感情がアインズに伝わってくる。

「皆さんなにをやっているんですか・・・」

「あつ!!ゴウン様良いところに!デスナイトさんをどうにかしてくださいー!」

——何というか、殺気でギラギラしている村人と、泣きそうなデスナイトを見比べて、いったいどういう状態なのか。後ろの拘束されていた集団は警戒心も露わだが、デスナイトに困惑気味だ。

「ジュゲム!なにがあつたんだ!」

「ゴウンの旦那!デスナイトの旦那どかしてくだせえ!これじゃ口封じが出来ねえ!」

ジュゲムの言葉に、アインズは事態を把握し——目眩がする。

つまり、ジュゲム達が一方的に拘束していた集団を襲撃しようとして、デスナイトがそれを阻止していたのだ。

「な、に、やってんだああああああああああつつ」

!!!!!!

アインズの怒号がカルネ村に轟いた。

アインズはオーガ、ゴブリン、村人全員を正座させて黒いオーラを発しながら仁王立ちしていた。ちなみにスキルではない。

「——で? 何で口封じなんて考えに思い至つたんだ」

さすがのジュゲムも青い顔で俯いていた。村では気のいい優しい骸骨であるが、本来はジュゲム程度のレベルなら指先一つで消せる死の超越者だ。怒らせて平気なわけもない。

「む、村の不利になるようなことを言いふらされる前に殺しちまった方が丸く収まると思つたんです」

ジュゲムの訴えに解らなくもないアインズはため息を吐く。しかし、短絡的な考えである。

「あのなあ？殺して済む話じゃないんだぞ？そいつらは依頼を受けている。依頼中に消息不明になったら依頼主が調査をし、そしてこの村で消息を絶ったとなったらゴブリンやオーガを従える村に疑惑が掛かり、最悪討伐隊がやってくるんだぞ?!」

「こ、このまま帰しても同じ事じゃ?」

「無傷で帰した事と斬って捨てたじゃ大いに違う!人間に友好的だったら監視対象にはなってもすぐに討伐対象にはならない!!だがこの場合、村人がゴブリンやオーガを使って人を襲ったとみなされて村全体が危険因子として国から討伐されるわ!!」

なんでこうなるんだとアインズは天を仰ぐ。アインズに関しては實力を見抜かれている。国一つ滅ぼせる存在がいてはさすがに目こぼしはないだろう。ガゼフでも誤魔化せない。

なら、ほとぼりが冷めるまで離れようとしていたのに――。

「ゴウン様!俺たちはゴウン様と共に戦う覚悟が出来てます!!」

そうだそうだと立ち上がる村人勢にアインズは呆気にとられる。何でそんな覚悟決めたんだ?!

「だからゴウン様!どこにも行かないでください!!」

「王国がゴウン様を迫害しようと言うなら命を投げ捨ててでも守ります!」

「我々を救っていただいたご恩を返させてください!!」

「ゴウン様!」

「ゴウン様!!」

村人の必死の形相に、アインズは困惑の限りである。隠れていた村の子供達もすがるように見上げてきて、その姿が心にくるが――、どうしてこんな大事に?

そんなアインズに、離れたところで見守っていたペテル達(ゴボルト風)が嫌な予感を感じながら、小声でアインズに問いかけた。

「も――ゴウンさん、まさか村の人に説明していませんか?」

「.....」

ペテルの言葉に、アインズは己の言動を振り返り――天を仰ぎ、片手で覆った。

「……まぢでなにしてんのゴウンさん」

「……スミマセン」

ルクルットは頭が痛そうに抱え、ダインも呆れ顔である。

しかしまさかアンデッドである自分をここまで慕ってくれているとは思っても見なかったのだ。出て行くことも仕方がないと受け入れてくれるものとはばかり――。

が、ここで感動している場合ではない。ここでの決定で今後のカルネ村の運命が決まるのである。どうしたものかと、ちらりと外部の人間達を見れば、怯えたように固まっている。

しかし、ここで自分たちの運命が決まると解った様で、気丈にも一人の男が声を上げた。

「お、俺たちを殺す気か？」

「――さてね、場合によってはそれも仕方がないが、私としてはあまり選びたくはないな」

殺してしまえばカルネ村の不利益にしかならない。仲間やカルネ村に関係がなければ、あっさり殺すことを選んだかもしれないが――いや、やっぱり殺すのは悪いことだ。

幼いネムの顔を思い浮かべると血なまぐさい事をするのは戸惑われる。子供の教育にも悪い。出来るだけ殺すのはやめようとインズは思う。

「……ここは、あの墳墓に支配されているのか？」
「墳墓？」

男の言葉に首を傾げると、この村から10Km離れた場所にある遺跡の事らしい。彼らはどうやらアインズはこの村を支配するためにその墳墓から来たモンスターだと思っているらしい。

ちらりとルクルットに視線をやると、首を横に振られた。やはり、そんな遺跡のことは知らない。組合の依頼でも遺跡探索なんて無かったはずだよなと考えていると、険しい顔のペテルがその男に問いかけた。

「――帝国の請負人が、王国領内の未発見の遺跡を探索してたのか？」

「帝国の請負人？」

請負人とは確か冒険者から脱落し、不正規に依頼をこなす者達の総称だったはずだ。王国にもそういう者がいると聞いてはいたが、ペテルは彼らは“帝国”の請負人と言った。

「なぜ彼らが帝国の請負人と？」

「この間、帝国に行ったときに見かけましたから」

そういえばペテルはこの間、帝国の冒険者組合で情報をもらっていたと思ひ出す。

「結構有名ですよ。ミスリル級の実力を持った請負人は」

冒険者にしても請負人にしても顔と実力を売らなくてはならない。クラスをわかりやすいプレートで示せない請負人は特に。

「フム」と、アインズは思考を巡らせる。

彼らは王国の冒険者だと思ひこんでいた。冒険者であれば正規の依頼を受けて、負傷してたまたまこのカルネ村に來たのだと考えた。

しかし、彼らの帰る場所が帝国なら話は変わってくる。村にいたア宁德ッドの話は帝国に広がったとしても、帝国が王国領内の村に討伐隊を出すとは考えにくい。なら、このまま帰したとしても問題はなにかも知れない。噂は王国にも來るかもしれないが、帝国からの噂ならあまり取り合わないかも——と、樂觀的に考えていたら、ペテルが低い声で請負人達を睨めつけた。

「他国の未発見の遺跡探索は犯罪だ。依頼もマトモなところから來ていないでしょう」

軽蔑するような視線に、請負人達はなにも言い返せない。

「消えた彼らを依頼人が探す事もない」

その言葉に、ギラリと殺気立つ村人に請負人達は覚悟を決めて戦闘態勢に入ろうとして——、アインズのため息に阻まれた。

「……どうしてそう物騒な結論に至るんですか」

呆れたようにジト目で睨むがペテルは動じた風も無かった。帝国の犯罪者と、仲間を天秤に掛けるならそりや仲間である。他のメンバーも同じらしい。特に反論することもない。

「あのねえ、人間は人間同士助け合わなきゃだめですよ？」

「嫌ですよ、人間なんてすぐ裏切るじゃないですか」

「そうだよなあ」と互いに頷きあう村人。

「人間なんか欲の皮が突つ張つて信用ならないよなあ」

「貴族とか役人は無駄に偉そうだし」

「貴族とかほんと死ねばいいのに」

「やばい、この村人間不信しかない!」

この村にいるほとんどの人間は同じ人間にひどい目に遭っていて、なおかつアインズやゴブリンに助けられた者たちだ。人間よりアインズ達に傾くのは仕方がないことだろう。

なので、アーク達のようなよそのゴブリンは受け入れても、傷ついた人間は警戒しまくりである。根本的な大問題が発覚したことにアインズは頭を抱えてしまう。

「いやいや、人間にもいい人いますつて! えくとととと。そう! 王国戦士長とか!!」

まあ、確かに戦士長様はいい人だったと顔を見合わせる村人達。アインズは他にいい人を探すが——これと言った人物が見あたらな

い。
(いや、個人的な知り合いならいるけど……、デミウルゴスさんとかいい人だよ。他に代表的な人——だめだたつちさんは蟲だ)

王様もいい人だろうが、ちよつと税金が重くなつて村人は不満気味だし……。あれ? 人間ろくでもない??

「てか皆さんも人間でいい人達ですから!!」

早めにこの人間不信を治さねばとアインズは決意するが、まずは目の先の問題である。どうこの人間達を生きて帰そうか……、無い頭をフル回転させ。仕方がないかと、泣く泣く交渉に入った。

「交渉——いや、依頼しよう請負人諸君」

「……依頼?」

警戒しながらも答える男にアインズは重々しく頷いた。

「君たちは金で雇われて仕事をするんだらう? ならば私も君たちを雇おう。ただし、断つたらただでは済まないことは君たちも解つていよう」

「——内容は？」

「なに、簡単なものだ。この村のことを黙っているだけでいい。それだけで報酬がもらえるんだ。容易かろう？」

「アインズの話に顔を見合わせる請負人達ワーカー、疑っているのも手に取るように解る。が、命が助かる可能性もこれしかない。

「——ほきに、エルダーリッチは生者との交渉もふるといふ。たひよりの損はしても命には代えられんじやろ」

「では、老公は受けるべきと？」

「断つても生き残る可能性はなかほう。——ほうだんの時間はくれるのかの？」

「いいだろう。大所帯では意見も分かれる。長い相談は許可できんがね」

「ありがとうございます」

「さすが年の功。恐ろしい化け物にも物怖じしないかと若者は感心する。」

「……あのエルダーリッチは意外と友好的ですし、乗つてもいいのでは？」

「それが罠の可能性は？」

「ここで殺さずに罠にはめるメリットはないだろ？」

「墳墓探索の依頼主を探すために泳がせるつもりとかあるかも」

「でも尋問もなにもありませんでしたよ？魔法で聞き出すことも出来たはずだし……」

「——むしろ、あのフルーダ以上の強さを持つてゐるなら有無を言わせず帝国を滅ぼせるだろ？そんなちまちま交渉するか？」

「アルシエ、間違いないのか？」

「間違いない。あんな量の魔法力見たこと無い」

「下を向いて顔を青くしているアルシエは、アインズを見ないよう必死である。もうトラウマでその顔を見たらまた吐く。そんなことで奴の不興は買いたくない。——アインズもまた吐かれたら今度こそ心が碎けて交渉どころじゃないし、村人はブチキレル。」

「しゃまーに、理性的なエルダーリッチがいることもはる。魔法の真

髓にしか興味ないひよかなら、わひらの生死も興味ないひやる」

「なら奴——いや、彼もその類と？」

「ひよかな？真髓にたどり着きまんひよくしてる可能性は高いかな」

ある意味ドラゴンに近いとパルパトラは思う。長い年月を経たドラゴンは自分より弱い者をどうとも思わない。道ばたの石ころぐらの認識で、己の脅威になり得ないなら放っておく。

——このエルダーリッチはそのドラゴンの領域まで到達しているのだろう。ならば下手に尾を踏まずに立ち去るべきだ。

「では、依頼を受けることに反対する者はいるか？」

しん、と静まりかえる仲間達に、代表者、ヘッケランがアインズに向き直った。

「——依頼を受け、ます。この村のことは口外しません」

「よろしい。では、報酬を与えよう」

そういつてどこか等か取り出したのか？ジャラリと硬貨がぶつかり合う音を奏でる袋を差し出した。一見かなりの量であるが、すべて金貨だとしても、全員に配るには少ない量である。しかし、そんなことに文句は言えない立場だ。たとえ銅貨であっても生きて帰れるならそれでいいと、中身も確認しないまま受け取った。

「——解っていると思うが、契約違反した場合。……この村に災厄がもたらされたのなら、どんな手を使ってもおまえ達を探し出し、死すら生ぬるい報復をさせてもらう。——場合によっては帝国が滅びると知れ」

ギリリと睨まれて、ヘッケランは芯から震え、コクコクと頷く。

その後ろにはやや不満そうな村人がいるが、アインズの決定に口を出す気は無いらしい——、いや、一人だけアインズのとなりに立つ少女が袖を引いた。

「どうしたエンリ？」

ヘッケラン達には違う優しげな声に、少し申し訳なさそうな顔でエンリはアインズにお願いを囁いた。

そのお願いを聞いて、渋い顔をしたが仕方がないとアインズは

ヘッケランに向き直った。

「あー、悪いがその娘達は置いていってもらおう」

そういつて指さした先にいたのはエルフの奴隷だった。ハーフェルフのイミーナが目をつり上げたが、ロバーデイクに腕を捕まれるとぐつと口を引き縛る。・・・イミーナも己の感情で仲間を危険に晒すほど愚かではない。

逆らう気力など無いエルフ達は言われるまま前が出る。その死んだ魚のような目に、アインズは眉を寄せた。

「ところで、このエルフ達は耳が短いみたいですが、そういう種族で？」

そばにいた魔法詠唱者のコボルトに訪ねると、娘達は震えた。

「——いえ、法国では奴隷の証としてエルフは耳を落とすんです」

エルフのプライドである耳の話をされて、僅かに娘達の目にはドロリとした感情と、透明な膜が張られた。

そして説明を受けたアンデッドは不快そうに娘達を眺めると、森祭祀ドルイドのコボルトを呼んだ。

「なんであるか？」

受け取ったスクロールを見て森祭祀ドルイドはアインズを見返した。その目には驚きが有った。

「いいのであるか？」

「子供の教育に悪い。それにどうせそれは俺には使えませんし、有効活用した方がいい」

「——やはりゴウン殿はお優しい」

そういつて、森祭祀ドルイドはスクロールをエルフの娘達に向かって使った。魔法の光に怯えて互いにスガリツく娘達——、しかし、暖かな光と痛みが引いていく感覚に目を開いて——目を疑った。

スガリツいていた仲間の耳がピンと延びている。恐る恐るさわると、確かにそこに存在している。そして、自分の失われて久しい感覚に涙がこぼれ落ちた。

「あ、あああ、ああああああああつ」

意味のある言葉など発することは出来ない。ただその場にうづく

まり、戻った己の耳にふれながら歓喜に泣いた。

「——エルフの切られた耳を復活させた？」

そんなことは可能なかとチームの魔法詠唱者や神官を振り返るが、目を見開いて固まっている。パルパトラでさえも聞いたことはない。

切り取られてすぐになら回復魔法で再生可能だが、時間が経過した奴隷の耳の復活は不可能とされていた。

ならば、目の前で起こったこれは奇跡であろうか？

娘達が、言葉にならない感謝をアンデッドに向けているがアインズは軽く答えただけで、横をすり抜けヘッケラン達の前に立つ。

「では村の外まで送ろう。依頼の完遂を願うよ、お互いのために」

村からかなり離れた辺りで、ようやっとほっと出来たヘッケラン達は崩れるようにその場に座り込んでしまった。

「——なんであんな所にあんなアンデッドがいるんだよ」

墳墓とは関係なさそうではあるが、あえて知らないふりという可能性も捨てきれない。が、何にしても命は助かったようである。

「武器も防具も返してもらったけど、逆に言えばあつても私たち程度相手にならないって事よね・・・」

戦ったわけではないので実感はもてない。けれど絶対的な自信・・・、というか当然のことのように己の力が上であるという態度。モンスター特有の高慢ともとれるが、だからといって戦う気にはなれ

ない。

何度思い返しても彼自身がこちらを害そうとはしなかった。むしろいまだ敵意を持つ村人から守ってもらっていた。

「あんにゃエルダーリツチは長く生きとる儂もしらんなあ」

老公としては、あれほど人間に友好的なアンデッドがいることが驚きである。今まで、会話できたアンデッドは自分の利益になるのなら交渉に応じるというタイプだ。あれはむしろ人間——それも英雄のように心が広い人物である。

「ま、はんにしても、この話はもう止めとくのがええ。どこで誰が聞いてて、契約違反しにやいとも限らんし」

監視されて無いとも言切れないので、不用意にこの話題はするべきではないとのパルパトラの言葉に全員頷いた。

「墳墓の件はどうする？一応調査できたと言えば出来たし、フェメル伯爵に報告すれば報酬はもらえるけど・・・」

「我は遠慮する。再び墳墓の調査を依頼されたくはない。——報告の過程で村についてもたずねられたら困る」

「儂らも遠慮するわい。報告に行つて依頼主もろほも襲われないほも限らんひ」

「だよなく、俺らも行きたくね〜。けど、誰も報告に行かなかつたら宝の持ち逃げと思われる」

「ほんだら別の人間雇つて報告にいかへるか。宝はひよてんに置きっぱなしらし、場所を報告してかいひゆうしてもらえばええ。——かいひゆうしにいった人間がどうなるかはひらんが」

何にしても、あの墳墓には二度と近寄りたくはない。何だつたら前金も全額返すから勘弁してくださいと伯爵に言いたい。

「あーあ、踏んだり蹴つたりだな。宝は全部無くすし、信用がた落ち、報酬全額返金となるとただ損しに行つただけだな」

「ま、請負人ならそんな日もあーなあ」

「そういえばさっきもらった報酬はどれほど入っているのだ？せめて消費した分の足しになればよいのだが——」

言われて担いでいたヘッケランが確認のために袋をのぞき込み――

——固まった。

「どひた？全部銅貨らったか？」

「まさかとは思うが、石でも詰められていたか？」

「……あー、俺の目がおかしくなったのかな？色がよくわからねえ」

しきりに目をこすり、上を見上げて瞬きをするともう一度のぞき込む、しかし、やはりそれは変わらなかつたので困惑顔でパルパトラとグリンガムに声をかける。

「……なあ、これ何色に見える？」

そういつて掴みだした硬貨を確認し、二人も固まり目をゴシゴシと擦る。

「——え？マジか？嘘だろ？全部か？」

「こりやたまげた」

グリンガムは素になり、パルパトラは顎を外さんばかりにアングリした。

ヘツケランの手には白金に輝く硬貨が鎮座していた。

「あれで鎧新調するって言ったのに、モモンさんお人好しがすぎますよ」

悪魔騒動の時に王からもらった金貨の十倍の価値が有る白金貨をそっくりそのまま請負人達に渡してしまったアインズに、ペテルもさすがにあきれ気味である。

「——どうせ、同程度の鎧を作れる人が見つかってないし、穩便に済ませられればそれでいいです」

内心滝のような涙を流しているが、村の必要経費として割り切ることにする。ペテルが請負人達が去った先をしばらく睨みつけていたが諦めたように肩を竦めた。

「村人達の様子を見てきますね」

そういつて村の丘から降りていくペテルを見送り、アイNZは村を眺めた。しばらくそうしていると、誰かが上ってくるのが見えて振り返る。

それは元村長の男だ。まだ短いつき合いであるが、前より老けたように思えた。

「ゴウン様、少し伺ってもよろしいでしょうか？」

また請負人^{ワーカー}を逃がしたことについて言われるのだろうか、ややうんざりしながらも先を促すと、意外なことを聞かれた。

「ゴウン様は記憶を取り戻したいとお考えなのでしょう？」

その言葉に思わず凝視した。そして、忘れかけていた記憶喪失であることをゆつくりと考えた。

「なんですか突然？」

「いえ、友人に聞かれて私も疑問に思いましたので——」

ふーんと思いつながら、思いを巡らす。記憶を取り戻す事に特に意欲を感じていないアイNZは正直に答えた。

「現在は、特に思い出したいとは思わない。今後必要になれば思い出そうとするかも知れないが——」

自分の過去は未だ謎だが、200年前に封印されていた魔神という説が一番有力である。もしそうであったのなら、このまま思い出さない方が幸せだろう。

そうですかと木訥な男は少し素っ気ない感じに頷いた。

「……ゴウン様は、これからなにをなさるのでしょうか？」

また妙な質問だと思いつながら考える。村の強化は絶対に必要であるし、冒険者としてバリバリ働かなくてはならない。

それに、今回発覚した村人の意識改善もしなくちゃいけないと考えながら、——おそらく、この男はそんなことを聞きたいのではないのだろうかと思いつく。

「俺の、やりたいことか——」

正直困る質問だ。子供なら無邪気に将来なにになりたいと答えるだろうが、大人のアイNZはなにをしたいかなどパツとは思いつかな

い。

アンデッド故あらゆる欲望は抜け落ちている。国を作って王様になるとか、世界征服とか出来るだろうが、興味はない。

今はただ、村を守り、冒険し、仲間と遊んでいたい。エンリヤネムの成長を見守り、ンファイレアをイビリ、それでも結婚には祝福し、産まれた子供を大いに甘やかすのだ。

”向こうで出来なかったことをしたい”

ふと、何かがよぎったがまた泡のように消えてしまう。時々あるのだが、よぎった何かを認識できないアインズはすぐに忘れてしまい、男を振り返った。

「今はまだ、決めかねるな。だが、そのうちやりたいことが見つかるかもな」

「——カジット・デイル・バダンテール？」

「はい私がカジットです」

ペテル達に、ズーラーノーンのことを聞き確認するためにエ・ランテルにやってきたモモンは

やたらキレイなカジットと対面していた。

「あなたがモモン殿ですね。私の愚かな行いを止めていただき感謝しております」

「ああ、はい」

両手両足を拘束されてイスに座らされているが、丁寧にお辞儀し感謝するカジットにモモンは困惑していた。

「えーと、記憶を消されているようですが」

「そのようですね。ズーラーノーンの秘密結社に入信していたようで

すが、その辺りの記憶は有りません。・・・確かに母を蘇らせたいと望んでいましたが、他人を犠牲にするような愚か者ではないと思っていたのですが——」

残念なことに自分は道を踏み外してしまったようだと言ったと遠くを見つめた。

組合長から詳しい話は聞いていた。他のズーラーノーンの者の襲撃があり、拘束していた二人は記憶を消されてしまった。他に被害はない、とても静かな襲撃だったそうさ。

まあ、ズーラーノーンの詳しい情報をしゃべられる前に口封じをしにくることは誰でも予想できたことだ。——予想外なのは、記憶を消しただけで放置されたことである。

(普通殺してしまうものじゃ——、いや、復活魔法もあるし、記憶消去はいい手なのかも知れない)

しかし、記憶操作魔法は高位の魔法である。そんな使い手がズーラーノーンにいるとは驚きである。——そして記憶消去の結果も驚きである。

廊下が騒がしいと気がつき扉を振り返れば勢いよく開かれる扉。そこに現れたのはものすごく見覚えのある女である。

「カジツちゃん、お話おわったあ?」

「・・・また抜け出したのか」

頭が痛い抱えたカジツトに女、クレマンティーヌはててと寄っていくとカジツトの膝に腰を下ろした。

「おもしろい。おとなしく待っていると言っただろう?」

「だって、つまらないんだもん」

足をパタパタと動かす女にカジツトは疲れたようにため息を吐いた。そして、扉にすぎりつき息を切らした衛兵がクレマンティーヌを睨んでいた。

「この、ちょこまかと——っ!!」

血管が浮き出るほど怒る男に、モモンは手を挙げて止める。

「——クレマンティーヌか?」

「ん? そうだよ? おじさん誰?」

あれほど怯えていた女は、モモンに対して無邪気に首を傾げていた。

「モモンというのだが、覚えていないか？」

「ん〜ん、しらなくい」

「そうか・・・、ところでいくつかな？」

「6！」

得意げに六本の指を突き出すクレマンティーンに、モモンは「そうか」と答えるしかない。

カジットはズーラーノーンに入信する前まで記憶を消されていたが、クレマンティーンは幼い少女の頃まで記憶を消されていた。性格が破綻する前まで戻された意図は分からない。解らないが、やっかいなことに身体能力はそのままなので拘束を外してはこうして周りを困らせているのだ。

唯一なぜかなついているカジットの言うことだけは聞くのだが、やはり我慢が利かず、結局カジットの元にこうしてやってくるのだ。

「・・・申し訳ないモモン殿、こらクレマンティーン、大人しくしろ」

「やーだー！お絵かき飽きたー！カジツちゃん遊ぼーよー！」

すさまじく怪しい光景ではあるが、中身は神官と6歳の少女である。

そう、本人達にそんな気はこれっぽっちも無いのだが――、後ろに控えた衛兵とモモンからでかい舌打ちが出てしまうのは仕方がないことである。

それぞれ道

今日もなにも変わらないと、デミウルゴスは己の持ち場で直立不動で考える。

このナザリツク地下大墳墓が、どこも解らない世界に転移させられてからどれほど経ったのだろうか？

その間に至高の方に配置された持ち場から離れたのはただの一度だけだ。

それ以後は、依然と変わらず己の階層に敵が来れば迎撃する仕事に戻っている。己の創造主と至高の方々がお与えになった仕事を全うすることが、己の、我々僕達の生き甲斐であり、使命である。

しかし、己の持ち場はあまりにも深いため、滅多なことでは侵入者も入ってこないため、今はただ立つことしかしていない。

だが、それを退屈とも面倒とも思っていない。なぜなら、至高の方が与えた私だけの仕事だからだ。——それを完璧に全うすれば、あの方々は帰って来てくださるかもしれない。

他の僕達も気付き始めている。けれど、誰もそのことを口にしない。口にしたら最後、それを受け入れなければならぬ。受け入れて、その後どうなるというのだ？命を絶つことなど許されぬ。与えられた仕事を放棄することも許されぬ。——絶望のまま同じことを繰り返すしかない。

だから皆必死に見ない振りをしている。様子を見に来るオーバーロードを至高の方と見立てて笑顔を見せる。

茶番だ。けれど必死に己の役を演じなければならぬ。

「我々はいつまで」

ふと、こぼれ落ちてしまった言葉を飲み込んだときだった。聞き慣れない軍靴の音がこちらに向かってくるのが聞こえてきた。

侵入者ではない。だが、己の領域に踏み込んだ者は自分は知らない僕であった。

「何者かね?」

「・・・あえて、はじめましてと言わせていただきますよう」

仰々しく軍帽を取りお辞儀をしたドツペルゲンガーにデミウルゴスはただ見つめる。

「私は宝物殿領域守護者、至高なる方々の頂点であり統括であるモモンガ様より生み出されたもの。名を、パンドラズ・アクターと申しませす」

「モモンガ様の――、なるほど、あなたがそうでしたか」

見たことはなかったが、初めて会ったわけではないパンドラに、デミウルゴスも精錬された優雅さでお辞儀を返した。

「初めまして」、私はアインズ・ウール・ゴウン最強の魔法詠唱者ウルベルト・アレイン・オールド様より生み出されました第七階層守護者デミウルゴスです」

挨拶をしながらも、なぜパンドラが”元の姿のまま”ここに来たのか思考を巡らせていた。僕達を安心させるためにナザリックを歩き回っていることは知っていたが――。

「単刀直入に言わせていただきます。モモンガ様が見つかりました」
「!!」

宝石の目を見開き、パンドラを凝視したデミウルゴスは「いま、なんと?」と耳を疑った。

「我が創造主であり、このナザリックの正当なる主である。」本物の”モモンガ様が見つかったと、申しました」

「っ!今どちらにいらっしやるのですか?!」

「それは今はいえませんが」

パンドラの答えに、デミウルゴスはその悪魔の腕をドツペルゲンガーの喉に食い込ませた。

「言えっ!!モモンガ様はどこにいらっしやる?!」

ギリギリと喉を締め付けられたパンドラだったが、表情が変わらぬドツペルゲンガー故か、涼しげにデミウルゴスを見下ろしていた。

「——言えぬ理由を、あなたは察せられると思いますか？」

「——っ!？」

どこから出しているのか？喉を絞められながらも諭したパンドラに、デミウルゴスは一気に冷静になった。そして己を恥じながらパンドラを解放し謝罪した。

「取り乱して、申し訳有りません」

「いえ、仕方がないことでしょう。それに統括殿に比べればずいぶんと紳士的でしたよ」

あの方とお会いしたときは問答無用でワールドアイテム乱れ撃ちだったと語れば、それも当然だとデミウルゴスと思う。

「至高の御方のお姿を騙る者が目の前にいれば、私だって八つ裂きにしますよ。——まあ、アルベドが許容していたのでだいたい察しはつきましたが」

僕達の心の慰めに、パンドラは今まで創造主の姿でナザリツクを守ってきた。それを知りながらデミウルゴスとアルベドは見えて見ぬ振りをしてきた。しかし、それもモモンガ様がお戻りになるかもと思えば、もはや目をそらす必要もない。

「それで、モモンガ様は無事なのですか？」

モモンガを発見しておきながら、居場所を言えないということとは、モモンガの身に何らかの問題が起きているということだ。

デミウルゴスなどの僕が接触することで主に不都合が生じることだろう。御身の無事を訪ねはしたが、パンドラの落ち着きから彼の創造主が危機に陥っているわけではないと解る。

しかし、パンドラはかの方の無事を訪ねられてわずかに動揺していた。そのことがデミウルゴスを不安にさせた。

「——」無事、ではあるのですが」

「何ですか、はつきり言ってください」

言いつらそうにしているパンドラに苛立ちと不安が沸いてくる。そしてパンドラは意を決して、デミウルゴスに告げた。

「モモンガ様は」記憶を無くされており」

報告を受けたパンドラズ・アクターは宝物殿に戻ると行動を起こした。

つい先ほど、ナザリックに侵入者があり、迎撃に成功との報告が上がってきた。しかし、侵入者は生きてナザリックから逃げ出したとも聞かされた。

「——まあ、ユグドラシル時代のまま行動せよと言ってしまった訳ですし、階層を越えての追撃は”前は”出来なかったですからね。それを忠実に守ったのですから階層守護者を責めるいわれは無いんですかね」

ただし、久しぶりの獲物を長く味わおうといたぶり遊んでしまったが為に別階層に逃げられたことはシャルティアの落ち度である。侵入者を逃がしたことについてはアルベドが嫌みたっぷりにつけていたが、命令した”制限”故ナザリックの外まで追いかけることはしなかった。

「あの頃のままのナザリックを維持すると決めた手前、ユグドラシルでしなかったことを強要することは出来ませんが、侵入者の動向ぐらいは確認させて頂きましょう」

逃げた侵入者が、大軍を率いてナザリックにこないとも限らない。容易く撃退できるだろうが、このナザリックに土足で入られることは不快なのだ。パンドラは独り言を呟きながら懐から一冊の手帳を取り出した。

「ぶにつと萌え様秘伝のらくらくPK術、情報収集編はと」

これは本来で有ればモモンガの所有物であるのだが、持ち歩いていて盗み取られたり、ドロップしてしまうことを恐れてパンドラに持たせていた。自室に置いておくことも考えていたようだが、るし★ふあーに悪戯を仕掛けられ荒らされてから、大事なものを自室に置くことを止めていた。

さすがに他人のNPCの持ち物を漁るとも考えられないし、宝物殿

——、ハアアアアンツ！落ち込まれた我が創造主も美しいいい
いっつ！！！！」

ドツタン！ボタン暴れるパンドラの奇声は宝物殿に響きわたった
が、ここにはパンドラしかいないのでドン引かれることはない。

「ふうふうつ、いけないいけない。あまりのことに醜態を晒してし
まった。これではモモンガ様が望まれた”かつこいいパンドラズ・ア
クター”とはほど遠い」

ようやく落ち着いたパンドラは、己の激情を何とか押さえ込み冷静
さを取り戻そうと必死になった。乱れた軍服を直し、息を整えてぴ
しつとカツコいいポーズを取る。——もしこの場に記憶があるモ
モンガが居れば悲鳴を上げて精神鎮静を繰り返していただろう。：
だからといって先ほどの醜態を受け入れる事もないが。

「——どうやらモモンガ様もこちらの世界にとばされておられたよ
うだ。いや、もしかしたら私が認識できていないだけで、ここはデー
タが引き継がれた新たなゲーム世界という可能性もあるか？」

パンドラはユグドラシルがゲーム世界で、自分たちがただのデー
タであることを知っている。宝物殿でのモモンガの独り言を拾い集め、
その頭脳でつなぎ合わせたことで導き出したのだ。

「しかし、だとしたらモモンガ様がナザリックにお越しにならないの
はおかしい。——やはり、異世界でしょう。それならモモンガ様
も、ナザリックがこちらに来ていとは思われないのも仕方がないこ
と」

誰もいないというのにパンドラの独り言は止まらない。これもま
た創造主から引き継がれた性格なのかもしれない。

「迎えに——いや、現在のモモンガ様の状況を把握してからがよろ
しいでしょう。我々の存在が負担となる可能性もありますし」

気遣いが出来るパンドラは確かにモモンガの子供である。

「そうして、私はモモンガ様が記憶を無くされたことを知ったのです」
村に侵入したパンドラは、影渡りが出来るギルメンに擬態し村人の話を総合し、時には魔法を使って情報を引き出したりした。

「では、すぐさまモモンガ様の御記憶を取り戻せるよう——」

「それを、現在のモモンガ様は望まれておりません」

村人を一時的に支配下に置き、直接本人の意向を確認したのだ。記憶を無くされたとは言え、至高の御方の意志に反することは出来ない。

それを言われてしまえば、デミウルゴスは黙るしかない。

「・・・モモンガ様は息災でしょうか？」

「ええ、今は小さな人間の村を支配下に置いているようです。その村はモモンガ様を崇拜しており、モモンガ様に仇なす者を即刻排除しようとしたので、なかなか忠誠心も有りますよ。まあ、我々にはかないませんが」

「当然でしょう」

くいつとメガネを押し上げて、デミウルゴスは思う。モモンガ様はもはやこのナザリックに戻られない。だが、その存在を生存を知れるだけで、今までとはずいぶんと違う。我々を思い出していたただかなくてもいい。我々僕など歯牙にもかけなくてよい存在である。——ただ、許されるので有れば、影ながらお役に立ちたいと、デミウルゴスは考える。

しかし、その思考をパンドラが遮って意外なことを言った。

「ところで、ご相談なのですが。このナザリックをモモンガ様に献上したいと思うのですがどうでしょう？」

パンドラの言葉に一瞬呆気にとられた。献上もなにも、このナザリックはモモンガ様、至高の御方々の所有物である。なにを今更——

しかし、デミウルゴスは一瞬で理解する。なるほど、そういうことか。

「今のモモンガ様にはご迷惑ではないでしょうか？」

「それでしたら、自害をお命じしていただきましょう。モモンガ様の

お役に立てないなら私はそちらの方がいい」

「たしかに」

役に立たずにただ存在する僕など何の価値もない。ならば至高の方の命で消滅したいと全ての僕が考えているだろう。

デミウルゴスの心は晴れ渡り、子供のようにウキウキと気持ちが高鳴った。モモンガ様に我らを献上する。なんてすばらしいアイデアだろう。

さっそく使者を選別しなければ。守護者がよいだろうが全員は無理だ。そして誰もがその使者を望むだろう。話し合いで済めばいいが——と、思考を巡らせていたらまたもやパンドラに止められた。「せっかくなので私としてはドラマチックに献上したいのですが、聞くだけ聞いていただけますか?」

「フム、聞きましょう」

「まず、このナザリックの存在を人間達に教え、攻略した者が支配者になれると触れ込みます」

ぴくりと、デミウルゴスのコメカミが疼いたが、先を促した。

「当然、このナザリックの攻略など不可能!人間達は誰もがこの墳墓の恐ろしき、すばらしさを世界中に宣伝してくれるでしょう!!難攻不落のナザリック!誰もが攻略不可能と考える中、颯爽と現れるのは我らがモモンガ様!!どんな強者も恐れるこのナザリックを容易く攻略し、我らを服従させるのです!!そして世界中にモモンガ様の偉業がナザリックを踏み台として轟くのです!!」

「すばらしい!!」

なんとすばらしく完璧な計画だと、デミウルゴスは涙が浮かぶ思いだ。

はじめは神聖なナザリックに人間たちの泥足を入れるのかと不快に思ったが、モモンガ様の偉業を轟かせるための必要な事と理解した。そして何より、我々僕が、モモンガ様の名声のために役立てるところが素晴らしい。

「ガラスの靴をお渡しするより、王として剣を抜いていただく方がよろしいかと」

「シンデレラとアーサー王だね。・・・しかし君は脚本家として素晴らしいな」

「私はアクター（役者）ですから、舞台を整えるのも朝飯前ですよ」それは役者の仕事ではないが、ツッコむつもりもないデミウルゴスはさらに素晴らしい舞台を用意するために思考を巡らせた。

「やはり侵入者は殺さずに広告塔としていくらか逃がすべきですね。雑魚よりは強者の方がよりナザリックの恐ろしさを理解し、宣伝してくれる」

「どの階層までは許しますか？やはり第3階層までで？」

「それではナザリックのすばらしさが伝わらない可能性もあります。至高の御方々が手ずからお造りになられたナザリックが第3階層までで理解できるとは思えませんね」

「たしかに、——では転移トラップを応用するのは？ほんの一部だけ見せてその場で倒してしましましょう」

「それもいいですが——捕らえて牢獄に連行するときに見せるのもいいですね」

「おや、捕らえては広告の意味はありませんよ？」

「牢獄まで連れて行った後は逃がしますよ。設定にナザリックの支配をもくろむ僕が居りますから」

「ああ、エクレアでしたか？妙な設定を入れられていると思いました——、もしやこの事態を見越して至高の方々がお造りになったのでは？」

「その可能性は高いですね。いやはや、御方々の知謀は我々より遙か彼方にありますね」

「まったくですね」

至高の41人を称えながら、パンドラとデミウルゴスは延々と草案を練り続けていた。それはとても有意義な時間であった。

「ところでなぜこの話をわざわざ私のところまで持ってきたのですか？」

「——統括殿は、貴方ほど冷静に聞いていただけるとは思えなかつ

たですし………フアーストコンタクトがトラウマでして」

パンドラの遠い目を見て、デミウルゴスはそれ以上なにも聞かなかった。

「じゃあ、あの二人の記憶を戻すことは不可能なんですか？」

ペテルの言葉に申し訳なさそうにアインズは頭を掻いた。

「そうですね。高位の記憶操作魔法だと思うんですが、元に戻すというのは行使した本人でも出来ないです」

その言葉に、ペテルも残念そうにしたがそこまで気落ちはしていなかった。ズーラーノーンの情報は惜しいが、被害が最小限だったのだし、それより気になることもあった。

「モモンさんも記憶操作の魔法を使えるんですよね？なぜ請負人たちに使わなかったんですか？」

「……この魔法、魔力消費が激しいんですよ。あの人数全員に使うなんて無理です。——あと、人の頭をイジるのはちよつと怖いんですよ。下手すると廃人になりますし」

「別にいいと思いますけどね」

「——ペテルさん、なんか請負人ワーカーに恨みでも？」

「いえ、そういうわけでは……、仲間の家族がいる村を危険にさらしたくなかっただけで」

「ああ、ツアレさんを心配なされたわけですか」

「いや！その！ツアレさんだけじゃなく村の皆さんの事も心配してますよ」

「！」

「わかってますよ。ペテルさんは優しいですね」

「そ、そういうわけでは……、えっと、エルフの娘たちは今は？」

「まあ、心の傷もありますからツアレさんに任せてますよ。結構タフな娘たちで、よくゴブリン達と森で狩りをしています。——ただ、私に恩義を感じすぎていて、背中を流しますと風呂場に来られたときは悲鳴を上げましたよ」

速攻女湯に追い返して、代わりにエンリを磨いてくるよう命じた。そうして出てきたエンリはピカピカに磨かれていたが、なぜか真っ赤になってポカポカ殴られた。

「と、それより新しい東の森の主の話ですよ」

「モモンさんより強いんですよね？大丈夫ですか」

「まあ、動きは西の森のナーガに見張らせてますからすぐわかりますがね。実際戦うとなると厳しいものがあります」

配下のオーガ達は問題ないが、主の半魔^{ネフィリム}巨人はかなり強い。前の主の持ち物だという魔法の剣を持ち、訓練をみる限り武道にも精通している。——自分たちだけでは勝てないだろう。

「まあ、いざとなったらたちちさんに助けを求めようと思っています」
「ああ、たちちさんなら心強いですね」

今や王国屈指の剣士とうたわれるたちちとアインズであれば大丈夫だろう。あの強さはデタラメである。

「ガゼフ・ストロノーフ、ブレイン・アングラウス、たちち・みーはいまや王国最強の三剣士と言われてますからね」

「有名になるのはいいんですが、いつか人間じゃないとバレそうで怖いですが——」

もう少しおとなしくしていた方がいいと思うのだが、あの正義感を止めるのはさすがに難しい。

「……王国民が異形種を受け入れることを祈りましょう」

「それしかありませんね」

諦めたように二人でため息を吐くとペテルは席を立った。

「それじゃあ、ツアレさんのところにいるニニヤを拾ってエ・ランテルに戻りますね」

「了解です。私は村の話し合いをしてからエ・ランテルに行きますね」
一度徹底的に人間不信を話し合わないと、今後も似たような事件を

起こしかねない。あと報・連・相もしつかりさせないと。

「で？姉ちゃんとペテルどうよニニヤ？」

「変態」

「何ですよ?!」

「微笑ましいことである。姉上はペテルのことをなんと?」

「まあ、まだいい人止まりですね。たっちさんのことまだ引きずつてますから」

「まー、あの人？に比べられるとペテルも大変か」

「ルクルットに比べると遙かにいいんですけどね」

「お前、最近俺に当たり強くね?」

「ルクルットはニニヤに対してデリカシーがないのが問題である」

「だって今更じゃん」

「だからモテないんだ。——— あるいはモモンさんはまだ気づいてないんですかね?」

「あの人も鈍いよなー。ペテルってわかりやすいと思うけどな」

「カルネ村に頻繁に通うようになったである」

「モモンさんが心配だからとか、村が心配だからとか———、理由を付けては来るよな」

「いつそのこと拠点を移します? 私はその方が姉といれて嬉しいですけど」

「まー、金の心配はないけど。依頼はいるとちよつと不便だよな」

「決めるのはペテルである。今は見守るのが仲間の勤めである」

「あれ? みんなここにいたのか」

「おー、ペテル。モモンさんと話し終わったのか」

「ああ、——— あとはエ・ランテルに戻るだけだけど」

「せっかくだし、ニニヤの姉ちゃんに挨拶しておけよ」

「そうだな、うん、そうする」

「はやっ、もう行つたぞ」

「恋とは偉大である」

「うまくいって欲しいですね」

ほっこりする漆黒の剣だった。

「弱つたな」

そういつて串焼きにした獣の肉をバリバリ食べながらため息を吐いたのは東の森の新しい主である半魔^{ネフィリム}巨人、名を武人建御雷という。

「ただ雨風が凌げる場所を借りたかつただけなんだけどなく」

せっせと串焼きを作るゴブリンを眺めながら健御雷はもう一度ため息を吐いた。

よくわからない世界にゲームキャラでとばされた健御雷は、森をさまよい。どこか身を置ける洞窟でもないかと探していたら、トロールの住処に入ってしまった。何とか交渉しようとしたら、縄張りを奪いに来たと勘違いされ、返り討ちにしたらなぜか森の主にされてしまったのだ。

いや、俺は住める場所が欲しかっただけなんだけど言っても聞いてくれず。トロールやオーガに奉られる。仕方なくまとめる立場になったが、献上品としてゴブリンや人間を持つてくるのはやめて欲しい。食べないから！

仕方なく人間は逃がし、ゴブリンは身の回りの世話をさせた。人間とかゴブリンの肉は好かない。動物にしてくれと言えば、それからは現実では絶滅した鹿とかウサギ、熊なんかを捕つてくるようになった。

健御雷としてはそっちの方が珍しくて喜んだら、それらばかり持つてくる。——しかし、串焼きもそろそろ飽きた。味噌とか醤油が恋しい。岩塩を見つけたからまだまじだが、調味料が欲しい。

「うーん、何とか人がいる村に調味料を分けてもらえないかなあ」

しかし、この姿を見て驚かない村などあるだろうか？捕まえた人間を逃がすんじゃないかなあと思ったかなあと後悔した。

「というか、森の主もやめたいんだけどな」

唯一話を通じそうだったナーガを逃がしてしまったのは惜しかった。聞けば西側の森の主らしい。だったらそいつにこいつ等を押すつけても何の問題もなかったのに。

「話をしに行くって言っても部下達が縄張りを奪いに行くって勘違いするし——、あーもー！何で主なんかになっちゃったかなあ俺！」
考えるのもめんどくさくなった健御雷はふて寝を決め込んだ。

変わってこちらは薄暗い神殿の中、〈道具創造〉で作った立派な玉座に座り、邪神と崇められているタブラ・スマラグデイナは信者にひれ伏されながらも退屈そうにもたれ掛かっていた。

(ひまだなく、やることないってホントに暇)

仰々しく信者の報告を聞きながらも、目の前の男の設定を考えながら暇を潰していた。しかし、もはや大半の信者の設定を作り終えたタブラは白く濁った目を眠そうにしていた。

(邪神がそうホイホイ行動しちゃいけないけどさ。実際なってみると退屈で死にそうだ。ゲームや物語の魔王はよく我慢できるものだ)

願いを叶えてもらうため、信者は必死であるがタブラはつまらない願いを聞く気は全くない。

(あ——、あのカジツトとかいう男の望みは叶えてもよかったかもな。あの顔で「お母さんを生き返らせたい」ってすごいギャップだよ。すごいな、何十年もがんばる理由が母親って。まあ、ズーラーノーンからははずしたから無理だけど)

そういえば、女の方はどうなったかなとタブラはふと思う。思った

よりも早く襲撃がバレて慌てたため、女の記憶をゴツソリ削ってしまった。ズーラーノーンの記憶がなくなればそれでよかったが、削りすぎた気もしなくもない。

エ・ランテルの警戒網が強化されたから確認にもいけないが、まあ、大丈夫だろうとタバブラは気にしないことにした。

(それにしても暇だ……。イベントでもないかなあ?)

そしてふと思いついた。

(そういえばカジット達を倒した漆黒の剣って奴らは強いらしいし、ズーラーノーンに招待してみようか? コツチのレベル的には30ぐらいだろうけど、信者達と戦うのならちようどいい。——邪神を倒しにくる勇者達。うん、おもしろそうだ)

ズーラーノーンが壊滅したらそれはそれでいい。また別なところに行けばいい話だとタバブラは信者に仰々しく頷きながら思った。

「うわーんっ!! あんちゃんやまちゃん会いたかったよ——っ!!」

「茶釜つちもコツチに来てたんだね! 会えてよかったよ!!」

「^{メッセージ}へ伝言」送りまくって正解だよ。通じなくても根気よく移動しながら使ってよかった」

「再会したら長距離でも ^{メッセージ}へ伝言」通じるけど、会わないと結構範囲が狭まっちゃうんだよね。何でだろう?」

「なんでもいいよーっ!! あたし一人かと思つて心細かったよーっ!!」

「そういつつ茶釜つち? 後ろにあるのはなに?」

「………バカな男からの貢ぎ物、エヘv」

「強奪品でしょ。もー、噂のローレライつて茶釜つちのことでしょー」
「しよーがないじゃん! この格好じゃ町にも行けないもん! ちよーつとくすねるくらいいいじゃんー!」

「根こそぎでしょ? まあ、仕方ないけどさ」

「ところでそつちの女の子誰?」

「ああ、旅の途中で拾ったの。なんか娼館から逃げてきたらしくてね。とりあえず保護したの」

「——いっちゃあ何だけど、絵面が怪物と非常食だよ」

「わかってるから言わないで」

「それで名前はなんて言うの?」

「リリアって言うの。まだ私たちが怖いけど行くところもないらしくて……」

「ありやく、まあ、あたしは全然かまわないよ?女の子が増えるのはうれしいし」

「茶釜つちおやじ臭い」

「ほっといて!」

「でもこうなると、ほかのメンバーも来てそうだよ。やまちゃんの妹さんとか、茶釜つちの弟君とか」

「あやつはいらん。見つけても基本無視で」

「もく素直じゃない」

「あつ、でもモモンガさんには会いたくない。メール来てたけど行けなかったし」

「そうだね。私も行けなかったから会ったら謝らないと」

「それはいいけど、そろそろまともなところで休みたくない?せめて屋根と壁が有るところ。洞窟は不可、お風呂が有ればなおよし!」

「だね、でもこの格好じゃ人間の町に入れないよ……」

「南の方に獣人の国が有るらしいし、そっち方面に行けば異形種が暮らしている国とか有るかも?」

「——あんまし屋根と壁に期待が持てないなあ」

まあ、とにかく行ってみようと奇妙な集団が南下を始めた。

そのころの南にある国では——

「貴様はわかっていない！」

「なにを言う、それこそ貴様こそだ!!」

「今度はなにを騒いでいるんだ？」

「あつ！ニグン隊長！何とかしてください!!またあの異形種とアダマンタイト冒険者が——」

「犬耳ゴスロリが竜王国女王に似合う!!」

「これだから異形種は！女王にはネコミミチャイナこそ至上!!」

「ビーストマン撃退成功の女王に戴く褒美について争ってしまって」

「バカなのか？というかあの異形種は人間に欲情するのか？」

「女王も竜の血が入ってますから——」

「どちらにしても、我々が来れない間に愚かになってないか？何なんだあの頭の悪い会話は」

「主にあの鳥の異形種のせいらしいですね。凄まじい力を有しておきながら、女王を着せ替え人形にすることを愉悦に感じているようです。．．．それでも手を出してこない分”閃烈”よりましだと言っていました。しかし、その”閃烈”の欲望にも火をつけているようです——」

「もういい、耳が汚れる」

「あ！ニグン！あんたはどつちがいいと思う?!やっぱ犬耳でゴスロリが女王に似合うと思うよな!!」

「バカめ！まともな感性ならネコミミチャイナよな!!」

「巻き込むな愚か者ども。だいたい私は身も心も神に捧げた身だ。そんなものに興味はない」

「え？あんた神様に犬耳ゴスロリを着てもらって「ご主人様v」って言われたいの？ひくわ——」

「我が神を邪悪な妄想で汚すなああああああつっ!!!」

「今回はさすがに死ぬかと思ったなザリユース」

「そうだなゼンベル。だが、すべての族長にブループラネット先生も居たんだ。勝てないはずもないだろう？」

「まあな。しかしあのでかいトレントも強かったよな。何だっけ？ ざいとる？」

「ザイトルクワエだ。世界を滅ぼす魔樹だとピニスンが説明しただろう？」

「なげーし、舌噛みそうだからよ。——それに世界を滅ぼすって言ったって、ブルー先生の方が怖かったろ」

「ああ、なぜかわからないが先生はあのトレントが気に入らなかつたようだ」

「見たことないくらいブチギレてたもんな。俺もしばらくは先生と手合わせは遠慮しとくわ」

「ピニスンにはあんなに優しいのになあ？」

「——やはり伝承の通り、”ぷれいやー”が各地に現れているようだ」

そうやってフランスの神官長は窓から国の町並みを眺めていた。

「おそらく陽光聖典が接触したのも”ぷれいやー”だろう」

彼らには”ぷれいやー”の詳しい話は伝わっていないので、神だと信じ切っているようだ。しかし、説明することは出来ない。すれば、我々が信仰している神の正体を明かすことになるからだ。

「…世界破滅の原因はやはり、100年の繰り返しのだろうか？」

「フランスにも”ぷれいやー”が一人流れてきている。死獣朱雀と名乗った異形種だったが、幸いなことにすでに予知されていた出会いだった為何とか取り込むことに成功していた。

彼は保護という名目でここに軟禁状態にしている。彼の知識はこちらにとって貴重である。そのおかげで、土の巫女姫の爆死を回避で

きたともいえる。

破滅の原因は彼ではないだろう。ならば、ほかの”ぷれいやー”のどれかが世界を破滅に導くのだろう。——いまはまだ、原因特定には至っていない。

「今は”絶死絶命”に監視の任に就かせているが、いつ気まぐれを起こすことやら——」

法国の蔵書を読みあさっているのではばらくは大丈夫だろうが、ほかのぷれいやーの話を目にすればここから去ることは確実である。

まだ完全に容疑が晴れたわけでもなく、さらに他の”ぷれいやー”に対抗できる貴重な存在なのだ。

——いっそのこと秘宝ケイ・セケ・コウクを使って？いやいや、なにかあるかわからないと神官長は首を振る。

「・・・本当に、やっかいなことだ」

そう、疲れたように・・・深くため息を吐いた。

再び！

邂逅

ドサリとまた一人部下が地に沈んだのを見て、屈強な男は顔をこれでもかと歪めて目の前の銀の騎士を睨みつけた。

「さて、後は貴方だけです。無駄な抵抗はやめて投降してください」「畜生がっ!!俺がいなけりや部下が貴族の娘を殺すことに——」

「そりやねーな。そいつ等は俺らが斬って捨てちまったからな」

「やあ、ブレイン。人質は無事ですか？」

「まあ、お前が派手に敵を引きつけたからな。今はガゼフの部隊に保護されてるよ」

そういつて気のない風に肩をすくめているが、もし男がブレインに向かってくるようなら斬り捨ててるつもりだ。もはや逃げ場はないと、悟った男は最後の手段にでる。

「てめーらも道連れだっ!!」

そう言つて一つの柱を叩き折ると、地響きが起こる。おそらく住処の自爆装置なのだろう、諸共生き埋めにする気なのだ。

ブレインが舌打ちして踵を返そうとするより早く、全身鎧であるはずのたつちに抱えられて凄まじいスピードでブレインが通った通路を走り出す。

「ブレイン！出口はどっちだ!!」

「目印があるからその通りに走れ!!」

抱えられながらたつちに怒鳴ると背後が崩落していく。かなりのスピードで、ブレインは急げと叫んだ。

「生き埋めになるぞ!!お前は土の中で冬眠できるかもしれんが、俺は死ぬ！」

「私だって冬眠なんかしない！」

鼻先まで迫る土砂にブレインは早くしろと銀の鎧を叩く。自分の足であったなら確実に埋もれているスピードはたつちでもギリギリ

である。道を間違えればアウトだろう。
長くも短くもない間にようやく外の匂いを感じた。

「おお、無事だったか二人とも」

「無事だったかじゃないぞガゼフ。危うく生き埋めになるところだった」「まあ、いいじゃないか。怪我もないのだから」

泥だらけで疲れたようなブレインにいいながら、たっちは息切れもなくノビている今回の首謀者をガゼフに突き出した。

「これが今回の事件の犯人だ。護送をよろしく」

突き出された男の顔を確認すると、ガゼフは部下に連れて行かせる。

「つたく、次から次へと人使いが荒い王様だな」

「そういうな、今回の大規模な改正で今まで甘い汁を吸っていた悪人達があぶり出しているんだ。逃げられる前に片っ端から捕まえなければならん」

「王子達も軍を率いて討伐しているんだ。我々もがんばらないといけないぞブレイン」

「わかっているって——。しかし、クライム君が参加しなかったのは意外だったな。彼の性格なら一も二なく前線に出るかと思ったんだが」

「悪魔騒動が有った後だからな、今ラナー様の傍から離れるのは心配なのだろう」

堅い顔で参加できないことを深々と詫びた少年を思いだし、ガゼフは王都のある空を見上げる。一步間違えれば死んでいただろう事件の後だ。むしろしばらくは王女の警護に徹して欲しい。

「・・・すまない。少し疲れたので休んでくる」

そういうと、たっちはそそくさとその場を離れてしまった。……

悪魔騒動の話になるといつもこれである。

「——なにがあったと思う?」

「さてなあ、あいつに負けたって訳じゃないさそうだが……。そういえ

「あの悪魔と初めてあった訳じゃなさそうだったな」

ブレインはウルベルトと対峙したたつちを思い出す。凄まじい勢いで飛んで行ってしまったので、戦いは見ていないがウルベルトがたつちを見て笑ったのを思い出す。

「昔の知り合いとかかねえ？ガゼフは聞いていないのか？」

「たつちはあまり過去を語ってはくれないからな、唯一知っているのは昔は人間だったという話だけだ」

「ふくん？・・・たとえばあの悪魔に呪いをかけられて蟲にされたとか？」

「——あり得なくはないな」

悪魔にモンスターに変えられ、故郷を追われてしまった。もしくは故郷を滅ぼされたという可能性もある。そして、この王国に流れてきた。

そう考えるとつじつまが合うような気がする。

「・・・あまりたつちの前で悪魔の話はやめたほうが良さそうだな」

「ああ」

「あく、意外と王様めんどくさいなあ」

どこに行っても護衛が付いてくるのがうざったい。プライベートがない。ついでに召還した悪魔はバカ。

「政治関連はザナツクに丸投げしてるし、軍事面はバルブロが張り切ってるし、俺のやることなんか読めない書類整理ぐらいなんだよな」

それも、テキトーにサインして判押してたら、レエブンが真っ青になってた。それから整理する書類が減ってたから、たぶん選別してから渡してるんだろう。

「なのに自由がない！ストレスでハゲるわ!!」

バタバタとベッドの上で暴れるウルベルト、今も寝室の扉の前には

護衛の兵が張り付いていて防音魔法をかけなければいけない。

今日は体調悪いからお休み！と言えば医者が集団で遣ってくるし、ちよつと散歩と言えば近衛がゾロゾロとついてくる。今のところプライベートが保たれているのは寝室のみである。

「メイドもなく、服着るのも風呂はいるのにもメイドを使うって……ないわ。聞いているうちは羨ましいとか思っちゃってたけど実際やるとハズいわく」

「こども自分の時間がないと、遊ぶことも実験することも出来ない。

「——癒しが欲しい。遊びに行きたい」

そう思うと、ウルベルトは起きあがって己のダミーを作り始める。

もう我慢しないと決め、欲望に忠実な悪魔になったウルベルトは城を抜け出すことを決めた。

「うくん、あまり依頼がありませんね」

「まあ、アダマンタイトに頼む仕事なんてそうそう有りませんからね」
組合の掲示板に貼られるのはせいぜいミスリル級の仕事である。

「そういえば指名された依頼が有りましたけどあれは？」

「——貴族の護衛の依頼だったので」

「ああ……」

貴族嫌いのニニヤがいる時点で断る案件である。まあ、どうせ貴族の見栄でアダマンタイト冒険者を雇うというだけである。だったらオリハルコンのクラルグラでも十分だろう。

貴族の依頼を断るとやっかいだが、そこは交渉が意外と得意なモモンによって穩便にクラルグラを紹介させてもらった。

「じゃあどうしましょうか？モンスター狩りにでも行きますか？」

「いえ、狩りすぎも良くないです。ここ一帯のモンスターが居なくなると別のモンスターが縄張りを求めてきますので」

「なるほど……、じゃあ、ドラゴン狩りは？」

「まだ諦めてなかったんですか、だめですよ。さすがにドラゴンは」

元々数は少ないし、下手をしたら竜王達の怒りを買いかねないとペテルは首を振る。いまだドラゴンステークを諦めきれないモモンはガツカリする。

「アイスクリームでも十分いけますって」

「寒くなったらそうもいきませんって、．．．あー、新しい料理でも考えなきゃだめか」

オーガやゴブリン達の報酬に頭を悩ませているモモンにペテルが苦笑いをしていると、ふと、前の集団に見覚えのある顔、というか鎧を発見した。

「あつ、たつちさんだ」

「え？あ、ホントだ」

相変わらず銀の鎧に赤マントという派手な出で立ちが目立つ。すでにこちらに気が付いているらしく、足取りも軽くこちらに向かってきていた。

「こんにちは、モモンさん、ペテルさん」

「お久しぶりです。エ・ランテルに何かご用事でも？」

基本的に王都を中心に活動しているたつちが、エ・ランテルまで来るのは珍しい。よく見れば、遅れてこちらに向かつてくるガゼフとブレインもいた。

「近くまで来ましたので、皆さんの顔を見にやりました」

「それだけじゃねえだろ。国に反抗する犯罪者集団を捕縛してな、その収監にエ・ランテルまで来たんだよ」

「なるほど」

ブレインの補足に、モモンは後ろの集団を眺める。確かに縄で縛られた男達がいた。だが、さらにこの町によつた理由が有つたらしくガゼフも会話に参加した。

「それと、ゴ——、ごほん。モモン殿達も知っておられると思うが、ズーラーノーンの幹部二人の事についての話も聞きに来たのだ」

国にとつても有事であるカジット達の襲撃の件は書類だけではわからないこともある。だが、悪魔の爪痕が残る王都に二人を護送しても収監する場所がないのだ。なので、王国戦士長直々に話を聞きに来

たのである。

「——とは言っても、聞ける事なんてほとんどないと思いますけどね」

本人達はもちろん、襲撃時にいた衛兵も記憶を消されてしまっていて手がかりとなるものはなにもなかった。一応は、アインズになって記憶を覗いてみても、なにもわからないので尋問で得られるものはないだろう。

そのあたりのことも、それとなくガゼフに伝えれば落胆した色が目に宿った。

「まあ、聞くだけ聞いてみよう。ブレインとたっちはのんびり観光でもしていてくれ」

「ついて行かなくていいのか?」

「いや、俺だけで十分だ」

最近の仕事ばかりだし、たまには息抜きしてくればいいとたっちの肩を叩く。なら案内をしましょうとモモンが申し出た時だった。

「モモンさん」

後ろから声をかけられ、振り返るとデミウルゴスが笑顔で立っていた。

「あれ?デミウルゴスさん、来てたんですか?」

帝都で忙しくしているはずの商人がエ・ランテルに來ていることに驚くモモンの後ろで「デミウルゴス・・・?」と訝しげな声が聞こえた。

「新しい事業で忙しいとおっしゃってたから、しばらくエ・ランテルには來れないかと——」

「ええ、忙しい日々ですが息抜きは必要ですから」

ニコニコしながらモモンににじり寄るデミウルゴスに、若干引いてしまう。

「ええっと、デミウルゴスさん近くないですか?」

「いやあ、もう精神的に疲弊してしまって・・・。モモンさんで癒されようかと」

「私なんかに癒されるんですか?」

ただのゴツい鎧なのとはいえ、癒されますともと頷かれてしま
う。まあ、本人がそういうならと納得しかけると、——後ろからと
ても低い声が聞こえた。

「アンタなにやってんだ」

「げえっ!？」

ようやくモモンの後ろにいる集団に気が付いたデミウルゴスが、
とっても不機嫌なたつちを見つけて顔を歪めた。

「あれ？お二人ともお知り合いですか」

「違います」

息ぴつたりに戻事をし、にらみ合う二人にモモンは首を傾げてしま
う。

「ここになにしてんですか、今度はなにをしようとしてるんだ」

「うるせえ、偶然だよ。てめえこそなにしてんだよ」

「アンタには関係ない」

ガルガルとにらみ合う二人に、全員目を丸くする。特に、たつちの
こんな姿など始めてみるガゼフとブレインは余計珍しいものを見た
顔だ。

その中で、モモンだけは冷静で、この二人との手紙のやり取りから
大体を察した。

（ああ、喧嘩したっていう友人か）

まさか、文通していた友人二人も友人だとは思わなかった。世界つ
て狭い。

「お二人とも、落ち着いてくださいよ」

「モモンさん、何でこいつと一緒にいるんですか」

「コツチの台詞ですよ。モモンさん彼とあまりつきあわない方がいい
ですよ」

「んだとコラ」

「何ですか」

バチバチとにらみ合う二人にモモンは少し悲しそうな声で言った。

「——友達が喧嘩していると私は悲しいんですが」

「すみませんモモンさん、ちよつと大人げなかったですね！」

「大丈夫！ただの挨拶みたいなものなんで！悲しむ必要ないですよ！」

コロツと態度を変えた二人にガゼフ達はあっけにとられてしまうが、モモンだけは慣れたように「そうですか」と微笑んだ。

「で、どうしてここにいますか？」

「ほんとーに偶然だって、友達になったモモンさんに会いに来ただけだ。——まさかお前までモモンさんと友人関係になっているとは思わなかったけどよ」

ちよつと話があると、裏路地で二人顔をつきあわせてたつちは警戒心も露わにデミウルゴスと名乗っているウルベルトを睨む。

王都であんな事をしでかしたのだ。エ・ランテルでも何かするつもりかと疑うのは当然である。しかし、モモンを友達と言う悪魔のぼつの悪そうな顔を見て、本当に偶然なのだとなつちはちよつとホツとした。

「で？お前はなににきた訳よ？」

「……この近くを荒らし回っている犯罪者集団を捕縛してたんですよ」

ああ、そういやそうだった。とウルベルトは思い出した。

いろいろと国をかき回したから、各地で犯罪者どもが騒ぎ出したので討伐に向かわせてたんだった。

バルブロに全部任せたから、誰がどこに向かったまでは把握してなかったが……。しかし、最強三人を分けずに一つの部隊にまとめるって、いや、まあ、自分で手柄をあげたいんだろうな。

「相も変わらず、国家権力になってるんですか」

「一応、門外顧問的立場ですよ」

知ってるよ。

などといえないウルベルトは「へー、そう」と当たり障りのない返事をする。

「——それで？ウルベルトさんは今なにをしてるんですか」

「まあ、いろいろかな。別の国で貿易業を営んでますよ」

あと王国の支配なんかもやってるけど。

そんなこと言えば問答無用のPVPになるから黙る。腕組みし、強い視線を送っているのがわかる。王都を襲撃したことが引つかかっているのだとわかる。が、あえて無視して戻ろうと提案する。

「人を待たせてるんですから、長話はやめませんか？」

「・・・そうですね」

薄暗い路地で二人つきりというのもイヤなので、ウルベルトはさっさと踵を返した。

その後は、モモン達の案内でエ・ランテルの観光をしていた。たっちは王都からあまり出ないので物珍しく見て回り、ウルベルト——デミウルゴスは帝国との文明の差を冷やかしたりしていた。

二人ともまだギクシャクとした空気をまもっていたのだが、不思議とモモンが間にはいることでそれが緩和された。

軽い喧嘩や会話もふつうに出来るようになり、懐かしい雰囲気二人は顔を見合わせた。

「やっぱ似てるよな？」

「ウル、デミウルゴスさんもそう思いますか？」

ユグドラシル時代、あの頃も二人はよく喧嘩をしていたが険悪な空気になりかけると決まってギルドマスター、モモンガが二人の仲介に入ってくれて、決定的な決別を回避してくれた。

そのタイミングや雰囲気、仕草までもが重なり二人の苛立ちがフツと鎮静された。

「なんつーか、・・・モモンさんの前だと喧嘩が遣りづらいわ」

あの人を思い出すから、・・・あの人に後ろめたさがある二人はモモンを困らせたくはないのだ。

そう言ったデミウルゴスを見て、たっちは彼さえいれば大丈夫なの

ではと思った。

(モモンさんがいれば、ウルベルトさんは悪さをしないかもしれない)
あの頃の、人間だった頃の心を保てるかもしれないとたっちは安心した。

——だが、元々王都襲撃の原因はモモンを誘拐して、それを元にモモンガを作ろうとしていたと知ったら、喧嘩どころか最終決戦になっていただろう。

ガゼフと合流すると、問題が発生したという。

この近隣に犯罪者集団が隠れ家を造っているという情報が有ったらしい。しかし、そこへ向かうには部隊は疲労していて若干の不安がある。それでは冒険者の力を借りればいいのかと、ブレインとたっちが提案するが、組合と国とで決められていることがある。

「国が冒険者を兵として徴集する事は出来ない」

そう言う取り決めが、昔からされている。あくまで対モンスター専門家であり人間との争いに関わらないとすることで、冒険者は戦争にかり出されることはないし、国は兵力をモンスター討伐に極力裂かなくても良くなるのだ。それでも、様々な問題はあるがこれによって保証されていることもある。

それを無理に破らせれる事は出来ない。同席していた組合長も許可することは出来ないと言った。王都の悪魔騒動は異例中の異例である。

それには納得できないと、たっちが渋い顔をしているがガゼフがなだめた。——どこでも管轄争いというものはあるのだ。

「——とところで組合長、一つお聞きしたいのですが護衛の依頼中に

人間の盗賊が襲ってきた場合。撃退することは出来ますよね？」

「ん？——ああ、そうだよモモン君」

「もし、護衛対象が盗賊のアジト内に入った場合。盗賊を殲滅するのは仕方がないことですよね？」

「君にはかなわんなあ・・・」

人間の争いには関わらないというルールは有るが、何事にも例外は有るのだ。その穴を指摘されて、組合長は困った顔をした。

「組合長だって、街の近くに犯罪者を住まわせたくはないでしょう？ちよつとだけ目を瞑ってもらえませんか？」

手を合わせて小首を傾げる仕草は、鎧の男がするには似合わないのだが——なぜかモモンにはしっくりくる不思議である。

責任者としてはここで許してしまえば、今後も同じような事が続く恐れもある。うゝつ、と髪をかきむしりながら悩んだ末。アイザックは今回だけだと消え入りそうなほど小さな声で許可した。

護衛対象はガゼフ・ストロノーフと付き添い二人のブレインとたち。部隊の戦士達はエ・ランテルにて待機する事になる。

これは個人の護衛なら許せるが、さすがに部隊の護衛となると誤魔化しきれないと組合長に言われたのである。

内容はカツツエ平野の視察を漆黒の剣が護衛する。——まあ、その途中に寄り道することになるが。

「私も同行しても宜しいですか？」

そう言ったのは商人であるはずのデミウルゴスである。ただの一般人には危険な道のりだと反対したが、「私、実は凄腕の魔法詠唱者マジックキャスターでも有るんです」と笑って見せるので、どうしたものかとたつちを振り返ればいいんじゃないですか？と特に反対もしなかった。

「昔、冒険者のまねごとをして、久しぶりに腕を振りたいと思いまして」

「——ちなみに使える位階はどれほどですか？」

「3位階までは問題なく使えますよ」

おおっ！と周りから感嘆の声が上がるなか、訝しげなたつちがデミ

ウルゴスに聞く。

「貴方超位魔法まで使えるじゃないですか」

「しっ！この世界では達人でも第3位階、最上位でも第6までしか使えないんですよ。周りに合わせ——つて、まさか貴方、考えなしに高位魔法バカスカ使っていないでしょうね？」

「私はいつでも全力です」

デミウルゴスは頭が痛そうにする。いや、まあ異形種だからとごまかせるだろうが、周りと足並みをそろえて欲しい。——たっちとしては人助けに全力を出さずにいつ出すのだという考えだろう。

「では、移動は馬ということだ」

馬、という言葉にビクリとするのが一人、困った顔をするのが一人、興味深そうなのが一人いた。

「馬ですか、私乗ったことはないですよね」

そう興味深そうに言うのはデミウルゴス。現実でも乗馬など出来るはずもないし、ユグドラシルではもっぱら〈飛行〉^{フライ}で移動していた。生きている馬というのも初めてである。

「私は馬に怯えられるですよね。いつもは走ってついて行くんですが」

「いや、さすがにそれは……」

騎馬の集団に着いてこれる人間を見たらさすがに警戒されるとルクルットは首を振る。ですよねと困った顔をするたっちにペテルが明るい顔をした。

「大丈夫ですよ！モモンさんが騎獣する魔獣ならたっちさんも乗せられると思いますよ！」

「ペ、ペテルさ」

ペテルの提案に動揺するモモンを余所に、魔獣に興味が集まる。

「そう言えば噂で聞きましたな、何でも森の賢王を従えたとか」

「へー、俺もいろいろな魔獣と戦ったがそんな伝説級とはお目にかかったことねえな」

「どんな魔獣なんですか？」

「蛇の尾を持つ白銀の四足獣です。見たら驚きますよ」

なにやら得意げな漆黒の剣に楽しみだとたち達が笑うが、その影で頭を抱えているモモンには誰も気が付かなかった。

魔獣を連れてくる間に、デミウルゴスに乗馬を教えていたが結局は乗りこなすことは出来ないようだった。

「まあ、ハムスケさんは大きいし、一緒に乗らせてもらえばいいんじゃないですかね」

ハムスケとは誰だと思いつつもそうしますとデミウルゴスは笑うが——その数分後、盛大に後悔することになった。

「こ、これが——」

「森の賢王」

「お初にお目にかかるでござる！拙者元森の賢王こと我が主モモン殿の騎獣ハムスケでござる！」

モモンが連れてきた大きなハムスターに全員呆気にとられてしまった。

「え？ハム、スターですよ？」

「モモンさんコレに乗ってたのかwww」

初見ではないデミウルゴスが笑いを堪えている。でかいハムスターを連れてきているなどは思ったが、まさか騎獣しているとは思わなかった。

想像するとアンバランスさにむしろ可愛い気がする。まあ、モモンだからそう思えるのかもしれない。ついでに骸骨のモモンガが乗っているところも想像した。たぶんギャップ萌のタブラは大喜びするかもしれない。

「いや、さすがに——」

「すげえ、こんな強大な魔獣マジでいるのか」

「え？」

「コレを屈服させるとは、すごいなモモン殿は」

「お前なら勝てると思うか？」

「うゝむ、装備を万端に、しかもありとあらゆる想定をしておいたらあるいはいけるかもしれんが．．．一人では厳しいな」

「だよな、見ろよあの堅そうな毛皮。生半可な剣じや通せそうもないぞ」

「しかも賢王と呼ばれているのだ。あの知性有る瞳を見ろ。おそらく魔法も使えるのではないか？」

「そうだな。強大な姿で知性を持ち魔法まで使えるか．．．けど、男としては一度はあんな魔獣を従えてみたいよな」

「ロマンだな。俺ももう少し若かったら挑戦してみたかった」

「なに年寄り臭いこと言ってるんだガゼフ、まだまだこれからだろ」

でかいハムスターを恐れながらも、輝く目で見ると二人に——「デミウルゴスとたつちは驚愕した。強大？知性？．．．．．どこが？」

「え？あの、ふつうに可愛くないか？」

「——は？」

「たつち．．．いや、お前は普通の人間の感性はわからないよな」

呆れたが、仕方がないかと諦めたようなブレインに、自分は間違っているのだろうかどたつちは真剣に悩んだ。

——それよりなにより、重大な問題が二人を待っていた。

「それでハムスケさん、あの二人も乗せることは可能ですか？」

「全然よーでござるよー！」

「——え？」

かくして、巨大ハムスターにおっさん3人が乗ることが決定したのだった。

荘厳なる玉座の間に、一人のアンデッドが気だるげに目の前でひれ伏すもの達を見ていた。

そのもの達は多種多様で、ある者は冷気を纏ったバーミンロード、またある者は幼きダークエルフの双子、またある者は美しき吸血姫、またある者は炎の気配を纏う悪魔、そして——漆黒の羽を持つ美しい女性が口を開いた。

「——このナザリックを制圧した貴方様こそ至高なる王でございます。ナザリックは貴方様の強大さを称えます。貴方様の知性を称えます。貴方様の美しさを称えます。貴方様の慈悲深さを称えます。貴方こそがこのナザリックの正当なる支配者でございます」

アンデッドを見上げた女の金色の瞳には恍惚の光が宿る。

「貴方様の望みを叶えましょう。貴方様の敵を屠りましょう。私は貴方の僕でございます。貴方の奴隷でございます。——そう！私のもすべてを貴方様に捧げま——」

「カットオツ!!統括殿台詞が違います!!貴方だけじゃなくてナザリックすべてを捧げてください!!」

「ごめんなさい、ついうっかり本音が」

「こんの大口ゴリラ!!モモンガ様に直接口上を述べることが出来るにも関わらず！自分だけ忠誠を誓おうなんて——!!厚かましいにもほどがありません!!」

美しき守護者統括アルベドの口上をパンドラが遮ると、シャルティアが牙をむき出しに怒り出す。ほかの守護者も不満げにアルベドを睨んでいた。

「——何度間違えればすむのかね？アルベド。こうなると代表者を変えることになるのだけれど?」

「あら、私以外につとまるのかしら?」

デミウルゴスの嫌みに、にっこり笑顔を返すアルベドだが、その手にはワールドアイテムが握られている。

・・・変更しようものなら乱れ打ちをするきであるこの女。

そんな守護者達を丸めた台本で肩を叩きながら眺めるパンドラは呆れきっている。振り返れば、モモンガを精巧に模した石像も呆れかえっているように見える。

「はあ、モモンガ様をお迎えする為の練習ですよ？まじめにやってください。このままではいつまでも本番が迎えられませんよ」

「そうだよアルベド！そんなんじやモモンガ様が帰って来て頂いた時に呆れられちゃうでしょ!!」

「モ、モモンガ様が、僕たちを使ったださるかの大事な時ですし、しつかりれ、練習しないと——」

「ムウ、備工有レバ憂イナシダ」

そう守護者が言い争っているのは10階層の玉座の間、ではなく、第六階層の闘技場内である。聖域である9・10階層の僕の立ち入りは基本禁止である。モモンガに忠誠を誓うときには玉座の間に入るが、ただの練習で聖域に入ることなど出来ない。

なので、ここに玉座の間のレプリカを作り練習中なのだ。

大事な場面で失態などもつてのほか。特に、演技が下手なコキユートスにどもりやすいマーレが練習に積極的である。なのに、アルベドが何度も台詞を間違えるのである。———というか、ここぞとばかりにモモンガにアピールしようとしているのが丸わかりである。

「ねえ、パンドラズ・アクター、台本を少し変えてもらえるかしら？そしたらまじめに演技するわ」

「———ふざけていたことは認めるんですか」

「私がどれほどモモンガ様を愛しているかを主張したかったのよ。守護者統括としての言葉以外にもモモンガ様を愛するアルベドとしての台詞を追加して欲しいの」

「ちよーずるいでありんす!!パンドラズ・アクター！私も台詞追加して欲しいでありんす!!」

ギヤイギヤイと争い出す二人の女をしばらく眺めっていると、パンドラはため息を吐いて「わかりました」と了承した。

「王には后が必要ですからね。イベントとしてどちらかをモモンガ様に選んで頂きましょう。コレなら文句はありませんね」

「ありがとう！食品サンプルを選ぶことはまず無いから大丈夫よ！」
「あ”あ”ん？賞味期限切れをモモンガ様が選ぶわけ無いじゃない
!!」

「んだとヤツメウナギ!!」

「やんのか大口ゴリラ!!」

「……別に喧嘩をなさるのはいいんですが、その分モモンガ様がお越しくださる日が遠のきますがそれでも宜しいので？」

その言葉に、二人は顔を見合わせる。ばつが悪くなって、互いに小声で謝罪した。

「パンドラって喧嘩の仲裁がうまいよねー。あたしだったらただ見るだけだわ」

「上手いってほどではないでしょうがね」

役者故に相手の気持ちを理解し、落としどころを見つけられているのか。それとも癖の強いギルメンをまとめ上げたモモンガの性格を受け継いでいるためか。どちらにしてもモモンガ様のおかげであろうとパンドラは特に気にしない。

「ところで、后イベントはアウラ殿も参加ですからね」

「うええええっ?!な、なんでよ!?!」

「なんでって、至高の方のお后候補が二人だけなどあり得ないでしょう?」

「そ、そりやそうだけど——あ、あたしなんかモモンガ様が」

「ないとも言い切れないでしょう?」

「フム、そうだね。ありとあらゆる想定は必要だ。もしかしたらコキユートスを選ぶ可能性だって0じゃないしね」

「ブホツウ?!ナ、ナゼソウナル!?!」

「ユグドラシルでは同性間の婚姻も普通だっただろう?モモンガ様はそうではないと誰が言えるかね?」

「タ、タシカニソウダガ——ッ」

「そうになると台本も大幅に書き換えねばなりませんね。——忠誠の議の練習はまた後日にしますか」

ブシユブシユと茹で蛸になっている守護者を余所に、パンドラはデ

ミウルゴスを振り返る。

「デミウルゴス殿は確か作品造りが得意でしたね。后を決めるためのティアラ制作を依頼しても宜しいですか？」

「いいですよ。モモンガ様の后となる者をつける冠ですからね。腕によりをかけましょう」

「っ！こうしちゃいられないわ!!セバスに言っつてウエディングドレスを仕立てさせないと！」

「あ、あたしも!!」

「セバス殿ほかメイドの皆様は任務中ですよ」

セバスやプレアデス達はある任務の為にナザリックから離れていった。一般メイドや使用人たちもモモンガをお迎えするために張り切つて隅々まで掃除しているのだ。あまり負担をかけるものではないとたしなめる。もはやナザリックは舐めても問題ないほどツルツルピカピカである。

「いいんじゃないですか？体力だけは有り余っている竜人ですし呼び戻しても」

「・・・どうしてこうお二人は仲が悪いのか」

パンドラはつるりとした頭を抱えてため息を吐いた。

「皆様！拙者の乗り心地は如何でござろうか？」

「あー、えー・・・、乗り心地は、いいですよ。ねえ？」

「俺に話しかけるな、今、無になつてんだよ」

「———なんかすいません」

ただいまカツツエ平原へおつさん三人を乗せた巨大ハムスターが

爆走中である。はじめは拒否したのだが、周囲の謎の押しによりあれよと言う間に乗せられてしまった。降りようと思っても周りの絶賛にもうどうにでもしろとやけくそになったのだ。

・・・モモンはデジャヴを感じた。なんでこんなに乗せたがるんだこいつ等。

「——やはり様になるな」

「まあ、あいつが普通の馬で収まるわけねえからな。しかし、出来すぎな絵面だよな」

ガゼフ達としては、自慢の仲間をカッコいい魔獣に乗せてみたいという思いだった。ブレインとしてはガゼフにも乗ってもらいたいと密かに思っていて帰りに頼んでみようと考えている。

漆黒の剣は自分のことじゃないのに少し自慢げだ。うちの漆黒の英雄すごいでしょと顔に書いてある。

——本人達の気持ちは置いてけぼりである。

「モモンさんはいつもハムスケさんに乗ってるんですか？」

「・・・遠出するときだけです。普段は森に放しています」

たっちの質問にモモンは消え入りそうな声で答える。漆黒の剣は普段から乗り回して欲しそうだが、そんなことすれば精神が死ぬ自信がある。

「デミウルゴスさんは大丈夫ですか？捕まるところもないですし、つらかったら言ってくださいね」

「モモンさんが支えてくれますから問題有りませんよ」

モモンにはにこやかに答えるデミウルゴス。しかし、座りが悪いので密かに〈飛行〉^{フライ}を使っていたりする。

別に〈飛行〉^{フライ}が使えるからとハムスケを辞退することは出来た。しかし、そうなるもモモンとたっちが相乗りすることに気が付いて口を噤んだのだ。そんなことになるなら我慢する。

座り順としては、前にデミウルゴス間にモモンを挟んで後ろにたっちとなっている。こいつの隣は絶対イヤだとそろって訴えたための処置である。

「たっちだけだったら爆笑してスクショ撮りまくってたのに」

「聞こえてますよ？モモンさんに失礼でしょう」

「・・・大丈夫です。見た目さえ目をつぶればいい騎獣なんですよ。馬に乗れなくて手綱が無くても意志疎通できますし、野伏レンジャーの能力持ってますし、——見た目さえ気にしなればっ」

ぐふうつと肩を震わすモモンに二人は無言で肩を叩いた。

「——待てよ？目立たないために馬で移動になったが、ハムスケに乗ったら意味くないか!？」

デミウルゴスの指摘に皆ハッと振り返った。

「——ちよつと作戦変更しましょうか？」

「なんで早く気づかないんですかアナタ」

「おめーに言われたくはないわ！てか、ただ恥かいただけじゃないか!!」

アジトに到着する前に気づいて良かった。

「で？結局は気づかれないように徒歩で移動するのか？」

「我々はそれぐらいの距離なら苦にはならないが——」

「まあ、目的地まではそこまでじゃないですし、我々も大丈夫なんです
が——」

チラリと不機嫌なデミウルゴスに全員視線を巡らせる。どう考えても体力がなさそうである。

「大丈夫ですよ。コレでも体力有りますから」

「なんでしたら、私が抱えましょうか？」

「喧嘩売ってんのか？売ってんだよな！買うぞコラ！」

仲の悪い二人を後目に、さてどうしようかと話し合いを始める。

「さて、一人も逃がさないように一網打尽にするんですよね？」

「困い込むにも人数足りねーけどどうするよ？」

ペテルとルクルトの言葉にガゼフはうなずき、地図を広げた。元々は洞窟が有った場所に、犯罪者達がアジトに作り変えたと説明する。

「ベースが洞窟で、出入り口がいくつ存在するのは——」

「ここなら俺が知ってる。新しく出口を作っていないなら全部で5つの出口がある。——ただ、一つはカツツエ平野に出るし、もう一つは確か沼地が広がっていた。：まあ、使うとしたらそこ以外の3つだろうか」

ブレインの答えになるほどと周囲が頷いた。野盗時代にアジトを探していて、この場所もチェックしていたのが役に立った。

「じゃあ、三チームに分かれるのか？作戦は？亀の頭を引っ張り出す感じでいいか？」

漆黒の剣の定番の戦法をルクルットが提案するが、ガゼフは顎に手をやり考える。

「・・・いつもであれば、たっちがアジトに突っ込んで行って、逃げ出してくる者達を捕縛しているのだが」

「ああ、追い込み漁戦法であるか」

「それパス。それでこの間生き埋めになりかけたろ」

ブレインが拒否をするので、ガゼフはなら漆黒の剣の戦法で行こうと頷いた。

「1チームが囷となり、ほかの2チームが逃げ出す者を捕縛だな」

「囷は誰がやります？」

「たっちだな。あいつ見た目も行動も派手だから大体囷にしてるんだ」

「囷は危険な役回りだが、たっちなら問題は無いからな」

たしかにと振り返れば、まだメンチの切り合いをしていた。

「しかし、たっちさんを見て逃げ出しませんかね」

「強いつたって一人だと何とかなると思いこむバカが多いからな。そこは大丈夫だ」

なるほどねとモモンは頷く。たしかにたっちはどうってつけの人物はいないだろう。

「じゃあ、たっちさんにはハムスケさんに乗って突撃してもらおうと言うことで——」

「まって、なんでハムスケを？」

「野伏^{レンジャー}の能力持ってますし、魔法も使えますし、支援にぴったりじゃないですか。ついでにさらに派手になって視線を釘付けに出来ますし」

「そうですけど・・・」

ハムスケに乗るたちを想像して、なんかイヤだとモモンは思う。たっちは格好良くいて欲しいという妙な願望があるのだが、しかし、この場合は仕方がないかため息を吐く。

「ではデミウルゴスさんは私と一緒に行動してもらいましょう。魔法を使えると言いますが、やはり本職ではないでしょうし」

「そうですね」

たっちとハムスケのチームとモモンとデミウルゴス、ペテルダインのチーム、ガゼフとブレイン、ニニヤルクルットの3チームに分かれようとはぼ話し合いが終わり、いまだ喧嘩中の二人に声をかけようとしたときだった。

「殿！強い気配を感じるでござる!!」

毛を逆立てたハムスケの警告に、全員振り返った。

共闘

「さてと、みんな配置に着いたかな？」

ハムスケと待機していたたっちは空を見上げて呟いた。

作戦を説明され、ハムスケに一人跨がることになったたっちは思わずギチギチと警戒音が顎のあたりで鳴らしてしまった。

作戦自体に不満は無いのだが、鬼の首を取ったかのように笑うデミウルゴスが気に入らないだけである。その姿はまさに悪魔である。警戒音も出てしまっても仕方がない。

この場にいるのが自分の正体を知る者だけで良かった。さすがに警戒音はごまかしが利かない。

まあ、結局はそれぞれが配置に着いてから跨がるので、デミウルゴスの目には入らないのが救いである。当の本人はギリギリまでたっちが跨がるのを待っていたが、モモンにせかさされて渋々配置に向かった。

——こっそりシャッターチャンスを狙っていた使い魔は叩き斬っておいた。

ほかにも隠れている使い魔がいなかあたりを探していると、ニヤから配置に着いたという〈メッセージ伝言〉を受け取り、たっちはハムスケに跨がった。

「では、行きましようか」

蛇の尾を持つ白銀の四足獣である強大な魔獣が、赤マントをはためかせる銀の騎士を乗せて平野をすさまじいスピードで駆け抜ける。

そして、目標から少し離れた場所ですたん止まると騎士が剣を抜いて太陽にその刀身を煌めかせた。

「我が名はたち・みー！リ・エステイーゼ王国に恩ある者だ！王国に徒なす悪党達に正義の鉄槌をくだしに来た！！抵抗することなく、その身を差し出せ！投降するというのであればそれもよし！だが、罪を重ねるといのであれば我が剣で断罪する！！」

手を加えられた洞窟の入り口を鋭く睨みながら口上を述べるたちは、おそらくカツコいいのだろう。実際に漆黒の剣やガゼフ達が見ればため息が漏れるほど見とれることだろう。

——だがしかし、やはりユグドラシル出身者から見れば、ドヤ顔した巨大ハムスターに乗ったおっさんがカツコつけているようにしか見えない。

デミウルゴスなんかは爆笑間違いなしだし、モモンは必死に目を反らすことだろう。その自覚もたちはあるが、だからといって恥ずかしがってもいられない。むしろ開き直って堂々とするしかない。

けれど、待てども洞窟からは何の動きもない。首を傾げてたちはハムスケから降りると顔を見合わせた。

ハムスケも髭をヒクヒクさせるがやはり動く気配を感じられず、困ったようにたちちを見つめた。

「どうしたのでござろう？もしやそれがし達に恐れをなして巢で縮こまっているのでござろうか？」

「いつもであれば、血の気の多い者が真っ先に顔を出すんですけどねえ？」

たちち一人の場合は大抵力量差も判らない脳筋男が飛び出してくるのだが・・・、ハムスケがいることで怯えているのだろうか？ただのどかいハムスターなのに・・・。

「まあ、戦わないで済むならそれでもいいんですけどね。投降を呼びかけてみますか」

そう言つて、たちは羊皮紙を取り出して丸めるとメガホン代わりにして、洞窟内まで聞こえるように声を張り上げる。

「あー、テストス。ううん！えー、君たちは完全に包囲されている！！大人しく投降したまえ！！」

昔とつた杵柄というか、さんざん見まくった刑事ドラマの影響でそ

んな口上を張り上げる。古い熱血刑事物ばかり見ていたので、現実の警察官では出来なかったことをここぞとばかりにする。

「故郷の親御さんも泣いてるぞ!! 罪を償って真つ当な人間になるんだ!!」

本当ならここにお袋さん呼びたいがそうも行かない。なので、たっちは咳払いをすると、とてもいい声で歌い始める。

「かくさんがよなべくをして、てぶくくろあんでくれたくく♪」

「——なにやってんですか」

呆れたように入り口から出てきたのは漆黒の鎧を着たモモンだった。意外な人物の登場に、たっちは小首を傾げた。

「あれ? どうしてモモンさんがこちらに?」

「どうしてというか・・・、なかを見てもらえば判りますよ」

犯罪者がいるはずの洞窟をあつさり抜けてきたモモンは、さっきのたっちについて突っ込むのをやめて手招きした。

それに素直について行くと、ようやつと異常に気が付いた。

「——すでに襲われた後だったんですね」

近づけば洞窟内に漂う血の匂いと、大きな爪痕に気が付いた。入り口も所々崩れており、無理矢理頭を突っ込んだようだ。

「やはりアレに襲われたんですね?」

「そうですね、ほぼ確定ですよ」

「そうやって奥にあった”元”人間の石を叩く。」

実はここに来る途中にギガント・バジリスクを見たのである。数が多かったのと、戦って気付かれる恐れもあったのでそのまま迂回して来たのだが——、進行方向から見えてここを襲った後だ。

「外に逃げ出して石にされているのもいくつかありました。アレは有効範囲が広いですから、外にでるのは無謀でしたね」

「生き残りは?」

「隠れているのが数人いました。抵抗する気力もなさそうですよ」

あつけないものだと言を疎めるが、空気は固いままだ。

「——奴らはエ・ランテルまで行くと思えますか?」

「行かなくても、ここら辺を縄張りにされると困りますよ」

カツツエ平野のアンデッド狩りをするのは冒険者の義務である。その途中をギガント・バジリスクに縄張りにされると非常に困る。

「やれやれ、盗賊狩りよりやっかいですね」

なんて言っているが、たっちもモモンもそこまでやっかいとは思ってはいなかった。

「では私は一足先にエ・ランテルに戻り方が一に備えておく」

そう言ってハムスケに乗り込んだガゼフはニニヤとともにエ・ランテルに知らせに走るようになった。

一匹で都市一つを簡単に滅ぼせるギガント・バジリスクの石化させる視線の効果はどこまでも長い。それこそ、姿が確認できなくても石化するのだ。なにも知らない衛兵や冒険者が犠牲になる可能性は高い。

ガゼフの部隊もいるし、王国戦士長の要請なら上層部も動きやすいだろうと、残りがかるガゼフを説得してハムスケに乗せた。

ニニヤは護衛だ。護衛対象を一人で行かせるのはさすがに不味いからとこちらも説得して無理矢理乗せる。

「大丈夫ですよ、石化対策はちゃんと有りますから」

そう言っただけで見たマジックアイテムに、ニニヤもホツとする。自分だけが逃がされるのではないかと疑っていた為、勝算があることに安心しガゼフとともにエ・ランテルに向かってハムスケを走らせた。

「——それで、モモンさん。そのマジックアイテムはいくつ有りますか?」

「この二つだけです」

”魔眼殺し”と呼ばれるマジックアイテムはこの世界では超貴重である。モモンでさえもアイテムボックスに突っ込んでいたこの二つしかない。

——ある場所には山ほどあるのだが、今はまだ知らない。

「そうになると、まともに戦えるのは二人だけってことになるな」

石化の視線以外にも、猛毒の体液対策がないと不味い。そうなる
と、全身鎧のたつちとモモン、それと魔法詠唱者であるデミウルゴス
になる。が、冒険者でもないデミウルゴスがどこまでやれるのか疑問
である。

そうになると、やはりたつちとモモンかとブレインが考えていると、
たつちが信じられないことを言う。

「あ、私はマジックアイテムはいりませんよ。耐性持ってますので」
その言葉に周りはギョツとする。石化に耐性を持つ生物など聞いた
ことがない。が、たつちならあるいはと納得してしまう。

ユグドラシル時代に課金して石化対策をしていたのが役にたつて
いた。当然、モモンもデミウルゴスも耐性を持っているのだが、ただ
の人間であると思われるので口には出さなかった。

「——と、なると三人でギガント・バジリスク退治をしましょうか」
ちようど三匹いるしと、好戦的な笑みを浮かべるデミウルゴスに、
たつちはため息をつく。

「言つときますけど、後ろから魔法攻撃しないでくださいよ」
「やだなーそんなことするわけないじゃないですかー」

たつちの釘に目を反らして棒読みするデミウルゴス。ものすごく
不安であるが、まあ、モモンもいるから大丈夫だろうと納得する。

「みなさんは岩影に隠れていてください。もしもの為に援護をお願い
します」

この三人が倒れたあとになにが出来るといえるのか？しかし、ブレイ
ンは領いてみせる。もしたつちたちが倒れたとしてもギガントバジ
リスクも深手を負っているだろう。それぐらいなら対処のしようも
ある。一匹ぐらいであればあるいはとブレインは対ギガントバジリ
スク戦をシミュレーションした。

「——まあ、死んだとしても青の薔薇に頼んで生き返らせてやるよ」
目を開き、ニツと笑って見せたブレインはモモンの鎧をゴツツと叩
いた。

「お願いしますね」と笑うモモンはたつちとデミウルゴスとともに歩
き出した。

その戦闘をブレイン達が見ることは叶わない。唯一野伏レンジャーのルク
ルトが気配を感じて戦闘の優劣を感じ取るのみだ。

そのルクルトは最初こそ真剣な表情で気配を探っていたが、戦闘
が始まり徐々に肩の力が抜けていった。

「大丈夫そうだなこりゃ」

なにが起こっているのかは判らない。だが、あの三人にとってみれ
ば、ギガントバジリスクなどその辺のトカゲと大差ないのだろうな
と、ルクルトは呟いた。

ミスリル程度の堅さの鱗など、たつちにとつてはバターを切るよう
にたやすいことだった。モモンにとつても、まあ、固いカボチャだ
と楽観視するぐらいたやすく刃が通る。毒の体液が飛び散り、モモン
は慌てて下がるがたつちには返り血の一つも付いていない。

怒り狂ったバジリスクが突進してくるが、たつちは片手であつさり
と10メートルはある巨体を止め、持っていた盾で殴打した。それだ
けでひしゃげた顔になったモンスターは動かなくなる。

自分ではああは行かないなあとモモンが見とれていれば、相手をし
ていたバジリスクがジャンプした。よくもまあ、その巨体でここまで
飛べるものだとのんきに自分の真上に来たバジリスクを見上げた。

ここで斬り付ければ確実に猛毒を浴びるなあとぼんやり考えるが、
なぜか心配など微塵もわからない。

空にいたバジリスクはすさまじい勢いで横に吹っ飛んだ。その際
体液が降り注いだ。だが、モモンに到達するまえに炎がすべてを燃やし尽
くしてしまう。

「ありがとうございます、デミウルゴスさん」

「油断は禁物ですよ、モモンさん」

につこりと笑うデミウルゴスはいくつもの魔法を展開し、バジリスクに集中砲火をしていた。最大でも第三位階の魔法なので、決定的なダメージは与えられないが、絶え間ない魔法攻撃にバジリスクはただジワジワとダメージを受けることしかできないでいた。

そんなバジリスクをニコニコしながら眺めてなにやら数を数えているデミウルゴス。しかし、魔法が途切れると、拗ねたように舌打ちした。

「チェツ、コンボ失敗した。やっぱり鈍ってるな」

片手をワキワキさせて見下ろす。どうやらコンボを狙っていたようだ。それでもなかなかのコンボ数だったとモモンは思う。

（デミウルゴスさん、魔法詠唱者として優秀な人なんじゃないか？なんで商人なんかやっているんだろう？）

それこそ、アダマタイトにだって上り詰められるだろうにと、考えながらモモンは大きな口を開けて威嚇するバジリスクに向けて突進した。

「片づきましたね」

キンッと涼やかな音を立ててたっちは剣を納める。返り血の一つも浴びることなく終わらせ、あたりを見渡す。デミウルゴスはともかく、モモンにとつても手こずることは無かったようだ。視線を向けた頃にはバジリスクの頭がまっぴたつに切り裂かれ、地面に沈んだ。

デミウルゴスは遊んでいるのか、ジワジワとダメージを与えながらコンボ数を稼いでいた。それに眉を寄せるが、まあモンスター相手なら別にいいかのため息を吐く。

「モモンさん、大丈夫ですか？」

怪我はないかと駆け寄ると、モモンは大丈夫といいつつ、左足を引きずっていた。

「怪我をされたんですか?！」

「あ、いえ、着地に失敗しまして捻っただけです」

そう愛想笑いをするモモンだが、実際は捻つてすらいらない。ただ、モモンとしての戦闘力としては怪我の一つもしてなきやおかしいだろうと、足を挫いたふりをしたのだ。

(気にし過ぎかもしれないけど、戦闘力に見合わない防御力に怪しまれるかもしれないし)

実際は100levelの魔法詠唱者^{マジックキャスター}なのだ。剣の腕と防御力がちぐはぐなのは仕方がない。なので、ちよつと怪我したふりくらいはした方がいいだろう。

「すぐ回復を」

「いえー捻っただけですし！回復魔法をかけるほどでは有りませんよ」

たっちの好意を慌てて辞退する。中身アンデッドだから回復魔法ではダメージを受けてしまう。しかし、正体を隠している以上そんなことは言えない。

「ほつといてもすぐ治りますよ」

そう言えば、たっちは「・・・そうですか？」と不満そうにしていたが、それじゃあと腕を伸ばした。

「——てめえはなにしてんだ」

バジリスクのHPが0になり、ちよつと満足したデミウルゴスが振り返ると——、たっちのバカ野郎がやらかしていた。

野伏^{レンジャー}の男が危険がなくなつたことを察知したようで、岩影で隠れていたブレインや漆黒の剣が顔を出し・・・、その光景に目を丸くしていた。

「えーと？たっちさん、なにをなさっているんですか？」

「モモンさんが足にお怪我をされたので」

肩を貸しています。と言いつついわゆるお姫様だっこをしていた。

銀の騎士の腕のなかで漆黒の英雄が居たたまれないと顔を覆って縮こまっていた。

「・・・誰か俺を殺してくれ」

「？ モモンさん何かおっしゃいました？」

「いいから降ろしてやれよ」

小刻みに震える声で呟くモモン、無自覚イケメンオーラをたれ流すたつちにブレインは頭が痛そうにしていた。

「・・・いや、そりやねーよたつちさん。モモンさんを何だと思ってるんだよ」

「大の男にすることではないのである」

「どこまでも善意であることは判るんですが——」

漆黒の剣もそりやないわくと残念な顔を見せる。

たつちはなぜ非難轟々なのか全く判らず小首を傾げていた。

椅子に深く腰掛けながら、ギルド、アインズ・ウール・ゴウン一の軍師、ぷにっと萌えは仲間達が集めた情報を吟味していた。

「——この、モモンという冒険者。モモンガさんじゃないかな」

「ふむ、その心は？」

「名前が似ているのと、性格も大体一致している」

同じように情報を吟味していたベルリバーは、顔を上げると態とらしく首を傾げる。

「しかし、彼は戦士職ではなかったと思いますが？」

「あの後戦士職も取っていたという可能性もありませんが、この世界のレベルにあわせて態と専門職ではない戦士に偽装していると思えますね」

「たしかに、100levelの魔法職が戦士のまねごとをすれば大

体三〇level程度の戦士になりますね」

それにと、ベルリバーは続ける。

「もし、自分一人だけだと思えば、仲間を探さずに旅人になっているでしょうね」

長い付き合いであるギルドマスターの性格を把握している男はため息を吐く。合流した仲間達からの話を統合して、彼は最後までユグドラシルに残っていた可能性が高い。こちら側に飛ばされた条件はいまだに判別できないが、様々なプレイヤーが時代もバラバラに転移していたことが判っている。

「・・・もしかしたら、私たちには会いたくなくて態と姿や名前を偽っている可能性もありますよ」

少し落ち込み気味にぶにっとは呟く。ユグドラシル最後の日に集った人数はあまりにも少なかった。そして最後の会話も短い。――長年ギルドを守り続けてきたギルマスに対してあんまりな打ちである。

それぞれの社会人としての事情があるから仕方がないと、モモンガは笑っていたようだが内心はどうだろうか？自分たちを恨んでも仕方がないとぶにっとは思う。

「だから接触するのを遅らせているんですか」

本当はもつと前から二人は薄々感づいてはいたのだ。しかし、今の今まで言わなかったのは、会いに行つて拒絶されることを恐れていたのだ。

呆れたように言つてはいるがベルリバーも似たような気持ちであつた。会いに行つて、拒絶されるならまだいい。何度でも謝罪をするつもりだ。たとえ許されなくてもいいと思う。だが、自分たちを無者にされるのが一番きついとベルリバーは考える。

「あなた方は誰ですか？」そういつて自分たちの存在ごと抹消されていけば謝罪など何の意味もなさない。自分たちの罪を無かつたことにされることで自分たちはこの罪悪感を一生背負い続けなければならないのだ。

「けれど、会いに行かなければならないでしょう？」

頷くぶにつと萌えを見ながらベルリバーは笑う。

そう、断罪の権利はモモンガが持っているのだ。どんな結果が待っているかと、我々はギルドマスターに会いに行かねばならない。

「——まあ、みんなが揃ってから土下座しに行きますか」
わざとらしいくらい明るくベルリバーは笑った。

「え？カジットとクレマンティーンがですか？」

ギガントバジリスクを倒し、エ・ランテルに戻ると組合長とガゼフが渋い顔をしてこの次第を教えてくださいました。

「・・・ギガント・バジリスクを警戒して、エ・ランテルの戦力を一カ所に集めている隙に、何者かが二人を連れだしたようだ」

ガゼフとニニヤの知らせに、エ・ランテルは騒然となり市民は避難し、腕の立つ冒険者は警戒に当たらせていたのだが、いつの間にか二人を拘束していた牢が空っぽになっていた。

それを聞いて顔を見合わせるモモン達はやられたとばかりに頭を抱えた。

「ギガント・バジリスクは囷だったわけですね」

ギガント・バジリスクが三体も固まっているのはおかしいと、ブレインが不思議がっていたが、アレが人為的なら納得である。

「たしかにアレが大量に出現すれば、エ・ランテルもイヤでも警戒が集
中するな」

「ズーラーノーンでしょうか？」

「たぶん違いますね。あの二人の記憶を消してもう用はないはず
です。あるなら先日のうちに連れ出していますし」

「となると、全くの別口からということか」

ガゼフが苛ただしげに頭をかきむしる。自分がいながらなにを

やっているのかと腹が立つ。

(あなたの仕業じゃないでしょうね?)

(ちっげーよ、そんな奴らしらねーし、だいたいバジリスクを使役するスキルなんかもってねーよ)

(―――そうですね)

とつさに疑ってしまつたが、彼にそんなことをする理由はない。やり方にしても彼にしてはスマートすぎるし。

「コレばかりはしょうがねーよガゼフ。あんな怪物が街に来るかもしれないとなつたら無駄に戦力は割けなかつたんだから」

「―――我々も、あの二人が大人しいからとつい油断してしまいましたからね」

組合長が申し訳なさそうに頭を下げるのを、ガゼフは手を振ってやめさせる。どこまでも責任感が強い男である。

「心当たりは無いだろうか?」

「さて、無いと言うよりはありすぎて困るといふ方が正解ですね」

ズーラーノーンの被害は広範囲に及ぶ。それこそ、恨みを持つている者はどこにでもいるのだ。ギガントバジリスクが人為的ではなく全くの偶然という線も捨てきれないうちは容疑者が多すぎる。

「二人が脱走した可能性もありますし」

大人しかったとは言え、二人の戦闘力を考えれば騒ぎに乗じて逃げ出すことも可能なのだ。そうなるともうお手上げである。

そうですか・・・と、たつちが落胆したように肩を落とす。探し出すことは不可能だろうと思われた。

「―――で、実際のところは見当がついてんだろ?」

ブレインの声に、三人が振り返る。組合長とガゼフとモモンである。

「おどかさないでくださいよブレインさん」

「たつちに知られたくないってことは・・・帝国とかか?」

「いや、法国じゃないかと思っている」

組合長が硬い表情で答える。以前のクレマンティーンが法国から宝を盗み出していたという報告を受けていたのだ。

「強力なマジックアイテムで、至宝の一つだったらしい」

「なるほどな。で、その至宝とやらはどこかに隠されてるってわけか？」

「いえ、破壊しました」

あつさりとモモンは経緯を話す。一人の命がかかっていたのでやむなく破壊した。そのことは組合長にも話していたが、法国を敵に回す恐れがあるので箝口令を強いたのだ。もしあちらに知られた場合は、モモンが責任を取る事になっていたが、いまや国のアダマントイトの英雄を差し出すなど考えられない。

フムと、ブレインは納得する。なら間違いなく、今回のことは法国の仕業だろう。注意をほかに反らして盗人を奪還し、至宝の在処を吐かせようとしたのだろう——が、もはや宝は破壊され盗人は記憶を消されて子供になっているのだ。全くの骨折り損だ。

しかし、それが判ったところで国力が弱体化している今、法国に文句など言えるはずもない。戦争にでもなればあつという間に王国は滅び去るだろう。

だからたつちには言わなかったのだろう。

「あいつクソ真面目、いや、バカ真面目だからな。法国に喧嘩売りそうだもんな」

「それならまだいい。国同士の争いにならないように個人で乗り込んでいく可能性がある」

「個人もなにも、あの人が乗り込んだ時点で法国は王国が喧嘩売っているのと取るに決まっているでしょう？」

「・・・たつちさんも頑固だからなあ」

組合長がいるから口には出さないが、たつちが異形種であることも問題である。人間なら、まだ話し合いの余地はあるだろうが、人類至上主義の法国がたつちの話の聞くはずもない。そこから最悪な展開しか思い浮かばない。

「たつちには悪いが、我々だけで対処したい」

法国は大を救うためなら小を切り捨てる主義だ。まつすぐなたつちがそんな国になにも思わないわけもない。そして、法国も異形種のたつちになにも思わないとも考えられない。

「今回は実害があつたわけではないですからね。穏便に済ませましよう」

エ・ランテルに被害はないし、ズーラーノーンの情報もはやなにも引き出せない状態だった。イヤミは言われるだろうが何の問題もない。

「まあ、解決後にたつちさんに説明すれば大丈夫ですよ」

納得はしてもらえなくても、理解はしてくれるだろう。法国へはガゼフが何とかすると言うことで、この事件についてはコレで終わりとなった。

はあ、と己の住居に戻ってきてたつちはソフアーに体を沈める。何週間ぶりに鎧を脱いで蟲の姿をさらしていた。

「――体は疲れていないけど、やっぱり精神は磨耗するな」

用意されていた果実水を飲み、もう一度深いため息を吐いた。

思いがけず、再び再会したウルベルトは以前の事件とは別人だったのではと思うほど、以前の彼だった。いろいろと問いつめたくはあつたが、他人がいる手前あまり強くは出られず、悪事を働かないように見張っていたがそれほど性格は変質していないようだった。

ただ、人を同じ生き物とは見れないのだと、ポロリとこぼしていた。

それに関しては実はたつちも同じである。しかし、か弱い者を守るのは自分の役目であると思っていた。

それは警察官だったからなのか、人間でいたいとすがりついているだけなのか……それは判らない。ただ、自分の信念は貫きたいと思っている。

「連絡先は聞いたけど……」

けれどウルベルトと文通をしたいとは思わない。何というか、手紙でも喧嘩をすると判っているので羊皮紙を前にしても筆が重い。これがメールなら一行二行でも済むのだが、真っ白な羊皮紙にただ一言だけというのは……。モモンに対してだったらくらでも言葉が出てくるのだが。

「……説教の言葉だったらくらでも出るけど、さすがにそれは喧嘩を売っているよな」

聞きたいことはいくらでもある。けれど、喧嘩腰にならない自信が全くない。どうしたものかと悩んでいると、書齋をノックする音を拾った。

「どうぞ」

そう許可をすれば、ローブを纏ったアンデッドが書齋に入室した。

「主、王宮からの依頼がいくつか来ています。早急に目を通していただけますか」

そういって、紙の束をディスクの上に置く。

彼の名はデイバーノック、元八本指六腕の一人であったアンデッドである。彼を含めた六腕をたつちがボコボコにして捕まえたのだが、エルダーリッチの彼だけはたつちが引き取ったのだ。

何というか、友人の姿がチラツいたのだ。他の六腕はともかくアンデッドのデイバーノックは処分される事が決まっていたが、たつちが彼を更正すると宣言したのだ。

当然誰もが反対したのだが、ガゼフだけはなぜか賛成してくれた。……そういえば、彼の友人にアンデッドがいるらしい。一度会ってみたいものだ。

ともかく、王国最強の二人のごり押しによりデイバーノックは晴れ

てたつちの奴隷となった。……言い方は悪いがモンスターを手元に置くのだ。周りの安心のためにも管理出来ていると見せないとだめらしい。

彼は最初すさまじく抵抗した。というよりたつちにおびえていて死すら選ぼうとしたのだが、たつちの説得（物理）により何とか落ち着き従うことを選んだ。

まあ、神聖系の聖騎士にアンデッドがおびえるのも無理はないのかもしれない。あつちではオーバードに懐かれていたので全く考えもしなかった。

そんなデイバーノックは思っていたよりも有能だった。人間不信の使用人達の代わりに王宮からの使者や来客の対応をしたり（当然幻術で人間に化けている）たつちの秘書的仕事をしたり、人化に時間制限のあるたつちに幻惑をかけて見た目だけ人にしたりと大活躍である。

文字の読み書きも出来る事もたつちには助かった。引き取ってよかったと笑いかけるが、当の本人には脅えられる。そろそろ心を開いてもらってもいいと思うのだが――。

「留守中変わったことは無かったか？」

「……まあ、王が街の整備に取りかかったことぐらいですかね」

戻る途中であちこちで工事が始まっていたことを思い出す。古くさいと感じる町並みを綺麗にするらしいが、……デザインが厨二臭い。何で悪魔像とか建てるんだらう？ さすがのガゼフも顔がひきつっていた。

しかし一部では好評らしい。ラキユースが気に入っているとガラーランが教えてくれた。――薄々そんな気はしていた。

「そうか、まあ、街が綺麗になることはいいいことだ」

そう頷いたたつちは、デイバーノックに書類を読み上げさせた。

城に戻るとバルブロ王子が帰還したことを知らされた。手柄を上げての帰還に王に化けたウルベルトは諸手を上げて歓迎した。

たち達のバジリスク退治の件はすでに耳に入っているらしく悔しげではあるが、あんな化け物と比べる必要はないと慰める。実際あんな完璧超人と比べられる辛さはいくわかれるとバルブロに同情する。「おまえが努力していることを私はよく知っている。他の者の評価など気にするな、無知な者達の言葉などただの雑音でしかない」

レベルで見れば弱い部類であるが、王族の中で努力しているのは何度も見ているし、他の兄弟にコンプレックスを感じていることもよくわかった。

判官鼻貞という言葉があるがまさにそんな気持ちでバルブロに沸く。つまりは同情である。ちよつと優しくしてやりたくなる。

「たしかに政治も大事だろうが、時には力を見せつけることも必要だ。勇ましい王子の姿に兵も勇気づけられることだろう。おまえはおまえのまま突き進むといい」

その言葉に目を見開いたバルブロは、慌てて頭を垂れて感謝の言葉を紡いだがほんの少し震えているのがわかった。この王子の周りの評価は散々だったからな。認められたのがうれしいようだ。

——しかし、親子なのに改まった場所でしか話せないってのも何だかなあ・・・、よし、家族団らんの席でも設けるか。

などと、家庭に夢を見ているウルベルトは考えているが、バルブロ以外の子供に正体がばれていることをすっかり忘れていた。

ぶれあです！

広い部屋に一人きりだった。

大きな円卓に41の席があるというのに、埋まっているのはたった一つだけだ。まだ誰か来るかもしれないと待ち続けたい。しかし、時間がないと重い腰を上げて——ふと、ソレを見上げる。

一度も使わないのは可哀想かと手を伸ばしてそこから持ち出した。

薄暗い玉座の間に、孤独な王様が最後の時を迎えようとしている。

走馬燈のように楽しかったことを思い出しながら、シンボルマークを指さし仲間の名を——

「ブオオオオッ!!」

「うわあっ!?!」

デスナイトの絶叫に意識を取り戻し、慌てて鍋を火から離す。しかし、鍋の中には炭が出来上がっていた。

「うわあ………やっぱり無理か」

調理中火にかけている間に意識が飛んでしまうので、デスナイトにいい頃合いに声を掛けるように言っておいたのだが——失敗したようだ。

「もつと早く声を掛けてもいいんじゃないか?」

「ゴウウウ……」

「え? 掛けただけど反応がなかった? じゃあ、せめて鍋を——。俺ががっちり掴んで離さなかったのか」

ちよっぴりデスナイトに八つ当たりしたら、困った顔で説明された。デスナイトもデスナイトで何とかしようとするらしいが、結

局はレベル差がありすぎてどうにもならなかったようだ。

こうなるとお手上げである。料理は断念するしかなかった。

「あー、もつたいない。せつかくご近所に分けてもらったのに・・・」
炭となった元食材を捨てながら、アインズはため息を吐く。しかし、意識が飛んでいる間の記憶がない。まさに切り取られているようだなあと、黒こげの鍋を悲しげに見つめていた。

カルネ村は今日も平和である。

大人達は畑仕事に出かけているが、ゴブリンやオーガが手伝ってくれるので仕事はすぐに終わってしまう。そうなると後は家の仕事や巡回の仕事だけである。

仕事が終わったゴブリンやオーガは、ご褒美に果実水を凍らせて雪のように砕いたシャーベットをもらってご満悦である。アイスクリームもうまいがシャーベットもうまい。

さて、大人達が仕事に行っている間、小さな子供達はどうしているかと言えばアインズが相手をしていた。子供の相手は村の大人が代わる代わるしていて、今日はアインズとエンリの番であった。

いつもはマジックアイテムを遊び道具にしてるのだが、今日は天気もいいし川まで遊びに行こうとエンリに提案された。川で魚を捕ったりできるし森で木の実を見つけおやつ代わりに出来るから、それにアインズがいることで危険なモンスターが来ても大丈夫だからと言う理由である。

アインズとしては護衛用のスキルもないからちよつと渋ったが、まあハムスケも連れて行けばいいかと了承した。

村の外に遊びに行くのも情操教育に良さそうである。しかし、ついて早々アインズに問題が発覚した。

大量の水が流れる川にアインズが恐怖を覚えたのである。

覚えてはいいのだが、アインズが鈴木悟という人間で生きていた世界に人が入れる川もなければ、清浄な水を溜めておく事すら困難で

あった。大量の水などお目にかかったことがない。

それでもお湯を張った湯船に恐怖を覚えることはないのだが、問題は延々と流れていく川だ。

流れる水の力は強い。

もし、足場が不安定な川で転倒してしまつたらどこまで流されてしまうのだろうか？アインズは骨である。浮かぶことなく川底に沈んでしまふだろう。恐ろしくて足がすくんでしまつた。

しかし、子供たちは慣れたようにキャツキャツと川遊びに夢中である。危ないと思いつつも器用に川を歩いていく子供にアインズは尊敬すらしてしまう。

そんなアインズの様子に気が付いたエンリが、なら私が手を引きますよと誘ってくれた。

皆おもしろいおもしろい好きなことをしている。川に入ってハシャぐもの、釣りをするもの、丸くなっているハムスケに寄りかかって昼寝するもの。

アインズもエンリもそこまで手が掛からない子供らに安心し、はじめての川に挑戦することにした。子供が足を滑らせて流されたとき、助けにいけなかったらシャレにならない。

ローブを腰のあたりまでまくり、ズボンを膝上までまくり上げると靴を脱いで恐る恐る川に入る。

「ひいつ、ぬるぬるする!?!」

「川石に藻が生えてるんですよ。滑りますから気をつけて」

そう言つて笑顔で手を引くエンリだが、ペースが速くてアインズは焦ってしまう。

「ちよ、まっ!!ゆっくり——ひゃあっ!!」(ちよつと滑った)

「大丈夫大丈夫」

「だ、大丈夫じゃ——、ふ、深いいいっ」(まだ脛当たり)

「まだもう少しいけますよ」

「む、無理いいいっ!!動かないでえええっ」(半泣き)

必死にエンリの手にしがみつぐが、当のエンリは笑顔である。冷静

な部分は大人の大人がなにをやっているんだと呆れてしまいが、怖いものは怖いのでしようがない。

足下に集中しないと滑ってしまいそうで、言葉数もだんだんと減ってしまい。「ひううっ」だか「はうっ!!」だか、情けない声ばかり出ていた。

「ほら、もうここまで来ましたよ?」(結構深めのところ)

「ちよつと、休憩させ、て」

「大丈夫ですか?ここから本番ですよ?」

「うう・・・、大丈夫じゃない・・・」

ここから補助なしで川を歩かなければならないのに、アインズはすっかり意気消沈していた。いや、たしかに川の中は気持ちいいのだが、絶えず流れてくる大量の水や不安定な足下が恐ろしい。

いつまでも覚悟が出来ないアインズにエンリは困った顔をしていたが、荒療治をする事にした。

「えいつ」(手を離れた)

「あああつ!!エ、エンリエンリイイツ!!」

「大丈夫ですよ、すぐ慣れて気持ちよくなりますって」

徐々に遠ざかっていく命綱にアインズは泣きそうである。優しく微笑み見守っているエンリが今だけは悪魔のように見えて仕方がない。

とりあえず川岸まで戻らなければならないのだが、足を踏み出そうとしても不安定な川底に泣きそうである。摺り足の要領でジワジワと進んでいると、なにやら向こうで子供らの歓声が上がった。

何だろうと思いつつも今はそれどころではないので、とにかく足下に集中していた。

「ゴウン様、みてみて!でっかいの釣れたよ」

どうやら子供が大物をつり上げたようだ。足場を確保して見ると——、何というか太くて長い魚を抱き上げて自慢げにしていた。

魚と言うよりはウナギっぽいか?とアインズは思ったが、現実では絶滅したドジョウを巨大化したような姿に近い。

そしてビチビチと跳ねる巨大なドジョウを、生の魚類など見たことのないアイنزスは気持ち悪いと引いてしまう。表面がヌメヌメしているし、目玉がギョロリとしている。これがモンスターなら平気なのだが――。

若干腰が引けつつ、子供にすごいなくと褒めていたら・・・子供の手からドジョウが逃げ出した。

ただ、川の中に逃げたのならソレでよかったのだが、勢いよくジャンプしたドジョウは――アイنزスの襟元から中に入り込んだ。

「ひよあああああつっつ?!?!」

ローブの襟から入り込んだソレは大きく開いた鎖骨の隙間から内部に入り込んだ。自分の中に長くて太くてヌメヌメしたものが入り込んだのでパニックを起こす。しかし、暴れば足下が滑って転ぶので動くことが出来ない!!

「うひいっ!!ヌメってるヌメってる!!――っ!!うあああっ!!変なところに入るなっ!!」

取りだそうにも肋骨が邪魔で手が入らない。隙間だらけの体のくせにと腹が立つ。内側から触る事なんてないので、奇妙な感覚に鳥肌が立つ。・・・いや、肌なんてないのだが。

「俺は籠じゃないぞ!!」

そんなことを怒鳴っても中のモノは出てこないどころか下に下がってきて、最終的には骨盤のあたりに収まってしまった。冷たくヌルヌルする感触にぞわわわっ!とアイنزスは震えてしまう。

泣きそうになりながらローブをまくり上げれば、ズボンのところでこんにちはしている巨大ドジョウと目があった。あまりの気持ち悪さに固まっていると、エンリが慌てて助けに来てくれた――が。

「ゴウン様!」

ガシツ!とドジョウの首根っこを掴むとズボンからそいつを引き抜いてくれた。慣れたようにビチビチと暴れるドジョウの首を絞めると「大丈夫ですか?!」とエンリが心配そうにアイنزズを振り返る。

申し訳ないことにアイنزズはエンリに礼を言うことも出来ず、ただただ真っ白になっていた。

——その後しばらくアインズは家に引きこもっていた。

いま、ンファイレーアは一世一代の大勝負をしようとしていた。

ゴブリン達の協力の下、今彼は恋人のエンリと二人っきりである。晴れて恋人になれたのは良いが、いい雰囲気になれば決まってアインズが邪魔しにくる。そのため今の今まで進展は一切ないのである。

しかし、今はアインズは家に閉じこもり（理由をエンリから聞いて思いつきり同情してしまった。当のエンリは全く理解していなかったが）ンファイレーアを邪魔する者はいない。——と、ジユゲム達に急かされて現在誰もいない倉庫にいる。

誰も入ってこれないよう、表ではゴブリンが見張っていてくれる。ここまでされて何もしないなど男ではないとンファイレーアは生唾を飲み込み覚悟を決めた。

——結果、エンリにより押し倒されて現在に至る。本当なら、男らしくエンリを優しく押し倒し、くっ、くく口づけをしようとがんばったのだが、所詮もやしっこには無理であった。

ああ、僕はここで初めてを迎えるんだね……………。

などとドキドキしながら目をつぶるンファイレーアを不思議そうに見つめているエンリ……、それを見ている怪しい影があった。

「ふじゅんいせいこーゆーはダメっすよー」

「ほわあああっ!!?!」

「あれ？ルプスレギナさん、こんなところで何をされているんです？」

「んー、サボリっすw」

そうゴソゴソと、藁の中から這いだしてきた美女、ルプスレギナ・ベータ。彼女は最近この村にやってきた新たな村人である。

「て言うのは冗談っすvお仕事が一段落したんでちよっとお昼寝をしてたんすよ〜」

「何も、こんな倉庫の藁の中でしなくても・・・」

「本能的にこの方が落ち着くんすよ」

ルプスレギナは人間の美女に見えるが、正体は人狼である。何でも、前住んでいたところに正体がバレて追い出されたそう。それで新たな住処を探してここに流れ着いたという。

最初は人間として村に入れて貰おうとしたのだが、人間不信のカルネ村だったので早々に正体を明かしたのである。

「てか、人間じゃないって解つたとたんの手のひら返しが笑えつつすねww」

「何の話です?」

「こっちの話つす。ところで二人ともここで何やってんすか?」

「倉庫の在庫点検です。そろそろ補充しなきゃならないのが有りますので」

へくへく、とにんまりしながらンファイレアを見ると真っ赤な顔で明後日の方を向いていた。

「よかつたら手伝うつすよ?」

「いえ、ここで最後でしたから」

そりや残念と笑いながら体に着いた藁をはたき落とすと、さっさと倉庫を出てしまう。そのときに「うおっ!!なんであんたが?!」というゴブリンが驚く声が聞こえてきた。

「ゴウン様々、ンファイとエンリちゃんのにチャイチャを邪魔してやっかつす!」

「よくやっつた」

褒めて褒めてとばかりに尻尾を振り回すルプスレギナの頭を撫でてやる。なぜか彼女はアインズに懐いているのだ。最初は戸惑ったが、ンファイレアの邪魔をしてくれるので速攻採用した。

たぶん骨だから気に入られてるんだらうなあ。などとアインズは思い込んでいる。

帝国の一角で老舗の商人の元に、他国から来たという親子が取引にやっつけてきた。

南にある都市で豪商だったという歳のいった男が、こちらでも商売を始めたといふところの顔である男に挨拶をしに来たのである。

お近づきの印にと渡された品はどれもなかなか手には入らない品ばかりであった。商売敵が増えるのは遠慮したい男だったが、優先的に取り引きすると言われればコロツと態度を変える。

これほどの質のいい品を比較的やすく取り引きできるのであれば、利益は十分である。

しかも、帝国での取引は主に隣にいる娘がするという。

帝国に置く拠点の店を娘に任せようと言う男に、少々不用心ではと聞いたが護衛兼執事はそこいらの悪漢が束になっても適わないほどの手練れであるとのことだ。

さてどの程度と軽く実力をみようとして、逆にこちらの用心棒を投げ飛ばされたときはなるほど納得した。

「たしかに娘に一つの店を任せるのに少々不安がありました——、帝国の豪商である貴方様に助力いただければと」

そう言うと、用心棒を投げ飛ばした執事が横につき銀の盆を差し出した。もちろんその上の袋を受け取り、中身を確認すると思わずニヤケてしまう。

「娘への教授料です。厳しく指導いただければ」

「うむ、まあ、新しい土地に不安であろうから困ったことがあれば私を頼ってもらっていいぞ」

「ありがとうございます」

娘が微笑みながら会釈をする。おっとりした箱入り娘のように見えるが、中身はしつかりしているようだ。男が今まで見知った中でダントツの美貌とお辞儀した際に強調された豊満な胸に、男はこれから楽しみだと鼻の下をのばした。

「では、セバス殿とソリュシャン殿は帝国でアンダーカバーを作ったのち、情報の収集をお願いします」

「了解しました。しかし、モモンガ様が居られる王国でなくてよろしかったのでしょうか？」

商人の姿から元のドツペルゲンガーの姿に戻ったパンドラは、セバスの質問に軍帽をちよいつと上げて答えた。

「王国は少し質が悪いですからね。信用を得るのなら帝国の商人の方が都合がいいのです」

それに、王国は最近監視が厳しいですからね。とパンドラはため息を吐く。犯罪者の摘発に熱を入れていて、こっちまで巻き込まれてはシャレにならない。

「しかし、商売するための品はどこから持ってくるのでしょうか？まさか宝物殿からですか？」

「そんな訳ないでしょう」

もつともな質問をソリュシャンが首を傾げながら言う。しかし、パンドラは少しムツとしたように答えた。

「ナザリックの資産は基本的に動かしませんよ。基本的にはこの世界で調達した資材を鍛冶長ほか生産スキルを持つ僕達でアイテムに加工します」

スキルで有れば、時間経過とともに回復する。コレならナザリックの資材を使わずに済む。

「資材獲得のため、ユリ殿エントマ殿とほか、デミウルゴス殿のスキルで召喚された悪魔達が動いています。資金が出来れば、傭兵モンスターも使えますので、出来れば商業にも手を抜かないで頂ければ幸いですね」

「なるほど、解りましたわ。・・・ところで、捕食の件はどこまでよろしいのでしょうか？」

ソリュシャンの声に力が籠もっている。彼女にとってもコレは重要なのだろう。

「——先も説明したとおり、基本的には人間を捕食するのは極力控えるようお願いします。その人物が利用価値が出来る可能性も有り

ますし、モモンガ様とどこかでつながっている可能性も有りますから」

そうパンドラが言えば目に見えてがっかりしたようだ。

「・・・しかし、消えても問題なさそうな者はかまいませんよ。犯罪者にもはや助からないだろう者、浮浪者など誰も気にも止めないものなら許可しましょう」

「ありがとうございます」

とたんに花が咲いたように笑ったのを呆れたように見た。

「セバス殿もくれぐれも目立たぬようお願いします」

「わかっております」

そういってお辞儀をするセバスだが、この帝都に来てからいろいろ目立っている。自覚はないのだろうが、早々に色めいた視線がセバスに集中していた。それはソリュシャンも同じ事であるが、彼女はあしらう術を知っているので心配はしていない。

「——八方美人というのも考え物か」

「？ なにか問題でも」

「いいえ別に」

しっかりしているこの二人ならまあ、大丈夫だろうとパンドラは気を取り直す事にした。問題は・・・。

「ところでナーちゃん——失礼、ナーベラルの方はどうしてます」

「ああ——、まあ、何とかしますよ」

頭の痛い問題にパンドラは遠い目をした。

死にそのような目にあった”フォーサイト”は今、解散するか継続するか瀬戸際に立たされていた。

「はあー、アルシエの抜けた穴は大きいよなあ」

あの事件から戻った後、アルシエが家庭の事情でチームを抜けたのである。まあ、前から聞いていたことであるので揉めることもなく、随分とあっさりとした別れであった。

「いっそのこと請負人をやめるって言う選択肢も有るじゃない」

「まあなあ、やめてひっそりと隠居するのも一つの手なんだけどさあ・・・手持ちが心許ないんだよな」

思いがけず手に入れた白金貨だったが、他のチームと山分けし諸々の負債を支払ってしまったえばほとんど手元に残らなかったのだ。

「まあ、家庭を持つとかなりの資金が必要となりますしね」

「・・・おい、なんで俺とイミーナを見るんだよ」

「今は大丈夫でも、後々家族が増える可能性も有りますし」

もはや完全にバレた二人の関係であるが、ロバーデイクは冷やかしている訳ではなく二人を純粹に祝福しようと今後の二人を心配しているのである。

「——しかし、危険な請負人を無理に続けるのもどうかと思いますしねえ」

実際、他の請負人達は早々に田舎に引っ込んでしまった。まあ、あんな事があったのだから当然である。

「だからといって、今更まともな職に就けるとは思えないぞ？」

「まあ、いろいろ恨まれてたりするしね」

そうになると、請負人業を辞めるのも難しい。闘技場で稼ぐ手も有るが、やはりアルシエが抜けた穴が痛い。

「はあ、地道にアンデッド退治でもして小金を稼ぐか」

「——悪いんですが、しばらくはアンデッドは見たくないです」

「あたしも」

もはやトラウマである。さてどうしたものかと悩んでいると、請負人が入り浸る宿屋に不釣り合いな少女が入り口に立っていた。

キヨロキヨロと当たりを見渡し、ヘッケラン達を見つけると迷い無くまっすぐ向かってくる。

その姿が、何となくアルシエと重なった。

「失礼します。仲間を募集している“フォーサイト”とは貴方たちで

「しょうか?」

「ん?お嬢ちゃん是谁だい?」

「わざわざ」仲間を募集している」と聞いてきたのだから、希望者なのだろう。しかし、見た目にはそこいらの貴族の令嬢に見える。どう見ても請負人初心者である。・・・が、アルシエの件もあつたので聞くだけ聞こうと促した。

「私は、シズ・デルタ。あなた方「フォーサイト」の仲間を希望します」

「ええっ!?ペテルさんとツアレさん結婚するんですか?!」

なにやら報告があると呼ばれて来てみれば、ペテルが照れくさそうに村長であるエンリにツアレと添い遂げると宣言した。

驚きはしたが喜ばしい報告に、エンリはハシヤいですごいすごいとツアレの手を取った。

「おめでとうございます!ツアレさん」

「ありがとうございます」

ちよつとうつむきながらも頬を染めるツアレ。ソレを見て、ペテルを小突き回す漆黒のメンバー。

「俺らに何の相談もなくいきなり結婚たあ。ペテルも偉くなったもんだなあおい?」

「ていうか、いつの間にツアレさんとそう言う関係に?全然知らなかったんですけど?」

「モモン殿は少しニブ——、いやいや、愛というものは静かに育むモノである。言いふらすような事ではないのである」

「ソレにしたって手が早いだろ?もう子供がいるっつーんだから」

ルクルットがちらりとツアレの腹を見るが、しかしすぐに視線をはずした。

「いやー、お前も父親になんのかよ。少しはその御利益を寂しい俺にも分けてくれよな〜」

バシバシと背中を叩くルクルットにペテルは少し困ったように笑っていた。

エ・ランテルに出てきた一行は仲間の結婚祝いにあれこれと露天を物色していた。しかし、色事に全く縁のないモモンはなにを贈ればいいのかさっぱりわからなくて途方に暮れていた。

「えー、結婚祝い、結婚祝い——、って、どうすればいいんだ？」
呆然としながらつぶやけば、ニニヤが心配そうに声を掛けてくれた。

一通り見て回り、店の店主とも相談しながら構想をまとめていたモモンだが、——なにやら自分にはオカシナ噂が有ることに気が付いた。

「なんで俺の娘が結婚するって話になるんだ?！」

結婚祝いと言うと、ほとんどの店の人が娘さんにですね?と聞き返してくるのである。娘どころか結婚もしていないモモンは仰天した。

いったいどう言うことかとニニヤに聞けば、どうやらエンリとモモンは親子関係だと思われると聞いてさらに仰天した。

「どうしてそうなった——」

「だって、モモンさんエンリに恋人が出来ただけですごい落ち込んでいたじゃないですか。ソレが娘に恋人が出来た父親そっくりだから——」

「・・・私としては、歳の離れた妹のように思っているんですが」
「いやー、年齢的に娘のほうがしつくりきますよ」

ニニヤの何気ない言葉にモモンはへ心臓掌握された気がした。

えーえー!この歳になっても子供がいらないほうがおかしいんでしょうね——っ!!

などと内心へソを曲げまくっていたが、でももしかしたら息子の一人や二人いたかもなーなんて考える。

ダインとルクルットに合流してみると、なにやらルクルットが機嫌良さげに髪飾りを眺めていた。

ツアレの結婚祝い——にしては少々彼女には似合わないデザインに思えて首を傾げると、ダインがこつそり教えてくれた。

「少し前に冒険者登録した美女にご執心なのである」

何でもとんでも無く美しい魔法詠唱者がエ・ランテルの冒険者組合に来たらしい。付き添いで男が一緒だったらしいが、顔立ちが似ていたのでおそらく兄妹か何かだろうと思っただそう。

しかし、美女だと思っただ甘く見てはいけない。ちよつかいを出しにいった男達を素手で叩きのめし、氷のように冷たい目で見下した。

骨を折られたが、付き添いの男が慌ててポーションを使ったので大事にはいたらなかったし、どう見てもちよつかい掛けた男達の自業自得だったので騒ぎにはならなかった。（ただし、何人かはMに目覚めた）

そんな恐ろしい女に見込みなどなさそうだが、彼女はどうかやらモモンのファンらしい。仲間のルクルットにぐいぐい話を聞いてきた。

「まー、ルクルットの性格故、彼女から舌打ちと毒舌は絶えなかったのであるが——」

「わかってねーな！あれは照れ隠しだつて！」

「・・・この有様である」

ルクルットに春が来たらしい。ニニヤは呆れたような半眼になっている。

けれど、その後問題を起こして姿を消してしまったそう。その問題というのは・・・スリの手を潰したそう。

ソレを見て、付き添いの男が彼女を抱えて走り去っていったという。

「——結構な問題児じゃないですか・・・」

「まあ、相手が悪いから今回は不問って事になってるけど、やっぱりそんな意味で心配だから今度来たら、私たち”漆黒の剣”に面倒見てほしいと組合長が・・・」

本当にいろいろな意味で心配だろう。しかし、登録したばかりと言うことはまだ銅クラスのはずだからなにも世話もアダムンタイトに頼まなくても思ったが、第三位階の魔法を使えることかなりのじゃじゃ馬に他の冒険者では手に余るだろうと予想されたのだ。そこで漆黒の剣に白羽の矢がたった——というよりも、モモンに熱を上げているようなので、モモンの言うことなら聞くだろうと投げたのである。

「モモンさんグッジョブ！」

「・・・ものすごい前向きですけど、ルクルットさん見向きもされないじゃないですか。私に嫉妬するとかないんですか？」

「だってモモンさん骨だし、どうにもならないじゃないっすか！なら俺にもチャンスが有るってもんだ！」

何だったらモモンさんがこっぴどく振って、俺が優しく慰める。そしてルクルットの良さに気が付いた美女がそのまま俺と・・・ムフフフフ。

などと気持ち悪く笑うルクルットにみんな引く。

「・・・あー、ソレでその美女の名はなんと？」

「たしかナーベと言っていました。詳しいことは組合長が説明してくれると思いますよ」

南方の顔立ちの異邦人のようです。と、クネクネと気持ち悪いルクルットを置いてモモン達は歩き出す。

ネムは綺麗な花を見繕いながらプチプチと摘むと、昔母親に教えて

貰ったとおりに編んでいく。幼い手では母のように上手くは出来ない。所々ほつれてしまっているが、それでも花の冠が出来上がる。

なかなかの出来栄えに誇らしげにしていれば、横ではブチブチと不器用に花の根までつみ取る大きな手があった。

ネムが教えたとおりに編もうとしているようだが、力加減を間違えてちぎってしまったり、花を握りつぶしてしまったりと上手く行かない。

いびつな冠は、ボロボロで土がついている。あんまりな出来に作った本人は体を丸めて落ち込んでいるようだった。

ネムが大丈夫だよと、自分の花冠を高い位置にある頭に掛けてあげた。

高すぎて上手く乗せられなかったが、引つかかったようだからまあいいよねと、ネムは笑う。

「あたしもはじめは上手く作れなかったもん。練習すればすぐに上手くなるよ！」

そう励ますと、猛獣のようななり声が返事をした。少し疑っているような声だが、ネムが摘んだ花を差し出せば戸惑い気味でも恐る恐ると花を受け取った。

そうして今度は倍の時間を掛けて花を編んでいく。その様子を離れた場所から見ていたツアレは、奇妙でありながら微笑ましいと微笑を漏らしていた。

生きる者の敵と教えられていたアンデッドが、大きな体を縮込ませて花を編んでいる姿はあまりにも不自然で似合わない。けれど、可愛らしく見えてしまうのは彼を恐れないからなのか。

小さな女の子と花畑でせっせと花環を作るデスナイト。その大きな背中に上ろうとしているやんちゃな子供達がいたが、困りながらも落ちないようあまり体を動かさないようにしているのがわかる。

アンデッドがみんなそうなのかと思ってしまうが、アインズが特別で、彼が作り出したアンデッドもまた特別なのだと、妹に教えて貰った。

笑い声が空から聞こえてくる。見上げれば三人ほど飛び回る子供

達に、必死に追いかける妹の姿。

アインズが貸し出している〈飛行^{フライ}〉のペンダントは子供達の格好の遊び道具である。はじめはアインズが付き添いの時にしか使わせてもらえなかったが、村の大人が飛ぶことに慣れたことで、大人が付き添うことで使用を許可されるようになった。

いざというとき〈飛行^{フライ}〉で知らせに走ったり、逃げたりする練習にもなるからと貴重なアイテムをポンと貸し出すアインズは、本当にこの村が好きなのだろうとツアレは思う。出なければ高価なアイテムを貸すどころか見せることもしないだろうから。

先を飛ぶ子供達が付き添いのニニヤを挑発する。彼女はまだ飛行^{フライ}を覚えて日が浅いので少しスピードが遅い。——ソレにしたって、アダマンタイトの冒険者を挑発するとは、度胸がある子供達である。案の定ちよつと本気になったニニヤに全員捕まり、別の子供と交代させられた。

余りに穏やかな日々に、今までのことは悪い夢だったのではと思うことがある。思い出すことすら苦痛であるあの日々の証拠はたしかにこの体にあるのだが——。

「ツアレお姉ちゃん」

「ガウツ」

呼ばれて振り返れば、ネムとデスナイトが大きな花環を盛っていた。

「あら、大きな花環ね」

「デスナイトが作ったんだよ！あたしの体よりおつきいんだよ！」

ネムの言葉に胸を張るデスナイトだが、まだまだ花びらよりも緑の茎の方が多い。しかし、そんなことは言わずにすごいですねと褒めればさらに体を反らしている。そのまま行くとひっくり返るのではと心配になるが、身体能力が並ではないのでいらぬ心配である。

「でね、これツアレお姉ちゃんに！」

そう言って差し出された花環は丁寧に編み込まれ、ツアレの頭にぴったりとハマるサイズであった。

「えへへ、けっこんおめでどう!!」

ネムの言葉に瞬き、その意味に言葉が出なくなった。

「お母さんがね、けっこんはとっても幸せなことなんだって言ったんだよ！お父さんとけっこんして、おねえちゃんとあたしが生まれてとっても幸せだって言ってたの！」

ツアレお姉ちゃんが幸せになるのが嬉しいとネムが見上げてきた。そんなネムをツアレは強く抱いた。ツアレが感激したのだと思ったネムが笑う。

そんな二人を見ているデスナイトは、自分の花環もツアレにかぶせようとしたようだが、ツアレとネムを囲うようにすり抜けてしまう。そんな結果に残念そうに、でもいつかとばかりに満足すると子供らに手を焼いているニニヤの手伝いに歩き出した。

「ナーベラル・ガンマ殿、盗人の手を潰すことはいけないことではないかもしれませんが自重してください!!貴方は秘密裏にモモンガ様の護衛をするという大役に抜擢されたのですから!!」

「下等生物を叩き潰すのがそんなに悪いことなのですか?」

ナザリックの一室で、正座しながら小首を傾げる冒険者ナーベに、パンドラはため息を吐く。

「大通りのど真ん中ですが問題なんです。人間と敵対した場合、人間に紛れ冒険者をしているモモンガ様が組合に依頼されて、貴方と敵対する可能性もあるのですよ」

「おのれ・・・、下等生物の分際でモモンガ様を使おうなどと——」
「そこではないでしょう?とにかく、貴方は目立たずにモモンガ様のチームに入り込み、影ながら御身を護衛する役目なのですよ?その貴方がトラブルを呼び込みモモンガ様のご迷惑になる可能性もあるのですからね?」

そうパンドラが言えば、ナーベラルはしゅんと肩を落とす。

彼女もモモンガを困らせることは本意ではないのだ。反省しているようなナーベラルに、パンドラも出来れば護衛役を変えたくない。

只でさえ、ナザリック全土の大騒動を経て、ナーベラルとルプスレギナに護衛役が決まったのだ。守護者という重要な役目により、ナザリックから動かせないと行って階層守護者——特に色ボケ二人をねじ伏せて何とか大人しくはさせたが、ナーベラルに問題があるとかればまたもや護衛役の争奪戦が勃発するだろう。

二度とあんな面倒な目に遭いたくない。パンドラは大きくため息を吐いた。

「とにかく！私がフォローできるのはここまでですからね?!隠れてナザリックと連絡なんて取っていいはモモンガ様から不信感を持たれてしまいますし、我々がモモンガ様をのぞき見などという不敬は取れません！ですからガンマ殿はご自分で考えてモモンガ様をお守りしなくてはなりません！」

パンドラの言葉に、さつきまで落ち込んでいたナーベラルの目が鋭くなり、真剣に聞き入っている。真面目ではあるのだが不安でパンドラの胃に穴が開きそうだ。

「まず、人間を見下すのを表面上だけでもやめてください。今はモモンガ様が庇護している存在です。——まあ、主人のペットだと思えば貴方にはわかりやすいですかね」

人間を友人といったらナザリックの者は反発するだろうからあえてわかりやすい表現を使った。主人の愛玩動物と認識すれば、興味なかるうが気持ち悪かるうが邪険にはしないだろう。

「次に、不敬を働いた者を即殺すのはやめてください。何かの役に立つかもしれないから捕まえるだけにしておくこと！」

まあ最悪、誰も見ていないところで有ればいくらでも殺して貰ってもかまわないのだが、後処理が大変である。

「まあ、この二つさえ守れば後は何とでもなりますかね。後は一番大事なことは、——貴方の命に代えてもモモンガ様もお守りする」と

「はい、それは十分承知しております」

「——まあ、いろいろ言いましたが、要はモモンガ様の不利にならないければ本当はどうでもいいことです。モモンガ様の身に危険が迫れば先の言葉は忘れてもかまいませんから」

パンドラも、人間をそこまで守ろうとは思っていない。ただ、モモンガが気に入っている人間が死んだりしたら、主人が悲しむだろうなと思うから忠告するのだ。主人と天秤に掛ければ即刻切り捨てる程度だが。

（そこんところをデミウルゴス殿やアルベド殿は理解してくれたが、ほかの者はあまりにもモモンガ様の周りの人間を軽視しすぎだ）

ペットが死んで長らくナザリックにも来れないほど悲しんだ至高の御方もいるのであるから、そこら辺の理解もして欲しい……。

ナーベラルにはトコトン言い聞かせたので、そろそろエ・ランテルに戻すことにする。……不安で胃がキリキリするが時間もあまり掛けられないから仕方がないとパンドラは納得することにした。

黒薔薇

まるで、導かれるようだった。

用事があり、仲間達と別行動をとっていたラクユースは裏路地に、怪しい影が入り込むのを見た。

その影が、人の物とは思えずラクユースは単身でそれを追ったのだが……。

「女性一人、こんな所に足を踏み入れるなんて物騒ですよ？」

後ろから囁かれた声に、ラクユースはとっさに距離をとって武器を取る。——そして、そいつを見て目を見開いた。

「お前はっ!？」

目撃者からの証言を元に作られた王都襲撃の主導者である悪魔の人相書きにそっくりな悪魔がソコにいた。

「自衛の手段は持っているようですが、私にとって小さな薔薇のトゲなんて何の意味もないですよ」

その言葉の通り、ラクユースは為す術もなく舗装されていない路地で泥にまみれた。

「……くっ、殺せっ!!」

「気高い薔薇ですね。たとえ地に落ちて泥にまみれようとも光を失わない」

しかし、ウルベルトにはラクユースにある可能性を感じていた。

「……しかし、貴方の中に私と同じモノを感じる」

「っ?!」

「ふふ、人間は貴方を光り輝く薔薇だと思っているようですがね……私にはわかるんですよ」

スルリと泥に落ちている金糸を拾い上げると悪魔は笑う。

「知ってますか？光には常に影がつきまとうんですよ。光が強ければ強いほど影は深くなり、闇となる——貴方はこちら側の人間でしよう？」

「っ!!なにをバカなことを——っ!!」

「強がるのもいいですが・・・本当はつらいんでしょう？その身の内にある暗黒の力を解放したいと——貴方は思っているはずだ」

「黙れ——っ!!」

苦しげに己の魔剣キリネイラムを握りしめて悪魔を睨みつける。しかし、その肩は震えていた。

「素直になれないというのも可愛いものだ。——いいでしょう、私が手伝ってあげましょう」

「っな、なにを!?!」

片手で持ち上げられ目線を合わせられた。目の前の悪魔はとても楽しそうにのどを鳴らしている。

「美しき薔薇の身の内にある、もう一つの人格を呼び出しましょうか」「ま、まさかっ!!やめろ!目覚めさせるな!!」

「そういやがるものではないでしょう？光と闇は表裏一体のコインだ。光の貴方ばかりでは不公平でしょう」

悪魔が何かの魔法を詠唱したらしい。ラクユースの姿が変わっていく。

「い、いやだ!!私は蒼の薔薇のリーダー・・・」

「さあ、目を覚まさない。美しきダークウオーリアー”黒き薔薇”よ」

ラクユースの全身は黒く染め上げられた——。

周りはまるで、竜巻に見舞われたかのようになぎ倒されている。ソコに佇むのは黒い騎士。仮面により表情は見えないが、まがまが

しい気配に対峙するモノはあれは悪魔だと恐れおののくだろう……。だが、黒騎士の前に立つアダマンタイト冒険者は、“彼女”が自分の意志でこんなことをするはずないと知っている。

「彼女になにをしたっ!？」

叫んだのは小柄な魔法詠唱者、イビルアイ。黒騎士と化したかつての仲間ラキユースの後ろで愉悦に笑う悪魔に怒鳴る。が、悪魔はニヤニヤと笑うだけだ。

「そんなに怒ることはないでしょう？彼女の秘められた欲求を解放しただけですよ」

「っ!!てめえまさか!!」

ガガーランが顔色を変える。ラキユースは魔剣を扱うに当たって闇の人格に悩まされていた。神官である彼女だから押さえ込め扱える為、知っては居ても大丈夫だと安心していた。——それを、悪魔に目を付けられるとはっ!

「こんつの悪魔がっ!!」

「悪魔に悪魔とののしる意味が分かりませんが……。よそ見をしていいいいので?」

「っ!。ちいっ!!」

悪魔にばかり気を取られていると、黒いラキユースがガガーラン達に向かって飛んでいた。鋭い攻撃を受け止めながらガガーランは細腕が繰り出しているとは思えない力に舌打ちした。

「ラキユースよお、あいつにナニされたんだ？随分と、色っぽくなってるじゃねえか……っ」

普段のラキユースからは想像がつかないほど胸元が開き、黒いドレスのようなインナーのスリットからは白い太股が見え隠れしていた。

「……私にダークウオーリアーだ」

「はっ!!仲間と会話する気ねえっつてのわ!つれねえ……なあ!!」

強い力とは言え、ガガーランの腕力の方が上である。気合いを入れて押し返せば、ラキユースの軽い体は軽く吹っ飛ぶ。——が、まるで意に介した風もなく軽くその場に降り立った。

「おいイビルアイ!!何とかならねえのかよ?!」

「うるさいっ!!今やっている!!」

イビルアイは己が知るありとあらゆる洗脳系の魔法解除を試みているが全く効果がない。悪魔だけが使える特殊な魔法だろうかといビルアイは悪態を吐く。

そもそも、イビルアイは回復系補助系の魔法はそれほど覚えていないし、信仰系はラキユースの得意分野である。そのラキユースが敵の手に落ちてしまえばどうしようもない。

「全く、下品な女達ですねえ。」蒼の薔薇とは聞いて呆れる」

口汚く罵る彼女らに悪魔はやれやれと肩を竦めた。

「薔薇を冠するのなら美しく、それでいて鋭いトゲを持つ冒険者かと思いましたが——名前負けしてませんか？」

「うっせーよ!冒険者に何を求めてんだてめえっ!!」

似たようなことを貴族のバカに言われたことがあり、ガガーランはカチンと来る。貴族相手には笑って流してやったが、対モンスターの傭兵に何を求めているのかと腹が立つ。

怒りのままに悪魔に突進しようとするのを遮る黒い影が。

「くそがっ!!」

「さあ、私の黒薔薇よ。彼女と踊ってあげなさい」

死の舞踏を。

剣と刺突戦鎚がぶつかり合う音が響きあう。もちろんイビルアイやティアテイナの援護もあるのだが、ウルベルトが相殺したり緩和するのであまりあてには出来なかった。アイテムに込められた魔法を使うも、すでに見破られていた。長年連れ添った仲間と戦いなどと厄介なものだなどガガーランは苦笑いする。——と、余所事を考えていたせいで注意力が散漫となり体勢を崩してしまう。

あつ、こりや死んだ。

そうガガーランは顔面に迫る切っ先に冷静にそう思った。——

——

「っ」

「うおつとお?！」

しかし、ラキユースの剣がガガーランの男らしい顔面を貫くことはなく、わずかに切っ先が頬から耳にかけて引き裂いただけだった。

相手を蹴り上げて仲間の元に転がるように下がれば、ラキユースはその場から動こうとしない。

「見たか? イビルアイ」

「ああ、見た。——まだ希望は消えちゃいないようだ」

「鬼リーダーそんなに柔じゃない」

「そうそう、凶太い」

あの瞬間、ラキユースが戸惑ったのだ。まるで仲間を手に掛けたくないと言うように、体が一瞬硬直したのである。

どうやら悪魔も気づいたらしい。つまらなそうに口を尖らせている。

「——なるほど、まだ染まりきれれないと言うことですか」

まるで聞き分けがない子供にあきれるように肩をすくめると、悪魔はラキユースを見つめた。

「まあ、今回は貴方の力を見たかっただけですし、今回は下がりましたよ
うか。——闇になじむにはまだまだ時間がかかりますしね」

そう言つてラキユースを下げようとするが、ガガーランやイビルアイ達がラキユースに怒濤の攻撃に打つて出た。

ウルベルトに連れて行かれる前にラキユースを確保しようと勝負に出たのである。

ウルベルトには忍術での足止めを試み、全員でラキユースに殺到する。効くかどうかもわからないし、効いたとしても長時間拘束は無理だとわかっている。だから、この一瞬で決めるしかないといビルアイは考える。

「少しキツイが、仲間のためだつ!!」

イビルアイには魔神と戦うために様々な魔法を習得、開発してきた。その中には神聖系の強力な魔法もあるのだが、吸血鬼であるイビルアイ自身にもダメージがあるという諸刃の刃である。

ガガーランがラキユースにキツメの一発を決め、双子が束縛系の忍

術を使う。体力を削り、動きを制限させるとイビルアイは魔法を発動させる。

イビルアイを中心にガガーラン達を神聖な光が包み込む。

「っああっ!!!」

「うおっ！ちつとキツイ、な！」

「ビリビリするっ」

「バリバリするっ」

まるで電撃を受けているような衝撃が体中を駆け抜けていく。しかし、ガガーラン達はまだましな方である。アンデッドであるイビルアイにとっては身の内から焼かれるような苦しみだ。

「—————っっっ!!!も、どってこい馬鹿者!!!」

それでも、痛みや苦しみを抑え込んでラキユースを睨みつけければ、仮面に罅が入り、覗くラキユースの瞳がイビルアイを見た。

「い、びるあ—————あ、あああああっ!!!」

その瞳に、理性的な光が戻ったように見えた。と、ラキユースは己の仮面に手をかけると、引きはがそうとする。

なんの変哲もない仮面かと思ったが、どうやらこれが原因かとおたろをつけると、イビルアイ達はその仮面を破壊した。

仮面が砕け散ると、まるで呪いが解けるように装備が形を変えて元のラキユースの姿へと戻った。そのまま、倒れ込む彼女をガガーランが受け止めて呼びかける。

「ラキユースっ!!」

「・・・どうやら、気を失っているだけのようだ」

ヨロツとバランスを崩しながらもイビルアイは冷静に確認すると、ホツとしたように言う。—————何とか取り戻せたようだ。が、これで終わりではないと悪魔を睨みつけた。

「—————仲間の情に負けたか。まあ、仕方がない」

足止めはなんの効果もなかったらしい。ただ、自分たちの遣り取りを興味深そうに観察していたようだ。

「なかなか興味深かったですよ？彼女が奪い返されたのは痛いが—————、だが、彼女はこちら側の人間です。いずれは我が元に戻ってくる」

「——そんなことは私たちがさせない」
ラキユースを庇うようにウルベルトを睨みつける彼女らに、悪魔は肩をすくめただけだった。

酒場に降りてくるその姿を認めて、ガガーランは飲んでいた酒を掲げて呼んだ。

「よお、ラキユース！体はもういいのか？」

「ええ、——ごめんなさい迷惑をかけたわ」

そう、表情を暗くするラキユースに、気にもしていないという声でイビルアイが肩を竦める。

「気にするな、お前の闇の人格とやらを知っていながら任せっきりにしていた我々も悪いからな」

「っ、し、知っていたの？」

「ああ、わりい。——隠しておきたかったかもしれないねえが、お前一人に押しつけるわけにはいかねえからな」

そう言つて脳天気なほどに背中をバシバシ叩くガガーランだが、その手にはいつも以上の力が籠もっていた。

「ラキユースの状態が他に例がないかいろいろと調べてみよう。呪いや支配とは違うようだしな」

「だな、あの悪魔がまたラキユースを狙ってくるだろうし。モテモテだなラキユース」

二人の言葉に苦笑いを返したラキユースは、ふと、あの時のことを思い出していた。

解放された心、みなぎる力に、まるで酒に酔うような高揚感。ふわふわと記憶が曖昧で実際はあまり覚えていない。

しかし、自分はその悪魔と楽しそうにしていたのは覚えている。まるで探し求めていたモノをようやく得たような——。

そこまで考えて頭を振って思考を散らした。これはおそらくはあの悪魔の術中にはまっているのだらうと、ラキユースはため息を吐く。

心を強く持つて己を戒めねばと誓うが、甘い誘惑がラキユースを誘う。

「さすがゴウン様ですね！病人の薬の処方も出来るなんて!!」

「ん？あれはンフィーレアの薬だぞ？俺はさすがに薬師の職は持つてないからな」

あの薬のおかげで体が楽になったと喜んでいる村人の話をすると、アインズは悪びれもなくそう言う。それにエンリはびっくりしてしまふ。

「え？だってンフィーアの薬はあんまり効かないって言ってましたけど・・・??」

「ああ、それは僕が説明するよ」

薬草を煎じていたンフィーレアが、手を拭きながら立ち上がると薬を一つ置いた。

「これがその薬なんだけどね。これ、僕が作ったのとゴウン様が作ったのとどっちが効きそうだと思う？」

「そりや、ンファイの腕は信用してるけど、やっぱりゴウン様が作った方が効きそう」

エンリの言葉に苦笑いしてしまう。祖母と薬師をしていたときも似たようなことがよくあったのだ。

「まあ、そう思われてもしょうがないんだけどね。けど、そう思いこまれるとどんな薬も効きにくくなるんだよ」

「逆に、俺がどんな病気も一発で治す薬だというと、たとえば井戸水でも次の日にはケロツとよくなるんだ」

思い込みというのは人間の体に大いに影響を及ぼすものである。

「じゃあ、嘘ついたんですか?」

「いや?ただ俺が渡しただけだ。別に俺が作ったとかンファイレアが作ったとは言っていない。これもまた思いこみだな」

ふと、お前を呪ったと言うだけでも、相手は呪われたと信じるだろうなあとアイNZは思う。

思いこみ、自己暗示というものは時に己の不都合であろうともその威力を発揮するのだ。——それを利用した詐欺もあると聞いたことがある、気がする。

「まあ、病は気からとも言おうし。良くなったというのならそれでもいいだろう?むしろほんとのことといったらまたぶり返す危険もあるからな」

口元に一本指を立ててエンリを見れば、苦笑いしながらも頷いた。
